R Markdown クックブック日本語版

(著者) Xie, Yihui (著者) Dervieux, Christophe (著者) Riederer, Emily (翻訳者) Katagiri, Satoshi*1

2021/03/15 01:17:40 (翻訳作業中の草稿)

^{*1} twitter @ill_identified: https://twitter.com/ill_identified

人生で最も驚異すべき料理人, Xie Shaobai と Si Zhinan へ	
	—Yihui
支えてくれた妻 Caroline と生まれたばかりの愛する Axel へ	—Christophe
生涯学び続けることの楽しさを教えてくれた母へ	
	—Emily

目次

はじめに		xiv
本書の	読み方	xv
本書の	構成	xvii
ソフト	ウェア情報と表記のルール	xvii
謝辞 .		xix
著者につ	いて	xxii
Yihui X	Xie	xxii
Christ	ophe Dervieux	xxiii
Emily	Riederer	xxiv
第1章	インストール方法	1
1.1	RStudio IDE にバンドルされていないバージョンの Pandoc を使う	2
1.2	PDF レポートの作成に LaTeX (TinyTeX) をインストールする	3
1.3	足りない LaTeX パッケージをインストールする	4
第 2 章	概念に関する概観	6
2.1	レンダリング時に何が起こっているのか	6
2.2	R Markdown の解剖学	8
	2.2.1 YAML メタデータ	8
	2.2.2 ナラティブ	10
	2.2.3 コードチャンク	11
	2.2.4 文書の本文	12
2.3	結果を変更するために、なにを変更できるか?	15
第 3 章	基本	16
3.1	コードチャンクとインライン R コード	16
3.2	RStudio のビジュアルエディタで R Markdown を書く	17
3.3	R スクリプトをレポートにレンダリングする	17

3.4	Markdown から R script への変換	1:1
3.5	R Markdown Notebook	:3
第 4 章	文書の要素 2	24
4.1	改ページ (改段) を挿入する 2	4
4.2	文書タイトルを動的に設定する	25
4.3	R コード内で文書メタデータにアクセスする	26
4.4	番号のない節	27
4.5	参考文献と引用	28
	4.5.1 引用スタイルの変更	29
	4.5.2 引用していない文献を参考文献に追加する 3	80
	4.5.3 全てのアイテムを参考文献に掲載する	80
	4.5.4 参考文献の後に補遺を掲載する (*)	80
4.6	R パッケージの引用を生成する	31
4.7	文書内の相互参照3	35
4.8	日付を自動的に更新する	8
4.9	文書に複数の著者を表記する	8
4.10	図のキャプションへの付番	0
4.11	単語をコンマ区切りで結合する4	1
4.12	複数の改行コードを維持する	-2
4.13	モデルを数式に変換する	4
4.14	複数の R プロットからアニメーションを作成する 4	4
4.15	ダイアグラムを作成する	6
	4.15.1 基本的なダイアグラム	17
	4.15.2 図にパラメータを追加する	17
	4.15.3 その他のダイアグラム作成パッケージ	9
4.16	特殊文字をエスケープする	9
4.17	テキストのコメントアウト 5	0
4.18	目次から見出しを省略する	0
4.19	全てのコードを補遺に置く (*)	0
4.20	Pandoc の Lua フィルタから操作する (*)	52
第5章	書式 5	6
5.1	フォント色	7
	5.1.1 生の HTML/LaTeX コードを書く関数を使う 5	7
	5.1.2 Lua フィルタを使う (*)	8
5 2	テキフトなインデントナス C	'n

5.3	テキスト出力の幅を制御する
5.4	グラフ・画像のサイズを制御する
5.5	図のアラインメント
5.6	コードチャンクをそのまま (verbatim) 表示
	5.6.1 行内 R コードをそのまま表示
5.7	コードブロックに行番号を表示する (*)
5.8	多段組み (*)
第6章	LaTeX 出力 74
6.1	プリアンブルに LaTeX コードを追加する
6.2	LaTeX 出力の Pandoc オプション
6.3	表紙ページにロゴを置く
6.4	LaTeX パッケージを追加で読み込む
	6.4.1 LaTeX パッケージを読み込む
	6.4.2 パッケージの例
6.5	図の位置を制御する
	6.5.1 フロート環境
	6.5.2 図がフロートするのを防ぐ
	6.5.3 フロートを後回しに強制する
	6.5.4 LaTeX 配置ルールを調整する (*)
6.6	LaTeX で複数の図をまとめる 84
6.7	Unicode 文字を含む文書をレンダリングする
6.8	LaTeX のコードフラグメントを生成する
6.9	カスタムヘッダとフッタ (*)
6.10	Pandoc の LaTeX テンプレートをカスタマイズする (*) 89
6.11	生の LaTeX コードを書く
6.12	ハードコア LaTeX ユーザーのために (*) 90
第7章	HTML 出力 93
7.1	カスタム CSS を適用する 93
7.2	セクションヘッダを中央揃えにする
7.3	コードチャンクのスタイルを変更する 95
7.4	コードブロックをスクロール可能にする (*)
7.5	全コードブロックを折りたたみ, かついくつかは表示する 100
7.6	内容をタブブラウジングさせる
7.7	Rmd ソースファイルを HTML に埋め込む
7.8	HTMI 出力に好きたファイルを埋め込む 105

7.9	カスタム HTML テンプレートを使う (*)
7.10	既存の HTML ファイルの内容を読み込む (*)
7.11	ブラウザアイコンをカスタマイズする
7.12	折りたたみ要素 <details> を使う111</details>
7.13	HTML 出力を Web で共有する
	7.13.1 R 特化のサービス
	7.13.2 Static website services
7.14	HTML ページのアクセシビリティを向上させる
7.15	ハードコア HTML ユーザー向けの話 (*)
第8章	Word 120
8.1	カスタム Word テンプレート
8.2	R Markdown と Word 間の双方向ワークフロー
8.3	個別の要素にスタイルを設定する126
第 9 章	複数の出力フォーマット 129
9.1	LaTeX か HTML か
9.2	HTML ウィジェットを表示する
9.3	Web ページの埋め込み
9.4	複数の図を横並びに
9.5	生のコードを書く (*)
9.6	カスタムブロック (*)
	9.6.1 構文
	9.6.2 影付きブロックを追加する
	9.6.3 アイコンを加える
第 10 章	表 146
10.1	knitr::kable() 関数 146
	10.1.1 サポートする表形式146
	10.1.2 列名を変更する
	10.1.3 列のアラインメントを指定する
	10.1.4 表にキャプションを追加する
	10.1.5 数値列を整形する
	10.1.6 欠損値を表示する
	10.1.7 特殊文字をエスケープする
	10.1.8 複数の表を横に並べる
	10.1.9 for ループから複数の表を作成する (*)
	10.1.10LaTeX の表をカスタマイズする (*)

	10.1.11HTML の表をカスタマイズする (*)	. 163
10.2	kableExtra パッケージ	. 164
	10.2.1 フォントサイズを設定する	. 166
	10.2.2 特定の行・列のスタイルを設定する	. 166
	10.2.3 行・列をグループ化する	. 167
	10.2.4 LaTeX で表を縮小する	. 168
10.3	その他の表作成パッケージ	. 169
第 11 章	チャンクオプション	172
11.1	チャンクオプションに変数を使う	. 173
11.2	エラーが起こっても中止しない....................................	. 174
11.3	同じグラフを複数の出力フォーマットに	. 174
11.4	時間のかかるチャンクをキャッシュする	. 175
11.5	複数の出力フォーマットに対してチャンクをキャッシュする	. 176
11.6	巨大オブジェクトをキャッシュする	. 177
11.7	コード, テキスト出力, メッセージ, グラフを隠す	. 178
11.8	チャンクの出力を全て隠す	. 180
11.9	テキスト出力をソースコードとまとめる	. 180
11.10	R のソースコードを整形する	. 181
11.11	テキストを生の Markdown として出力する (*)	. 183
11.12	テキストの先頭のハッシュ記号を消す	. 186
11.13	テキスト出力ブロックに属性を与える (*)	. 187
11.14	グラフに後処理をかける (*)	. 189
11.15	高品質なグラフィック (*)	. 191
11.16	低水準作図関数で 1 つづつグラフを作る (*)	. 193
11.17	チャンク内のオブジェクト表示をカスタマイズする (*)	. 194
11.18	オプションフック (*)	. 197
第 12 章	Output Hooks (*)	201
12.1	Redact source code	. 204
12.2	Add line numbers to source code	. 206
12.3	Scrollable text output	. 208
12.4	Truncate text output	. 212
12.5	Output figures in the HTML5 format	. 213
第 13 章	Chunk Hooks (*)	217
13.1	Crop plots	. 219
12.2	Ontimiza DNC plots	220

13.3	Report how much time each chunk takes to run
13.4	Show the chunk header in the output
13.5	Embed an interactive 3D plot with rgl
第 14 章	Miscellaneous knitr Tricks 228
14.1	Reuse code chunks
	14.1.1 Embed one chunk in another chunk (*)
	14.1.2 Use the same chunk label in another chunk
	14.1.3 Use reference labels (*)
14.2	Use an object before it is created (*)
14.3	Exit knitting early
14.4	Generate a plot and display it elsewhere
14.5	Modify a plot in a previous code chunk
14.6	Save a group of chunk options and reuse them (*)
14.7	Use knitr::knit_expand() to generate Rmd source 238
14.8	Allow duplicate labels in code chunks (*)
14.9	A more transparent caching mechanism
	14.9.1 Invalidate the cache by changing code in the expression 242
	14.9.2 Invalidate the cache by changes in global variables
	14.9.3 Keep multiple copies of the cache
	14.9.4 Comparison with knitr 's caching
第 15 章	Other Languages 248
15.1	Register a custom language engine (*)
15.2	Run Python code and interact with Python
15.3	Execute content conditionally via the asis engine
15.4	Execute Shell scripts
15.5	Visualization with D3
15.6	Write the chunk content to a file via the cat engine
	15.6.1 Write to a CSS file
	15.6.2 Include LaTeX code in the preamble
	15.6.3 Write YAML data to a file and also display it
15.7	Run SAS code
15.8	Run Stata code
15.9	Create graphics with Asymptote
	15.9.1 Generate data in R and read it in Asymptote
15 10	Style HTML pages with Sass/SCSS 264

第 16 章	Managing Projects	266
16.1	Source external R scripts	266
16.2	Read external scripts into a chunk	267
16.3	Read multiple code chunks from an external script (*)	268
16.4	Child documents (*)	269
16.5	Keep the plot files	272
16.6	The working directory for R code chunks	273
16.7	R package vignettes	277
16.8	R Markdown templates in R packages	279
	16.8.1 Template use-cases	279
	16.8.2 Template setup	280
16.9	Write books and long-form reports with bookdown	281
16.10	Build websites with blogdown	283
第 17 章	Workflow	285
17.1	Use RStudio keyboard shortcuts	285
17.2	Spell-check R Markdown	286
17.3	Render R Markdown with rmarkdown::render()	286
17.4	Parameterized reports	288
17.5	Customize the Knit button (*)	290
17.6	Collaborate on Rmd documents through Google Drive	293
17.7	Organize an R Markdown project into a research website with workflowr	294
17.8	Send emails based on R Markdown	294
付録 A	knitr's Chunk and Package Options	296
A.1	Chunk options	296
	A.1.1 Code evaluation	298
	A.1.2 Text output	298
	A.1.3 Code decoration	300
	A.1.4 Cache	302
	A.1.5 Plots	303
	A.1.6 Animation	308
	A.1.7 Code chunk	308
	A.1.8 Child documents	309
	A.1.9 Language engines	309
	A.1.10 Option templates	309
	A.1.11 Extracting source code	310

	A.1.12 Other chunk options	310
A.2	Package options	310
A.3	About this	313
A.4	進捗状況	315
A.5	関連リンク	315
参考文献		316
索引		323

表目次

4.1	R における日付と時刻のフォーマット 39
6.1	LaTeX デフォルトのフロート設定
10.2	表のキャプションの例
17.1	RStudio keyboard shortcuts related to R Markdown

図目次

2.1	R Markdown 文書がどのように最終的な出力文書に変換されるかを表すダイアグ	
	ラム	7
2.2	言語エンジンへの入出力フローチャート	12
2.3	入れ子状のコンテナとして表現された単純な R Markdown 文書の例	14
3.1	RStudio のビジュアル Markdown エディタ	18
4.1	付番された章とされていない章を示すための目次のスクリーンショット	28
4.2	R Markdown 文書内の相互参照の例	37
4.3	パックマンのアニメーション	45
4.4	プログラマの絵空事を表したダイアグラム	48
4.5	R から入力されたパラメータを使用したダイアグラム	49
5.1	幅が広すぎる通常のテキスト出力	63
5.2	listings パッケージで折り返されたテキスト出力	64
5.3	HTML, LaTeX, Beamer で動作する二段組み	72
6.1	LaTeX の表紙ページにロゴを追加する	79
6.2	複数の図を含む単一の figure 環境の例	86
7.1	Bootstrap で定義された背景色を使ったコードチャンクと出力ブロック	96
7.2	明桃色の背景, 赤い太枠線をもつコードチャンク	97
7.3	カスタム CSS を使用したスクロール可能なコードブロック	100
7.4	複数のセクションをタブに	104
7.5	details 要素でテキスト出力を囲む	112
8.1	特定の文書要素のスタイルを見つける	122
8.2	Word 文書の要素のスタイルを変更する	123
8.3	Modify the styles of tables in a Word document	124

9.1 9.2	iframe または screenshot による Yihui's のホームページ	
10.1	HTML と CSS で作成したストライプ背景の表	165
11.1	チャンクオプション fig.process でグラフに R のロゴを追加する	190
11.2	tikz デバイスでレンダリングされたグラフ	193
11.3	cars データの散布図	195
11.4	既にある散布図に回帰曲線を追加	196
12.1	An example of scrollable text output, with its height specified in the chunk	
	option max.height	211
12.2	A figure in the HTML5 figure tag	216
13.1	A plot that is not cropped	220
13.2	A plot that is cropped	221
13.3	A 3D scatterplot generated from the rgl package	227
15.1	A 3D graph made with Asymptote	262
15.2	Pass data from R to Asymptote to draw a graph	264
16.1	Change the default working directory for all R Markdown documents in	
	RStudio	274
16.2	Knit an Rmd document with other possible working directories in RStudio.	275
16.3	Autocomplete file paths in an Rmd document in RStudio	277
16.4	Create a package vignette in RStudio	278
16.5	Create a bookdown project in RStudio	282
17.1	Knit an R Markdown document with parameters that you can input from a	
	GUI	291

はじめに



本書はクリエイティブ・コモンズ表示 - 非営利 - 継承 4.0 国際ライセンス*1 で提供されています. オリジナルはこちら*2で読むことができます.

This is an unofficial Japanese translation of "R Markdown Cookbook" by Xie, Dervieux, and Riederer, which is licensed under CC BY-NC-SA 4.0*3. The original is here*4.

注:本書は Chapman & Hall/CRC*⁵より出版されます.本書のオンライン版は (Chapman & Hall/CRC の厚意により) ここで無料で読むことができます.本書はクリエイティブ・コモンズ表示 - 非営利 - 継承 4.0 国際ライセンス*6のもとで提供されています.ご意見は GitHub で*7 いつでも受け付けています. いつもありがとうございます.

R Markdown は分析とレポート作成を 1 つのドキュメントとして結びつけるパワフルなツールです. 2014 年初頭に **rmarkdown** パッケージ (JJ Allaire Xie McPherson, et al., 2021) が誕生して以来, R Markdown はいくつかの出力フォーマットをサポートするだけの単なるパッケージから, 書籍・ブログ・科学論文・ウェブサイト, そして講義資料の作成までもサポートする拡張性と多様なエコシステムを持つパッケージへと成長を遂げました.

R Markdown: The Definitive Guide*8 (Xie J.J. Allaire, and Grolemund, 2018) という, ほんの数年前に書かれた情報の詰まったガイドブックがあります. これは **rmarkdown** パッケージやその他の拡張パッケージの組み込みフォーマットのリファレンスを詳説しています. しかし読者や出版社から, どうやって作りたい内容を実現できるのかを見つけるまでが大変なので, より実践的で, 面白く役に立つ小規模な使用例を豊富に掲載したものがあればというコメントをいただきました (言い換えるなら, 前書は無機質すぎるということです). これが本書の生まれた経緯です.

^{*5} https://www.routledge.com/p/book/9780367563837

 $^{^{*6}}$ https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/4.0/deed.ja

^{*7} https://github.com/yihui/rmarkdown-cookbook/issues/new

^{*8} https://bookdown.org/yihui/rmarkdown/

公式ドキュメントが存在するにも関わらず、R Markdown のユーザーは有名な Q&A フォーラム『スタック・オーバーフロー』でしょっちゅう助けを求めています。本書の執筆時点では、r-markdown タグのついた質問*9 が 6,000 件以上ありました。この膨大な件数は特定の問題を探すのでない場合、フォーラムの利用が難しくなります。よって R Markdown を使ってできること、あるいはどのすればできるか、ということについての全ての可能性を知ることが難しくなるかもしれません。本書の狙いはスタック・オーバーフローやその他のオンラインリソース(ブログの投稿やチュートリアル)から有名な質問を取り上げ、多くのユーザーが毎日こぞって検索している問題に対して最新のソリューションを提供することです。実際、本書で扱うトピックを決めるのに役立つよう、第二著者の Christophe はスタックオーバーフローの日々の最も人気のある投稿をスクレイピングする R Markdown のダッシュボートを作成しました。幸運にも、我々のクックブックはこれらの人気の投稿を含むことでより一層役に立つものになったに違いありません。

本書は R Markdown 文書の機能をどう活用するかの多くの例を掲載しています. クックブックとして, このガイドは R Markdown をより効率よく使いたい, そして R Markdown の力をより知りたい新規または初心者ユーザーにおすすめです.

本書の読み方

本書は R Markdown の基礎を理解している読者におすすめです. R Markdown: The Definitive Guide (Xie J.J. Allaire, and Grolemund, 2018) の Chapter 2^{*10} は R Markdown の基礎を解説しており、新規ユーザーが読むのにおすすめです. たとえば、本書では Markdown の構文はカバーしていませんので、読者が他の手段でそれを学んでいる想定です. 特に、最低でも一度は Pandoc の完全なマニュアル *11*12 に目を通すことを強くお薦めします. このマニュアルはかなり長大ですが、金脈のようなものでもあります. 全てを覚えておかなくともよいですが、Markdown の機能をどう応用できるか知っていればとても役に立つでしょう. 多くの人々が 3 連続バッククォートをverbatim なコードブロックに書こうとして失敗したり、子要素を持つリストを作ろうとして失敗したりするのを、私は数え切れないほど見てきました *13 . マニュアルに書いてある Markdown の構文を全て読まなければ、「N 連続バッククォートに対して外側に N + 1 連続でバッククォートを書く」「子要素を表現するには適切なインデントを」といったことにきっとあなたは気づかないままでしょう.

このクックブックは R Markdown の技術的なリファレンスを網羅することを意図したものではあ

 $^{^{*9}}$ https://stackoverflow.com/questions/tagged/r-markdown

 $^{^{*10}}$ https://bookdown.org/yihui/rmarkdown/basics.html

 $^{^{*11}}$ https://pandoc.org/MANUAL.html

^{*12} 訳注: 完全ではありませんが, 日本語訳が公開されています. https://pandoc-doc-ja.readthedocs.io/ja/latest/users-guide.html

^{*13} https://yihui.org/en/2018/11/hard-markdown/

りません. 本書は既存の資料に対する補足となることを目的としています. よって, さらに詳細な情報を知るために読者は以下のような本を参考にすることになるでしょう.

- *R Markdown: The Definitive Guide* (Xie J.J. Allaire, and Grolemund, 2018) は **rmarkdown'** パッケージやその他いくつかの拡張パッケージでの R Markdown の出力フォーマットに関する技術的資料です.
- *R for Data Science* (Wickham and Grolemund, 2016b)*¹⁴ の Part V "Communicate".: このパートは上記の "Definitive Guide" よりも技術的なことは少ないので, より平易な R Markdown の入門になるでしょう.
- Dynamic Documents with R and knitr (Xie, 2015) は **knitr** パッケージ (Xie, 2021a) の網羅的な入門書です (補足しますと, R Markdown は **knitr** パッケージのサポートする文書形式の 1 つにすぎません). 短縮版を読みたい場合, Karl Broman による最小限のチュートリアル "knitr in a knutshell"*¹⁵ が役に立つでしょう. **訳注**: これらは日本語訳が存在しませんが, Yihui 氏によるドキュメント *knitr Elegant, flexible, and fast dynamic report generation with R*¹⁶* の日本語訳は既に用意してあります*¹⁷.
- bookdown: Authoring Books and Technical Documents with R Markdown (Xie, 2016) は bookdown パッケージ (Xie, 2020a) の公式ドキュメントとして書かれた小規模な書籍です. bookdown パッケージは長大なフォーマットのドキュメントを R Markdown で簡単に書くために設計されました.
- blogdown: Creating Websites with R Markdown (Xie Hill, and Thomas, 2017) は **blogdown** パッケージ (Xie Dervieux, and Presmanes Hill, 2021) によって R Markdown でウェブサイトを作成する方法を紹介してます.

関連性に応じて本書は既存の参考資料を紹介します。それとは別に、R Markdown の公式ウェブサイトにも役立つ情報が多く含まれています: https://rmarkdown.rstudio.com

本書は最初から順に読む必要はありません. 以降の各章はそれより前の章よりも難解になることはありません. 各章と各セクションのうち, 他よりも発展的と思われるものに対しては, タイトルにアスタリスク (*) を付けています. R Markdown でやりたい具体的なタスクがあるとき, あるいは目次に目を通していたら興味のある箇所が見つかった, という使い方が最も効率的な読み方でしょう. いくつかの箇所で相互参照を免れないところがありますが, 用例集を理解するのに必要な予備知識を参照するつもりです.

^{*} *14 本書は https://r4ds.had.co.nz/ で無料公開されています. また, 日本語訳がオライリー・ジャパンより出版されています.

 $^{^{*15}}$ https://kbroman.org/knitr_knutshell/

^{*16} https://yihui.org/knitr/

^{*17} https://gedevan-aleksizde.github.io/knitr-doc-ja/

自分で用例集に挑戦したいならば、本書の完全なソースコードと用例集は Github の https://github.com/yihui/rmarkdown-cookbook で自由に見ることができます* 18 . 本書の電子書籍版をお読みの場合、掲載されているコードをお好きなテキストエディタにコピー & ペーストして実行することになるでしょう.

本書の構成

本書はそれぞれ単独のコンセプトを実演するため、小規模な「レシピ」に細分化されています. 1章 では必要なソフトウェアツールのインストール方法を紹介しています.2 章では R Markdown の コンセプトを概観します. 3 章では R Markdown の基本的な構成要素を紹介し, R Markdown 文 書と R スクリプトの変換方法を紹介します. 4 章では, 改ページ, 参考文献リストの掲載, 番号付き の図, アニメーション, ダイアグラムといった文書の要素を作成する方法の話をします. 5 章では図 の大きさやアラインメントといった文書の整形方法を紹介します. 6 章では LaTeX/PDF のみ出力 したい場合に使える豆知識と小ワザを紹介します. 同様に 7 章では HTML ユーザーに対して, 8 章では Word ユーザーに対して豆知識や小ワザを紹介します. 同時に複数の出力フォーマットで生 成したい場合 (しょっちゅう小技を駆使します), 9 章の記述が役に立つでしょう. 10 章は, 正直に 言えば私が最も気に入らなかった箇所ですが, 私は多くのユーザーが表の作成方法を本当に欲して いることを理解しています. 私はゴテゴテした装飾過多な表の専門家ではありませんが, その役に 立つパッケージのリストを知ることはできるでしょう. 11 章では, あなたがまだ知らないであろう **knitr** のチャンクオプションのいくつかの応用をお教えします. 12, 13 章は **knitr** の出力とカス タムフック関数の挙動をうまく扱えるようになることの偉大さをお教えしますので, 少し発展的で すがこれまたとても役に立つはずです. 14 章ではいろいろな knitr の小ワザを紹介します. 15 章 では R Markdown で他のプログラミング言語を扱う例をお見せします. そう, R Markdown は R のためだけのものではありません. また, knitr がまだサポートしていない新しい言語でも動作さ せる方法も紹介します。16章はR Markdown とプロジェクトを関連付けて管理するための豆知 識を紹介します. 17 はあなたのワークフローを改善する豆知識をいくつか提示します.

本書のレシピはそれぞれ独立した項目になっているので, あなたに決まった目的がなくてもこれらの中から適当に取り上げて読むことができます.

ソフトウェア情報と表記のルール

本書をコンパイルした時点での基本的な R セッション情報は以下のとおりです $*^{19}$.

^{*18} 訳注: この日本語版のソースコードは https://github.com/Gedevan-Aleksizde/rmarkdown-cookbook で見られま

^{*} 19 訳注: 日本語版作成にあたって, **rmdja** パッケージ* 20 を使用しています.

```
xfun::session_info(c(
01
      'bookdown', 'knitr', 'rmarkdown', 'rmdja', 'xfun'
02
03
    ), dependencies = FALSE)
    ## R version 4.0.3 (2020-10-10)
    ## Platform: x86_64-pc-linux-gnu (64-bit)
    ## Running under: Ubuntu 20.04.2 LTS
    ##
    ## Locale:
         LC_CTYPE=ja_JP.UTF-8
    ##
        LC_NUMERIC=C
    ##
    ##
         LC_TIME=ja_JP.UTF-8
    ##
         LC_COLLATE=ja_JP.UTF-8
    ##
         LC_MONETARY=ja_JP.UTF-8
    ##
         LC_MESSAGES=ja_JP.UTF-8
         LC_PAPER=ja_JP.UTF-8
    ##
         LC_NAME=C
    ##
    ##
         LC_ADDRESS=C
         LC_TELEPHONE=C
    ##
    ##
         LC_MEASUREMENT=ja_JP.UTF-8
    ##
         LC_IDENTIFICATION=C
    ##
    ## Package version:
    ##
         bookdown_0.21 knitr_1.31 rmarkdown_2.7
         rmdja_0.4.3 xfun_0.20
    ##
    ##
```

Pandoc version: 2.11.2

上記のセッション情報を見て分かるように、本書では R ソースコードにプロンプト記号 (> や +) を付けたりしません。またテキスト出力は 2 連続ハッシュ ## でコメントアウトしています。これはコードをコピーして実行する際の利便性のためです (テキスト出力はコメントアウトされているので無視されます)。 パッケージ名は太字 (例: **rmarkdown**) で表記し、本文中のコードやファイルネームはタイプライタフォントで表記します (例: knitr::knit('foo.Rmd'))。 関数名の末尾には括弧を付けます (例: blogdown::serve_site())。 二重コロン演算子:: はパッケージのオブジェクトへのアクセスを意味します。

"Rmd" は R Markdown のファイル拡張子名であり, 本書では R markdown の略称としても使用します.

謝辞

常のこととして、初めに本書の執筆作業の自由を与えていただいた雇用主である RStudio 社に感謝の意を表します。執筆作業が始まってから、上司である Tareef Kawaf との毎週のミーティング当初 15 分から 5 分に削減され、それから完全になくなりました。私は複数の友人から所属先で耐えられないほど多くのミーティングがあり、時間の浪費になっていると聞いていました。集中力の維持の観点から、最近友人の一人は「5 分間 Slack をミュートすることができるかもしれないが、1 日中ミュートできるものか?」と嘆きました「もちろんできる!」と私は答えました。私は 1 ヶ月でも好きなだけ Slack をミュートできるようになったようです。誤解しないでください — Tareef や同僚が邪魔だという意味ではありません。皆の提供してくれた自由がどれだけ価値あることかを伝えたいだけです。

R Markdown Definitive Guide を刊行したのち、このクックブックを執筆することを思いつきましたが、アイディアはまだ貧弱でした。困難で高く付く作業でした。最初に Michael Harper's*21 の後押しがなければ、この作業にまじめに取り組むことはなかったでしょう。Christophe Dervieux は助けが必要なときにいつも近くにいました。彼の R と R Markdown のスキルにより作成された ダッシュボード (flexdashboard パッケージによるもの) は人々が興味を持つであろうもの、役に立つであろうトピックを本書に記載する助けになりました。同時に多数の Github issues を手伝ってくれたため、最小限の再現例も添付してないバグ報告と格闘する時間を執筆作業に割くことができました。同様に、Martin Schmelzer、Marcel Schilling、Ralf Stubner をはじめ数名がスタック・オーバーフロー上の R Markdown の質問に答えるのを手伝ってくれました。おそらく意図してのことではないと思いますが、彼らの努力は私の多くの持ち時間を節約してくれました。最近のスタック・オーバーフローでは Johannes Friedrich の活動が注意を引きます。これまでに何度か、スタック・オーバーフローの質問を開いたら彼がもう回答していた、ということがありました。

10.3 節では David Keyes が私を救ってくれました. 私は彼のことをあまり知りませんでしたが, 表を作成するためのパッケージをいくつか紹介する すばらしいブログ記事 *22 を彼が書いていたおかげで助かりました. Holtz Yan の R Markdown の豆知識に関する投稿 *23 , Nicholas Tierney の本 R Markdown for Scientists *24 Maëlle Salmon の R Markdown の講座 *25 , Jennifer Thompson

 $^{^{*21}}$ http://mikeyharper.uk

 $^{^{*22}}$ https://rfortherestofus.com/2019/11/how-to-make-beautiful-tables-in-r/

 $^{^{*23}}$ https://holtzy.github.io/Pimp-my-rmd/

 $^{^{*24}}$ https://rmd4sci.njtierney.com

^{*25} https://github.com/maelle/rmd_course_isglobal

の R Markdown の講座* 26 , Emi Tanaka の R Markdown のワークショップ* 27 , Alison Hill の R Markdown ワークショップ* 28 (私も講師の 1 人です), Alison Hill と Emi Tanaka's R Markdown のワークショップ* 29 といったそれ以外のオンライン上の資料もまた, たいへん助けになりました.

Maria Bekker-Nielsen Dunbar, Nathan Eastwood, Johannes Friedrich, Krishnakumar Gopalakrishnan, Xiangyun Huang, Florian Kohrt, Romain Lesur, Jiaxiang Li, Song Li, Ulrik Lyngs, Matt Small, Jake Stephen, Atsushi Yasumoto, Hao Zhu, John Zobolas といった人々がプルリクエストを送ったり, issues を埋めたりして多くの人が本書の Github リポジトリに貢献してくれました. 本書の素晴らしい表紙絵は Allison Horst によってデザインされ*30, 全体のデザインは Kevin Craig によって完成されました.

本書の当初のアイディアの一部は 2018 年の RaukR Summer School で **knitr** のあまり知られていない機能についてのリモート講演で生まれたものでした。 視聴者は **knitr** の機能についてレシピ形式のような手短な入門を好んでいるようでした。 私を招待していただいた,Marcin Kierczakと Sebastian Dilorenzo をはじめとするサマースクールのオーガナイザたちに感謝したいです. Genentech と DahShu.* 31 でものちに同様の講演を行いました。 招待していただいた Michael Lawrenceと Yuqing Zhang,そしてフィードバックをくれた視聴者のみなさんにも感謝したいです. Paul Johnson からは 2020 年刊の *The American Statistician* に掲載された *R Markdown: The Definitive Guide* に対するとても有意義な批評をいただきました. 彼がこの本には詳細な例が欠けていると批判してくれたため,この「決定版ガイド」は十分に決定的とはいえないことになりました. 彼の論評には心から称賛と賛意を送ります. この新しいクックブックがこの溝を埋めてくれることを願います.

これは編集者の John Kimmel との仕事で 5 番目になる本です. 彼と Chapman & Hall/CRC のチームとの共同作業は常に喜びに満ちていました. 他の著者たちに **bookdown** が広く利用されるのは **bookdown** の成功だと John が言ってくれるたびに私は興奮しました. 私の以前の著作のプロダクションエディターであった Suzanne Lassandro が, 他にも多くの責任ある立場にあり著者と直接の接点がほとんどなくなった今も, 本書の手助けになるよう熱心に取り組んでいると John から聞いて私は誇りに思いました. Suzanne と校正担当 (Rebecca Condit) は初稿から「たったの」377 箇所の問題を見つけ出してくれました. 実は次の本のミスは 30 箇所くらいだろうという以前の私の予想*32 は楽観的すぎました. LaTeX の専門家 Shashi Kumar は PDF を印刷する直前の最後の障害となった, 厄介な LaTeX の問題を解決する手助けをしてくれました.

 $^{^{*26}}$ https://github.com/jenniferthompson/RepResearchRMarkdown

 $^{^{*27}}$ https://github.com/emitanaka/combine2019

 $^{^{*28}}$ https://arm.rbind.io

^{*29} https://ysc-rmarkdown.netlify.app

 $^{^{*30}}$ https://github.com/yihui/rmarkdown-cookbook/issues/180

^{*31} http://dahshu.org

 $^{^{*32}}$ https://bookdown.org/yihui/rmarkdown/acknowledgments.html

John は原稿へのフィードバックのために数名の査読を用意してくれました。実質的に 9 人の偉大な査読を得ることになりました。彼らの 1 人は共同著者として迎えられれば良かったのにと思うほど偉大でした! 9 人の査読との作業は膨大でしたが、間違いなく苦労に見合った価値がありました。 Carl Boettiger, John Blischak, Sharla Gelfand, Johannes Friedrich, Atsushi Yasumoto, そして残りの匿名の査読たちの有意義なフィードバックに感謝の意を送りたいと思います。

本書の最後のパートの作業は私の昔なじみの友人, Dong Guo と Qian Jia が引っ越した後の空き家 (ネット回線なし!) で行いました. 私が疲労困憊しとにかく静かな環境を必要としていた時, 家を一時的なオフィスとして使わせてくれた彼らに感謝します. 彼らに別れを告げるのは悲しいです. 私が, この本を, 彼らの家で, 仕上げられたというのは, 両親とかわいらしい娘をふくむ彼らの家族との良い思い出となるでしょう.

最後に、COVID-19 のパンデミックの下で自宅での 2 人の小さな「超役に立つ同僚」(5 歳と 3 歳) に感謝するという、このユニークな機会を絶対に逃せません。もし 2 人がいなければ、5 ヶ月は早く刊行できたでしょう。今となっては託児所 (Small Miracle) の先生が懐かしいですし、料金もきっと高くはないと感じています...

Yihui Xie ネブラスカ州エルクホーンにて

著者について

Yihui が本書のほとんどの文を書きました. これが第一著者であることを正当化する唯一の根拠です. Christophe は全ての Github issues をまとめ, そしていくつかのセクションを書いたというはっきりした貢献があります. Emily は本来は本書の査読者でした. Yihui は彼女と長いコメントでやり取りできるほどの忍耐がないので,自分でとてもうまく書けたと思っていたものに大量の追加注文を付けられる痛みを分かち合うために (報復のために) 共同著者として招待されました. いいえ, 冗談です. 彼女のコメントはとても有意義でしたが, Yihui には提案された全ての改善案に対処する時間がなかったため, 完全に賛意によって彼女を招待しました.

本書で「私」という表現があれば、それは Yihui のことを指します. 「我々」ではなく「私」を使うのは、共著者のことを忘れてしまったからではなく、完全に Yihui の独自の意見を表明したいことを意味しています. 彼は賢く見られたいと思っていますが、実は愚かであるというのなら愚かなのは自分だけであってほしいと思っています.

Yihui Xie

Yihui Xie (https://yihui.org) は RStudio (https://www.rstudio.com) のソフトウェアエンジニアです. アイオワ州立大学の統計学部で PhD を取得しました. インタラクティブな統計的グラフィックと統計的コンピューティングに関心があります. 活動的な R ユーザーとして, knitr, bookdown, blogdown, xaringan, tinytex, rolldown, animation, DT, tufte, formatR, fun, xfun, testit, mime, highr, servr, Rd2roxygen といった R パッケージを開発しています. その中でも animation パッケージは 2009 年の John M. Chambers Statistical Software Award (ASA) を受賞しています. また, shiny, rmarkdown, pagedown, leaflet といったパッケージの開発メンバーにも加わっています.

彼は 2 つの本を書いています, *Dynamic Documents with knitr* (Xie, 2015), *と bookdown: Authoring Books and Technical Documents with R Markdown* (Xie, 2016), です. そして 2 つの本の共著者です, *blogdown: Creating Websites with R Markdown* (Xie Hill, and Thomas, 2017), *と R Markdown: The Definitive Guide* (Xie J.J. Allaire, and Grolemund, 2018) です.

2006 年, 彼は Capital of Statistics (https://cosx.org) を設立しました. これは中国国内の大きな統計学のオンラインコミュニティに成長しました. 彼はまた 2008 年に Chinese R conference を開始し, 以降, 中国での R カンファレンスの企画に関わってきました. アイオワ州立大学での PhD のトレーニングの間に, 彼は学部で Vince Sposito Statistical Computing Award (2011 年) と Snedecor Award (2012)*³³を受賞しました.

彼はたいていの場合, twitter のメッセージを週に1度確認します (https://twitter.com/xieyihui). ほとんどの時間, 彼は Github (https://github.com/yihui) で見かけることができます.

彼には4つの趣味があります. 読むこと, 書くこと (ほとんどはブログ), 料理, そしてバドミントンをすることです. 彼は実際食べるより料理する方に関心があります. 食べるのに我慢できないほど好きな料理はそう多くなく, 辛い料理が数少ない一例です. 料理がさらに楽しくなったので, レストランに行くことがまれになっています. レストランに行って「料理はどれくらい辛くしたらよろしいでしょうか」と訊かれれば彼はたいてい「シェフができる限界まで辛くして」と答えます.

Christophe Dervieux

Christophe Dervieux は R コミュニティの活動的なメンバーであり、現在はフランス在住です.エネルギーと経済に関する修士号を取得しており、R を使った最初の仕事はマーケットデザインに関する経済研究のアナリストです.これは developer advocate および R 管理者となって R の布教と職場での R ユーザーへのサポートをするようになる前のことです.

彼は人々が R を最大限活用できるように手助けすることに関心があり、彼が RStudio Community で sustainer としてあちこちを渡り歩く姿を、あるいはいくつかの R パッケージの Github issues であなたも目にすることができるでしょう。 どちらの場でも、"cderv" という短縮ハンドルネーム で彼だと認識できるでしょう。

R 開発者としての彼は, **bookdown**, **rmarkdown**, **knitr** といったいくつかの R パッケージのコントリビューターです. **crrri** パッケージの開発メンバーの一人でもあります. 彼自身のプロジェクトは GitHub (https://github.com/cderv) で確認できますし, ときどき Twitter でアイディアを共有することもあります.

彼は辛い料理は苦手ですが,毎週バドミントンを楽しんでいます.

^{*33} 訳注: Committee of Presidents of Statistical Societies の授与するものではなく, 大学内で学生に授与されるもの

Emily Riederer

Emily Riederer は消費者金融業界でデータサイエンスの仕事をしており、R を使った分析ツールを構築するチームを率い、この業界でオープンサイエンスの文化を育てています。それ以前は、彼女はチャペルヒルのノースカロライナ大学で数学と統計学を専攻していました。

Emily は頻繁に Twitter (https://twitter.com/emilyriederer) や自分のブログ (https://emily.rbind.io) で R について議論し、プロジェクトを共有します. その中には GitHub (https://github.com/emilyriederer) にある **projmgr** パッケージも含まれます. rOpenSci のパッケージレビュアーとしても活動し、さらに satuRday Chicago R conference の発起メンバーの一人でもあります.

TODO: "satRday" はタイポか?

Emily の他の関心は読書とウェイトリフティングです.彼女は自分で辛い料理が好きだと考えていますが,合衆国内にしか住んだことがないため,その言葉が実際に意味するところをよく分かっていないのだと言われています.

第1章

インストール方法

R Markdown を使うには R (R Core Team, 2020) と R パッケージである **rmarkdown** (JJ Allaire Xie McPherson, et al., 2021) のインストールが必要です.

```
# CRAN から rmarkdown パッケージを R にインストール
install.packages("rmarkdown")

# または、開発版をインストールしたければ GitHub

# からインストール

if (!requireNamespace("remotes")) install.packages("remotes")

remotes::install_github("rstudio/rmarkdown")
```

こだわりのあるテキストエディタや IDE (統合開発環境) がなければ, RStudio IDE (https://www.rstudio.com) のインストールも推奨します. RStudio は必須ではないですが, エディタに強力な R Markdown 支援機能があるので平均的なユーザーにとっては作業がより簡単になります. RStudio IDE を使わない選択をしたなら, Markdown を他の形式の文書に変換するためにrmarkdown が使用する Pandoc(1.1 節参照) をインストールする必要があります.

PDF として作成する必要があるなら, LaTeX $(1.2\ \mbox{\fontfamily figure } 1.2\ \mbox{\fontfamily figure } 1.3)$ のインストールも必要になるかもしれません.

1.1 RStudio IDE にバンドルされていないバージョンの Pandoc を使う

RStudio IDE は特定のバージョンの Pandoc を同梱しているため, RStudio IDE を使用する場合は自分で Pandoc をインストールする必要はありません. しかし同梱されたバージョンが最新でないことはよくありますし, 必要なバージョンでないかもしれません. 別の Pandoc を自分でインストールすることができます. ほとんどの RStudio ユーザーは同梱されたバージョンを使用しているでしょうから, このバージョンの Pandoc は R Markdown での徹底的なテストを乗り越えていることを覚えておいてください. 異なるバージョン (特に新しいバージョン)を使う場合, 他の R Markdown ユーザーや開発者が解決できない問題にぶつかるかもしれません.

Pandoc のサイトに, プラットフォームごとの Pandoc のインストール方法の詳細なインストラクション https://pandoc.org/installing.html があります. 特定のバージョンを使うために Pandoc を自分でインストールしたのなら, rmarkdown::find_pandoc() 関数を呼び出して rmarkdown パッケージにそのことを知らせることになるでしょう. 例えば以下のように.

```
# 特定のバージョンを検索
rmarkdown::find_pandoc(version = "2.9.1")

# 特定のディレクトリから検索
rmarkdown::find_pandoc(dir = "~/Downloads/Pandoc")

# 以前発見した Pandoc を無視して再検索する
rmarkdown::find_pandoc(cache = FALSE)
```

上記のコードチャンクのように、Pandoc のバージョンを特定する方法はいくつかあります。デフォルトでは rmarkdown::find_pandoc() はお使いのシステムの最新の Pandoc を発見しようとします。発見できたなら、バージョン情報はキャッシュされ cache = FALSE でキャッシュは無効化されます。 pandoc 実行ファイルの発見されるであろうディレクトリがどこにある可能性があるかは、ヘルプページの ?rmarkdown::find_pandoc を見てください。

この関数は Rmd 文書内でも外部でも呼び出される可能性があります. あなたのコンピュータにインストールした特定のバージョンの Pandoc で Rmd 文書をコンパイルしたい場合, この関数を文書内のチャンクのどれかで呼び出すことになるでしょう. 例えばセットアップ用のチャンクで以下のように.

```
```{r, setup, include=FALSE}
rmarkdown::find_pandoc(version = '2.9.1')
...
```

### 1.2 PDF レポートの作成に LaTeX (TinyTeX) をインストールする

R Markdown から PDF 文書を作りたいなら, LaTeX がインストール済みである必要があります. 伝統的な選択肢として MiKTeX, MacTeX, そして TeX Live がありますが, R Markdown ユーザーに対しては TinyTeX\*<sup>1</sup> のインストールを推奨します.

TinyTeX は TeX Live をもとにカスタムされた LaTeX ディストリビューションで, 比較的サイズ が小さく, それでいて, 特に R ユーザーが使うようなほとんどの機能を備えています. TinyTeX の インストールや起動にはシステム管理者権限は不要です $^{*2}$ . TinyTeX は R パッケージの **tinytex** (Xie, 2021c) でインストールできます.

```
01 tinytex::install_tinytex()
```

- 02 # TinyTeX をアンインストールするなら、
- 03 # tinytex::uninstall\_tinytex() を実行してください

"tinytex" は R パッケージのことを指し, "TinyTeX" は LaTeX ディストリビューションを指すことに注意してください. TinyTeX を使う利点は 2 つあります.

- 1. TinyTeX は (他の LaTeX ディストリビューションと比べて) 軽量であり, クロスプラットフォームでありポータブルです. 例えば USB ドライブや他のポータブルデバイスに TinyTeX のコピーを保存し, 同じオペレーティングシステムの別のコンピュータで使用することができます.
- 2. R Markdown を PDF へ変換する時, Pandoc はまず Markdown を中間ファイルとして LaTeX 文書に変換します. **tinytex** パッケージは LaTeX 文書を PDF にコンパイルするへ ルパー関数を提供します (主な関数は tinytex::latexmk() です). TinyTeX を使っていて, インストールされていない LaTeX パッケージが必要ならば, **tinytex** は自動でインストー ルしようとします. LaTeX ファイルに対するコンパイルも,全ての相互参照を確実に解決するために十分な回数だけ行おうとします.

<sup>\*1</sup> https://yihui.org/tinytex/

 $<sup>^{*2}</sup>$  というより, あなたがシステムの唯一のユーザーなら Linux や macOS では TinyTeX を root 権限で (つまり sudoで) インストール**しない**ことをお薦めします.

技術的に詳しい話に興味があるなら, Xie (2019b) の論文と https://yihui.org/tinytex/faq/の FAQ を確認するとよいかもしれません.

### 1.3 足りない LaTeX パッケージをインストールする

文書を LaTeX を通して PDF にコンパイルしたい時, これらのようなエラーに遭遇するかもしれません.

```
! LaTeX Error: File `ocgbase.sty' not found.

!pdfTeX error: pdflatex (file 8r.enc):
 cannot open encoding file for reading

!pdfTeX error: /usr/local/bin/pdflatex (file tcrm0700):
 Font tcrm0700 at 600 not found
```

1.2 節で紹介した TinyTeX を使用しているなら, だいたいの場合このようなエラーに対処する必要はありません. **tinytex** (Xie, 2021c) が自動で対処してくれるからですが, 何らかの理由でこのようなエラーに遭遇した場合でもやはり, tinytex::parse\_install() で足りない LaTex パッケージをインストールするのは簡単です. この関数は LaTeX ログファイルのパスを引数として, 足りないパッケージの問題を自動的に解決し, CTAN (the Comprehensive TEX Archive Network, https://ctan.org) で見つけられたものをインストールしようとします. LaTeX ログファイルは典型的には入力文書ファイルとおなじ基底名と,.log という拡張子名を持ちます. このログファイルを見つけられない場合, エラーメッセージをこの関数の text 引数に与えることができます. どちらの方法でも動作するはずです.

```
ログファイルが filename.log だとする
tinytex::parse_install("filename.log")

または `text` 引数を使う
tinytex::parse_install(
text = "! LaTeX Error: File `ocgbase.sty' not found."

| **Ocgx2*** パッケージがインストールされる
```

TinyTeX を使わない場合, tinytex パッケージはやはりエラーログから LaTeX パッケージ名を解

決しようとします. tinytex::parse\_packages() を例えばこのように使用してください.

```
ログファイル名が filename.log だったとする
tinytex::parse_packages("filename.log")

または `text` 引数を使う
tinytex::parse_packages(
text = "! LaTeX Error: File `ocgbase.sty' not found."

"ocgx2" と返ってくるはず
```

パッケージ名が判明したら, あなたの LaTeX ディストリビューションのパッケージマネージャで インストールすることができます.

代わりに MiKTeX を使っているなら、これも自動で足りないパッケージをインストールできます。 MikTeX のインストール中に "Always install missing packages on-the-fly" の設定に必ずチェックしてください。この設定をせずにインストールしていても、まだ MiKTeX Console で変更できます $^{*3}$ .

 $<sup>^{*3}</sup>$  https://github.com/rstudio/rmarkdown/issues/1285#issuecomment-374340175

### 第2章

## 概念に関する概観

このテキストの目標は R Markdown を最大限活用するために多くの豆知識と小技を見せることです. 以降の各章ではより効率的で簡潔なコードを書き, 出力をカスタマイズする技術を実演します. これを始める前に, これらを理解し, 覚え, 応用し, 「リミックス」できる助けになるよう, R Markdown の動作がどうなっているかを少しだけ学んでおくと役に立つでしょう. この節では文書を knit する処理と出力を変更する「重要な切り替えレバー」について簡潔に概観します. この資料は後の章の内容理解に必要ではありません (読み飛ばすのは自由です!) が, 全てのピースをどう当てはめるかについて, より豊かなメンタルモデルを構築する助けになるかもしれません.

### 2.1 レンダリング時に何が起こっているのか

R Markdown はいくつかの異なるプロセスを合わせて文書を作成し、これが R Markdown の全ての部品がどう連動してるかに関する混乱の主な理由です.\*1 幸運にも、ユーザーが文書を作成できるようになるためにはこれらの処理の内部の挙動を全て理解することは必須ではありません. しかし、文書の挙動の変えようとするだろうユーザーにとっては、どの部品がどの挙動を担当しているかを理解することは重要です。あなたが検索する適切な範囲を絞れるようになれば、ヘルプを探すのがより簡単になります。

R Markdown 文書に対する基本的なワークフローの構造を図2.1に示します. ステップ (矢印) と, 出力ファイルが生成される前に作成される中間ファイルを強調しています. 全ての処理は rmarkdown::render() 関数内で実装されています. 以降は各段階を詳細に説明します.

.Rmd 文書は, 文書の本来の形式です. YAML (メタデータ), テキスト (ナラティブ), コードチャンク

<sup>\*&</sup>lt;sup>1</sup> Allison Horst が R Markdown の処理を魔法になぞらえたすばらしいイラストに描き出してくれました (https://github.com/allisonhorst/stats-illustrations/raw/master/rstats-artwork/rmarkdown\_wizards.png). そして実際のところ、この絵は本書の扉絵に使われました.



図2.1: R Markdown 文書がどのように最終的な出力文書に変換されるかを表すダイアグラム

を含んでいます.

最初に **knitr** (Xie, 2021a) の knit() 関数が .Rmd ファイルに埋め込まれた全てのコードを実行することになり, そして出力文書にコードの出力を表示します. 全ての結果は, 一時的に作られた .md ファイルに含まれるよう, 適正なマークアップ言語へと変換されます.

その後 .md ファイルは, あるマークアップ言語のファイルから別のものへと変換するための多用途 なツールである Pandoc によって処理されます. 文書を output パラメータで指定された (HTML へ出力する html\_document のような) 出力形式へ変換するため, 文書の YAML フロントマターで 指定されたパラメータを取ります (例: title, author, date).

出力形式が PDF ならば、Pandoc が中間ファイルの .md を .tex ファイルに変換する時にさらに処理が 1 層、追加されます.このファイルはその後、最終的な PDF 文書を形成するため LaTeX によって処理されます.1.2 節で話したように、rmarkdown パッケージは tinytex パッケージ Xie (2021c)] の latexmk() 関数を呼び出し、これが次々に LaTeX を呼び出して .tex をコンパイルし.pdf にします.

簡潔にまとめると, rmarkdown::render() = knitr::knit() + Pandoc (PDF の場合のみ + LaTeX) ということです.

Robin Linacre が https://stackoverflow.com/q/40563479/559676 で R Markdown と **knitr** と Pandoc の関係について良い要約を書いてくれました.この投稿には上記の概観よりも技術的に 細かい話も含まれています.

全ての R Markdown 文書が常に Pandoc を通してコンパイルされるわけではないことに注意して

ください. 中間ファイル .md は他の Markdown レンダラによってもコンパイルできます. 例えば 2 つ例を挙げます.

- **xaringan** パッケージ (Xie, 2020b) は出力された .md をウェブブラウザ上で Markdown コンテンツを表示するための JavaScript ライブラリに渡します.\*<sup>2</sup>
- **blogdown** パッケージは (Xie Dervieux, and Presmanes Hill, 2021) .Rmarkdown 文書 形式をサポートしています. これは .Rmarkdown を knit して .markdown にし, Markdown 文書は大抵の場合外部のサイトジェネレータによって HTML にレンダリングされます.

### 2.2 R Markdown の解剖学

R Markdown にいくつかの部品があることを考えながら、我々は1レベル深く掘り下げることができます。では、レンダリング作業中にいつどのように処理を変化させるかに注目してみましょう。

### 2.2.1 YAML メタデータ

YAML metadata (YAML ヘッダとも呼びます) はレンダリング処理の中の多くのステージで処理され,様々な形で最終的な文書に作用することことができます. YAML メタデータは Pandoc, rmarkdown, そして knitr のそれぞれに読み込まれます. その過程で,メタデータに含まれる情報はコード,コンテンツ,そしてレンダリング処理に影響しうるものです.

典型的な YAML ヘッダはこのように, 文書と基本的なレンダリング操作指示に関する基本的なメタデータを含んでいます.

---

title: My R Markdown Report

author: Yihui Xie

output: html\_document

---

この場合, title, author フィールドは Pandoc によって処理され, テンプレート変数の値に設定されます. デフォルトのテンプレートでは, title と author の情報は得られた文書の冒頭に現れます. Pandoc が YAML ヘッダの情報をどう扱うかのより詳細な話は, Pandoc マニュアルの YAML

<sup>\*&</sup>lt;sup>2</sup> **訳注: xaringan** について日本語で言及している例は少ないですが,次のページが用法・技術的な説明の両面で優れています. https://qiita.com/nozma/items/21c56c7319e4fefceb79

metadata block.\*3 に関するセクションで見られます.\*4

対照的に output フィールドはレンダリング処理の中で rmarkdown が出力フォーマット関数  $rmarkdown:html_document()$  に適用するのに使われます output に指定した出力フォーマットに引数をあたえることで,レンダリング処理に影響させることができます. 例えばこのように書きます.

#### output:

html\_document:

toc: true

toc\_float: true

これは rmarkdown::render() に, rmarkdown::html\_document(toc = TRUE, toc\_float = TRUE) と指示することと同じです.これらのオプションが何をするのか知るために, あるいは使える他のオプションを知るために, R コンソールで?rmarkdown::html\_document を実行してヘルプページを読むことになるでしょう.output: html\_document は output: rmarkdown::html\_document と 等価であることに注意してください.出力フォーマットが rmarkdown:: のような修飾子を持たない場合, rmarkdown パッケージのものと想定されます.そうでないなら, R パッケージ名のプレフィックスが必要です.例えば bookdown::html\_document2 のような.

17.4 節に書いたように、YAML ヘッダ内でパラメータを選択したのなら、コンテンツとコードにも影響することができます。簡潔に言うと、R Markdown ドキュメント全体で参照可能な変数や R 評価式をヘッダに含めることができるということです。例えば以下のヘッダでは start\_date と end\_date パラメータを定義し、これらは以降の R Markdown 文書内で params というリスト内に反映されます。つまり、R コード内でこれらを使うことができ、params\$start\_date と params\$end\_date でアクセスできるということです。

- - -

title: My RMarkdown

author: Yihui Xie

output: html\_document

params:

start\_date: '2020-01-01'

<sup>\*3</sup> https://pandoc.org/MANUAL.html#extension-yaml\_metadata\_block

<sup>\*&</sup>lt;sup>4</sup> 訳注: 日本語訳での対応箇所はこちら: https://pandoc-doc-ja.readthedocs.io/ja/latest/users-guide.html#m etadata-blocks

end\_date: '2020-06-01'

---

#### 2.2.2 ナラティブ

TODO: ナラティブ, 訳し方 R Markdown のナラティブテキスト要素は YAML メタデータやコードチャンクよりは理解が簡単でしょう. 典型的には, これはテキストエディタで書いているようなものだと感じられるでしょう. しかし Markdown コンテンツは, どのようにコンテンツが作られるか, どうやって文書の構造がそこから作られるか, の両方に関して, 単純なテキストよりも強力で面白いものに違いありません.

我々のナラティブの多くは人の手で書かれていますが、多くの R Markdown 文書ではコードと使用される分析を参照することが求められているようです。この理由として、4章において、コードがテキストの一部を生成するのを助ける様々な方法が実演されています。単語を結合してリストにしたり (4.11節)、参考文献リストを書いたり (4.5節) といったやり方です。この変換は .Rmd から .md への変換と同様に **knitr** で制御されます。

Markdown のテキストは文書の構造も与えることができます。Markdown の構文をこの場で復習するには紙面が足りませんが、 $^{*5}$ 特に関連深い概念の 1 つとしてセクション (節) ヘッダがあります。これは 1 つ以上の、対応したレベルの数のハッシュ (#) で表現されます。例えば、以下のように、

# First-level header

## Second-level header

### Third-level header

TODO: section はセクションで統一するか節で統一するか. chapter との兼ね合い

これらのヘッダは **rmarkdown** が .md を最終的な出力フォーマットに変換する際に文書全体に構造を与えます。この構造は、いくつかの属性を付与することで節を参照し形成するのに役立ちます。 Pandoc 構文は、ヘッダの記述に  $\{\#id\}$  と続けることで参照を作成することが可能になり、あるいは  $\{\#id\}$  のように書くこと節に複数のクラスを付与できます。例えば以下のように.

<sup>\*&</sup>lt;sup>5</sup> Markdown の復習には, 代わりに, https://bookdown.org/yihui/bookdown/markdown-syntax.html をご覧になってください.

例えば ID やクラスで参照するといった, これから学ぶいくつもの方法で, この節にアクセスすることが出来ます. 具体例として, **4.**7節では節 ID を使って文書内のどこでも相互参照する方法を実演していますし, **7.**6節では小節を認識させる. tabset クラスを紹介しています.

R Markdown のテキスト部分で見られる最後の興味深いコンテンツのタイプとして, 特定の出力したいフォーマットに対して「生のコンテンツ」をそのまま書き出す方法, 例えば LaTeX 出力に対して LaTeX コードを直接書く (6.11 節), HTML 出力に対して HTML コードを直接書く, 等 (9.5 節), を挙げます. 生のコンテンツは基本的な Markdown ではできないことが達成できますが, 出力フォーマットが異なるとたいていは無視されることに留意してください. 例えば生の LaTeX コマンドは出力が HTML の場合, 無視されます.

### 2.2.3 コードチャンク

コードチャンクは R Markdown にとっての心臓の鼓動です. チャンク内のコードは **knitr** によって実行され, 出力は Markdown に翻訳され, レポートは現在のスクリプトとデータに動的に同期します. 各コードチャンクは言語エンジン (15章), ラベル, チャンクオプション (11章), そしてコードで構成されます.

コードチャンクを作ることができるいくつかの mod について理解するためには, **knitr** の処理をあとほんの少しだけ詳しく知ることが有意義です. 各チャンクでは, **knitr** 言語エンジンは 3 つの入力の部品を得ます. knit 環境 (knitr::knit\_global()), コードの入力, 任意に指定できるラベル, そしてチャンクオプションのリストです. コードチャンクはコードもその出力も整形された表現として返します. 副作用として, knit 環境も修正されます. 例えばコードチャンク内のソースコードを介してこの環境内で新しい変数がつくられます. この処理は図2.2のように表せます.

この処理は以下の方法で修正できます.

- 言語エンジンを変更する
- チャンクオプションを, グローバルあるいはローカル, あるいは特定の言語に対してのみ修正する
- 入出力にさらなる処理を追加するためのフックを使用する

例えば12.1節で, ソースコードの特定行を改ざんする後処理をするフックを加える方法を学ぶことになるでしょう.



図2.2: 言語エンジンへの入出力フローチャート

コードチャンクは2.2.2節でつぶさに見てきたナラティブのようなクラスと識別子を持ちます. コードチャンクは識別子 (よく「チャンクラベル」と呼ばれます) を言語エンジンの直後に任意で指定することができます. チャンクオプション class.source と class.output でそれぞれコードブロックとテキスト出力ブロックに対するクラスを設定することもできます (7.3節参照). 例えばチャンクヘッダ ```{r summary-stats, class.output = 'large-text'} はチャンクラベルに summary-stats を与え, テキスト出力ブロックに large-text というクラスを与えています. チャンクのラベルは 1 つだけですが, クラスは複数持つことができます.

#### 2.2.4 文書の本文

文書を執筆し編集するに際して理解すべき重要なことは、どのようにしてコードとナラティブの小片が文書内のいくつもの節やコンテナを作るのかです。例えばこのような文書があったとします.

# タイトル

## X 節

ここから導入文

```{r chunk-x}
x <- 1

```
### 第1小節

ここに詳細な話

### 第2小節

ここにさらに詳しい話

## Y 節

ここから新しい節

```{r chunk-y}
y <- 2
print(y)

```
```

この文書を書いていると、それぞれの小片は、テキストとコードを含んだ、独立した節とともに直線上に並んでいるものとみなすかもしれません。しかし実際にしているのは、概念としては図2.3でより細かく描いているように、入れ子(ネスト)になったコンテナの作成です*6

この図に関する 2 つの重要な特徴は (1) テキストやコードのどのセクションも個別のコンテナであり, (2) コンテナは他の別のコンテナを入れ子にできる, ということです. この入れ子は R Markdown 文書を RStudio IDE で執筆し, 文書のアウトラインを展開しているとはっきりと分かります.

図2.3では同じレベルのヘッダは同じレベルの入れ子を表していることに注意してください. 低レベルのヘッダはより高レベルなヘッダのコンテナ内部にあります. この場合, 通常は高レベルの節を「親」といい, 低レベルの節を「子」といいます. 例えば「小節」は「節」の子です. 5.8節で実演するように, ヘッダだけでなく::: を使ってまとまりの単位を作ることができます

このテキストで説明されているフォーマットやスタイルのオプションを適用するとき,この構造は

^{*6} 現実に, ここで見えているよりも多くのコンテナがあります. 例えば knit されたコードチャンクや, コードと出力が それぞれ別のコンテナとして存在し, そしてこれらは親要素を共有しています.

タイトル (レベル 1)節 X (レベル 2) - テキスト - コード (チャンク-x) - 第1小節 - 第2小節 **節 Y (レベル 2)**- テキスト - コード (チャンク-y)

図2.3: 入れ子状のコンテナとして表現された単純な R Markdown 文書の例

重要な意味を持ちます. 例えば, Pandoc が抽象構文木 (AST) でどのように文書を表現するかを学ぶ時 (4.20節) や, HTML 出力のスタイルを決めるために CSS セレクタを使用する時 (7.1節ほか), 入れ子構造の概念が現れます.

フォーマットとスタイルは似たようなタイプのコンテナ (例えばコードブロック) や, あるコンテナ内に全てあるコンテナ (例: 「Y節」以下にある全てのコンテナ) に対して適用できます. 加えて2.2.2節で説明したように, 同一のクラスをある節に対して同様のものとして扱うために適用することができますし, この場合は共通のクラス名は共通のプロパティ, あるいはこの節に共通の意図を示すようになります.

本書を読みながら、特定の「レシピ」がどんな種類のコンテナに対して作用しているのかを自問し、 考えることはあなたにとって有益になるでしょう.

2.3 結果を変更するために、なにを変更できるか?

では,ここまでで概観してきたものを要約し,これから何をすべきかを下見していきましょう.

rmarkdown で R Markdown 文書をレンダリングする処理は **knitr** で .Rmd を .md で変換する処理, それから (典型的には) Pandoc で .md を望む出力に変換する処理で構成されます.

.Rmd から .md 変換のステップではレポート内の全てのコードの実行と「翻訳」を制御するため,「コンテンツ」への変更のほとんどは, **knitr** の翻訳するためのコードを伴う .Rmd を編集する作業が絡んできます. これらのステップ全体を操作するツールには **knitr** チャンクオプションおよびフックがあります.

.md はフォーマットされていないプレーンテキストです。ここで Pandoc の出番です。HTML やPDF, Word といった最終的な出力フォーマットへ変換されます。この途上で構造とスタイルを付与します。この処理ではスタイルシート (CSS), 生 LaTeX または HTML コード, Pandoc テンプレート, Lua フィルタといった様々なツールが助けになります。R Markdown 文書の入れ子構造を理解し,よく考えて識別子とクラスを使うことで,これらのツールを取捨選択して出力の目標となる箇所に応用することができます。

最後に、YAML メタデータはこれらのステップの切り替えに役に立つかも知れません. パラメータの変更はコードがどう動作するかを変更することができ、メタデータの変更はテキストの内容を変化させ、出力オプションの変更は、異なる命令のセットをもつ render() 関数を与えます.

もちろんこれらは全て大まかな経験則であり、絶対的な事実として扱うべきでありません。究極的には、機能を完璧にきれいに分類することはできません。本書全体を通じて、説明されている結果の多くは、しばしば実現のための道筋が複数あり、さらにそのパイプラインの様々なステージの説明に立ち入ることになることが分かるでしょう。例えば文書内に画像を挿入する作業では、.Rmd から.md への変換の段階で R コード knitr::include_graphics() を使うこともあれば、Markdown 構文() を直接使うこともあるでしょう。ややこしく思えるかもしれませんし、アプローチごとに異なる利点を持つこともあります。しかし悩まないでください。なんにせよ、あなたの問題を解決する多くの有効な方法が存在し、あなたはそれらから自分にとって最も理にかなうアプローチに従うことができます。

さあこの辺にしておきましょう. 本書の残りの部分で, R Markdown を最大限活用するために我々が説明した, あらゆるコンポネントを変更する方法のより具体的な例を使って絵の下書きに色をつけることができます.

第3章

基本

この章では、R Markdown の重要な概念をいくつか提示します.まず「平文」「コード」という R Markdown の基本的なコンポネントを紹介します.次に、R Markdown 文書をどう R スクリプトへ変換するか、あるいは逆はどうするかを提示します.

もっと基本的な話を求める方は, *R Markdown Definitive Guide* (Xie J.J. Allaire, and Grolemund, 2018) の 2 章を見てください.

3.1 コードチャンクとインライン R コード

R Markdown 文書は平文 (ナラティブ) とコードが混合してできています. Rmd 文書には 2 種類のコード, コードチャンクとインライン (行内) R コードです. 以下は簡単な例です.

```
```{r}
x <- 5 # 円の半径
...

半径 'r x' の円に対し,
その面積は 'r pi * x^2' である.
```

コードチャンクはたいていは ```{} で始まり, ``` で終わります. コードチャンク内ではコードを何行でも書いてかまいません. インライン R コードは `r `という構文を使って文書のナラティブの中に埋め込まれます. 上記の例ではコードチャンク内で円の半径として変数 x を定義し, この円の面積を次のパラグラフで計算しています.

チャンクオプションを通してコードチャンクの挙動と出力をカスタマイズできます (オプションは

カーリー・ブレイス  $\{\}$  内に与えます). 例のいくつかは11章で見つかるでしょう. コードチャンク に別のプログラミング言語のコードを書くこともあるでしょう (15 章を見てください).

#### 3.2 RStudio のビジュアルエディタで R Markdown を書く

あなたがまだ Markdown の書き方に慣れていないか, Markdown コードを書くのが気に入らないならば, RStudio ver. 1.4 には実験的ですが Markdown 文書用のビジュアルエディタがあります. これは図3.1で示すように Word のような伝統的な WYSIWYG なエディタと似ていると感じるでしょう. この完全なドキュメントは https://rstudio.github.io/visual-markdown-editing/ で見ることができます.

ビジュアルエディタによって、 $\wedge$ ッダ、図、表、脚注などといった Pandoc でサポートされているほとんどあらゆる Markdown 要素を視覚的に編集できます。あなたは全ての構文を覚えなくてもよいということです。ある要素の構文を忘れた場合、RStudio ツールバー (図3.1参照) を使うかキーボードショートカットを使って要素を追加したり編集したりすることになるでしょう。

あなたが既に Markdown に熟練しているなら、ツールバーを右クリックしてソースモードとビジュアルモードを切り替えられるので、文書をソースモードのままで書くこともできます.

# 3.3 R スクリプトをレポートにレンダリングする

年季の入った R を Markdown ユーザーであっても、別の選択肢があることを見落としているかもしれません. Dean Attali はこれを"**knitr** の隠された至宝\*<sup>1</sup> と読んでいます. 純粋な R スクリプトを直接レンダリングできるということです.RStudio IDE をお使いなら, R スクリプトをレンダリングするキーボードショートカットは Rmd 文書を knit するとき (Ctrl / Cmd + Shift + K) と同じです.

R スクリプトをレポートにレンダリングすると, まず knitr::spin() 関数が呼ばれスクリプトが Rmd ファイルに変換されます. この関数が Dean Attali が「**knitr** の隠された至宝」と呼んでいるものです. レポートには全てのテキストとグラフィックの出力が掲載されます.

レポートの要素を細かく管理したいなら,以下のようにその助けとなるいくつかの構文があります.

• Roxygen コメントは平文として扱われます. roxygen コメントは #' で始まる R コメントで, レポートにナラティブを書くのに役立つかもしれません. コメント内ではあらゆる Markdown 構文を使うことができます.

<sup>\*1</sup> https://deanattali.com/2015/03/24/knitrs-best-hidden-gem-spin/



# **Preface**

R Markdown is a powerful tool for combining analysis and reporting into the same document. Since the birth of the **rmarkdown** package [@R-rmarkdown] in early 2014, R Markdown has grown substantially from a package that supports a few output formats, to an extensive and diverse ecosystem that supports the creation of books, blogs, scientific articles, websites, and even resumes.

Chapter	Title	Sections
1	Installation	3
2	Conceptual Overview	3
3	Basics	5



- #+ で始まるコメントは knitr チャンクヘッダとして扱われます. 例えば #+ label, fig.width=5 というコメントを, knitr::spin() は R Markdown の ```{r label, fig.width=5} というチャンクヘッダへ翻訳します.
- {{ code }} で囲まれた R コードは R Markdown のインライン R 表現へ翻訳されます. {{ code }} は 1 行で書かなければならないことに注意してください.
- YAML フロントマターも, R スクリプトの冒頭の roxigen コメント内に書くことができます. YAML フィールドのインデントによく気をつけてください. YAML のインデントを省くとデータ構造の表現は不正確なものに変わることがあります. 例えば keep\_tex: true というフィールドは, 後述する例のように pdf\_document 以下に 2 つ以上のスペースでインデントするべきです.
- /\* と \*/ の間の任意のテキストは無視されます (つまり, 完全にコメントとして扱われます) 上記のルールの全ての例を表現したのが以下です.

```
#' ---
#' title: "純粋な R script から生成したレポート"
#' output:
#'
 pdf_document:
#'
 keep_tex: true
#' ---
#'これは `knitr::spin()` によって生成されたレポートです.
#' **knitr** オプションをいくつか試してみましょう:
#+ echo=FALSE, fig.width=7
これは通常の R コメント文です.
plot(cars)
#' ここにインラインの値を書きましょう. π の値は
{{ pi }}
#'であると知られています.
#'
#' 最後に,全ての roxygen コメントは任意だということを書いておきます.
#'プロットの大きさなど出力要素をコントロールしようと思わない限り
```

```
#' チャンクオプションも必要でありません

/* C 言語のコメントのように /* と */ の間にコメントを書きましょう:
Sys.sleep(60)
*/
```

このスクリプトがレポートにレンダリングされた時, knitr::spin() はこれを R Markdown へと 変換します.

```
title: "純粋な R script から生成したレポート"
output:
 pdf_document:
 keep_tex: true

これは `knitr::spin()` によって生成されたレポートです.

knitr オプションをいくつか試してみましょう:

```{r echo=FALSE, fig.width=7}
# これは通常の R コメント文です.
plot(cars)
...

ここにインラインの値を書きましょう. $\pi$ の値は
'`r pi '`
であると知られています.

最後に、全ての roxygen コメントは任意だということを書いておきます.
プロットの大きさなど出力要素をコントロールしようと思わない限り
チャンクオプションも必要でありません
```

このレポート生成方法は,主にRスクリプトを使って作業していて,多くのナラティブを必要としないときに特に役立つかもしれません.レポートが実質テキストであるほどの割合のテキストなら,

全てのテキストを roxygen コメントに入れなくてもいいので R Markdown がより良い選択かもしれません.

3.4 Markdown から R script への変換

R Markdown から全ての R コードを取り出したい時, あなたは knitr::purl() を呼ぶことができます. 以下は purl.Rmd というファイル名の簡単な Rmd の例です.

```
title: R コードを取りだすために `purl()` を使いましょう
---

'knitr::purl()` 関数は **knitr** 文書から R コードチャンクを取り出しコードを R スクリ

プトに保存します.

以下は簡単なチャンクです.

'``{r, simple, echo=TRUE}
1 + 1

'``

'r 2 * pi` のようなインライン R 表現はデフォルトでは無視されます.

特定のコードチャンクを取り出してほしくない場合は, チャンクオプション `purl = FALSE` を

設定できます. 例えば以下のように.

'``{r, ignored, purl=FALSE}
x = rnorm(1000)
...
```

knitr::purl("purl.Rmd") を呼び出したら, 以下の R スクリプト (デフォルトのファイル名は purl.R) が生成されます.

上記の R スクリプトでは, チャンクオプションはコメントとして書かれています. 純粋な R コードが欲しい場合, documentation = 0 という引数を与えて knitr::purl() を呼ぶことになるでしょう. これで以下のような R スクリプトが生成されます.

1 + 1

テキストも全て維持したい場合 documentation = 2 引数を使うことになるでしょう. これは以下 のような R スクリプトを生成します.

```
#' ---
#' title: R コードを取りだすために `purl()` を使いましょう
#' ---
#'
#' `knitr::purl()` 関数は **knitr** 文書から R コードチャンクを取り出しコードを R ス
→ クリプトに保存します.
#1
#'以下は簡単なチャンクです.
#'
## ---- simple, echo=TRUE-----
1 + 1
#'
\#' `r 2 * pi ` のようなインライン R 表現はデフォルトでは無視されます.
#'
#'特定のコードチャンクを取り出してほしくない場合は,チャンクオプション `purl = FALSE`
→ を設定できます. 例えば以下のように.
#'
```

purl = FALSE というオプションのあるコードチャンクはこの R スクリプトから除外されることに 注意してください.

インライン R 表現はデフォルトでは無視されます. R スクリプトにインライン表現も含めたいなら, knitr::purl() を呼ぶ前に R のグローバルオプション options(knitr.purl.inline = TRUE) を設定する必要があります.

3.5 R Markdown Notebook

R Markdown Definitive Guide (Xie J.J. Allaire, and Grolemund, 2018) の Section 2.2*² で言及したように, Rmd 文書をコンパイルする方法はいくつかあります. その 1 つは html_notebook という出力形式で R Markdown Notebook を使うことです. 例えば以下のように.

- - -

title: An R Markdown Notebook

output: html_notebook

RStudio でこの出力形式を使うと、ツールバー上の knit ボタンが Preview ボタンになります.

notebook を使う主な利点は Rmd 文書を同じ R セッションで繰り返し作業できることです. コードチャンクにある緑色の矢印ボタンを押すことでチャンクを個別に随時実行し, エディタ上でテキストやグラフの出力を見ることができます. ツールバー上の Preview ボタンを押せば Rmd 文書は, あなたが既に実行したコードチャンクの出力を含む HTML 出力の文書へのみレンダリングされます. Preview ボタンは一切のコードチャンクを実行しません. これと比較して, 他の出力形式を使い knit ボタンを押せば RStudio は文書全体をコンパイルする (つまり全てのコードチャンクが一気に実行されます) ために R セッションを新規で立ち上げます. これはたいてい, より時間がかかります.

コードチャンクを個別に実行した時に出力が表示されるという RStudio のデフォルトの挙動が気 に入らないなら, Tools -> Global Options -> R Markdown から "Show output inline for all R Markdown documents" というオプションのチェックを外すことができます. 以降は, コードチャンクを実行すると出力はソースエディタ内ではなく R コンソールに表示されます. このオプションは YAML メタデータで個別の Rmd 文書ごとに設定できます. このように.

editor_options:

chunk_output_type: console

^{*2} https://bookdown.org/yihui/rmarkdown/compile.html

第4章

文書の要素

本章では、改ページ、YAML メタデータ、セクションヘッダ、引用、相互参照、数式、アニメーション、対話的プロット、ダイアグラム、コメントといった R Markdown 文書の要素をカスタマイズしたり生成したりするのに使える豆知識と小ワザを紹介します.

4.1 改ページ(改段)を挿入する

改ページしたい場合, \newpage を文書に挿入できます.*1 これは LaTeX コマンドですが, **rmarkdown** パッケージは LaTeX 出力フォーマットでも, HTML, Word, ODT などのいくつかの非 LaTeX 出力フォーマットでも認識することができます.*2

例えば以下のように.

title: Breaking pages
output:
 pdf_document: default
 word_document: default
 html_document: default
 odt_document: default

 $^{^{*1}}$ **訳注**: 正確には \newpage コマンドは改「段」です.二段組の場合,次の段に改めるため,必ずページを改めるわけではありません.

 $^{^{*2}}$ HTML 出力では、 改ページは HTML ページの出力時のみ意味をなし、 それ以外では HTML は単一の連続したページになるため、 改ページを見ることはありません.

第一節

\newpage

第二節

これは Pandoc の Lua フィルタ に基づく機能です (4.20 節参照). 技術的なことに興味のある方はこのパッケージの vignettte を見てください.

```
vignette("lua-filters", package = "rmarkdown")
```

4.2 文書タイトルを動的に設定する

Rmd 文書内のどこでも, YAML メタデータの部分であっても行内 R コード (3.1節) を使うことができます. つまり行内 R コードによって文書のタイトルなどの YAML メタデータの動的生成が可能ということです. 例えばこのように.

```
---
title: "自動車 `r nrow(mtcars)` 台の分析"
---
```

タイトルが以降の文書内で作成される R の変数に依存する場合, 以下の例のようにその後に YAML セクションを書いて title フィールドを加えることになるでしょう.

```
author: "利口なアナリスト"
output: pdf_document
---

我々の市場シェアを頑張って計算してみました.
I just tried really hard to calculate our market share:
'``{r}
```

```
share <- runif(1)
---
title: "我々の市場シェアは今や `r round(100 * share, 2)`% です!"
---
これはとても `r if(share > 0.8) "喜ばしい" else "悲しい" ことです.
```

上記の例では,変数 share を作成してから文書のタイトルを追加しています. Pandoc は文書内に YAML セクションをいくつ書いても読み込む (そして全てマージする) ことができるため, この例 が動作します.

タイトルだけでなくどの YAML フィールドも, パラメータ化されたレポートから動的に生成することができます (17.4 節参照). 例えばこのように.

```
title: "`r params$doc_title`"
author: "利口なアナリスト"
params:
doc_title: "デフォルトのタイトル"
```

タイトルが動的なパラメータなら,タイトルだけ異なるレポートのまとまりを簡単に生成できます. この節ではタイトルを例にしましたが,このアイディアは YAML セクションのどのメタデータのフィールドにも適用可能です.

4.3 R コード内で文書メタデータにアクセスする

Rmd 文書をコンパイルする際に、YAML セクションの全てのメタデータはリストオブジェクト rmarkdown::metadata に保存されます。例えば rmarkdown::metadata\$title は文書のタイトルを与えます。YAML メタデータに与えられた情報をハードコードしなくてすむように、この metadata オブジェクトを R コード内で使うことができます。例えば **blastula** パッケージ (Richard Iannone and Cheng、2020) で E メールを送る時、文書のタイトルをメールの件名に、著者フィールドを送信者情報に使うことができます。

```
title: 重要なレポート
author: John Doe
email: john@example.com
---

重要な分析ができましたので結果をメールで送りたいと思います.

'``{r}
library(rmarkdown)
library(blastula)
smtp_send(
...,
from = setNames(metadata$email, metadata$author),
subject = metadata$title
)
```

4.4 番号のない節

ほとんどの出力フォーマットは number_sections オプションをサポートしています. これは true を設定すれば節への付番を有効にできるオプションです. 例えば以下のように.

```
output:
  html_document:
    number_sections: true

pdf_document:
    number_sections: true
```

特定の節に番号を付けたくないならば, number_sections オプションは true のままにして, その節のヘッダの直後に $\{-\}$ を加えます. 例えばこのように.

この節には番号がつきません {-}

全く同じことを, {.unnumbered} を使ってもできます. 例えば {.unnumbered #section-id} のように, 他の属性を追加することもできます. 詳細は https://pandoc.org/MANUAL.html#extension-header_attributes を確認してください.

付番されてない節はしばしば記述に追加の情報を与えるのに使われます。例えば本書では、「はじめに」と「著者について」の章は本文では含まれないため付番されていません。図4.1で見られるように、実際の本文は付番されていない章 2 つの後から始まり、本文の章は付番されています。TODO:日本語版が出来たらスクリーンショット撮り直す。

図4.1: 付番された章とされていない章を示すための目次のスクリーンショット

節番号は漸増します。もし付番されている節の後にされていない節が挿入し, その後にさらに付番された節が開始しているなら, 節番号はそこから増加を再開します。

4.5 参考文献と引用

目次

参考文献の目録を出力文書に含める方法の概観として, Xie (2016) の Section 2.8*3 を見ると良いでしょう. 基本的な使用法として, YAML メタデータの bibliography フィールドに文献目録ファイルを指定する必要があります. 例えば BibTeX データベースが *.bib という拡張子の付いたプレーンテキストとして与えられているなら. このようにします.

^{*3} https://bookdown.org/yihui/bookdown/citations.html

```
output: html_document
bibliography: references.bib
---
```

そしてこのファイルに文献アイテムがこのようなエントリで含まれています.

文書内 @key という構文で文献アイテムを直接引用することができます. key の部分エントリの最初の行にある引用キーです. 上記の例なら @R-base です. 括弧で囲んで引用したいなら, [@key] を使います. 複数のエントリを同時に引用するなら, [@key-1; @key-2; @key-3] のようにセミコロンでキーを区切ります. 著者名を表示しないのなら, [-@R-base] のように @ の前にマイナス記号を付けます.

4.5.1 引用スタイルの変更

デフォルトでは Pandoc は Chicago 式の著者名-出版年形式の引用スタイルと参考文献スタイルを使います. 他のスタイルを使うには, メタデータフィールドの csl で CSL (Citation Style Language) ファイルを指定します. 例えばこのように.

```
output: html_document
bibliography: references.bib
csl: biomed-central.csl
---
```

必要としているフォーマットを見つけるには, Zotero Style Repository,*⁴ を使うことをおすすめします. これは必要なスタイルの検索とダウンロードが簡単にできます.

CSL ファイルはカスタマイズされたフォーマット要件に合うようにを修正できます。例えば "et al." の前に表示する著者の人数を変更できます。これは https://editor.citationstyles.org で 使用できるようなビジュアルエディタを使って簡単にできます。

4.5.2 引用していない文献を参考文献に追加する

デフォルトでは参考文献には文書で直接参照されたアイテムのみ表示されます。本文中に実際に引用されていない文献を含めたい場合, notice というダミーのメタデータフィールドを定義し, そこで引用します.

```
nocite: |
@item1, @item2
```

4.5.3 全てのアイテムを参考文献に掲載する

文献目録のすべてのアイテムを明示的に言及したくないが,参考文献には掲載したいというなら, 以下のような構文が使えます.

```
---
nocite: '@*'
```

これは全てのアイテムを参考文献として強制的に掲載させます.

4.5.4 参考文献の後に補遺を掲載する(*)

デフォルトでは参考文献は文書全体の最後に掲載されます. しかし参考文献一覧の後に追加のテキストを置きたいこともあるでしょう. 一番よくあるのは文書に補遺 (appendix) を含めたいときです. 以下に示すように、、div id="refs"></div> を使うことで参考文献一覧の位置を矯正できます.

^{*4} https://www.zotero.org/styles

参考文献

<div id="refs"></div>

補遺

<div> は HTML タグですが、この方法は PDF など他の出力フォーマットでも機能します.

bookdown パッケージ (Xie, 2020a) を使うことで, 補遺の開始前に special header*5 # (AP-PENDIX) Appendix {-} の挿入が可能となりさらに改善できます. 例えば以下のように.

参考文献

<div id="refs"></div>

- # (APPENDIX) 補遺 {-}
- # 追加情報

これは「補遺 A」になる.

さらにもう1つ

これは「補遺 B」になる.

LaTeX/PDF および HTML フォーマットでは補遺の付番スタイルは自動的に変更されます (たいていは A, A.1, A.2, B, B.1, ... という形式です).

4.6 R パッケージの引用を生成する

R パッケージを引用するには, base R の citation() を使うことができます. BibTeX 用の引用エントリを生成したいなら, citation() の返り値を toBibtex() を与えることができます. 例えばこうです.

 $^{^{*5}\ \}text{https://bookdown.org/yihui/bookdown/markdown-extensions-by-bookdown.html\#special-headers}$

01 toBibtex(citation("xaringan"))

```
@Manual{,
  title = {xaringan: Presentation Ninja},
  author = {Yihui Xie},
  year = {2020},
  note = {R package version 0.19},
  url = {https://CRAN.R-project.org/package=xaringan},
}
```

toBibtex()で生成されたエントリを使うには、出力を.bib ファイルにコピーし、引用キーを追加しなければなりません (例えば @Manual { , の部分を @Manual { R-xaringan , と書き換える). これは knitr::write_bib() 関数によって自動化できます. この関数は引用エントリを生成し、自動的にキーを加えてファイルに書き込みます. 例えばこのようにします.

```
81 knitr::write_bib(c(.packages(), "bookdown"), "packages.bib")
```

第1引数はパッケージ名の文字列ベクトルで, 第2引数は .bib ファイルのパスであるべきです. 上記の例では, .packages() は現在の R セッションが読み込んでいる全てのパッケージ名を返します. これらのパッケージのいずれかが更新された (例えば著者, タイトル, 年, あるいはバージョンが変更された) とき, write_bib() は自動的に .bib を更新できます.

引用エントリには 2 つのタイプが選択肢としてあります。1 つはパッケージの DESCRIPTION ファイルをもとに生成したもので,もう 1 つは,もしパッケージに CITATION ファイルが存在するなら,そこから生成したものです。前者のタイプは引用キーが R-(パッケージ名) という形式になり(例えば R-knitr),後者のタイプはパッケージ名と公開年を結合したものがキーとなります(例:knitr2015)。もし複数のエントリが同一年にあるなら,接尾文字が追加されます。例えばknitr2015a と knitr2015b のように。前者のタイプはしばしばパッケージ自体を引用(つまり,ソフトウェアとして)するのに使われますが,後者のタイプはしばしば論文や書籍のようなパッケージと関連のある出版物として扱われます。

```
81 knitr::write_bib(c("knitr", "rmarkdown"), width = 60)
```

```
@Manual{R-knitr,
  title = {knitr: A General-Purpose Package for Dynamic
    Report Generation in R},
  author = {Yihui Xie},
  year = \{2021\},\
  note = {R package version 1.31},
  url = {https://yihui.org/knitr/},
}
@Manual{R-rmarkdown,
  title = {rmarkdown: Dynamic Documents for R},
  author = {JJ Allaire and Yihui Xie and Jonathan McPherson
    and Javier Luraschi and Kevin Ushey and Aron Atkins
    and Hadley Wickham and Joe Cheng and Winston Chang and
    Richard Iannone},
  year = \{2021\},\
  note = {R package version 2.7},
  url = {https://CRAN.R-project.org/package=rmarkdown},
}
@Book{knitr2015,
  title = {Dynamic Documents with {R} and knitr},
  author = {Yihui Xie},
  publisher = {Chapman and Hall/CRC},
  address = {Boca Raton, Florida},
  year = \{2015\},\
  edition = {2nd},
  note = {ISBN 978-1498716963},
  url = {https://yihui.org/knitr/},
}
@InCollection{knitr2014,
  booktitle = {Implementing Reproducible Computational
    Research },
  editor = {Victoria Stodden and Friedrich Leisch and Roger
```

```
D. Peng},
  title = {knitr: A Comprehensive Tool for Reproducible
    Research in {R}},
  author = {Yihui Xie},
  publisher = {Chapman and Hall/CRC},
  year = \{2014\},\
  note = {ISBN 978-1466561595},
  url = {http://www.crcpress.com/product/isbn/
    9781466561595},
}
@Book{rmarkdown2018,
  title = {R Markdown: The Definitive Guide},
  author = {Yihui Xie and J.J. Allaire and Garrett
    Grolemund},
  publisher = {Chapman and Hall/CRC},
  address = {Boca Raton, Florida},
  year = {2018},
  note = {ISBN 9781138359338},
  url = {https://bookdown.org/yihui/rmarkdown},
}
@Book{rmarkdown2020,
  title = {R Markdown Cookbook},
  author = {Yihui Xie and Christophe Dervieux and Emily
    Riederer},
  publisher = {Chapman and Hall/CRC},
  address = {Boca Raton, Florida},
  year = \{2020\},\
  note = {ISBN 9780367563837},
  url = {https://bookdown.org/yihui/rmarkdown-cookbook},
}
```

ファイルパスの引数がないと, knitr::write_bib() は上記の例のように引用エントリをコンソールに出力します.

write_bib() は既存の文献目録ファイルを上書きするように設計されていることに注意してください. 文献目録に手動で他のエントリを追加したい場合, 2 つ目の .bib ファイルを作成して, この例のように bibliography フィールドで参照してください.

```
bibliography: [packages.bib, references.bib]
---
'``{r, include=FALSE}
knitr::write_bib(file = 'packages.bib')
'``
```

上記の例では packages.bib が自動で生成されたもので, 手動で変更すべきではありません. それ以外の全ての引用エントリは references.bib に手動で書き込むことができます.

ここまでは R パッケージの引用を生成する方法を 1 つだけ紹介しています. それ以外のタイプの 文献を動的に引用を生成するには, **knitcitations** パッケージ (Boettiger, 2021) を確認すると良いでしょう.

4.7 文書内の相互参照

相互参照 はあなたの文書を通して読者を誘導するのに役に立つ方法であり, R Markdown ではこれを自動的に行なえます. これは **bookdown** 本の Chapter 2^{*6} で既に説明されていますが, 以下で簡潔な説明をします.

相互参照を使用するにあたって,以下が必要になります.

- **bookdown** 出力フォーマット: 相互参照は基本となる **rmarkdown** パッケージでは直接提供されず, **bookdown** (Xie, 2020a) による拡張機能として提供されています. よって YAML の output フィールドで **bookdown** のフォーマット (例: html_document2, pdf_document2, word_document2 など) を使用しなければなりません.
- 図 (または表) に対するキャプション: キャプションのない図は単なる画像として直接埋め 込まれるたあめ, 付番された図 (figure) にはなりません.
- **ラベルの設定されたコードチャンク**: チャンクによって生成された図を参照するための識別 子を提供してくれます.

^{*6} https://bookdown.org/yihui/bookdown/components.html

これらの条件が合わさって初めて、テキスト内で $\ensuremath{\mbox{\tt Qref(type:label)}}$ という構文を使って相互参照 を作成できます。 label はチャンクラベルであり、 type は参照するものの環境 (例:, tab, fig, eqn) です。 以下に例を示します。

```
title: 図,表,数式を相互参照する
author: bookdown による生成
output:
 bookdown::pdf_document2:
   latex_engine: lualatex
 bookdown::html_document2: default
documentclass: ltjsarticle
図 \@ref(fig:cars-plot) を見よ.
```{r cars-plot, fig.cap="自動車のデータ", echo=FALSE}
par(mar = c(4, 4, .2, .1))
plot(cars) # a scatterplot
次に数式\@ref(eq:mean) を見よ.
\begin{equation}
\bar{X} = \frac{i=1}^n X_i}{n} (\ensuremath{\mbox{"#eq:mean}})
\end{equation}
さらに表 \@ref(tab:mtcars) を見よ.
```{r mtcars, echo=FALSE}
knitr::kable(mtcars[1:5, 1:5], caption = "mtcars データ")
```

この文書の出力を図 4.2 に示します.

数式, 定理, 節の見出しにも相互参照することができます. これらのタイプの参照は **bookdown** 本の 2.2, 2.6 節でより説明されています.



図4.2: R Markdown 文書内の相互参照の例

4.8 日付を自動的に更新する

出力されたレポートに Rmd 文書がコンパイルされた日付を表示したいなら, YAML メタデータの date フィールドに行内 R 評価式を追加し, 現在の日付を得るために Sys.Date() or Sys.time() 関数を使用できます.

date: "`r Sys.Date()`"

もっと人間にとって読みやすい, 特定の日次フォーマットを指定したいかもしれません. 例えば以下のようにします.

date: "`r format(Sys.time(), '%x')`"

例えば 2021 年 3 月 15 日といったコードはあなたが文書を knit するごとに, 日付を動的に生成します. 日付のフォーマットをカスタマイズしたいならば, ご自分でフォーマット文字列を与えて変更できます. いくつか例をお見せしましょう.

• %Y %B: 2021 3 月

• %y/%m/%d: 21/03/15

• %b%d (%a): 3月15(月)

表 4.1 は POSIXct フォーマットの一覧です.

最後に, 説明的なテキストを日付に含めたいかもしれないときのことを書いておきます. このように R コードの前に「最終コンパイル日」のような何らかの文を追加することができます.

date: "最終コンパイル日 `r format(Sys.time(), '%Y/%m/%d')`"

4.9 文書に複数の著者を表記する

R Markdown 文書の YAML フロントマターに複数の著者を加える方法は複数あります. 単純に, 全員を同列に並べたい場合, 1 つの文字列を与えることでできます. 例えばこのように.

表4.1: Rにおける日付と時刻のフォーマット

コード	意味	コード	意味
%a	曜日の略称	%A	曜日の名称
%b	月の略称	%B	月の名称
%c	ロケール依存の時刻	%d	数値表記の日
%Н	数値表記の時間 (24 時間)	%I	数値表記の時間 (12 時間)
%j	1年の何日目か	%m	数値表記の月
%M	数値表記の分	%p	ロケール依存の午前/午後
%S	数値表記の秒	%U	年の何週目か (日曜日始まり)
%w	数値表記の曜日 (0= 日曜日)	%W	年の何週目か (月曜日始まり)
%x	ロケール依存の日付	%X	ロケール依存の時刻
%y	下 2 桁表記の年	%Y	4 桁表記の年
%z	GMT からのオフセット	%Z	タイムゾーン (文字表記)

title: "無題"

author: "John Doe, Jane Doe"

別の方法として, 各エントリごとに行を分けたいならば, YAML フィールドにエントリのリストを与えることができます. これは著者ごとに E メールアドレスや所属情報を加えたいときに役に立ちます. 例えばこのように.

author:

- John Doe, 組織 1
- Jane Doe, 組織 2

追加情報を文書の脚注として追記したい時、Markdown 構文の $^{[]}$ を利用できます。これは著者 ごとに連絡先 E メールや住所といった多くの情報を含めたい場合により便利です。厳密な動作は出力フォーマットに依存します。

```
---
author:
- John Doe^[組織 1, john@example.org]
- Jane Doe^[組織 2, jane@example.org]
---
```

特定の R Markdown テンプレートでは YAML に直接追加パラメータを指定することができます. 例えば Distill*⁷ 出力フォーマットは url, affiliation, affiliation_url を指定することが可能です. まずは **distill** パッケージ (JJ Allaire Rich Iannone, et al., 2021) をインストールします.

```
01 install.packages("distill")
```

Distill フォーマットは詳細な著者情報を与えて使うことができます. 例えばこのように.

```
title: "R Markdown のための Distill"
author:
- name: "JJ Allaire"
   url: https://github.com/jjallaire
   affiliation: RStudio
   affiliation_url: https://www.rstudio.com
output: distill::distill_article
---
```

4.10 図のキャプションへの付番

bookdown (Xie, 2020a) 出力フォーマット を, 図のキャプションに図番号を追加するのに使うことができます. 以下はその例です.

```
output: bookdown::html_document2
---
```

^{*7} https://rstudio.github.io/distill/

```
'``{r cars, fig.cap = "すごいプロット"}
plot(cars)
'``
'``{r mtcars, fig.cap = "これもすごいプロット"}
plot(mpg ~ hp, mtcars)
'``
```

4.7 節では表や数式といった他の要素でどのように動くか、そして付番された要素をテキスト内で相互参照する方法を実演しています。 html_document2 いがいにも、pdf_document2, word_document2 といった他の出力に対する同様のフォーマット関数もあります。

bookdown 以外の R Markdown 出力フォーマットにもこの機能を追加できます. 鍵はこれらが **bookdown** 出力フォーマットの「基本フォーマット」であることです. 例えば, rti-cles::jss_article フォーマットで図に付番と相互参照をするために以下が使えます.

```
output:
  bookdown::pdf_book:
  base_format: rticles::jss_article
```

bookdown 出力フォーマット関数のヘルプページを読んで, base_format 引数があるかどうか確認してみてください (例: ?bookdown::html_document2).

4.11 単語をコンマ区切りで結合する

文字列ベクトルを人間の読みやすい形で出力したいとします. 例えば x < c ("apple", "banana", "cherry") について, きっとあなたは [1] "apple" "banana" "cherry" のような R が通常プリントする形式で出力をしてほしくないでしょう. あなたは代わりに "apple, banana, and cherry" という文字列がほしいのではないでしょうか. 文字列ベクトルを連結して 1 つにまとめる R 基本関数の paste() があります. 例えば paste(x, collapse = ', ') とすれば, 出力は "apple, banana, cherry" となるでしょう. この方法の問題は (1) 接続詞 "and" が欠けており, (2) ベクトルの要素が 2 つだけの場合はコンマを使うべきでない ("apple, banana" ではなく "apple and banana" という出力になるべき) ということです.

knitr::combine_words() 関数は文字列ベクトルの長さにかかわらず, 要素を連結して文にできます. 基本的に, 単語 1 つに対してはそのまま同じものを返し, "A and B" という 2 つの単語に対し

```
v <- c("apple", "banana", "cherry")</pre>
01
    knitr::combine_words(v)
02
   ## apple, banana, and cherry
03
    knitr::combine_words(v, before = "`", after = "'")
04
    ## `apple', `banana', and `cherry'
05
    knitr::combine_words(v, sep = "、", and = " そして")
06
    ## apple、banana、そして cherry
07
    knitr::combine_words(v, sep = " / ", and = "")
08
    ## apple / banana / cherry
09
    knitr::combine_words(v[1]) # 単語1つ
10
   ## apple
11
   knitr::combine_words(v[1:2]) # 単語 2つ
12
13 ## apple and banana
14 knitr::combine_words(LETTERS[1:5])
15 ## A, B, C, D, and E
```

この関数は行内 R 評価式を使うときに特に使いやすいでしょう. 例えばこのように.

```
今朝は`r knitr::combine_words(v, sep = '、', and='')`を食べた.
```

4.12 複数の改行コードを維持する

Markdown ユーザは, verbatim 環境 (コードブロック) 以外の場所では空白 (改行コード含む) は大抵の場合意味を持たないことに気づき, 驚くでしょう. 2 つ以上のスペースはスペース 1 つと同じであり, 改行 1 つはスペース 1 つと同じです。 LaTeX や HTML を使ったことがあるなら, これらの言語と同じルールであるため驚くことはないかもしれません.

Markdown では, 空白行はしばしば段落などの要素の分離に使われます. 新しい段落に入らずに改行をするには, 末尾にスペース 2 つを追加しなければなりません. 特に詩や歌詞を引用したいときなど, 複数回改行したいときもあるかもしれません. 各行の末尾にスペース 2 つを手動で書き加え

るのはうんざりする作業です. $blogdown:::quote_poem()$ はこの作業を自動でやってくれます. 例えばこのように.

01 blogdown:::quote_poem(c("かたつむり", "そろそろ登れ",

02 "富士の山"))

03

[1] "> **かたつむり** \n そろそろ登れ \n 富士の山"

RStudio IDE と **blogdown** パッケージ (Xie Dervieux, and Presmanes Hill, 2021) をインストールして使っているなら, 改行を維持したいテキストを選択し, ツールバーの "Addins" から RStudio アドインの "Quote Poem" をクリックすることができます. 例えば以下のテキスト (fenced code block 記法内) は末尾にスペースが付いていません.

田子の浦ゆ

うち出でてみれば

真白にそ

富士の高嶺に

雪は降りける

--- 山部赤人

上記の詩句を選択肢, RStudio アドインの "Quote Poem" をクリックすれば, こう出力されます.

田子の浦ゆ

うち出でてみれば

真白にそ

富士の高嶺に

雪は降りける

一 山部赤人

TODO: quote poem だと flushrght が作られない?

時に「fenced code block は空白を維持するのに, 詩句をコードブロックに書くのはなぜですか」と質問があります. コードは詩的でありますが, 詩はコードではありません. 「コーディング」という行為にこだわりすぎないでください.

4.13 モデルを数式に変換する

Daniel Anderson らによって開発された **equatiomatic** パッケージ (https://github.com/dat alorax/equatiomatic) は R で当てはめたモデルに対応する数式を表示する, 便利な自動化の手段を提供します. 簡単な例を以下に示します.

```
01 fit <- lm(mpg ~ cyl + disp, mtcars)
02 # 理論モデルを表示
03 equatiomatic::extract_eq(fit)
```

$$mpg = \alpha + \beta_1(cyl) + \beta_2(disp) + \epsilon$$

- 01 # 実際の係数を表示
- 02 equatiomatic::extract_eq(fit, use_coefs = TRUE)

$$\hat{\text{mpg}} = 34.66 - 1.59(\text{cyl}) - 0.02(\text{disp})$$

実際の数式を表示するには, チャンクオプション results = "asis" (オプションの意味は11.11節 参照) が必要です. そうしないと, テキスト出力がそのまま表示されてしまいます.

このパッケージについてより詳しく知りたいならば, ドキュメントを読み, Github 上での開発状況を追ってください.

4.14 複数の R プロットからアニメーションを作成する

1つのコードチャンクで一連のプロットを生成したとき、これらを結合し1つのアニメーションを生成できます。出力フォーマットが HTML なら、これは簡単です。**gifski** パッケージ (Ooms、2018) をインストールし、チャンクオプション animation.hook = "gifski" 設定するだけです。図4.3 はシンプルな「パックマン」のアニメーションで、これは以下のコードで作成しました。

```
'``{r, animation.hook="gifski"}
for (i in 1:2) {
  pie(c(i %% 2, 6), col = c('red', 'yellow'), labels = NA)
```

}

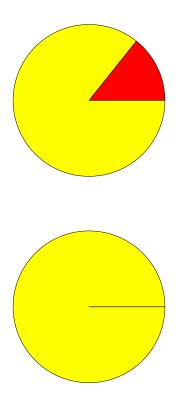


図4.3: パックマンのアニメーション

アニメーションのフォーマットは GIF で、HTML 出力ではうまく動作しますが、LaTeX は GIF を直接サポートしていません。あなたが本書の PDF または印刷版を読んでいるなら、図4.3 が 2 つの動かない画像になっているのはこれが理由です。本書のオンライン版を読めば、実際のアニメーションが見られるでしょう。

PDF でもアニメーションを動作させることはできますが,事前準備が 2 つ必要です.第 1 に,LaTeX パッケージの **animate***8 を読み込む必要があります (方法は6.4節参照).第 2 に,Acrobat Reader でのみアニメーションを見ることができます.第 2 位に,Acrobat Reader でのみアニメーションの動作を見ることができます.それからチャンクオプション fig. show = "animate" で **animate** パッケージ を使いアニメーションを作成できるようにします.以下はその例です.

^{*8} https://ctan.org/pkg/animate

```
title: PDF でのアニメーション
output:

pdf_document:

extra_dependencies: animate

---
以下のアニメーションは Acrobat Reader でのみ見ることができます.

'``{r, fig.show='animate'}
for (i in 1:2) {

pie(c(i %% 2, 6), col = c('red', 'yellow'), labels = NA)
}
...
```

アニメーションのイメージフレーム間の表示間隔はチャンクオプション interval で設定できます. デフォルトでは interval = 1 (つまり 1 秒) です.

R パッケージ **animation** (Xie, 2018) には, 統計的計算の方法やアイディアを表現するアニメーションの例がいくつか入っています. **gganimate** パッケージ (Pedersen and Robinson, 2020) は **ggplot2** (Wickham Chang, et al., 2020) に基づいた滑らかなアニメーションの作成を可能にします. どちらも R Markdown で動作します.

4.15 ダイアグラムを作成する

ダイアグラムやフローチャートを生成する, R とは独立したプログラム (例: Graphviz) は多くありますが, これらは Rmd 文書内のコードチャンク内で直接管理することができます.

R ではいくつかのパッケージが使用可能ですが, その中で **DiagrammeR** (Richard Iannone, 2020) とその他いくつかを最後に簡単に解説します. 完全なデモは https://rich-iannone.gith ub.io/DiagrammeR/ で見ることができます. この節では基本的な使用法とダイアグラム内で R コードを使う方法を紹介します.

4.15.1 基本的なダイアグラム

DiagrammeR はいくつかの異なるグラフ言語を使ってグラフを作成する方法を提供します.この節では Graphviz の例を提示しますが,*⁹ **DiagrammeR** は純粋に R コードだけでグラフを作ることもできます.

RStudio IDE は Graphviz (.gv) および mermaid (.mmd) ファイルをネイティブにサポートして います. これらのタイプのファイルを RStudio で編集すると, シンタックスハイライトされるとい う利点があります. RStudio のツールバーの "Preview" ボタンをクリックすると, ダイアグラム をプレビューすることができます. 図4.4 は, 4 つのステップを表す矩形で構成された, フローチャートの単純な例です. これは以下のコードで生成されています.

```
DiagrammeR::grViz("digraph {
01
02
     graph [layout = dot, rankdir = TB]
03
     node [shape = rectangle]
04
05
     rec1 [label = 'ステップ 1. 起床する']
     rec2 [label = 'ステップ 2. コードを書く']
06
     rec3 [label = 'ステップ 3. ???']
07
     rec4 [label = 'ステップ 4. 収入を得る']
08
09
     # ノード ID でエッジを定義
10
11
     rec1 -> rec2 -> rec3 -> rec4
     }",
12
     height = 500)
13
```

ノードの形状, 色, 線のタイプを定義したり, パラメータを追加したりといったことができる拡張的な操作も用意されています.

4.15.2 図にパラメータを追加する

Graphviz の置換機能は可読性を損なうことなく, R 評価式を Graphviz のグラフ設定に混ぜ込むことができます. @ を伴う置換を指定すれば, そこに置換される有効な R 評価式が確実にあるよう

^{*&}lt;sup>9</sup> あなたのバックグラウンド次第では、この節は **DiagrammeR** に対する偏った解説になるかもしれません. このパッケージに興味があるなら、パッケージの公式ドキュメントをご覧ください.



図4.4: プログラマの絵空事を表したダイアグラム

にせねばなりません. 評価式は脚注として置かれ、そして R ベクトルオブジェクトを返すものでなくてはなりません. @@ という記法のすぐ後には数字が続き、これは R 評価式の脚注番号に対応します. 図4.5はダイアグラムへの R コードの埋め込みと評価の例です.

```
01
    DiagrammeR::grViz("
      digraph graph2 {
02
03
      graph [layout = dot, rankdir = LR]
04
05
      # node definitions with substituted label text
06
      node [shape = oval]
07
      a [label = '@@1']
80
      b [label = '@@2']
09
      c [label = '@@3']
10
      d [label = '@@4']
11
12
      a -> b -> c -> d
13
14
      }
```

```
15
16  [1]: names(iris)[1]
17  [2]: names(iris)[2]
18  [3]: names(iris)[3]
19  [4]: names(iris)[4]
20  ",
21  height = 100)
```

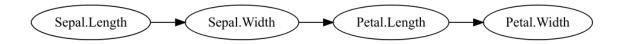


図4.5: R から入力されたパラメータを使用したダイアグラム

4.15.3 その他のダイアグラム作成パッケージ

ダイアグラム作成に使えるパッケージとして, **nomnoml** (de Vries and Luraschi, 2020), **diagram** (Soetaert, 2020), **dagitty** (Textor van der Zander, and Ankan, 2021), **ggdag** (Barrett, 2021), **plantuml** (https://github.com/rkrug/plantuml) といったものを確かめることになるかもしません.

4.16 特殊文字をエスケープする

Markdown 構文で特殊な意味を持つ文字がいくつかあります. これらの文字を直接使いたい場合, エスケープしなければなりません. 例えばテキストを囲むアンダースコアの組はたいていの場合テキストをイタリック体にします. イタリック体ではなく, アンダースコアをそのまま表示させたいなら, アンダースコアをエスケープする必要があります. 特殊な文字をエスケープする方法は, その直前にバックスラッシュを付けることです. 例えば「ここは_ イタリックに_ したくない.」というふうに. 同様に, # をセクションヘッダを表してほしくないなら, \# これは見出しではないなどと書けばよいでしょう.

4.12 節で言及したように, 連続した空白文字は 1 つの正規スペースとして表示されます. 書いたとおりに連続した空白文字を表示させたいならば, 1 つ 1 つにエスケープが必要です. 例えば ソーシャル \ \ \ ディスタンス維持というふうに. 空白がエスケープされた時, 空白は「改行しない空白」に変換されます. これは, そのスペースの位置では行が折り返されないということです. 例えばMr.\ Dervieux と言うふうに. TODO: ここもしかして折返しが発生するように調整されてる?

4.17 テキストのコメントアウト

ソース文書内のテキストを最終的な出力文書に表示させないようコメントアウトするのはとても便利です.この用途のため, HTML の構文である <!-- ここにコメント --> を使えます. コメントはどの出力形式にも表示されません.

コメントは1行でも、複数行にも広げられます.これは草稿を書くのに便利でしょう.

RStudio を使うなら, 1 行丸ごとコメントアウトするのにキーボードショートカット Ctrl + Shift + C (MacOS なら Command + Shift + C) を使えます.

4.18 目次から見出しを省略する

目次に特定のセクションの見出しを表示させたくないなら、見出しに 2 つのクラスを追加できます。 unlisted 2 unnumbered です。 例えばこのように

見出し {.unlisted .unnumbered}

この機能は Pandoc 2.10 以降のバージョンが必要です. rmarkdown::pandoc_version() で Pandoc のバージョンを確認しましょう. バージョンが 2.10 より古いなら, 新しいバージョンをインストールすることになるでしょう (1.1節参照).

4.19 全てのコードを補遺に置く(*)

対象読者がレポートを読む時, 計算の詳細に強く関心があるのでない限り, あなたはレポートにソースコードブロックを表示させたくないかもしれません. この用途で, チャンクオプション echo = FALSE を設定してソースコードを隠し, 読者がプログラムコードで気が散らないようにすることができます. しかしそれでも, ソースコードは再現可能性のある研究のために重要です. 読者はレポートを読み終わった後に計算の正しさを検証したいと思うかも知れません. この場合, 本文中の全てのコードブロックをまとめ, 文書の末尾 (例えば補遺として) に表示するというのは良い考えでし

ょう.

チャンクオプションの ref.label と knitr::all_labels() 関数を使い, 文書内の全てのコードチャンクを取り出して 1 つのコードチャンクにまとめる簡単な方法があります. 例えばこのように.

```
# 補遺: 本稿で使ったコード全文
```{r ref.label=knitr::all_labels(), echo=TRUE, eval=FALSE}
...
```

チャンクオプション ref.label について詳しく知らないならば, 14.1.3節を読んでください.

knitr::all\_labels() 関数は文書内の全てのチャンクラベルを返すため、ref.label = knitr::all\_labels() は全てのソースコードチャンクを回収しこのチャンクに持ってくることを意味します。チャンクオプション echo = TRUE (コードを表示させる) と eval = FALSE (全てのコードはすでに実行されているため、このコードチャンクは実行してはいけません) を付与すれば、1つのコードチャンクに全てのソースコードのコピーを表示させられます。

ref.label は任意のチャンクラベルの文字列ベクトルであるため、補遺に表示するコードチャンクを一部だけにするようにラベルをフィルタリングできます.以下はその例 (Ariel Muldoon\* $^{10}$  によるものです) として setup と get-labels というラベルを排除しています.

```
'``{r get-labels, echo = FALSE}
labs = knitr::all_labels()
labs = setdiff(labs, c("setup", "get-labels"))
'``
'``{r all-code, ref.label=labs, eval=FALSE}
'``
```

knitr::all\_labels() の引数を使ってコードチャンクをフィルタリングすることもできます. 例えば Rcpp エンジン (engine == "Rcpp") を使用した全てのコードチャンクを得て, かつ文書に表示しない (echo = FALSE) ようにするには knitr::all\_labels(engine == "Rcpp", echo == FALSE) を使えば良いでしょう. どのコードチャンクを補遺に表示したいのか, 正確にコントロールしたいならば, 指定したいコードチャンクに特殊なチャンクオプション appendix = TRUE を使い, それら

<sup>\*10</sup> https://yihui.org/en/2018/09/code-appendix/

のチャンクのラベルを得るのに ref.label = knitr::all\_labels(appendix == TRUE) を使えば良いでしょう.

# 4.20 Pandoc の Lua フィルタから操作する (\*)

技術的にはこの節は少し発展的ですが、Markdown の内容が Pandoc 抽象構文木 (AST) にどのように翻訳されるかを一度学べば、Lua というプログラミング言語を使ってどのような Markdown の要素も操作する力を得ることになります。

基本として、Pandoc は Markdown ファイルを読み取り、その内容が AST にパースされます。 Pandoc はこの AST を Lua スクリプトを使って修正することを可能にします。 AST の意味するものを示すため、以下のような簡単な Markdown ファイル (ast.md) を使います.

01 ## 第1節

02

03 Hello world!

このファイルは見出し 1 つとパラグラフ 1 つを持っています. Pandoc がこの内容をパースした後ファイルを JSON 形式に変換すれば, R ユーザーにとっては結果として現れる AST を理解するよりも簡単でしょう.

01 pandoc -f markdown -t json -o ast.json ast.md

そして JSON ファイルを R に読み込み, データ構造を書き出します.

この操作をしたら、Markdown の内容は再帰的なリストで表現されていることが分かるでしょう. その構造を以下に表します. ラベル t は "type", c は "content" を表します. 例として見出しを取り上げてみましょう. タイプは "Header" で,その中身は 3 つの要素が含まれています. 見出しのレベル (2)、 属性 (例えば ID が section-one であること), そしてテキストの内容です.

```
01 xfun:::tree(
02 jsonlite::fromJSON('ast.json', simplifyVector = FALSE)
03)
```

List of 3

|-blocks :List of 2

```
| |-:List of 2
| | |-t: chr "Header"
 | |-c:List of 3
 |-: int 2
 |-:List of 3
 | |-: chr "第1節"
 | |-: list()
 | |-: list()
 |-:List of 1
 |-:List of 2
 |-t: chr "Str"
 |-c: chr "第1節"
 |-:List of 2
 |-t: chr "Para"
 |-c:List of 3
 |-:List of 2
 | |-t: chr "Str"
 | |-c: chr "Hello"
 |-:List of 1
 | |-t: chr "Space"
 |-:List of 2
 |-t: chr "Str"
 |-c: chr "world!"
|-pandoc-api-version:List of 2
| |-: int 1
| |-: int 20
|-meta
 : Named list()
```

あなたが AST に気づけば、Lua によって修正することができます。Pandoc は組み込みの Lua インタプリタを持っているので、追加でツールをインストールする必要はありません。Lua スクリプトは Pandoc では「Lua フィルタ」と呼ばれます。次に見出しのレベルを 1 増やす、例えばレベル3 の見出しを 2 に変換する簡単な例を見せます。これは文書のトップレベルの見出しがレベル2で、代わりにレベル1 から始めたい場合に便利です。

最初に raise-header.lua という名前の Lua スクリプトファイルを作ります. これには Header という名前の関数が含まれており、"Header" タイプの要素を修正したいということを意味しています (一般に、あるタイプの要素を処理するためにタイプ名を関数名として使うことができます).

```
function Header(el)
01
 -- 見出しのレベルは要素の持つ 'level' 属性でアクセスできます.
02
03
 -- 後述の Pandoc ドキュメントを見てください.
 if (el.level <= 1) then</pre>
94
 error("h1 のレベルを上げる方法がわかりません")
05
06
 end
 el.level = el.level - 1
07
08
 return el
 end
09
```

そしてこのスクリプト Pandoc の --lua-filter 引数に与えることができます. 例えばこうです.

```
pandoc -t markdown --atx-headers \
 --lua-filter=raise-header.lua ast.md
```

#### # 第1節

Hello world!

## Section One を # Section One へ変換することに成功したのがお分かりかと思います. この例は些細なものだと思うかも知れませんし, なんでこんなふうに単に正規表現を使って ## を # に置き換えないのかと思うかも知れません.

```
gsub("^##", "#", readLines("ast.md"))
```

例えば ## が R コード内でコメントに使われていたら, と言うふうに, 正規表現はほとんど常に例外があるため, たいていの場合で, 構造化された文書を操作するのにロバストな手段ではありません. AST は構造化されたデータを与えてくれるので, 確実に意図した要素を修正していることが分かります.

Pandoc の Lua フィルタに関する追加ドキュメントが https://pandoc.org/lua-filters.html にあり、ここで多くの例を見つけることができます。 GitHub リポジトリ https://github.com/pandoc/lua-filters のコミュニティで書かれたフィルタを見つけることもできます。

R Markdown の世界では Lua フィルタを活用しているパッケージの例の一部が以下になります (たいていは inst/ ディレクトリにあります)

- **rmarkdown** パッケージ (https://github.com/rstudio/rmarkdown) は改行 (4.1節参照) を挿入するフィルタとカスタムブロック (9.6節参照) を生成するフィルタを含んでいます.
- **pagedown** パッケージ (Xie Lesur, et al., 2020) には脚注を実装するのを助けるフィルタと HTML ページに図のリストを表示するフィルタがあります.
- **govdown** パッケージ (Garmonsway, 2020) には Pandoc の Div による囲みを適切な HTML タグに変換するフィルタがあります.

本書の5.1.2節でも Lua フィルタでテキストの色を変更する方法を紹介する例を見ることができます.

Lua フィルタを (上記のパッケージのように) 導入するために R パッケージを作りたくない R Markdown ユーザーは, これらの Lua スクリプトをコンピュータのどこかに保存し, R Markdown 出力フォーマットの pandoc\_args オプションで適用すると良いでしょう. 例えばこのように.

```
output:
 html_document:
 pandoc_args:
 - --lua-filter=raise-header.lua

```

# 第5章

# 書式

Markdown 言語の最大の強みは、その簡潔さが初心者にとっても読み書きを非常に簡単にさせていることです。これはオリジナルの Markdown 言語の考案者も次のようにまとめている設計原理の鍵です。

Markdown 形式の文書は見たままに、タグや整形の指示文でマークアップされず、プレーンテキストとして出力されるべきである.

— John Gruber\*1

しかし、これはカスタマイズのコストがかかります。 典型的なワードプロセッサの多くの機能は Markdown で直接使うことができません. 例えば以下のような機能です.

- テキストの一部のフォントサイズを変更する
- ある単語のフォント色を変更する
- テキストアラインメントを指定する

こういった機能があなたの努力に見合うかどうかはあなたの判断に委ねます. Markdown は,「自然界」はプレーンテキストからなり, (見た目上の)面白さを欲求して作為すべきではない, というストア派哲学をいくらか反映しています. いずれにせよ, この章では R Markdown 文書の見た目や要素のスタイルをカスタマイズをどうやればできるかの豆知識をいくつか提示します.

Markdown 言語の基礎のリマインダが必要ならば、https://www.rstudio.com/resources/cheatsheets/ にある R Markdown チートシートには基本構文の概観がうまく盛り込まれています. TODO: 翻訳版がないか確認

### 5.1 フォント色

Markdown 構文にはテキストの色を変更する方法は組み込まれていません. HTML と LaTeX の構文で単語の書式を変更できます.

- HTML では, テキストを <span> タグで囲み CSS で色を設定します. 例えば <span style="color: red;">text</span> というふうに.
- PDF では、LaTeX コマンドの \textcolor{}{} が使えます.これには LaTeX パッケージの **xcolor** が必要で、Pandoc のデフォルトの LaTex テンプレートに含まれています.

PDF でテキストの色を変更する例として、以下のようなものを挙げます.

```
output: pdf_document

```

薔薇は \textcolor{red}{赤い}, 菫は \textcolor{blue}{青い}.

上記の例では最初のカーリー・ブレースには指定するテキスト色が含まれ,2番めには色を適用したいテキストが含まれています.

R Markdown の文書を複数の出力フォーマットに対してデザインしたいなら、生の HTML または LaTeX コードは他の出力フォーマットでは無視される (例: LaTeX コードは HTML では無視され, HTML タグは LaTeX 出力時には失われます.) ため文書に埋め込むべきではありません. 次に, この問題に対処する方法を 2 つ提示します.

### 5.1.1 生の HTML/LaTeX コードを書く関数を使う

**knitr** パッケージの is\_latex\_output() および is\_html\_output() 関数を使って, このように出力フォーマットに依存して適切な構文を挿入するカスタム R 関数を書くことができます.

```
colorize <- function(x, color) {
 if (knitr::is_latex_output()) {
 sprintf("\\textcolor{%s}{%s}", color, x)
 } else if (knitr::is_html_output()) {
 sprintf("%s", color,
 x)
```

```
07 } else x
08 }
```

これは行内 R 評価式内で `r colorize("文の一部を赤色にする", "red")` ように使うことができます. これは 文の一部を赤色にする でしょう (モノクロで印刷されたものを読んでいるなら, 赤色に見えないでしょう).

### 5.1.2 Lua フィルタを使う (\*)

この方法は Lua という他のプログラミング言語が関わるため R ユーザにとっての利点は少ないでしょうが, きわめて強力です。Pandoc の Lua フィルタ(4.20節参照) を使って Markdown 要素をプログラミング的に修正することができます。以下は使用例の全容です。

```
title: "Color text with a Lua filter"
output:
 html_document:
 pandoc_args: ["--lua-filter=color-text.lua"]
 pdf_document:
 pandoc_args: ["--lua-filter=color-text.lua"]
 keep_tex: true
First, we define a Lua filter and write it to
the file 'color-text.lua'.
```{cat, engine.opts = list(file = "color-text.lua")}
Span = function(el)
  color = el.attributes['color']
  -- if no color attribute, return unchange
  if color == nil then return el end
  -- tranform to <span style="color: red;"></span>
  if FORMAT:match 'html' then
    -- remove color attributes
```

```
el.attributes['color'] = nil
    -- use style attribute instead
    el.attributes['style'] = 'color: ' .. color .. ';'
    -- return full span element
    return el
  elseif FORMAT:match 'latex' then
    -- remove color attributes
    el.attributes['color'] = nil
    -- encapsulate in latex code
    table.insert(
      el.content, 1,
      pandoc.RawInline('latex', '\\textcolor{'..color..'}{')
    table.insert(
      el.content,
      pandoc.RawInline('latex', '}')
    -- returns only span content
    return el.content
  else
    -- for other format return unchanged
    return el
  end
end
. . .
Now we can test the filter with some text in brackets with
the 'color' attribute, e.g.,
> Roses are [red and **bold**]{color="red"} and
> violets are [blue]{color="blue"}.
```

この例では、bracketed_spans という名称の Pandoc Markdown 拡張機能をこっそり使っています.これはテキストに属性を付けて書くことを可能にします.例えば [text]{.class

attribute="value"} のように. cat コードチャンク*2内で定義された Lua フィルタは, 出力が HTML ならば という形でテキストを配置し, LaTeX なら \textcolor{...}{} として配置します. color-text.lua というファイル名で書き出しコマンドラインオプション --lua-filter で有効になった Lua フィルタは出力フォーマットの pandoc_args オプションを経由して Pandoc に与えられます.

従来の方法と比較して, Lua フィルタを使う利点はブラケット内でも Markdown 構文が使えることですが, 以前の節で紹介した R の colorize() 関数は Markdown 構文を使うことが出来ません (例えば colorize('** 太字 **') と書いても太字にはなりません).

5.2 テキストをインデントする

4.12節で話したように、Markdown では空白文字はしばしば意味をなさなくなります。 Markdown はまた、デフォルトでインデントの空白を無視します。 しかしいくつかの場合ではインデントを維持できます。 例えば詩や演説文などです。 これらの状況では垂直線 (|) で始まる罫線ブロックを使うことができます。 改行と行頭のスペースは出力でも維持されます。 例えばこのように *3

```
| When dollars appear it's a sign
| that your code does not quite align
| Ensure that your math
| in xaringan hath
| been placed on a single long line
```

出力はこうなります.

When dollars appear it's a sign that your code does not quite align Ensure that your math in xaringan hath been placed on a single long line

各行は Markdown のソースでは改行コードが使われています (ハードラップ). 連続する行をスペースで始めれば, 1 つ前の改行と, この行頭のスペースは通常は無視されます. 例えばこのように

 $^{^{*2}}$ cat コードチャンクを詳しく知らないのなら, 15.6節を見てください. ここでは, チャンクを .lua ファイルに書き出す便利な方法としてこのエンジンを使っています. そのため Lua スクリプトを color-text.lua という別のファイルとして管理しなくてもよいわけです. cat エンジンを使いたくなというなら, コードチャンクに Lua コードを埋め込む代わりに Lua コードを正しくコピーして別のファイルに保存することができます.

^{*&}lt;sup>3</sup> Claus Ekstrøm: https://yihui.org/en/2018/06/xaringan-math-limerick/ 作のリメリックです.

| 採用責任者

| ニンジャ学校,ハッカーの大学

| 404 Not Found Road, Undefined 0x1234, NA

出力はこうなります.

採用責任者

ニンジャの学校, ハッカーの大学

404 Not Found Road, Undefined 0x1234, NA

「ニンジャの学校」の直後の改行が無視されているのがわかると思います.

5.3 テキスト出力の幅を制御する

R コードから表示されたテキスト出力の幅が広すぎることがたまにあります. 出力文書のページ幅が固定 (例えば PDF 文書) ならばテキスト出力がページ余白をはみ出すことがあります. その例が 25.1です.

R グローバルオプションの width は R 関数からのテキスト出力の印字幅を制御するのに使うことができます. デフォルトが大きすぎるなら, 値を小さくしてみてください. このオプションは典型的には, おおまかに 1 行ごとの文字数を表しています (東アジア言語は例外です). 例えばこのように.

```
このチャンクの出力は幅広すぎる

```{r}

options(width = 300)

matrix(runif(100), ncol = 20)

...

このチャンクの出力のほうが良い

```{r}

options(width = 60)

matrix(runif(100), ncol = 20)
```

• • •

全ての R 関数が width オプションを尊重しているわけではありません. このオプションが動作しないなら, 唯一の選択は長いテキスト行を折り返しすることです. 実際これは $html_document$ 出力フォーマットのデフォルトの挙動です. あなたの使っている $html_document$ 出力フォーマットが長い行の折返しをしないのなら, 以下の $html_document$ と適用してみてください (解説は $html_document$).

```
pre code {
  white-space: pre-wrap;
}
```

PDF 出力では、行の折返しはよりトリッキーになります。解決策の1つは、Pandoc 引数の--listing を使うことで有効になる LaTeX パッケージの **listings** を使うことです。そうしたなら、このパッケージに対するオプションを設定しなければならず、またその設定コードは外部 LaTeX ファイルに含めることができます (方法は6.1節参照) 例えばこのように.

```
output:
  pdf_document:
    pandoc_args: --listings
    includes:
    in_header: preamble.tex
```

preamble.tex 内では, **listings** パッケージのオプションを設定しています.

```
\lstset{
  breaklines=true
}
```

listings によるコードブロックの見た目が気に入らないなら、\lstset{} で他の **listings** オプションを設定することができます。例えば basicstyle=\ttfamily でフォントファミリを変更できます。このパッケージのより詳細な情報はドキュメント https://ctan.org/pkg/listings で見つけることができます。

図 5.1 は長い行のあるデフォルトの pdf_document 出力で、ページ余白をはみ出しています。図5.2 は **listings** パッケージでテキストを折り返したときの PDF 出力です.

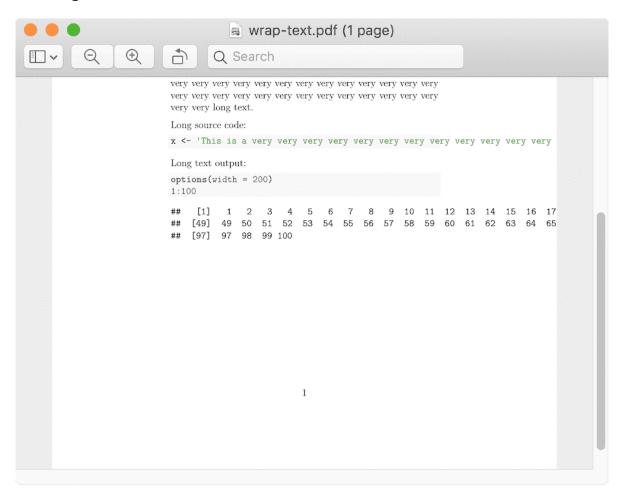


図5.1:幅が広すぎる通常のテキスト出力

訳注: **listings** には多くのオプションがありますが, それだけでデフォルトのシンタックスハイライトを再現するのは難しいです. コードブロックの折返しは **knitr** の styler オプションである程度制御できます. Pandoc は出力ブロックをほとんど表示オプションのない verbatim 環境として出力し, これが問題の主な原因です. フィルタや LaTeX マクロを使うなどしてこの環境を置き換えればデフォルトのシンタックスハイライトと折返しを両立することができます.

5.4 グラフ・画像のサイズを制御する

R が作成するグラフのサイズはチャンクオプション fig.width と fig.height でインチ単位で制御できます. 同様に fig.dim オプション に長さ 2 のベクトルで幅と高さを指定できます. 例えば fig.dim = c(8, 6) は fig.width = 8 と fig.height = 6 を指定したのと同じです. これらのオ



図5.2: listings パッケージで折り返されたテキスト出力

プションはグラフの物理的なサイズを設定し, さらに out.width と out.heightを使い出力時に異なるサイズで, 例えば out.width = "50%" のように表示することが出来ます.

R コードチャンクで生成されないグラフや画像は, 2 通りの方法で掲載できます.

• Markdown 構文![キャプション](画像ファイルパス) を使う. この場合は width, height 属性でサイズを設定できます例えばこのように.

次のパラグラフに画像を掲載する.
![良い画像](なんとか.png){width=50%}

• コードチャンクで **knitr** 関数 knitr::include_graphics() を使う. そのチャンクで out.width と out.height といったオプションを設定することもできます. 例えばこのよ

うに.

```
R function を使って外部画像ファイルを掲載します

```{r, echo=FALSE, out.width="50%", fig.cap="良い画像"}

knitr::include_graphics("なんとか.png")

...
```

上記の例では幅 50% が使われており, 画像コンテナの半分の幅にすることを意味します (もし画像がページの子要素ではなく, ページに直接含まれていると仮定すると, これはページ幅の半分を意味します). 特定の出力フォーマットに対してのみ画像を生成することが分かっているのなら, 単位を特定することもできます. たとえば出力フォーマットが HTML なら 300px と書けるでしょう.

### 5.5 図のアラインメント

チャンクオプション fig.align は図のアラインメントを指定します. 例えば fig.align = 'center' で中央揃え, あるいは fig.align = 'right' で右揃えができます. このオプションは HTML と LaTeX 出力の両方で機能しますが, 他の出力フォーマット (残念ですが Word といったものは) では機能しないかもしれません. R コードチャンクで描画されたグラフも, knitr::include\_graphics() で取り込まれた外部イメージに対しても機能します.

# 5.6 コードチャンクをそのまま (verbatim) 表示

典型的には私達はコードチャンクと行内評価式は **knitr** によってパースされ評価してほしいと思って書きますが,もし **knitr** を使ったチュートリアルを書きたいなら, **knitr** にパース**されない**コードチャンクや行内評価式を生成する必要があり,そしてチャンクヘッダの中身も掲載したいということもあるかもしれません.

不運なことにコードチャンクをさらに別のバッククオートのレイヤで囲むことは出来ませんが、代わりにチャンクヘッダに、r ''`を挿入することでソースコード内でコードチャンクを無効化しなければなりません. これは **knitr** によって、**空の文字列**の行内評価式であるものと評価されます. この例ではソース文書内の以下の「コードチャンク」

```
```{r, eval=TRUE}`r ''`
1 + 1
```

は出力時にはこのようにレンダリングされます.

```
```{r, eval=TRUE}
1 + 1
```

空の文字列で置き換えられるため、行内評価式は消え去ります。しかしこれは第 1 歩にすぎません。 出力時になんらかの無加工のコードを表示するには、Markdown の構文はコードブロックで包ま れているべきです (スペース 4 つ分のインデントかバッククオートによる囲みで)。上記の出力を見 たいとき、実際のソースは以下のようになります。

```
```\{r, eval=TRUE}\`r ''`
1 + 1
...
```

なぜバッククオートが 4 つなのでしょうか. これは N 個のバッククオートを包むには, 少なくとも N+1 個のバッククオートを使わなければならないからです.

5.6.1 行内 R コードをそのまま表示

行内コードをそのまま表示する方法はいくつかあります. 最初の方法は `r の直後で行内式を改行することです. 例えばこのように.

```
これは出力時に行内 R コードをそのまま表示します `` `r
1+1` ``.
```

これが出力文書ではこうなっているはずです.

■ これは出力時に行内 R コードをそのまま表示します `r 1+1`.

この小技は 2 つの理由で動作します。 (1) Markdown パーサはしばしば単独の改行文字を単なるスペース 1 つとして扱う (2 連続の改行は新しい段落を始めることと比べてみてください) ということと、 (2) **knitr** は `r をパースするのに直後にスペース 1 つを要求する,つまりここにスペースがないと行内コードとして扱われないということです。

行内 R コードをそのまま表示する別の方法は, R コードを knitr::inline_expr() で包むことです. 例えばこのように.

```
これで出力時に行内 R コードがそのまま表示されます
`` `r knitr::inline_expr("1+1")` ``.
```

私 (Yihui) は 2 つ目の方法をお薦めします. 1 つ目の方法は多かれ少なかれ Markdown 構文と **knitr** パーサに対するハック的なものだからです.

5.7 コードブロックに行番号を表示する (*)

attr.source = ".numberLines" でソースコードブロックにも行番号を付けることも, attr.output = ".numberLines" でテキスト出力ブロックに行番号を付けることもできます (これらのオプションの詳細は11.13節参照). 例えばこのように.

```
'``{r, attr.source='.numberLines'}
if (TRUE) {
    x <- 1:10
    x + 1
}
'``</pre>
```

出力はこうなります.

```
01 if (TRUE) {
02  x <- 1:10
03  x + 1
04 }
```

HTML 出力では、Pandoc が提供するシンタックスハイライト のテーマ を選ぶ必要があることに 注意してください.これは出力フォーマットの highlight オプションを default や textmate に すべきではないということを意味します.ヘルプページ ?rmarkdown::html_document でこのオプションの他の値の一覧を見ることができます.例えばこう設定できます.

```
output:
  html_document:
  highlight: tango
```

bookdown の gitbook 出力フォーマットでは、コードの左側の適切な位置に数字を表示するため に CSS を多少調整する必要があるかもしれません. 以下は本書で使用しているものです (行番号がページ左余白に近すぎると思ったら、left の値を -0.2em などに増やして調整してください).*4

```
pre.numberSource code > span > a:first-child::before {
   left: -0.3em;
}
```

revealjs の revealjs_presentation 出力フォーマット (El Hattab and JJ Allaire, 2017) に対しても CSS の調整が必要かもしれません.

```
.reveal pre code {
  overflow: visible;
}
```

カスタム CSS スタイルを HTML 出力に適用する方法がわからないなら, 7.1節を見てください. startFrom 属性で開始する数字を指定することもできます. 例えばこのように.

```
'``{r, attr.source='.numberLines startFrom="5"'}
if (TRUE) {
   1:10
}
...
```

現時点では Word 出力での行番号はサポートしていません.

5.8 多段組み(*)

Pandoc の Markdown はスライドに対する多段レイアウトをサポートしていますが, 他のタイプの文書ではサポートしていません. このレシピでは通常の HTML 文書や LaTeX 文書での多段レイアウトを使う方法を紹介します. これは **knitr** の issue https://github.com/yihui/knitr/issues/1743 での Atsushi Yasumoto の解決策に着想を得ました.

^{*&}lt;sup>4</sup> **訳注**: 日本語版は **rmdja** の出力フォーマットを使用しており, これはデフォルトで行番号を表示し, かつ gitbook に対応した調整を予め搭載しています.

HTML 要素を CSS を使って並べて表示するのは比較的簡単なので, この方法は HTML 出力のみ 考慮する必要があるならかなり簡単です. コードチャンクのテキスト出力を並べるだけならば, もっと簡単になります. 以下は1つ目の例です.

```
output: html_document
---

```{r attr.source="style='display:inline-block;'", collapse=TRUE}

1:10 # 1 から 10 の数列

10:1 # その逆順

```
```

CSS 属性 display: inline-block; はコードブロックの出力 (つまり HTML タグの です) をインライン要素として表示すべきという意味です. デフォルトではこれらのブロックはブロックレベル要素 (つまり display: block;) として表示され, 行を丸ごと占有します. チャンクオプション collapse = TRUE はテキスト出力を R ソースコードブロックと結合することを意味するので, ソースとテキスト出力が同じ ブロックに配置されます.

HTML 出力時に任意の順で横に並べたい場合, Pandoc の fenced Div.*5 を使うことができます. "Div" は HTML タグの <div> に由来しますが, 任意のブロックやコンテナと解釈できます. Div の 開始と終了はは 3 つ以上のコロン (例: :::) です. より多くのコロンの Div は, よりコロンの少な い Div を含むことができます. fanced Div の重要で有用な機能は, これに属性を付与できるという ことです. 例えば CSS 属性 display: flex; を外側のコンテナに適用できるので, 内側のコンテナは横並びに配置されます.

```
output: html_document
---
:::: {style="display: flex;"}
:::: {}
ここは ** 最初の ** Div です.
```

 $^{^{*5}}$ https://pandoc.org/MANUAL.html#divs-and-spans

上記の例では外側の Div (::::) は 2 つの Div (:::) を含んでいます。この中にさらに Div を追加することもできます。とても強力な CSS 属性 display: flex; (CSS Flexbox) についてもっと知るためには https://css-tricks.com/snippets/css/a-guide-to-flexbox/ というガイドを読むと良いでしょう。 CSS グリッド (display: grid;) はもっと強力で、上記の例にも使えます。もし試してみたいなら、display: flex; を display: grid; grid-template-columns: 1fr 1fr; grid-column-gap: 10px; に置き換えてみてください。 グリッドレイアウトについてより知りたいのなら、https://css-tricks.com/snippets/css/complete-guide-grid/のガイドを見てください。

HTML でも LaTeX でも同じようなレイアウトにしたいのなら、よりトリッキーになります. 以下 に HTML, LaTeX そして Beamer で動作する用例の全容を示します.

```
output:

pdf_document:

latex_engine: lualatex
keep_tex: true
includes:
   in_header: columns.tex
html_document:
```

```
css: columns.css
  beamer_presentation:
   keep_tex: true
   latex_engine: lualatex
   includes:
     in_header: columns.tex
documentclass: "`r if(knitr::opts_knit$get('rmarkdown.pandoc.to') == 'beamer')
→ 'beamer' else 'ltjsarticle'`"
mainfont: 'Noto Sans CJK JP'
# 二段組み
以下は 3 つの子要素の Div を横並びに持つ Div コンテナです. 中央の Div は空で, 左右の
→ Div の間に空白を作るためだけに存在します.
:::::: {.cols data-latex=""}
::: {.col data-latex="{0.55\textwidth}"}
```{r, echo=FALSE, fig.width=5, fig.height=4}
par(mar = c(4, 4, .2, .1))
plot(cars, pch = 19)
. . .
:::
::: {.col data-latex="{0.05\textwidth}"}
<!-- 段どうしのセパレータとして機能するだけの空の Div (空白入り) -->
:::
::: {.col data-latex="{0.4\textwidth}"}
左側の図は 'cars' データを表しています.
> いろはにほへと ちりぬるを
```

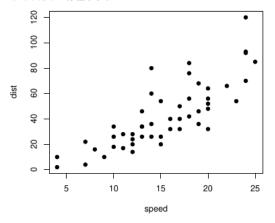
わかよたれそ つねならむ うねのおくやま けふこえて あさきゆめみし ゑひもせす

:::

:::::

#### 二段組み

以下は 3 つの子要素の Div を横並びに持つ Div コンテナです. 中央の Div は空で, 左右の Div の間に空白を作るためだけに存在します.



左側の図は cars データを表しています.

いろはにほへと ちりぬるを わかよた
れそ つねならむ うゐのおくやまけふ
こえて あさきゆめみし ゑひもせす

図5.3: HTML, LaTeX, Beamer で動作する二段組み

図5.3 がその出力です. この例では外側の .cols クラスを持つ Div と, 内側に .col クラスを持つ 3 つの Div を使っています. HTML 出力では, 外部 CSS ファイル columns.css を導入し, その中で Flexbox レイアウトを外側の Div に適用しているので, 内側の Div が横並びになります.

```
.cols {display: flex; }
```

LaTeX 出力 (pdf\_document) では, LaTeX プリアンブルで LaTeX 環境 cols と col で定義するための columns.tex に含まれているダーティーハックについて解説せねばなりません.

\newenvironment{cols}[1][]{}{}

```
\newenvironment{col}[1]{\begin{minipage}{#1}\ignorespaces}{%
\end{minipage}
\ifhmode\unskip\fi
\aftergroup\useignorespacesandallpars}

\def\useignorespacesandallpars#1\ignorespaces\fi{%
#1\fi\ignorespacesandallpars}

\makeatletter
\def\ignorespacesandallpars{%
\@ifnextchar\par
{\expandafter\ignorespacesandallpars\@gobble}%
{}%
}
\makeatother
```

主に Pandoc が LaTeX 出力では Div に対していつも段落を改めており、この改段を除去しなければならないという理由のため、col 環境は特に複雑です。 そうしないと Div を横並びにすることはできません。このハックは https://tex.stackexchange.com/q/179016/9128 から借用しました。

Beamer 出力でも columns. tex で同じハックを適用しています. Pandoc は ::: {.columns}, :: {.

fenced Div についてより詳しく知りたいなら, 9.6節を見てください.

**訳注**: 二段組にしたいのが PDF 限定であれば, YAML フロントマターのみで簡単に制御することができます (6.2節参照).

 $<sup>^{*6}\ \</sup>mathsf{https://pandoc.org/MANUAL.html\#producing-slide-shows-with-pandoc}$ 

# 第6章

# LaTeX 出力

多くの著者にとって作品の主な出力は PDF レポートで, この出力では強力な LaTex のスタイル設定を活用できます. この章では, LaTeX コードやパッケージをプリアンブルに含めることや, カスタム LaTeX レンプレートの使用, ヘッダとフッタの追加, 図を分割して生成する方法, 生の LaTeX コードを文書の本文に書く方法, といった PDF レポートのカスタマイズに使えるアプローチについて議論します.

ただし、始める前に注意しておきたいことがあります。R Markdown の恩恵の 1 つは単一のソース 文書から複数のフォーマットの文書を生成できるということです。あなたの作品を単一の出力に対して仕立て上げるこにとよって、その出力フォーマット単体の見た目やパフォーマンスは向上する かもしれませんが、それはこの移植性を犠牲にすることでもあります。この問題は LaTeX に限ったことでなく。他の出力フォーマットでも同様です。

# 6.1 プリアンブルに LaTeX コードを追加する

LaTeX 文書の一般的な構造はこのようになっています.

\documentclass{article}

% preamble

**\begin**{document}

% body

**\end**{document}

これは文書クラスを \documentclass{} で宣言し、必要に応じて特定の LaTeX パッケージを読み込んだり特定のオプションをプリアンブルで設定し、そして \begin{document} の後で文書の本文

を書き始めています. Markdown 文書はほとんどがこの文書の本文に対応します.

プリアンブルになにか追加したい時, pdf\_document include を使わねばなりません. このオプションは 3 つのサブオプションを持ちます. in\_header, before\_body, そして after\_body です. これらは 1 つ以上のファイルパスを指定できます. in\_header に指定されたファイルはプリアンブルに追加されます. before\_body と after\_body に指定されたファイルはそれぞれ本文の前と後に追加されます.

例えば以下はテキスト内のハイパーリンクを脚注に変えるトリックです. PDF 出力された文書が紙に印刷されたものだと, 読者は紙面のリンク (\href{URL}{text} で生成されたもの) をクリックすることはできませんが, 脚注の URL を見ることはできるのでこのトリックは役に立ちます. このトリックはテキストと URL の両方を表示します.

#### % あなたはレンダリング前に \href のコピーを保存したいかもしれない

% \let\oldhref\href

 $\ref}[2]{#2\footnote{\url{#1}}}$ 

あるファイル名, 例えば preamble. tex 内に上記のコードを保存できます. それからプリアンブルにこれを読み込んでください.

output:

pdf\_document:

includes:

in\_header: "preamble.tex"

このトリックは実際には自分で実装しなくてもよく、Pandoc のデフォルトのテンプレート (6.2節 参照) に組み込まれた機能である YAML オプション links-as-notes を 'true"にすることで簡単にできます.

コードをプリアンブルに追加する別の方法は、YAML フロントマター の header-includes フィールドに直接与えることです。6.3節でその例を紹介しています。header-includes を使う利点は R Markdown 文書 1 つの内部に全てを含められることです。しかしあなたのレポートを複数の出力フォーマットに生成しなければならないなら、includes を使う方法をお薦めします。header-includes は無条件であり、非 LaTeX 出力の文書に対しても読み込まれてしまうからです。比較として、includes オプションは pdf\_document フォーマットにのみ適用されます。

### 6.2 LaTeX 出力の Pandoc オプション

LaTeX 出力に対してデフォルトの Pandoc を使うなら, PDF 出力の文書の見た目を調整するいくつかのオプションがあります. いくつかのオプションの例を以下に挙げていきます. 完全なリストは https://pandoc.org/MANUAL.html#variables-for-latex で見ることができます.

documentclass: book

classoption:

twocolumnlandscape

papersize: a5 linestretch: 1.5 fontsize: 12pt

links-as-notes: true

あなたが LaTeX にある程度詳しいなら、これらのオプションの意味は明らかでしょう。document-class オプション は、例えば article、book、report などの文書クラスを設定します。classoption は文書クラスに与えるオプションのリストで、例えば二段組の文書を作りたいなら twocolumn オプション、 $^{*1}$ 、横置きレイアウトにするなら landscape オプション(デフォルトでは縦置き (portrait) レイアウト)があります。papersize オプションは a4、paper、a5 といった用紙サイズを設定します。linestretch オプションは行間を設定します。fontsize オプションはフォントサイズを 10pt、11pt、12pt というふうに設定します。links-as-notes オプションはテキスト内のリンクを脚注に置き換えます。紙に印刷する際には読者は紙面上のリンクをクリックできませんが、脚注の URL を見ることができるので便利です。

フォントの変更は少しトリッキーです。どの LaTeX エンジンを使っているかに依存します。LaTeX ベースの出力フォーマットで大抵の場合デフォルトである pdflatex を使っているのなら $^{*2}$ , 読み込む LaTeX フォントパッケージを選択するために fontfamily オプションを使ってください。例えばこのように、

<sup>\*1</sup> このオプションは文書全体を変更しますが、特定の位置から再度一段組に戻したいのなら、そこに \onecolumn コマンドを挿入することになるでしょう.二段組モードを続けたいなら \twocolumn を挿入します.

 $<sup>*^2</sup>$  **訳注**: 日本語文書を **pdflatex** で出力することは全く不可能というわけではありませんが, 技術的制約が多いため LaTeX に慣れている方以外にはお薦めしません.

fontfamily: accanthis

output:

pdf\_document:

latex\_engine: pdflatex

これで文書に Accanthis\*3 フォントが使われます. 他の多数の LaTeX フォントパッケージのリストは You may see https://tug.org/FontCatalogue/ で見ることができます. LaTeX ディストリビューションに TinyTeX をお使いで,フォントパッケージがインストールされていないならば,文書がコンパイルされる際に自動でインストールされるはずです (1.2節参照).

LaTeX エンジンに xelatex または lualatex を使っているなら, ローカルのコンピュータで使用可能なフォントから選ぶことができ, LaTeX パッケージの追加インストールはしなくともよいです. YAML オプション mainfont, sansfont, monofont はメインのフォント, サンセリフ体, そしてタイプライタ体のフォントをそれぞれ指定するのに使えます.\*4 例えばこのように.

mainfont: Arial

output:

pdf\_document:

latex\_engine: xelatex

Beamer の文書は LaTeX 文書なので、Beamer でスライドを生成する時にもこれらのオプションを使用できます。加えて、Pandoc は Beamer スライド用にいくつか追加オプションを提供してくれています。それらは https://pandoc.org/MANUAL.html#variables-for-beamer-slides で確認できます。例えば institute オプションで著者の所属機関を指定することができます。

\_ \_ \_

output: beamer\_presentation institute: "ハッカーの大学"

\_\_\_

<sup>\*3</sup> https://tug.org/FontCatalogue/accanthis/

 $<sup>^{*4}</sup>$  訳注: rmdja では YAML フロントマターでさらに欧文用フォントと和文用フォントを個別に指定できます.

### 6.3 表紙ページにロゴを置く

LaTeX パッケージの **titling** を表題ブロックを画像に変更するのに使うとができます. 以下は R ロゴ (logo.jpg) を表紙に配置する方法の例の全容です. 画像は LaTeX のサポートする形式 (例えば jpg, png, pdf) ならなんでも使えます.

```
title: LaTeX のタイトルにロゴを追加する
author: Michael Harper
date: 2018/12/7
output:
 pdf_document:
 latex_engine: lualatex
documentclass: ltjsarticle
header-includes:
 - \usepackage{titling}
 - \pretitle{\begin{center}
 \includegraphics[width=2in,height=2in]{logo.jpg}\LARGE\\}
 - \posttitle{\end{center}}
<!-- 改ページを含めることもできます. これで文書を強制的に2ページ目から始めさせます. -->
\newpage
ここからあなたのレポート
```{r, include=FALSE}
# R ロゴをカレントディレクトリにコピー
file.copy(file.path(R.home("doc"), "html", "logo.jpg"), '.')
```

図6.1 がこの例の出力です.

LaTeX パッケージ (titling) を特に要求しない代替方法として, Markdown 構文を使って title



LaTeX のタイトルにロゴを追加する
Michael Harper
2018/12/7

図6.1: LaTeX の表紙ページにロゴを追加する

フィールドに画像を挿入する方法があります. 例えばこのように.

title: |

{width=1in} LaTeX のタイトルにロゴを追加する

この場合,最初の例のように YAML フロントマターの header-includes フィールドは不要になります. 例からは見えませんが, {width=1in} の末尾にスペースが 2 つあることに注意してください. これは Markdown では改行を意味します (4.12節参照). 改行がない場合画像とタイトルは同じ行に現れてしまい, きっとそれはあなたの意図するものではないでしょう.

6.4 LaTeX パッケージを追加で読み込む

追加の LaTeX パッケージを使うことで文書のスタイルに拡張的なカスタマイズが可能になります. 加えて **kableExtra** (Zhu, 2020) のようないくつかのパッケージは R パッケージの関数を提供するために LaTeX に依存しているかもしれません. R でもよくあるように, これらの関数を使えるようになる前に R Markdown 文書内でパッケージを読み込む必要があります.

6.4.1 LaTeX パッケージを読み込む

pdf_document の YAML での設定 extra_dependencies オプション を使って追加の LaTeX パッケージを読み込めます. 中間ファイルの LaTeX 出力文書で読み込む LaTeX パッケージのリストを与えることができます. 例えばこのように.

```
title: "追加 LaTeX パッケージを使う"
output:
   pdf_document:
   extra_dependencies: ["bbm", "threeparttable"]
```

パッケージ読み込み時のオプションを指定する必要があるなら, 第2のレベルを加えてオプションをリストとして与えられます. 例えばこのように.

```
output:
   pdf_document:
    extra_dependencies:
        caption: ["labelfont={bf}"]
        hyperref: ["unicode=true", "breaklinks=true"]
        lmodern: null
```

LaTeX に慣れた人にとっては、これは以下の LaTeX コードと同じです.

```
\usepackage[labelfont={bf}]{caption}
\usepackage[unicode=true, breaklinks=true]{hyperref}
\userpackage{lmodern}
```

6.1節で紹介した includes 引数に対し extra_dependencies 引数を使う利点は、外部ファイルを読み込む必要がないため、Rmd 文書が自己完結的になりうるということです。

6.4.2 パッケージの例

LaTeX には広範なコミュニティがあり Comprehensive TeX Archive Network* *5 (CTAN) 全体には 4,000 種類以上のパッケージがあります. ここにレポートに使えるかもしれない LaTeX パッケージの例をいくつか挙げます.

- pdfpages*6: あなたの文書内に, 別の外部 PDF 文書からページを丸ごと持ってきて埋め込むことができます.
- caption* 7 : キャプションのサブタイトルを変更します. 例えば図のタイトルをイタリックや太字にできます.
- fancyhdr*8: 全てのページのラニングタイトル (欄外見出し) を変更できます.

6.5 図の位置を制御する

LaTeX に共通の不満点の 1 つは図表の位置です。Microsoft Word のような図がユーザーの指定した場所にそのまま置かれるワードプロセッサと違い、LaTeX は特定の組版ルールに反しないように図を配置しようとします。そうなると図はテキストで参照した場所から浮動 (フロート) するかもしれません。この節では (図などの) フロート環境がどう機能し、その挙動をカスタマイズするためにどうオプションを与えるかについての予備知識を解説します。

6.5.1 フロート環境

LaTeX ではデフォルトではキャプションのある図は figure 環境で生成されます. 例えば Pandoc は以下の画像を含む Markdown コードを...,

![This is a figure.](images/cool.jpg)

こう変換します.

\begin{figure}

\includegraphics{images/cool.jpg}

^{*5} https://ctan.org

 $^{^{*6}}$ https://ctan.org/pkg/pdfpages

^{*7} https://ctan.org/pkg/caption

^{*8} https://ctan.org/pkg/fancyhdr

\caption{This is a figure.}

\end{figure}

figure 環境はフロート環境です。フロートの詳細な説明は https://en.wikibooks.org/wiki/La TeX/Floats,_Figures_and_Captions で読むことができます。要約するとフロートは,図や表のようにページで区切られないコンテナとして使われます。図表が現在のページの余白におさめられないと,LaTeX は次のページの先頭に配置します。図が十分に縦長だと,テキストを数行分の余白が残っていたとしても,次のページ全てを占有します。この挙動は,\begin{figure}[b] のように,\begin{figure} の後のブラケット内のいくつかの配置指定修飾子によって制御できます。以下は使用可能な記号のリストです。

- h: フロートを**ここ** (here) に配置します. つまりソーステキスト上に現れるところとほぼ同じ位置です.
- t: そのページの**先頭** (top) に配置します.
- b: そのページの末尾 (bottom) に配置します.
- p: フロート専用の特別なページに配置します.
- !: LaTex が「良い」フロートの位置を決定するための内部パラメータ上書きします.
- H: フロートを正確に LaTex コード上と同じ位置に配置します. **float** パッケージが必要です (\usepackage{float}).

これらの修飾子は併用できます. 例えば!b は LaTeX に図をページ末尾に置くよう矯正できます. デフォルトの挙動は tbp です. これは LaTeX が図をまずページ先頭に, ついで末尾に, そして独立したページに置こうとします.

6.5.2 図がフロートするのを防ぐ

多くのユーザは初めに、伝統的なワードプロセッサの挙動を再現できるよう、文書内を図が移動するのを防ぎたくなります.これを実現するには、まず LaTeX パッケージの **float** を読み込まなければなりません.YAML に以下の記述を含めることでできます.

output:

pdf_document:

extra_dependencies: ["float"]

チャンクオプション fig.pos をフロートの挙動を制御するのに使えます. オプションの値!H は文書でのいかなる移動も防ぎます. 以下の行を R Markdown 文書の最初のコードチャンクに書く

ことで、全てのチャンクがこの設定を持つように、これをデフォルトの挙動にすることもできます。

```
01 knitr::opts_chunk$set(fig.pos = "!H", out.extra = "")
```

一般論として、LaTeX の図のフロートを強制的にやめさせることをおすすめしません. よくある要望なので、本書にこの解決策を盛り込んだのですが、*9 LaTeX が図をフロートできないときにはいくつかの深刻な副作用が発生することがあります.

6.5.3 フロートを後回しに強制する

全てのフロートを固定するよう強制することに代わる方法は、テキスト上でフロートが後回しになるよう強制することです。これは関連するテキストが現れるよりも前に図がページの先頭に現れてしまうというよくある問題を排除できます。こうなるとレポートを読む流れが破壊されてしまいます。LaTeX パッケージの **flafter** を使って以下のようにすることで、常に図がテキストより後に現れるよう強制できます。

```
output:
```

pdf_document:

extra_dependencies: ["flafter"]

6.5.4 LaTeX 配置ルールを調整する (*)

LaTeX 自体のフロート配置パラメータは全体として、あなたにとって「理にかなった」配置を邪魔しているかもしれません。堅実などころか悪質なまでに、これらのデフォルト設定を表6.1に示します。

LaTeX に図を動かさないよう努力してもらうために、これらの設定を変えることができます. LaTeX プリアンブルファイルに、1ページのテキストの最小量を減らすような以下のコードを追加 し、フロートが収まる余地を増やさせることができます.

\renewcommand{\topfraction}{.85}
\renewcommand{\bottomfraction}{.7}

\renewcommand{\textfraction}{.15}

^{*&}lt;sup>9</sup> 関連するスタック・オーバーフローの質問 https://stackoverflow.com/q/16626462/559676 は **45,000** 回以上閲覧されました.

表6.1: LaTeX デフォルトのフロート設定

コマンド	概要	デフォルト
topfraction	ページ先頭からフロートが占めるページ割合の最大値	0.7
bottomfraction	ページ末尾からフロートが占めるページ割合の最大値	0.3
textfraction	1 ページに占めるテキストの割合の最小値	0.2
floatpagefraction	1 ページに占めるフロートの割合の最小値	0.5
topnumber	ページ先頭のフロート最大数	2
bottomnumber	ページ末尾のフロート最大数	1
totalnumber	1ページの最大フロート数	3

```
\renewcommand{\floatpagefraction}{.66}
\setcounter{topnumber}{3}
\setcounter{bottomnumber}{3}
\setcounter{totalnumber}{4}
```

これらの記述を.tex ファイルに追加したら, 6.1節で紹介した方法で LaTeX 文書のプリアンブルで読み込ませることができます.

6.6 LaTeX で複数の図をまとめる

複数の画像を 1 つの画像環境に含めたいときがあるかもしれません. 複数の画像を 1 つの環境に並べ, それぞれのサブキャプションを与えることで, 複数の図 (サブ図) をまとめることが達成できます. Sometimes you may want to include multiple images in a single figure environment. Sub-figures allow us to achieve this by arranging multiple images within a single environment and providing each with its own sub-caption.

図をまとめるには LaTeX パッケージの **subfig** が必要です. pdf_document 出力の YAML オプションの extra_dependencies で読み込ませることができます. 例えばこのように.

```
output:
   pdf_document:
     extra_dependencies: "subfig"
---
```

コードチャンクからの全てのプロットを並べるために, チャンクオプション fig.cap (環境全体のキャプション) と fig.subcap (サブ図のためのキャプションの文字列ベクトル) を使わなければなりません. 最良の選択のために, 以下のような選択肢も使用できます.

- fig.ncol: サブ図の列の数です. デフォルトでは全てのグラフが単一の行に並べられます. これは複数の行に分けられます.
- out.width: 個別のグラフの出力幅です. 通常はこれを 100% を列の数で割ったものに設定しますが. 例えば 2 つグラフがあるなら, out.width は 50% 以下にすべきです. そうしないとグラフはページの外枠をはみ出すかもしれません.

以下は具体例の1つです.

```
output:
  pdf_document:
    extra_dependencies: "subfig"
---
```

```
'``{r, fig.cap='Figure 1', fig.subcap=c('(a)', '(b)', '(c)')}
plot(1:10)
plot(cars, pch = 19)
boxplot(Sepal.Width ~ Species, data = iris)
'``
```

この出力を図6.2に示します. 簡潔さのため, 上記の例は fig.ncol = 2, out.width = "50%", fig.align = "center" や長いキャプションなどのチャンクオプションをいくつか省略しています.

6.7 Unicode 文字を含む文書をレンダリングする

```
! Package inputenc Error:
Unicode char \u8: not set up for use with LaTeX.
```

もしこのようなエラーにでくわしたら、おそらくデフォルトの LaTeX エンジンである pdflatex を使って文書 (中間ファイルの .tex) を PDF ヘレンダリングしているのでしょう. pdflatex は



図6.2: 複数の図を含む単一の figure 環境の例

そのファイルにある何らかの Unicode 文字を処理できません. もしこのようなケースであれば, xelatex か lualatex へ切り替えることになるでしょう. 例えばこのように.

```
output:
   pdf_document:
    latex_engine: xelatex
```

他の文書出力フォーマット, 特に bookdown::pdf_document2 や tufte::tufte_handout といった pdf_document ベースのものも LaTeX エンジンも変更できるでしょう. 例えばこのように.

```
output:
  bookdown::pdf_document2:
  latex_engine: lualatex
```

tufte::tufte_handout:
 latex_engine: xelatex

6.8 LaTeX のコードフラグメントを生成する

もし純粋な LaTeX 文書で作業しているのなら, R Markdown はそれでもやはり便利だと感じているかもしれません. R Markdown で書いて, 文書を他の LaTeX 文書に読み込める LaTeX のコード片 (フラグメント) に変換したほうが便利なこともあるかもしれません.

Rmd 文書を LaTeX にレンダリングするとき, \documentclass{}, \begin{body}, \end{body} を 含む完全な LaTeX 文書が生成されます. フラグメントはこの完全な文書の主に本文の部分です. LaTeX フラグメントをレンダリングするのに, latex_fragment 出力フォーマットが使えます. 例えばこのように.

--output: latex_fragment

これは .tex ファイルをレンダリングします. 例えば foo.Rmd は foo.tex にレンダリングされ, 別の LaTeX 文書で $^{\cdot}$ \input{foo.tex} を使うことでフラグメントを読み込めます.

6.9 カスタムヘッダとフッタ (*)

LaTeX パッケージの **fancyhdr** は文書のヘッダとフッタをカスタマイズするいくつかのコマンドを提供します. より完全なガイドとして, https://ctan.org/pkg/fancyhdr の完全版ドキュメントを参照してください. 最初に, パッケージを読み込みます. それからヘッダのスタイルを変えます. 例えばこのように.

\usepackage{fancyhdr}
\pagestyle{fancy}

このパッケージは異なる 3 つのインターフェースを提示しますが、ここでは \fancyhead と \fancyfoot コマンドを使います.形式を決める構文は \fancyhead[selectors]{output text} で、ここでカスタマイズしたいヘッダの部分がどこかをセレクタが宣言しています.ページの位置を指

定する以下のようなセレクタが使えます.

- E 偶数ページ
- O 奇数ページ
- L ページ左側
- C ページ中央
- **R**ページ右側

例えば \fancyhead[LE,RO]{あなたの名前} は偶数ページの頭の左側と, 奇数ページの頭の右側に「あなたの名前」と印字します. さらに LaTeX コマンドを織り交ぜることで, 各ページの詳細情報を取りだすことができます.

• \thepage: 現在のページ番号

• \thechapter: 現在の章番号

• \thesection: 現在の節番号

- \chaptername: 英語の "Chapter" の単語, あるいは現在の言語でそれに対応するもの, また は著者がこのコマンドを再定義してできたテキスト.
- \leftmark: 大文字で現在のトップレベル構造の名前と番号.
- \rightmark: 大文字で現在のトップレベル構造に次ぐレベルの名前と番号.

以下は LaTeX コードの例で、6.1節で紹介した方法でプリアンブルに書き加えることができます.

\usepackage{fancyhdr}

\pagestyle{fancy}

% ヘッダ中央

\fancyhead[CO,CE]{Your Document Header}

% フッタ中央

\fancyfoot[CO,CE]{And this is a fancy footer}

% 偶数ページ左と奇数ページ右にページ番号

\fancyfoot[LE,RO]{\thepage}

デフォルトではヘッダとフッタは PDF 文書の最初のページには表示されません. 表示にもフッタ を表示したいなら, もう 1 行 \fancypagestyle{plain}{\pagestyle{fancy}} を追加しなければなりません.

6.10 Pandoc の LaTeX テンプレートをカスタマイズする (*)

Pandoc はテンプレート を通じて Markdown を LaTeX に変換します. テンプレートは Pandoc 変数を含む LaTeX ファイルであり, Pandoc はこれらの変数を値に置き換えます. 以下は body という変数を bdey 1 つだけ含んだ単純なテンプレートです.

\documentclass{article}

\begin{document}

\$body\$

\end{document}

\$body\$ の値は Markdown ドキュメントの本文から生成された LaTeX コードです. 例えば Markdown で本文が Hello **world**! ならば, \$body\$ の値は Hello \textbf{world}! となります.

6.1, 6.2, 6.4節で紹介した LaTeX のカスタマイズ方法だけでは不十分なら, 代わりにカスタムテンプレートを使ってみてください. テンプレートはその内部に任意の LaTeX コードを使うことが可能なので, はるかに柔軟です. テンプレートを使うには, pdf_document の template オプションにテンプレートのパスを含めます.

output:

pdf_document:

template: my-template.tex

デフォルトの LaTeX テンプレートは https://github.com/jgm/pandoc/tree/master/data/tem plates で見ることができます (ファイル名は default.latex). 自分でテンプレートを作成したい 場合, このテンプレートから作りたいと思うことでしょう.

Pandoc 変数の完全なリストとその意味 (\$body\$ や \$title\$ のような) は Pandoc マニュアルの https://pandoc.org/MANUAL.html#templates で見ることができます. 任意のカスタム変数を 使うこともでき, それは典型的には YAML メタデータからテンプレートへと与えられます. もし 具体例で学びたいなら, **MonashEBSTemplates** パッケージ (https://github.com/robjhyndm an/MonashEBSTemplates) を確認すると良いでしょう. これはいくつかのカスタム LaTeX テンプレートを提供しています. これらのテンプレートは inst/rmarkdown/templates/*/resources/ディレクトリ (* はテンプレート名を指します) 以下にあります. 例えば出力フォーマット MonashEBSTemplates::memo に対するテンプレートは YAML メタデータの変数 branding をモナ

シュ大学のブランドロゴを含むかどうかをコントロールするのに使えます. このようにテンプレート内で if 文を使うことでこれを実現しています.

```
$if(branding)$%
\includegraphics[height=1.5cm]{monash2}
\vspace*{-0.6cm}
$else$
\vspace*{-1cm}
$endif$
```

6.11 牛の LaTeX コードを書く

デフォルトでは Pandoc は LaTeX へ変換する時, 文書内の LaTeX コードを維持するので, Markdown 内で LaTeX コマンドや環境を使うことができます. しかし, LaTeX コードが Pandoc がパースするには複雑過ぎるときがあるかもしれず, そのような場合 Pandoc は通常の Markdown として扱います. 結果として特別な LaTeX の文字はエスケープされます. 例えばバックスラッシュ \ は \textbackslash{} に変換されるかもしれません.

Pandoc が Markdown 文書内の生の LaTeX コードに確実に手を付けないようにするには, コードを fenced block で囲み, =latex の属性を付けると良いでしょう. 例えばこのように.

```
'``{=latex}
\begin{tabular}{11}
A & B \\
A & B \\
\end{tabular}
```

latex の前の等号を忘れないでください. つまり latex ではなく =latex です. この機能は Pandoc 2.0 以降のバージョンが必要です (rmarkdown::pandoc_version() で確認してください).

6.12 ハードコア LaTeX ユーザーのために (*)

R Markdown はきっと執筆と組版のための最善の文書フォーマットではないでしょう. シンプル さは長所であると同時に短所でもあります. LaTeX はタイプすべきコマンドの多さと引き換えに,

組版の観点で Markdown よりはるかに強力です。あなたにとって組版がはるかに優先すべき事項で、あらゆる LaTeX コマンドや環境を使うことに満足しているのなら、文書全体で Markdown を使う代わりに純粋な LaTeX コードを使うことができます。

knitr パッケージは R Markdown に限定されない多様なソース文書フォーマットをサポートして います. 以下は R コードと純粋な LaTeX コードが混ざり合っている例です

```
\documentclass{article}
\usepackage[T1]{fontenc}

\begin{document}

これがコードチャンクです.

<<foo, fig.height=4>>=
1 + 1
par(mar = c(4, 4, .2, .2))
plot(rnorm(100))
@

インライン評価式を書くこともできます.例えば $\pi=\Sexpr{pi}$ とか,
\Sexpr{1.9910214e28} で大きな数値を表現できます.
\end{document}
```

例えば上記のファイルは latex. Rnw であるようにファイル名はたいてい . Rnw という拡張子がつきます. 考え方は同じですが R コードチャンクと行内 R コードを書くための構文が異なっています. R コードチャンクは <<>>= で始まり (チャンクオプションは括弧内に書きます), @ で終わります. 行内 R 式は Sexpr{} 内に書きます.

knitr::knit() 関数は Rnw 文書を出力ファイルである LaTeX (.tex) にコンパイルでき, それをさらに pdflatex といった LaTeX ツールを通して PDF にコンパイルできます. .Rnw から PDF を一足でコンパイルするのに knitr::knit2pdf() を使うこともできます. RStudio を使っているならツールバーの Compile PDF を押すこともできます. Rnw 文書をコンパイルする方法のデフォルトは Sweave であり, たぶんあなたは knitr に変更したいだろうということに注意してください (その方法はこの投稿 http://stackoverflow.com/q/27592837/559676 を確認してください).

Rnw 文書は LaTeX のフルパワーをあなたにもたらします. Markdown ではほんとうに解決の難し

い組版の問題があるのなら、これは最終手段となるでしょう。ただし、Markdown をやめる前に、カスタム Pandoc LaTeX テンプレート (6.10節参照) もまた役に立つかもしれない、ということも覚えておいてほしいです。

第7章

HTML 出力

LaTeX と比べて HTML はおそらくページに分けた出力の組版が苦手です. しかし, 特に CSS や JavaScript と連携すれば, 結果を見せつける際にははるかに強力になります. 例えば HTML にインタラクティブアプリケーションを埋め込んだり, 動的に HTML ページの外観や, 内容すら修正できます. HTML 出力における有用ながらもシンプルな CSS と JavaScript のトリックは LaTeX 出力で再現するのがとても難しいこともあります (しばしば不可能なこともあります).

この章では、カスタム CSS の適用方法、カスタム HTML テンプレートの使い方、コードブロックのスタイル変更や折りたたみ、表の内容の並び替え、そして HTML ページへのファイル埋め込みといった、R Markdown の HTML 出力を向上するテクニックを紹介します。 In this chapter, we introduce techniques to enhance your HTML output from R Markdown, including how to apply custom CSS rules, use custom HTML templates, style or fold code blocks, arrange content in tabs, and embed files on HTML pages.

7.1 カスタム CSS を適用する

HTML 文書の外観をカスタマイズしようと思うのなら, CSS と JavaScript を少しでも勉強することを強く勧めます. **blogdown** 本 (Xie Hill, and Thomas, 2017) の Appendix B*1 には HTML, CSS, JavaScript の簡単なチュートリアルがあります.

CSS のセレクタと優先度のルールを理解することは初心者にとっては極めて重要です. さもなければ自分のカスタム CSS が意図したように機能しないことに混乱することになるでしょう (おそらく優先度が十分でないから).

Rmd 文書に 1 つかそれ以上のカスタムスタイルシートを読み込ませるには, css オプション を使

 $^{^{*1}}$ https://bookdown.org/yihui/blogdown/website-basics.html

うことができます. 例えばこのように.

```
output:
  html_document:
    css: "style.css"
```

複数のスタイルシートを読み込ませるには、このようにブラケットで囲んだリストを使うことになるでしょう.

```
output:
  html_document:
    css: ["style-1.css", "style-2.css"]
```

あるいは, Rmd 文書に直接 CSS のルールを埋め込むのに, css コードチャンク を使うこともできます. 例えばこのように.

```
We embed a 'css' code chunk here.

'``{css, echo=FALSE}
p {
  font-size: 32px;
}
```

チャンクオプション echo = FALSE は CSS コードを出力にそのまま表示させないことを意味しますが, CSS コードを含む <style> タグは HTML 出力ファイルにも生成されます.

7.2 セクションヘッダを中央揃えにする

7.1節で言及した応用方法のように、CSS を見出しのアラインメント調整に使うことができます。 例えば以下のような CSS コードを使ってレベル 1 から 3 の見出しを中央揃えにしたいかもしれません.

```
h1, h2, h3 {
  text-align: center;
```

}

Rmd 文書に CSS を適用する方法は7.1節を見てください.

7.3 コードチャンクのスタイルを変更する

チャンクオプションの class.source と class.output を使い, それぞれコードチャンクおよびそのテキスト出力のスタイルをカスタマイズできます。これらのオプションはクラス名の文字列ベクトルを取ります (11.13節参照)。例えば class.source = "important" は出力時にコードチャンクを含む HTML 要素に important というクラス名を持たせます。そこでこのクラスに CSS ルールを定義できます.*2 このルールは特定のコードチャンクやテキスト出力を強調したいときに役に立ちます。

デフォルトでは, R Markdown の HTML 出力は Bootstrap フレームワークを読み込みます. Bootstrap は "bg-primary", "bg-success", "bg-info", "bg-warning", "bg-danger" といったい くつかの 背景に対する CSS クラス*³ が定義済みのため, コードと出力の外観の変更を容易にしてくれます.

以下はチャンクオプション class.source = "bg-danger" と class.output = "bg-warning" を使った例で, その出力は図7.1で見られます.

```
title: チャンクのスタイルを変更する
output: html_document
---
データフレームの一部を取りだすとき、必ずしもデータフレームが返されるとは限りません。例え
は 2 つの列を取りだすなら、データフレームを得ますが、1 つの列を取り出そうとするとき
は、ベクトルを得ます。

'``{r class.source="bg-danger"、class.output="bg-warning"}
mtcars[1:5, "mpg"]
```

^{*&}lt;sup>2</sup> CSS ではクラスは先頭にピリオド (.) を付けるため, この場合はルールは .important から始まります.

^{*3} https://getbootstrap.com/docs/3.4/css/#helper-classes

```
常に確実にデータフレームを得るようにするには, `drop = FALSE` 引数を使わなければなりませ
。 ん. ここで, チャンクオプション `class.source = "bg-success"` を使います.

```{r df-drop-ok, class.source="bg-success"}
mtcars[1:5, "mpg", drop = FALSE]
```

データフレームの一部を取りだすとき,必ずしもデータフレームが返されるとは限りません. 例えば2つの列を取りだすなら,データフレームを得ますが,1つの列を取り出そうとするときは、ベクトルを得ます.

```
mtcars[1:5, "mpg"]
```

```
[1] 21.0 21.0 22.8 21.4 18.7
```

常に確実にデータフレームを得るようにするには、drop = FALSE 引数を使わなければなりません. ここで、チャンクオプション class.source = "bg-success" を使います.

```
mtcars[1:5, "mpg", drop = FALSE]
```

```
Mazda RX4 21.0
Mazda RX4 Wag 21.0
Datsun 710 22.8
Hornet 4 Drive 21.4
Hornet Sportabout 18.7
```

図7.1: Bootstrap で定義された背景色を使ったコードチャンクと出力ブロック

任意のクラスを使って対応する CSS ルールを定義することもできます. この場合, 7.1節で言及した方法を使ってカスタム CSS ルールを読み込ませなければなりません. 以下はその例です.

```

title: チャンクにカスタムクラスを割り当てる
output: html_document

```

図7.2がスタイルの出力です.

まず watch-out というクラスにいくつか CSSを ルールを定義します.

それからチャンクオプション class.source で watch-out クラスをコードチャンクに割り当てます.

```
mtcars[1:5, "mpg"]
[1] 21.0 21.0 22.8 21.4 18.7
```

図7.2: 明桃色の背景, 赤い太枠線をもつコードチャンク

文書内の全てのコードブロックにカスタムスタイルを塩要したいなら, グローバルな **knitr** オプションで class.source を設定します. 例えばこのように.

```
knitr::opts_chunk$set(class.source = "watch-out")
```

複数のクラスをコードブロックに適用できます. 例えば class.source = c("important",

"warning") でコードブロックに "important" と "warning" という 2 つのクラスを持たせられます.

コードブロック全体ではなく, 内部の個別の要素を装飾したいならば, **flair** パッケージ (Bodwin and Glanz, 2020) の使用を検討してもよいかもしれません. このパッケージでコードの個別の部分 (特定の文字, 関数名, 引数など) をカスタムスタイル (例えば色, フォントサイズ, あるいはフォントのウエイト) で強調できます.

### 7.4 コードブロックをスクロール可能にする (\*)

大量のコードやテキスト出力を HTML ページに表示するとき,表示範囲の高さを制限したいかもしれません. そうしないとページはとてつもなく長くなり,それらを細かく読む気のない読者に読み飛ばしづらくなるかもしれません. この問題の解決法は複数あります.  $html_document$  フォーマットの code\_folding オプションを使うというのがその 1 つです. このオプションは出力文書のコードブロックを折りたたみ,また読者はボタンを押して展開することができます (詳細は7.5節).

他の可能性としてはコードブロックが長すぎるとき,高さを固定しスクロール可能にすることです. これは CSS プロパティの max-height と overflow-y で実現できます. 以下はその使用例の全容で,出力は図7.3になります.

```
title: スクロール可能なコードブロック
output: html_document

'``{css, echo=FALSE}
pre {
 max-height: 300px;
 overflow-y: auto;
}

pre[class] {
 max-height: 100px;
}

コードブロックの高さを制限する CSS ルールをいくつか定義しました. これらのルールがコード
```

→ ブロックとテキスト出力に対して機能するのかテストすることができます.

```
```{r}
# このチャンクに多くのコードがあるように見せかける
if (1 + 1 == 2) {
 # もちろん真になる
 print(mtcars)
 # 単に長いデータを表示させるだけ
}
. . .
次に高さを 100px に制限するために `scroll-100` という新しいクラスにルールを追加し, チャ
→ ンクオプション `class.output` でこのクラスをコードチャンクの出力に追加します.
```{css, echo=FALSE}
.scroll-100 {
 max-height: 100px;
 overflow-y: auto;
 background-color: inherit;
}
. . .
```{r, class.output="scroll-100"}
print(mtcars)
```

上記の例では全てのコードブロックに大域的に 300px の高さ上限を定義しています. HTML 出力時にはコードブロックが タグで囲まれていることを思い出してください. それから class属性に <math> ブロックの高さを 100px に制限します. これは CSS セレクタ pre[class] が意味するところです. デフォルトではテキスト出力は <math> に含まれ, R コードブロックは <math> class="r"> に含まれます (ここで <math> タグが class 属性を持っていることに注意してください).

第2のRコードチャンクからのテキスト出力の高さも 100px です. これが出力にたいして, カスタムクラス名 scroll-100 を割り当て, 高さの上限を 100px に定義した理由です.

個別のコードブロックに対して異なる最大高さを指定したいならば、12.3節の例を見ればよいでし

コードブロックの高さを制限する CSS ルールをいくつか定義しました. これらのルールがコードブロックとテキスト出力に対して機能するのかテストすることができます.

```
# このチャンクに多くのコードがあるように見せかける
if (1 + 1 = 2) {
 # もちろん真になる
 print(mtcars)
  # 単に長いデータを表示させるだけ
                    mpg cyl disp hp drat
##
                                          wt qsec vs am gear carb
## Mazda RX4
                    21.0 6 160.0 110 3.90 2.620 16.46 0 1
## Mazda RX4 Wag
                    21.0 6 160.0 110 3.90 2.875 17.02 0 1
## Datsun 710
                    22.8 4 108.0 93 3.85 2.320 18.61 1 1
                                                               1
                    21.4 6 258.0 110 3.08 3.215 19.44
## Hornet 4 Drive
                                                    1 0
                                                               1
## Hornet Sportabout 18.7 8 360.0 175 3.15 3.440 17.02 0 0
                                                               2
                   18.1 6 225.0 105 2.76 3.460 20.22 1 0
## Valiant
                                                               1
                  14.3 8 360.0 245 3.21 3.570 15.84 0 0
## Duster 360
## Merc 240D
                  24.4 4 146.7 62 3.69 3.190 20.00 1 0
                                                               2
## Merc 230
                  22.8 4 140.8 95 3.92 3.150 22.90 1 0
                  19.2 6 167.6 123 3.92 3.440 18.30 1 0
## Merc 280
## Merc 280C
                   17.8 6 167.6 123 3.92 3.440 18.90 1 0
## Merc 450SE
                   16.4 8 275.8 180 3.07 4.070 17.40 0 0
                                                           3
                                                               3
## Merc 450SL
                   17.3 8 275.8 180 3.07 3.730 17.60 0 0
                                                           3
                                                               3
## Merc 450SLC
                   15.2 8 275.8 180 3.07 3.780 18.00 0 0
                                                         3
                                                               3
## Cadillac Fleetwood 10.4 8 472.0 205 2.93 5.250 17.98 0 0
```

次に高さを100px に制限するために scroll-100 という新しいクラスにルールを追加し, チャンクオプション class.output でこのクラスをコードチャンクの出力に追加します.

```
print(mtcars)
##
                     mpg cyl disp hp drat wt qsec vs am gear carb
## Mazda RX4
                    21.0 6 160.0 110 3.90 2.620 16.46 0 1 4
                                                                 4
## Mazda RX4 Wag
                                                                  4
                    21.0 6 160.0 110 3.90 2.875 17.02 0 1
                                                            4
## Datsun 710
                    22.8 4 108.0 93 3.85 2.320 18.61 1 1
                                                             4
                                                                  1
## Hornet 4 Drive
                    21.4 6 258.0 110 3.08 3.215 19.44 1 0
```

図7.3: カスタム CSS を使用したスクロール可能なコードブロック

ょう.

7.5 全コードブロックを折りたたみ, かついくつかは表示する

出力文書に書かれたコードブロックが読者に嫌がられるおそれがあるなら, はじめは折りたたんでおくという選択をするとよいかもしれません. 読者はボタンを押して表示を選ぶことができます.

output:			
html_document:			

```
code_folding: hide
```

全てのコードブロックを最初から展開することもできます (よって読者は折りたたむことを選べます).

```
output:
  html_document:
    code_folding: show
```

最初から全てのコードブロックを折りたたんだなら, チャンクオプション class. source = "fold-show" を使い特定のブロックを展開だけを最初から展開させておくこともできます. このように.

```
title: Hide all code blocks and show some initially
output:
   html_document:
      code_folding: hide
---
'''{r}
1  # code is hidden initially
'''
'''{r class.source = 'fold-show'}
2  # code is shown initially
'''
'''{r}
3  # also hidden
```

反対のこともできます. つまり, 最初から全てのコードブロックを表示するもののそれらの一部は表示させます. 例えばこのように.

```
output:
   html_document:
    code_folding: show
---
'```{r}
1  # code is shown initially
'```
'```{r class.source = 'fold-hide'}
2  # code is hidden initially
'```
```

7.6 内容をタブブラウジングさせる

HTML レポートの並列しているセクションをまとめる自然な方法の1つは,タブセットを使うことです.これは読者がページをスクロールして戻したり進めたりするかわりに,タブのタイトルをクリックすることで異なるセクションの内容を閲覧することを可能にします.

セクションをタブにするために、タブに変換する見出しより 1 レベル上の見出しにクラス属性 .tabset を追加できます。例えばレベル 2 の見出しに .tabset を追加するとそれ以降のレベル 3 の見出しが全てタブに変換されます。以下は用例の全容です。

```
title: 内容をタブにまとめる
output: html_document
---

'html_document' 出力で並列するセクションをタブにできます.

## 結果 {.tabset}

### グラフ
```

```
このセクションでは散布図を表示します.

```{r, fig.dim=c(5, 3)}
par(mar = c(4, 4, .5, .1))
plot(mpg ~ hp, data = mtcars, pch = 19)

...

表

このタブではデータを表示します.

```{r}
head(mtcars)
...
```

出力を図7.4に示します。実際には一度に1つのタブしか見られないことに注意してください。この図は両方のタブがみられるよう2つのスクリーンショットを連結したものです。

タブに "pill" 効果を付けるため, さらに別の属性 .tabset-pills を上位レベルの見出しに追加することができます. これでタブは暗青色の背景になります.

```
## Results {.tabset .tabset-pills}
```

デフォルトでは最初のタブがアクティブ (つまり表示されている) です. 他のタブを最初に表示させたいなら, そのセクションに.active 属性を追加するとよいでしょう.

タブセットを終わらせるには、上位レベルのセクション見出しを新しく開始する必要があります。 新しいセクションの見出しは空にすることができます。例えばこのように、

```
## Results {.tabset}

### Tab One

### Tab Two

## {-}
```

グラフ 表

このセクションでは散布図を表示します.

```
par(mar = c(4, 4, .5, .1))
plot(mpg ~ hp, data = mtcars, pch = 19)
```



グラフ

表

このタブではデータを表示します.

head(mtcars)

```
mpg cyl disp hp drat
                                             wt qsec vs am gear carb
## Mazda RX4
                    21.0
                           6 160 110 3.90 2.620 16.46
## Mazda RX4 Wag
                    21.0
                           6 160 110 3.90 2.875 17.02
                                                                    4
## Datsun 710
                    22.8
                           4 108 93 3.85 2.320 18.61
                                                                    1
                              258 110 3.08 3.215 19.44
## Hornet 4 Drive
                    21.4
                           6
                                                       1
                                                               3
                                                                    1
                           8 360 175 3.15 3.440 17.02
                                                                    2
## Hornet Sportabout 18.7
                    18.1
                           6 225 105 2.76 3.460 20.22 1 0
## Valiant
                                                               3
                                                                    1
```

図7.4: 複数のセクションをタブに

上記のように番号なし(`{-}`)で空のセクション見出しがあれば、 タブセットを終了しさらなる段落を続けることができます.

7.7 Rmd ソースファイルを HTML に埋め込む

HTML 出力ページを共有するとき, Rmd ソースファイルもほしいかもしれません. 例えば Rmd ソースを変更し, 自分自身でレポートをコンパイルしたいかもしれません. Rmd ソースファイルのコピーを HTML に埋め込むにはオプション code_download を使うことができます.

```
output:
  html_document:
    code_download: true
```

オプションが有効になると, HTML 出力ページはダウンロードボタンを持ち, 読者はそのボタンを押してソースファイルのダウンロードができます.

7.8 HTML 出力に好きなファイルを埋め込む

7.7節で言及したように, HTML 出力には Rmd ソース文書のコピーを埋め込めます. Rmd ファイル単体ではレポートを再現するのに不十分な場合もあるかもしれません. 例えばレポートに外部のデータファイルが必要かもしれません. HTML 出力ファイルに好きなファイルを埋め込んでくれる一連の関数が **xfun** パッケージ (Xie, 2021d) にあります. これらの関数を使うために, 以下の R パッケージを用意しておきます.

```
vfun::pkg_load2(c("htmltools", "mime"))
```

これで 1 つ以上のファイルやディレクトリを HTML 出力に埋め込むのに, コードチャンク内で xfun::embed_file(), xfun::embed_files(), xfun::embed_dir() を使えます. 例えばこのように.

```
'``{r echo=FALSE}
# a single file
xfun::embed_file('source.Rmd')
```

105

```
# multiple files
xfun::embed_files(c('source.Rmd', 'data.csv'))

# a directory
xfun::embed_dir('data/', text = 'Download full data')
```

プログラミング的にファイルのリストを与えることもできます. 例えばこのように.

```
# embed all Rmd and csv files
xfun::embed_files(list.files(".", "[.](Rmd|csv)$"))
```

複数のファイルに対し、これらの関数はまず zip ファイルに圧縮してから、この zip ファイルを埋め込みます。これらの関数はリンクを返し、読者は HTML ページのリンクをクリックして埋め込んだファイルをダウンロードすることができます。

ヘルプページ?xfun::embed_file またはブログ投稿 https://yihui.org/en/2018/07/embed-file/でこれらの関数のより詳細な技術的情報を学ぶことができます. 同様のアイディアにより, **downloadthis** package (Mattioni Maturana, 2020) はダウンロードボタンを実装したことでユーザーはリンクではなくダウンロードボタンをクリックしてダウンロードできるようになります. ボタンを使うほうがお好みなら, こちらを使うことも検討するとよいでしょう.

7.9 カスタム HTML テンプレートを使う (*)

既に6.10節では LaTeX テンプレートについて話しました. Pandoc が Markdown を HTML へ変換するに際しカスタム HTML テンプレート を指定することもできます. 以下は簡単なテンプレートの例です.

```
<html>
<head>
<title>$title$</title>
$for(css)$
<link rel="stylesheet" href="$css$" type="text/css" />
$endfor$
```

```
</head>
<body>
$body$
</body>
</html>
```

テンプレートに title, body といったいくつかの変数が含まれているのがわかるでしょう. Pandoc 変数の完全なリストとそれぞれの意味については ttps://pandoc.org/MANUAL.html#tem plates で検索することができます.

テンプレートによってあなたは HTML 出力をカスタマイズする究極の力を得ることになります. 例えば好きな CSS スタイルシートや JavaScript コード, あるいはライブラリを <head> 内で読み込ませたりできます. あるいは文書が下書きか, 最終稿かを示すブーリアン変数 draft も使えます.

```
<head>
<style type="text/css">
.logo {
  float: right;
}
</style>
</head>
<body>
<div class="logo">
$if(draft)$
<!-- use draft.png to show that this is a draft -->
<img src="images/draft.png" alt="Draft mode" />
$else$
<!-- insert the formal logo if this is final -->
<img src="images/logo.png" alt="Final version" />
$endif$
</div>
$body$
</body>
```

すると Rmd 文書の YAML メタデータ内で draft 変数に true または false を設定できます. 例 えばこのように.

```
title: "An Important Report"

draft: true
```

テンプレートを Rmd 文書に適用するのに、テンプレートをファイルに保存し、 $html_document$ の template オプションにファイルパスを与えることができます。 例えばこのように.

```
output:
  html_document:
  template: my-template.html
```

rmarkdown パッケージは Pandoc のデフォルトテンプレートとは異なるカスタム HTML テンプレートをパッケージ内で読み込んで使用しています. Pandoc のデフォルトを使うには template: null で指定できます.

7.10 既存の HTML ファイルの内容を読み込む (*)

html_document フォーマット (あるいはこのオプションをサポートしている他のフォーマット) の includes オプション があれば, 既存の HTML ファイルの本文を HTML 出力文書の 3 箇所のどこかで読み込むことができます. それらは $\frac{1}{2}$
 $\frac{1}{$

```
output:
  html_document:
  includes:
    in_header: header.html
    before_body: before.html
    after_body: after.html
```

HTML にあまり詳しくないなら, 7.9節がこのオプションをより理解するのに役に立つかもしれません.

in_header オプションを使うなら, CSS と JavaScript コードを <head> タグ内に挿入することが

できます. before_body を使うなら, バナーやロゴを表示するヘッダを埋め込むと良いでしょう. after_body を使うなら, フッタを読み込ませることができます. 例えばこのように.

```
<div class="footer">Copyright &copy; John Doe 2020</div>
```

外部 HTML ファイルの内容を本文の好きな位置で読み込みたいときもあるかもしれません. これは htmltools::includeHTML()を使えば可能です. HTML ファイルパスをこの関数に与えます. 関数はこのファイルを読み込み, 出力文書にたいしてこのファイルの中身を書き込みます. 9.5節で使用したようなテクニックをを使っても良いかもしれません. 例えばこのように.

```
'```{=html}
'```{r, echo=FALSE, results='asis'}
xfun::file_string('file.html')
...
...
```

HTML ファイル内読み込めるのは別の HTML 部分だけであり, 完全な HTML ファイルを読み込んではならないことに注意してください. 完全な HTML ファイルとは html タグを含むものであり, これは他の html タグ内に埋め込むことができません. 以下は HTML 文書に別の完全なHTML 文書が埋め込まれた場合の無効な HTML 文書です.

</body>

HTML ファイルを別の HTML 出力文書に読み込む時に問題が発生したなら, HTML ファイルに html>a href="html">a href="html">>a href="html">>a href="html">>a href="html">>a hre

rmarkdown パッケージには html_fragment という出力フォーマットがあり, 完全な HTML 文書の代わりに HTML の一部を生成します. Rmd 文書内で別のコンパイルされた Rmd 文書の結果を読み込みたい場合, 後者の Rmd 文書は html_document フォーマットの代わりに html_fragment フォーマットを使うと良いでしょう.

HTML ファイルの代わりに Rmd または Markdown 文書を読み込ませたいなら, 16.4節で紹介されている子文書を使うとよいでしょう.

7.11 ブラウザアイコンをカスタマイズする

7.10節では html_document フォーマットの includes オプションで追加のコードを HTML のヘッダ, 本文, フッタに挿入できることを実演しました. このテクニックはファビコンというカスタムブラウザアイコンを HTML 出力に追加することに使えます.

ファビコンはブラウザのアドレスバー, タブタイトル, ブックマークに表示されるウェブサイトの ロゴです. 例えば Google Chrome で CRAN のウェブサイト (https://cran.r-project.org) を 開いてブラウザのタブを見ると, 小さな R ロゴがあります. 携帯端末ならばファビコンはウェブサイトをホームスクリーンに固定表示した際にアプリアイコンの代わりに使われます.

HTML 文書にファビコンを追加するには、以下のコードをカスタムヘッダファイル (7.10節で言及したように、header.html といった名前のファイル) を追加します.

<link rel="shortcut icon" href="{ファビコン画像ファイルへのパス}" />

YAML メタデータを使って, このファイルを文書の <head> 内に挿入できることを思い出してください.

output:

html_document:

includes:

in_header: header.html

o href 属性に与えたパスは他のアセット (例えば画像やデータ・セット) を参照するときと同じように、相対パス構造を前提とすべきです。使用する画像は、最も小さい正方形の PNG ファイルがよく機能します。 典型的なウェブブラウザは画像を 16 x 16 ピクセルの領域に表示するため、シンプルなデザインがより良いということに留意してください。

あなたの文書を表示するそれぞれのブラウザやプラットフォームは特定のレイアウトに対して最適な解像度のバージョンを使用します。ファビコンセットとより複雑な HTML ヘッダのコードを生成するのに、https://realfavicongenerator.net といったサービスを使うとよいかもしれません。このサービスは現在 **pkgdown** パッケージ (Wickham and Hesselberth, 2020) の pkgdown::build_favicon() 関数で R パッケージロゴのセットを作り出すのに使用されています。

7.12 折りたたみ要素 <details> を使う

7.4節で言及したように、html_document フォーマットの code_folding: hide オプションでソースコードチャンクを折りたたむことができます。現在は出力ブロックを折りたたむことはできませんが、出力を折りたたみできるようにするのに JavaScript のトリックが使えます。これは出力が比較的長く、しかしさほど重要でないときに役に立つでしょう。初期状態で折りたたみ、読者が興味を持てば内容を見るために展開することができます。図7.5はその例です。「詳細」ボタンをクリックして出力を展開できるでしょう。

あなたがご覧になっているのが本書の HTML バージョンなら, 以下のチャンクで実際に動くのを見ることができます. PDF または印刷版を読んでいるのなら, このような対話的機能 (「詳細」ボタンを押すこと) はおそらく不可能です.

1:100

01

7 ## [1] 2 3 5 6 8 9 10 11 12 ## [13] 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 ## [25] 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 [37] 37 ## 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 [49] 49 50 51 52 53 54 55 59 ## 56 57 58 60 ## [61] 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 ## [73] 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84

```
1:100

▶ 詳細

1:100

▼ 詳細

## [1] 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 ## [19] 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 ## [37] 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 ## [55] 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 ## [73] 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 ## [91] 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100
```

図7.5: details 要素でテキスト出力を囲む

```
## [85] 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96
## [97] 97 98 99 100
```

以下は出力ブロックを検出し、それを <details> タグで囲む JavaScript コードを読み込ませた Rmd 文書の完全なソースです.

```
title: 折りたたみ要素 `<details>` を使う
output: html_document
---

この例ではテキスト出力を `<details>` タグ内に表示します.
JavaScript でテキスト出力ブロックを `<details></details>` で囲みます.
Javascript コードはこの文書の未尾で実行する必要があるため,
最後に配置します. 以下はテスト用のコードチャンクです.

```{r}
1:100

実際の JavaScript コードは以下になります.
```

```
```{js, echo=FALSE}
(function() {
  var codes = document.querySelectorAll('pre:not([class])');
  var code, i, d, s, p;
  for (i = 0; i < codes.length; i++) {
    code = codes[i];
    p = code.parentNode;
    d = document.createElement('details');
    s = document.createElement('summary');
    s.innerText = '詳細';
    // <details><summary>詳細 </summary></details>
    d.appendChild(s);
    // コードを <details> 内に移動
    p.replaceChild(d, code);
   d.appendChild(code);
 }
})();
```

上記の JavaScript コードを自分で適用すればよいでしょう. ポイントは要素を <details> で囲むということです.

```
document.querySelectorAll('pre:not([class])');
```

CSS セレクタの pre:not([class]) は class 属性のない全ての 要素を意味します.他の要素のタイプを選択することもできます.CSS セレクタについてより知りたいなら、https://www.w3schools.com/css/css_selectors.asp を見てください.HTML タグ <details> と <summary> をより知りたいなら、https://www.w3schools.com/tags/tag_details.asp を見てください.

7.13 HTML 出力を Web で共有する

R Markdown を HTML ファイルにレンダリングするということの魅力的な側面の 1 つは, これらのファイルをとても簡単にインターネットでホストし他のウェブサイトと同様に共有できるということです. この節では貴方の作成した HTML 文書を共有するオプションを簡単に要約します.

7.13.1 R 特化のサービス

RStudio は R Markdown で作られた様々な種類のコンテンツをインターネットで公開するためのサービスをいくつか提案しています。これらのサービスは特に RStudio IDE または **rsconnect** パッケージ ([J Allaire, 2019) を使って簡単に公開できます。

- **RPubs*** は静的な単一の R Markdown コンテンツの無料ホスティングを可能とします. RStudio IDE の Publish ボタンまたは rsconnect::rpubsUpload() 関数で簡単に公開できます. 詳細は "Getting Started" のページ (https://rpubs.com/about/getting-started) をご覧ください.
- **ShinyApps.io*** は R を実行するサーバを要求するような動的コンテンツのホスティングを可能にします. 例えば Shiny コンポネントを含んでいる*6インタラクティブな R Markdown 文書をホストできます. ShinyApp.io は Shiny アプリケーション用の RPubs の類似サービスです. アプリとインタラクティブな R Markdown 文書は RStudio IDE の push ボタンか rsconnect::deployApp() 関数を使って公開できます. 詳細はユーザーガイド (https://docs.rstudio.com/shinyapps.io/) をご覧ください.
- **bookdown.org***⁷ は **bookdown** パッケージで書かれた本の無料ホスティングを提案します. bookdown::publish_book() 関数であなたの書籍の静的な出力ファイルを簡単に公開できるでしょう.
- **RStudio Connect*8** は組織団体が自前のサーバで動作させるような企業向け製品です. で 作成された広範な種類のコンテンツ (R Markdown 文書, Shiny アプリケーション, API な ど) を文書レベルでのアクセス制御, 閲覧履歴などといった機能を使いセキュアな環境でホストできます. コンテンツは RStudio Connect に手動でアップロードするか, **rsconnect** パッケージか, または git ベースのデプロイによって公開できます.

^{*4} https://rpubs.com

^{*5} https://www.shinyapps.io

^{*6} R Markdown 文書に Shiny コンポネントを含むには, YAML メタデータで runtime: shiny または runtime: shiny_prerendered オプションを設定するとよいでしょう. この文書を以前のように HTML 文書にレンダリングすることはできないでしょうが, 代わりに rmarkdown::run() で文書を実行することになります. 詳しく知るには Xie J.J. Allaire, and Grolemund (2018) (Chapter 19, https://bookdown.org/yihui/rmarkdown/shiny-documents.html) をご覧ください.

^{*7} https://bookdown.org/home/about/

^{*8} https://rstudio.com/products/connect/

7.13.2 Static website services

端的に言うなら、単純な静的ウェブサイトは数個の HTML ファイル (典型的にはホームページである index.html), JavaScript, CSS ファイル、そして画像などの追加のコンテンツで構成されます. 一連のファイルは web サーバにそのままホストし、web ブラウザに表示させることができます.

R Markdown が HTML 出力フォーマットでレンダリングされた場合, その結果は静的なウェブサイトとして扱われます. ウェブサイトは単一のスタンドアロンな HTML ファイル (デフォルトオプション self_contained: true を使った場合に得られます) から, ファイルのセット, **blogdown**パッケージ (静的なウェブサイトジェネレータに依存しています) に基づいたウェブサイトのような洗練されたプロジェクトまで複雑さの点で多岐に及びます. より詳しく知りたいなら, **blogdown**本 (Xie Hill, and Thomas, 2017) の Section 2.1 on Static Sites*9 を見てください.

結論として、あなたは R 特化のサービスに加え、多くの無料で使用可能な静的ウェブサイトホスティングサービスを使って HTML 文書をホストできるでしょう。 R コミュニティでのよくある選択としては以下があります.

- **GitHub Pages***10 は Github リポジトリから Markdown と HTML コンテンツをそのまま公開する場合は特に簡単です. main ブランチのルートの doc ディレクトリか, あるいはgh-pages ブランチからコンテンツをホストすることを指定することになるでしょう. 新しいコンテンツの公開は git でリポジトリに新しい HTML ファイルをプッシュするだけで可能です.
- **GitLab Pages***11 は GitHub Pages と類似の機能を GitLab リポジトリに対して提案します. GitLab はリポジトリの public ディレクトリに保存されたコンテンツをデプロイします. コンテンツをビルドし公開するには, 指示のため .gitlab-ci.yml というYAML ファイルを与えなければなりませんが, GitLab は多くの便利なテンプレートを提供してくれます. レンダリングされた HTML コンテンツをホストする例として, https://gitlab.com/pages/plain-html/-/tree/master をご覧ください.
- **Netlify***¹² は静的な web コンテンツをビルドしデプロイするプラットフォームです. **blogdown** と **pkgdown** で作成された web コンテンツに対する選択としてはよく知られていますが, これはあらゆる種類の HTML ファイルをホスティングできます. 公開方法として, ドラッグ・アンド・ドロップ, コマンドライン, あるいは GitHub および GitLab レ

 $^{^{*9}}$ https://bookdown.org/yihui/blogdown/static-sites.html

^{*10} https://pages.github.com

^{*11} https://docs.gitlab.com/ce/user/project/pages/

^{*12} https://www.netlify.com

ポジトリから自動公開するといったいくつもの選択があります。加えて、プルリクエストから web サイトをプレビューするといった多くの役立つ機能も提案されています。詳細は Netlify のドキュメント (https://docs.netlify.com) や RStudio webinar "Sharing on Short Notice"* 13 をご覧ください。

7.14 HTML ページのアクセシビリティを向上させる

HTML 出力文書に、何らかの視覚的な障害を持つ読者に対するアクセシビリティをもたせることは重要です。こういた読者はしばしば、文書を視覚的に読み上げる代わりにスクリーンリーダ (音声読み上げソフト) といった聞くための、特殊なツールを使います。大抵はスクリーンリーダはテキストを読み上げることができるだけで、(ラスタ) 画像を読み上げられません。つまりあなたはスクリーンリーダに十分なヒントを与える必要があるということです。 良いニュースは、少々の労力であなたの文書のアクセシビリティをかなり向上できるということです。 Jonathan Godfrey が R Markdown 文書のアクセシビリティのためのいくつかのヒントをhttps://r-resources.massey.ac.nz/rmarkdown/ で記事にしています。 *14 この記事に基づいて、本書の読者にとっての利便性になるいくつかのヒントを以下に提示します。

- HTML 文書はしばしば PDF よりアクセシビリティが優れている.
- 可能ならば HTML 出力文書に Rmd ソース文書を同梱するようにする (例えば7.7節でその方法の1つを実演しています). HTML 文書にアクセシビリティがない場合, 視覚障害者は Rmd ソースから内容を理解できるかもしれませんし, ソースを修正することもできるかもしれません.
- テキスト情報をグラフに与える. 2014 年の useR! カンファレンスで, 私は Jonathan から この問題を個人的に教えてもらいました. web ページ上の画像の alt 属性の重要さを私は 初めて理解しました.

この問題を理解するために、まずは web ページの画像が HTML タグ によって生成されることを知らなければなりません。このタグは x src 属性を持ち、画像ファイルのソースの場所を指定しています。例えば x sing x src="foo_figures/image.png" x のように、視力のある読者はこの画像を見ることができますが、スクリーンリーダは画像を読むことが出来ないため、視覚障害者には描かれていることを知るのは難しいです、特にラスタ画像の場合は x (x のようなベクタ画像は多少ましかもしれません)。この場合テキストでのヒント

^{*13} https://rstudio.com/resources/webinars/sharing-on-short-notice-how-to-get-your-materials-online-with-r-markdown/

^{*&}lt;sup>14</sup> JooYoung Seo も, 視覚障害を持つ人の手助けになる R パッケージを https://jooyoungseo.com/post/ds4blind/ で紹介しています. これは R Markdown と直接関係しませんが, 視覚障害者がどうグラフを読み取っているのかを 学ぶのに役に立つでしょう.

を与えると, スクリーンリーダは読み上げることができるので便利です. このテキストでのヒントは画像の代替 (alternate) テキストを意味する alt 属性で与えることできます.

R Markdown のコードチャンクから生成された画像の場合は、もしチャンクオプション fig. cap (つまり画像のキャプション, figure caption) 設定されているなら alt 属性はここ から生成されます. 代わりに Markdown 構文 を使って画像を挿入することもできます. 画像パスをパーレン() 内に入力し、alt テキストをブラケット[] 内に入力、例えば![テキスト情報](パス/image.png) のように.

alt テキストは視力のある読者にとっては HTML ページ上に表示されません. しかし画像 にキャプションや代替テキストを与えた場合, rmarkdown: :html_document フォーマットは デフォルトでキャプション要素を表示します. もし実際にキャプションを表示させたくない なら, このように fig_caption をオフにすることができます.

output:

html_document:

fig_caption: false

このケースでは alt 属性はまだ生成されますが,表示されることはありません.

- 画像の代わりに LaTeX 構文を使って数学的なコンテンツを書く (例: \$ \$, あるいは \$\$ \$\$). デフォルトでは, R Markdown は数学的なコンテンツのレンダリングに MathJax ライブラリを使い, 結果としてスクリーンリーダが読み上げられるものになります.
- チャンクオプション comment = "" を設定してコードチャンクのテキスト出力の行頭の ## を除く (11.12節参照).

我々はアクセシビリティの専門家ではありませんので, 詳細は元の記事を読むことをお薦めします.

7.15 ハードコア HTML ユーザー向けの話 (*)

6.12節では、あなたが Markdown のシンプルさのためにその制約が強すぎると感じているなら、 Markdown の代わりに純粋な LaTeX 文書にコードチャンクを埋め込むことができる、という話を しました. 同様にあなたが直接 HTML コードを書くことに慣れていて快適さを感じるなら、HTML にコードチャンクを混ぜ合わせることもまた可能です。 そのような文書は慣習的に .Rhtml というファイル拡張子を持ちます.

Rhtml 文書では、コードチャンクは <!--begin.rcode と end.rcode--> の間に埋め込まれ、インライン R コードは <!--rinline --> 内に埋め込まれます.以下は Rhtml 全体の例です.これを

test.Rhtml というファイル名で保存し, コンパイルには knitr::knit("test.Rhtml") を使うことができます. 出力は 1 つの HTML (.html) ファイルになります. RStudio では, ツールバーの Knit ボタンを押すことでもコンパイルできます.

```
<!DOCTYPE html>
<html>
<head>
 <title>HTML の最低限の knitr 使用例</title>
</head>
<body>
<!--begin.rcode
 knitr::opts_chunk$set(fig.width=5, fig.height=5)
 end.rcode-->
 これは <strong>knitr</strong> が純粋な HTML ページでどのように動作するかの最低限の
  → 例です.
 お決まりの退屈な使用例.
<!--begin.rcode
   # 単純な計算
   1 + 1
   # 退屈な乱数生成
   set.seed(123)
   rnorm(5)
   end.rcode-->
 図を生成することもできます(<code>fig.align='center'</code>オプションで中央揃えし

    ています).

<!--begin.rcode cars-scatter, fig.align='center'
   plot(mpg ~ hp, data = mtcars)
   end.rcode-->
 エラー、メッセージ、警告文はそれぞれ異なる<code>class</code>を持つ
  → <code>div</code> 内に配置されます.
```

```
<!--begin.rcode
sqrt(-1) # 警告
message('knitr says hello to HTML!')
1 + 'a' # ミッションインポッシブル
end.rcode-->

さて全てうまくいっているようです. R に &pi; の値を聞いてみましょう. もちろん答えは
    <!--rinline pi --> です.
</body>
</html>
```

第8章

Word

R Markdown から Word 文書を生成するには、出力フォーマット word_document が使えます. 文書に相互参照を含めたいなら、4.7節でも言及された bookdown::word_document2 を検討するとよいでしょう.

```
---
output:
word_document: default
bookdown::word_document2: default # 相互参照のため
---
```

われわれの経験上, Word 出力に関する最もよくある質問は以下のようなものです.

- 1. 文書へのカスタム Word テンプレートはどうすれば適用できるのか?
- 2. Word 側で元の R Markdown 文書を適切に変更にはどうすればいいのか?
- 3. 個別の文書の要素のスタイルの設定はどうすればいいのか?

この章ではこれらの質問にこたえていきます.

8.1 カスタム Word テンプレート

Word テンプレート文書で定義されたスタイルを R Markdown で新たに生成された Word 文書に 適用することができます。テンプレート文書は「スタイル参照文書」"style reference document" とも呼ばれています。ポイントは,最初はこのテンプレート文書 Pandoc から作成し,それからス

タイル定義を変更しなければならないということです。それからこのテンプレートファイルのパスを word_document の reference_docx オプションに与えてください。例えばこのように.

```
output:
  word_document:
    reference_docx: "template.docx"
---
```

たった今言及したように、template.docx は Pandoc から生成されたものでなければなりません. このテンプレートは word_document 出力フォーマットを使った R Markdown 文書からなら何でも (この文書の実際の内容はなんでも問題ありませんが、スタイルを適用したい種類の要素を含んでいるべきです) 作ることができます.それから .docx ファイルを開き、スタイルを編集します.

図8.1は Word の「ホーム」タブから "Styles" ウィンドウを開くと見つけられます. カーソルを文書の特定の要素上に動かすと, スタイルリストの項目が強調されます. あるタイプの要素のスタイルを変更したいならば, 強調された項目上でドロップダウンメニューをクリックして図8.2のようなダイアログボックスを見ることができます.

TODO: Word 日本語版での名称確認

スタイルの編集を終わったら、文書を保存し (誤って上書きしないようなファイル名にしてください)、今後の Word 文書のテンプレートとして使用することができます. Pandoc が参照文書テンプレートを与えられて新しい Word 文書をレンダリングするとき、テンプレートのスタイルが読み出されそれが新しい文書に適用されます.

カスタムスタイル付きの Word テンプレートを作成する方法の詳細は https://vimeo.com/1108 04387 で短い動画を見るか, https://rmarkdown.rstudio.com/articles_docx.html の記事を読むとよいでしょう.

要素に対するスタイル名がすぐには見つからないこともあるかもしれません。複数のスタイルが同じ要素に適用され、それらのうち 1 つだけが強調されてみえることもあるかもしれません。修正したいスタイルが実際になんであるかは、当て推量やネット検索で解決することが求められることもあるかもしれません。例えば "Manage Styles" ボタン (図8.1のスタイルリストの下部にある、左から 3 番目のボタン) をクリックし、"Tabke" スタイル (図8.3参照) を見つけるまでに多数のスタイル名をスクロールして飛ばさなければならりません。これであなたは、例えば枠線のなどの表のスタイルを修正できます。



図8.1: 特定の文書要素のスタイルを見つける



図8.2: Word 文書の要素のスタイルを変更する

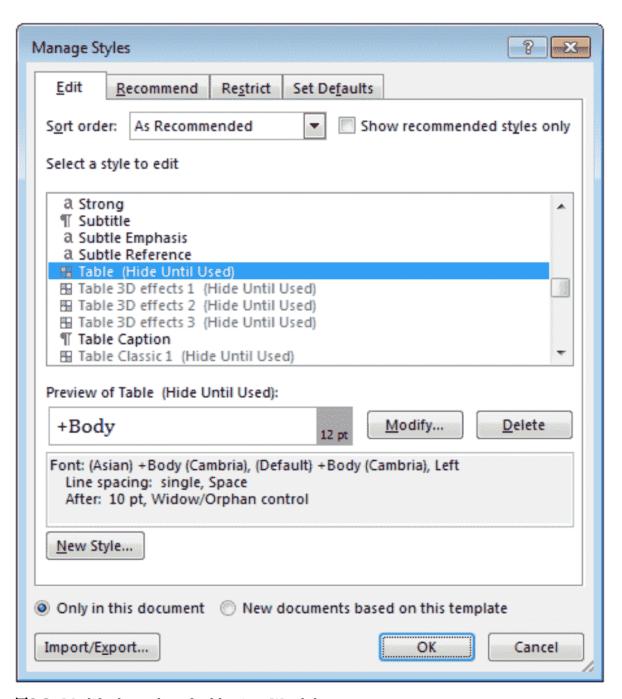


図8.3: Modify the styles of tables in a Word document.

8.2 R Markdown と Word 間の双方向ワークフロー

R Markdown から Word 文書を生成するのは簡単ですが、一方で Word 文書を編集して手動の変更を元の R Markdown 文書に反映しなければならないとき、特に苦痛となるかもしれません。 幸いにも Noam Ross がこの問題に対して有望な解決策を提示しています。 redoc パッケージ (https://github.com/noamross/redoc) は Word 文書を生成し、文書を校正してから R Markdown に再度変換することを可能にします。この原稿を書いている現時点 (2020 年 6 月) では redoc パッケージはまだ試験的であり、さらに不運なことに、彼は開発を中止しています。どちらにせよこれを試して見たいなら、GitHub からインストールすることができます。

remotes::install_github("noamross/redoc")

パッケージがインストールされたら, 出力フォーマット redoc::redoc を使うと良いでしょう.

output: redoc::redoc

この出力フォーマットは実質的に元の Rmd 文書を保存している Word 文書を生成するので, Word 文書を Rmd に変換して戻すこともできます. Word 上で追跡された変更箇所は CriticMarkup 構文 (http://criticmarkup.com) で書かれたテキストへ変換されます例えば $\{++$ 重要 $++\}$ はテキストに「重要」という単語が挿入されたことを表現しています.

redoc::dedoc() 関数で redoc::redoc で生成された Word 文書を Rmd に変換できます. 例えば redoc::dedoc("file.docx") は file.Rmd を生成します. この処理では Word 上で追跡された変 更箇所を track_changes 引数でどう対処するか決めることができます. 例えば変更を受け入れる か破棄するか, 追跡された変更箇所を CriticMarkup に変換するかなどです. 追跡された変更箇所 が完全に失われてしまわないように, track_changes = 'criticmarkup' を使うことを推奨します.

Word 文書を編集する時, R Markdown のコードチャンクや行内 R コードで自動生成されていない箇所を編集すると想定されています。例えばコードチャンク内で knitr::kable()を使って自動生成された表は編集してはなりません。そのような変更は dedoc()で Word から Rmd に変換する際に失われます。コードチャンクで自動生成された出力を誤って編集することを避けるために、redoc::redoc フォーマットの highlight_outputs オプションを true に設定してください。これは自動出力を Word 上で強調表示することを意味します (背景色で強調表示します)。あなたの共同編集者には Word 文書上の強調表示された箇所に触れないよう伝えるべきでしょう。

繰り返しになりますが、**redoc** パッケージは未だ試験的であり現時点ではその機能がはっきりしないため、ここでの導入はあえて簡潔なものとしています.信用できない場合、GitHub 上のパッケージのドキュメントを読むことをお薦めします.

TODO: 動作確認

8.3 個別の要素にスタイルを設定する

Markdown のシンプルさにより, Word 文書に対してグローバルなスタイル設定を適用することができます (8.1節参照) が, ある単語の色やある段落の中央揃えなど, 個別の要素に直接スタイルを設定することはできません.

R上で Office 文書で作業するのをより簡単にするという努力を続けた結果, David Gohel は 2018 年に **officedown** パッケージ (Gohel and Ross, 2021) の開発を始めました. これは **officer** (Gohel, 2021b) パッケージの機能のいくつかを R Markdown に持ち込むのが目的です. 本書の執筆時点ではこのパッケージの初期のバージョンが CRAN で公開されていますが, まだ実験的です. CRAN あるいは GitHub どちらからインストールしてもよいでしょう.

CRAN からインストール

install.packages("officedown")

GitHub からインストール

remotes::install_github("davidgohel/officedown")

パッケージがインストールされたら, R Markdown 文書内で読み込む必要があります. 例えばこのように.

```
'``{r, setup, include=FALSE}
library(officedown)
'``
```

officedown パッケージには rdocx_document 出力フォーマットがあります. これはデフォルトでは rmarkdown::word_document を元にしており, スタイル付きの表やグラフといった機能が追加されています.

officedown パッケージは **officer** パッケージを介して特定の Word 要素にスタイルを適用することを可能にします. 例えば officer::fp_text() 関数でスタイルを作成し, 行内 R コードの

ftext() でテキストの一部にそのスタイルを適用できます.

```
title: officedown でテキストにスタイルを適用する
output:
    officedown::rdocx_document: default
---
'``{r}
library(officedown)
library(officer)
ft <- fp_text(color = 'red', bold = TRUE)
'``
# テスト
**officedown** パッケージは 'r ftext('すごい', ft)'!
```

officer の関数とは別に, **officedown** パッケージは **officer** のタスクを実現するための特殊な HTML コメントを使うことを可能にしてくれます. 例えば officer::block_pour_docx() は外部 の Word 文書を現在の文書にインポートするのに使えますし, 代わりに R Markdown 上で HTML コメントを使うこともできます.

```
<!---BLOCK_POUR_DOCX{file: 'my-file.docx'}--->
```

これはインラインRコードで以下のように書くのと等価です.

```
`r block_pour_docx(file = 'my-file.docx')`
```

officedown と officer パッケージでするとよいこととして, 他には以下のようなものがあります.

- 改ページの挿入
- 多段組みレイアウトの配置
- 段落設定の変更
- 目次の挿入

• あるセクションのページの向きを変える (縦向きか横向きか)

officedown についてより学ぶには,公式ドキュメント https://davidgohel.github.io/officedown/を確認してください.

第9章

複数の出力フォーマット

R Markdown の主な利点は 1 つのソースから複数種類の出力フォーマットを作成できることです. これは 1 つ以上の Rmd ファイルでも可能です. 例えば本書は R Markdown で書かれ, 2 種類のフォーマットでコンパイルされています. 印刷用の PDF と, オンライン版の HTML です.

コードチャンクの出力を全ての出力フォーマットに対応させるのは時には難題になることがあります。例えばたった 1 つの CSS ルール (img $\{$ border-radius: 50%; $\}$) で HTML 出力に対して円の画像を作成するのは非常に単純ですが,LaTeX 出力ではこれとそのまま同じようにはいきません。 典型的には Tikz グラフィックスに関係する問題になります。

単に出力要素が出力フォーマットの全てに対して動作しないこともあります。例えば **gifski** パッケージ (Ooms, 2018) (4.14節参照) で GIF アニメを簡単に作ることができ、これは HTML 出力では完璧に動作しますが、LaTeX 出力に埋め込んだものは追加の GIF ファイルの処理と LaTeX パッケージなしでは不可能です。

この章では複数のフォーマットで動作する例を少しだけ提示します。ある機能が特定の出力フォーマットでのみ有効なら、その出力形式に基づいて条件付きで有効・無効にする方法を提示します。

9.1 LaTeX か HTML か

LaTeX と HTML はどちらもよく使われるフォーマットです. knitr::is_latex_output() 関数は出力フォーマットが LaTeX かどうか (Pandoc 出力フォーマットの latex および beamer) を教えてくれます. 同様に knitr::is_html_output 関数は出力フォーマットが HTML かどうか教えてくれます. デフォルトでは Pandoc 出力フォーマットのうち markdown, epub, html, html4, html5, revealjs, s5, slideous, そして slidy が HTML 出力とみなされます. です. ある Pandoc 出力がHTML であると思えないなら, そのフォーマットを除外するために, 例えばこのように excludes

引数を使えます.

```
# markdown を HTML として扱わない
knitr::is_html_output(excludes = "markdown")
## [1] FALSE
```

特定の出力要素を LaTeX または HTML でのみ生成することができるのなら, これらの関数は条件 つきで生成するのに使うことができます. 例えば, PDF のページには大きすぎる表はフォントサイズを小さくした環境内に表を入れるといいでしょうが, そういった LaTeX 環境はおそらく HTML 出力では機能しませんので, HTML 出力に含めるべきでありません (HTML 出力でフォントサイズを調整したいなら, CSS を使うと良いでしょう). 以下はその例です.

```
title: tiny 環境内で表をレンダリングする
output:
  pdf_document:
    latex_engine: lualatex
  html_document: default
documentclass: ltjsarticle
```{r, setup, include=FALSE}
knitr::opts_chunk$set(echo = FALSE)
options(knitr.table.format = function() {
 if (knitr::is_latex_output()) 'latex' else 'pandoc'
})
. . .
LaTeX 環境の 'tiny' は LaTeX 出力でのみ生成されます.
```{r, include=knitr::is_latex_output()}
knitr::asis_output('\n\n\\begin{tiny}')
. . .
```{r}
knitr::kable(mtcars)
```

```
```{r, include=knitr::is_latex_output()}
knitr::asis_output('\\end{tiny}\n\n')

```

比較のため、以下に通常のフォントサイズの表を配置します.

```{r}
knitr::kable(mtcars)

```
```

上記の例でのポイントはチャンクオプション include = knitr::is\_latex\_output() です. \begin{tiny} \end{tiny} 環境は出力フォーマットが LaTeX の場合のみ含まれます. この例の 2 つの表は出力が LaTeX でない場合は同じ見た目になるでしょう.

5.1節では HTML と LaTeX 出力のテキストの色を変更する関数を使用しました. 4.14節では, アニメーションの例を提示しました. これにも今回のトリックを使うことができます. HTML 出力に対してアニメーションを生成し, LaTeX 出力に対しては静止画を生成するコードチャンクはこのようになります.

```
'``{r animation.hook=if (knitr::is_html_output()) 'gifski'}
for (i in 1:2) {
 pie(c(i %% 2, 6), col = c('red', 'yellow'), labels = NA)
}
...
```

これらの条件付き関数はどこでも使えます. 他のチャンクオプションにも使えます (例えばチャンクの評価に条件を付けるため eval に使うなど) し, あるいはこの例のように R コード内にも使えます.

TODO: conditional functions をなんと呼ぶのが良いか

```
```{r, eval=knitr::is_html_output(), echo=FALSE}
cat('これは HTML 出力でのみ見えます')
、、、
```

```
'``{r}
if (knitr::is_latex_output()) {
    knitr::asis_output('\n\n\\begin{tiny}')
}
...
```

9.2 HTML ウィジェットを表示する

HTML ウィジェット (https://htmlwidgets.org) は典型例で言えばインタラクティブな JavaScript アプリケーションで、HTML 出力でのみ動作します.HTML ウィジェットを含んだ Rmd 文書を、PDF や Word など HTML でないフォーマットへと knit するなら、このようなエラーメッセージが返ってくるかもしれません.

```
Error: Functions that produce HTML output found in document targeting X output. Please change the output type of this document to HTML. Alternatively, you can allow HTML output in non-HTML formats by adding this option to the YAML front-matter of your rmarkdown file:

always_allow_html: yes

Note however that the HTML output will not be visible in non-HTML formats.
```

上記のエラーメッセージの方法よりも良い解決法が存在しますが、追加のパッケージが絡んできます. R に **webshot** パッケージ (Chang, 2019) をインストールし、さらに PhantomJS をインストールしてください.

```
install.packages("webshot")
webshot::install_phantomjs()
```

それから HTML ウィジェットつきの Rmd 文書を非 HTML フォーマットで knit すれば, HTML ウィジェットは静的なスクリーンショットとして表示されます. スクリーンショットは **knitr** によ

って自動的に作られます. **bookdown** 本の Section 2.10^{*1} に, スクリーンショットの詳しい操作 方法が書かれています.

9.3 Web ページの埋め込み

webshot パッケージ (Chang, 2019) と PhantomJS をインストール (9.2説参照) していれば, knitr::include_url() でどんな web ページも出力文書に埋め込むことができます。コードチャンク内でこの関数に URL を与えれば, 出力フォーマットが HTML ならば <iframe> (インラインフレーム) が生成され, 他のパッケージならばスクリーンショットが埋め込まれます。例えば図9.1は, 本書のオンライン版を読んでいるなら私の個人サイトが, それ以外なら代わりに静的なスクリーンショットが現れているはずです。

```
01 knitr::include_url("https://yihui.org")
```

out.width や fig.cap といった図に関連するほとんどのチャンクオプションが knitr::include_url() でも機能します.

サーバ上で Shiny アプリを公開しているなら、これを文書に含めるために knitr::include_app() を使うことができます。これは include_url() と同じように動作します。 **bookdown** 本 (Xie, 2016) の Section 2.11^{*2} には include_app() と include_url() に関する詳細な話が書かれています。

9.4 複数の図を横並びに

fig. show="hold" と out.width option オプションを併用して複数の図を並べることができます. 以下の例では out.width="48%" を設定し、出力は図9.2になります.

```
'``{r, figures-side, fig.show="hold", out.width="48%"}
par(mar = c(4, 4, .1, .1))
plot(cars)
plot(mpg ~ hp, data = mtcars, pch = 19)
'``
```

この単純なアプローチは PDF でも HTML 出力でも動作します.

^{*1} https://bookdown.org/yihui/bookdown/html-widgets.html

^{*2} https://bookdown.org/yihui/bookdown/web-pages-and-shiny-apps.html



I'm a software engineer working at RStudio, PBC. I earned my PhD from the Department of Statistics, Iowa State University. My thesis was Dynamic Graphics and Reporting for Statistics, advised by Di Cook and Heike Hofmann. I have developed a few R packages either seriously or for fun (or both), such as knitr, animation, bookdown, blogdown, pagedown, xaringan, and tinytex. I founded a Chinese website called "Capital of Statistics" in 2006, which has grown into a large online community on statistics. I initiated the Chinese R conference in 2008. I'm a big fan of GitHub, LyX and Pandoc. I hate IE. I fall asleep when I see beamer slides, and I yell at people who use \textbf{} to write \title{}. I know I cannot eat code, so I cook almost every day to stay away from my computer for two

这是谢益辉的个人主页。2013年底我从 Ames 村办大学统计系毕业,终于解决了人生 前 30 年被问最多的问题:"你怎么还没毕 业?"目前就职于 RStudio。我支持开源,喜 欢折腾网站和代码, 是一个高度自我驱动的 人。打羽毛球爱勾对角, 打乒乓球像太极, 网 球满场子捡球, 篮球容易被撞飞, 攀岩一次, 腿软。宅, 口重, 嗜辣, 屡教不改。智商中等 偏下, 对麻将和三国杀有不可逾越的认知障 碍,实变函数课上曾被老师叫醒。略好读书, 偶尔也在网上乱翻帖子, 对诗词楹联比较感兴 趣, 目前比较中意的一联是: 千秋邈矣独留 我; 百战归来再读书。最喜欢的一首词是:

> 深情似海, 问相逢初度, 是何年 纪?依约而今还记取,不是前生夙 世。放学花前, 题诗石上, 春水园 亭里。逢君一笑,人间无此欢喜。 无奈苍狗看云, 红羊数劫, 惘惘休 提起。客气渐多真气少,汩没心灵 何已。千古声名, 百年担负, 事事 违初意。心头阁住, 儿时那种情 味。

> > © Yihui Xie 2005 - 2020



図9.2: 横に並べた図

訳注: この方法は、PDF では必ず横並びになるとは限りません. 余白にはみ出す大きさならば、自動で折り返されます. これは LaTeX 側の文書スタイルの設定にも依存し、多くの場合は欧文と和文でよく使われるレイアウトが異なることが原因です. よって、ここでは原著とは異なり画像サイズを48%と少し小さくしています.

図の内部に複数のプロットがあり, サブフィギュアを使いたいなら, 6.6説を見るとよいでしょう. しかしサブフィギュアは LaTeX に対してのみのサポートです.

9.5 生のコードを書く (*)

6.11節で紹介したテクニックは実に汎用的なものです。たどんな複雑な生のコードであっても Markdown 内で「生の」コンテンツとして指定すれば保護されます。例えば HTML を直接書いた なら、=html 属性を使用することができます。

```
```{=html}
どんな 生の HTML コンテンツでもここでは動作します.
例えば、ここにユーチューブのビデオがあります.
<iframe width="100%" height="400"
 src="https://www.youtube.com/embed/s3JldKoA0zw?rel=0"
 frameborder="0" allow="autoplay; encrypted-media"
 allowfullscreen></iframe>

```
```

属性名は Pandoc 出力の名前です. 出力フォーマット名を知りたいなら, Rmd 内で以下のコードチャンクの出力を確認すればよいでしょう.

```
'``{r}
knitr:::pandoc_to()
'``
```

生のコンテンツは特定の出力フォーマットでのみ表示されることに注意してください. 例えば生の LaTeX コンテンツは出力フォーマットが HTML の場合は無視されます.

9.6 カスタムブロック (*)

bookdown 本の 2.7 節 *3 では, どうすれば R Markdown でブロックの見た目をカスタマイズできるかを話しました。これはレポートや本の中で, 読者があなたの著作の中の要点を確実に取りせるようにコンテンツを目立たせるための, 便利な方法になりうるでしょう。これらのブロックをどう使うかの例として, 次のようなものがあります.

- あなたの分析コードを実行する前に、ユーザが最新のパッケージを使用しているか確認するための警告メッセージを表示する.
- ソースコードのある GitHub リポジトリへのリンクを文書の冒頭に追加する.
- あなたの分析から得られた要点や知見を強調する.

この節では PDF と HTML の両方でカスタムブロックを作成する方法を説明します. どちらのフォーマットでも R Markdown 上で同じ整形の構文を使用できますが, 要求される設定は異なります.

9.6.1 構文

カスタムブロックの構文は Pandoc の fenced Div blocks* 4 に基づいています。Div ブロックはと ても強力ですが 1 つだけ問題があります。これはおもに HTML 出力に対して動作し, LaTeX 出力 に対しては動作しないことです。

バージョン 1.16 以降の rmarkdown パッケージは Div ブロックを HTML と LaTeX どちらに対しても変換するようになりました. HTML 出力に対してはブロックの全ての属性が <div> タグの属性になります. 例えば Div は ID (# の後のに続くもの), 1 つまたは複数のクラス (クラス名は . の後に書かれるものです), そしてそれ以外の属性を持ちます. 以下の Div ブロック,

^{*3} https://bookdown.org/yihui/bookdown/custom-blocks.html

^{*4} https://pandoc.org/MANUAL.html#divs-and-spans

```
::: {#hello .greeting .message width="40%"}
Hello **world**!
:::
```

は以下の HTML コードに変換されます.

```
<div id="hello" class="greeting message" width="40%">
Hello <strong>world</strong>!
</div>
```

LaTeX 出力に対しては、最初のクラス名が LaTeX 環境名として使われます。また、data-latex と名付けた属性を Div ブロックに与えるべきです。これは環境に対する引数になります。環境が引数を必要としないなら、この属性は空白にすることができます。2 つの単純な例を以下にお見せします。1 つ目の例は LaTeX で verbatim 環境を使用します。これは引数を必要としません。

```
::: {.verbatim data-latex=""}
ここに _verbatim_ テキストを表示.
:::
```

LaTeX 出力はこうなります.

```
\begin{verbatim}
ここに \emph{verbatim} テキストを表示.
\end{verbatim}
```

ブロックが HTML へと変換される場合は、HTML コードはこのようになります.

```
<div class="verbatim">
ここに <em>verbatim</em> テキストを表示.
</div>
```

2つ目の例は center と minipage 環境を使い, ページ幅の半分の大きさの中央揃えしたボックス内にテキストを表示しています.

```
:::: {.center data-latex=""}
::: {.minipage data-latex="{.5\linewidth}"}
この段落は中央揃えされ、親要素の半分の幅で表示されます.
:::
```

center ブロックの中に minipage ブロックをネストしていることに注意してください. 親ブロック に子ブロックを入れるには, さらに 1 つ余分にコロンが必要です. 上記の例では center ブロックに 4 つのコロンを使用していますが, 5 個以上書くことも可能です. 2 つのブロックは以下の LaTeX コードに変換されます.

```
\begin{center}
\begin{minipage}{.5\linewidth}
この段落は中央揃えされ、親要素の半分の幅で表示されます.
\end{minipage}
\end{center}
```

HTML 出力では、ユーザーの好みで CSS によって <div> ブロックの外見を定義することもできます。LaTeX 出力の場合は、環境が未定義ならば \newenvironment を、既存の環境を再定義するならば \renewenvironment コマンドを LaTeX 上で使うと良いでしょう。LaTeX 上での定義で PDF 上でのブロックの見た目を決定できます。これらのカスタマイズは通常は style.css や preamble.tex といったファイルを内に記述子、YAML オプションで読み込みます。

```
output:
   html_document:
      css: style.css
   pdf_document:
      includes:
      in_header: preamble.tex
```

次に, CSS ルールや LaTeX 環境を使用したいくつか発展的なカスタムブロックの実例をお見せし

ます. 5.8節にさらなる使用例として, 多段組みレイアウト内で複数ブロックを並べるものがあります.

9.6.2 影付きブロックを追加する

まず, 影付きボックスの内部にコンテンツを入れる方法を紹介します. ボックスは黒の背景色とオレンジ色の枠があり, 角は丸めます. ボックス内のテキストは白色です.

HTML 出力に対しては、CSS ファイル内でそのルールを定義します。CSSにあまり詳しくないなくても、無料で見られるオンラインチュートリアルが豊富にあります。例えば https://www.w3schools.com/css/とか、TODO: 日本語の代替サイト

```
.blackbox {
01
      padding: 1em;
02
03
      background: black;
      color: white;
04
      border: 2px solid orange;
05
06
      border-radius: 10px;
07
    }
    .center {
08
      text-align: center;
09
    }
10
```

LaTeX 出力に対しては、LaTeX パッケージの **framed** を基にして blackbox という名前で黒い背景色と白い文字色の新しい環境を作成します.

```
\usepackage{color}
01
    \usepackage{framed}
02
    \setlength{\fboxsep}{.8em}
03
04
    \newenvironment{blackbox}{
05
      \definecolor{shadecolor}{rgb}{0, 0, 0} % black
06
      \color{white}
07
      \begin{shaded}}
80
09
     {\end{shaded}}
```

本書で **framed** パッケージを使うのはこれがかなり軽量だからですが,このパッケージは角の丸い枠を描画することができません. それを実現するには,影付きボックスを作るためのとても柔軟な一連のオプションを持つ,より洗練された LaTeX パッケージである **tcolorblox** (https://ctan.org/pkg/tcolorbox)が必要になります. パッケージのドキュメントからは多くの使用例を見ることができます. 以下の LaTeX 環境は上記の CSS の例と似た影付きボックスを作成できます.

```
\usepackage{tcolorbox}
\newtcolorbox{blackbox}{
  colback=black,
  colframe=orange,
  coltext=white,
  boxsep=5pt,
  arc=4pt}
```

これで PDF と HTML 出力の両方のフォーマットでカスタムボックスを使用できるようになりました. ボックスのソースコードはこのようになります.

出力は:

注意!

この**新しい注意書き**を見てくれてありがとう! あなたがこれを見ていることは監視されており, 当局に報告される!

9.6.3 アイコンを加える

カスタムボックス内に画像を含めることで,より注意を引く見た目に作ることができます.画像はブロックの内容をより効果的に伝える方法にもなりえます.次の例は,このようなディレクトリ構造で動作させるという前提です.これは本書を作成するために使ったものを簡略化したものです.

directory/

```
├--- your-report.Rmd
├--- style.css
├--- preamble.tex
└--- images/
└--- ├--- important.png
├--- note.png
└--- caution.png
```

どのように動作するか説明する前に,この例のソースコードと出力を示します.

```
    ::: {.infobox .caution data-latex="{caution}"}
    ** 注意!**
    この ** 新しい注意書き ** を見てくれてありがとう! あなたがこれを見ていることは監視されて
    ⇒ おり, 当局に報告される!
    :::
```

出力はこうなります.



注意!

この**新しい注意書き**を見てくれてありがとう! あなたがこれを見ていることは監視されており, 当局に報告される!

HTML 出力では、CSS の background-image プロパティ内にボックスの画像を追加することができます. 背景に画像を挿入し、左側に十分な幅のパディングを追加することでテキストと画像の重なりを避けます. ローカルの画像ファイルを使用するなら、ファイルパスは CSS との相対パスで与えます. これが例です.

```
.infobox {
  padding: 1em 1em 1em 4em;
  margin-bottom: 10px;
  border: 2px solid orange;
  border-radius: 10px;
  background: #f5f5f5 5px center/3em no-repeat;
}
.caution {
  background-image: url("images/caution.png");
}
```

ブロックに .infobox と .caution という 2 つのクラス名を使用していることに注意してください. infobox クラスは色付きの外枠のある影付きボックスを定義するのに使用し, caution クラスは画像を入れるために使用されています. 2 つのクラスを使用する利点は影付きボックスの設定を繰り返すことなく, いろいろなアイコンの付いたブロックを定義できるということです. warning のボックスが必要ならば, .infobox のルールを繰り返し書くことなく, 以下のように定義するだけで十分です.

```
.warning {
  background-image: url("images/warning.png");
}
```

すると以下の Markdown ソースコードで warning ボックスを作成できます.

```
:::: {.infobox .warning data-latex="warning"}

実際のコンテンツをここに表示
::::
```

PDF 出力に対しては、以前の例で定義した blackbox 環境を基に infobox 環境を作成し、ボックスの左側に画像を追加できます。 LaTeX 環境に画像を追加する方法はいくつもあります。 これはそのうちの 1 つにすぎません。 なお、これは上記の CSS で定義したスタイルを正確に再現するものではありません。

```
\newenvironment{infobox}[1]
01
      {
02
03
      \begin{itemize}
      \renewcommand{\labelitemi}{
04
        \raisebox{-.7\height}[0pt][0pt]{
05
          {\setkeys{Gin}{width=3em,keepaspectratio}
06
             \includegraphics{images/#1}}
07
        }
08
      }
09
      \setlength{\fboxsep}{1em}
10
      \begin{blackbox}
11
12
      \item
      }
13
      {
14
      \end{blackbox}
15
      \end{itemize}
16
      }
17
```

以下に, 異なるアイコンでブロックを示します. Below we show more example blocks with different icons:



注意!

この**新しい注意書き**を見てくれてありがとう! あなたがこれを見ていることは監視されており, 当局に報告される!



注意!

この**新しい注意書き**を見てくれてありがとう! あなたがこれを見ていることは監視されており, 当局に報告される!



注意!

この**新しい注意書き**を見てくれてありがとう! あなたがこれを見ていることは監視されており, 当局に報告される!



注意!

この**新しい注意書き**を見てくれてありがとう! あなたがこれを見ていることは監視されており, 当局に報告される!

代替案として, LaTeX パッケージの **awesomebox***5 を使って PDF にアイコン付きのボックスを 生成しても良いでしょう. このパッケージがあれば非常に多くのアイコンを選ぶことができます. 以下に簡単な例をお見せします. 使用可能な LaTeX 環境と引数についてはパッケージのドキュメントを参照してください.

```
title: Awesome Boxes
output:
 pdf_document:
   latex_engine: lualatex
   extra_dependencies: awesomebox
documentlass: ltjsarticle
mainfont: Noto Serif CJK JP
sansfont: Noto Sans CJK JP
"note"型のボックス:
::: {.noteblock data-latex=""}
この ** 新しい注意書き ** を見てくれてありがとう! あなたがこれを見ていることは監視されて
→ おり、あなたがこれを見ていることは監視されており、_ 当局に報告される _!
:::
このボックスの引数を生成するための R 関数 'box_args()' を定義しました.
```{r}
box_args <- function(</pre>
 vrulecolor = 'white',
 hrule = c('\\abLongLine', '\\abShortLine', ''),
```

<sup>\*5</sup> https://ctan.org/pkg/awesomebox

```
title = '', vrulewidth = '0pt',
icon = 'Bomb', iconcolor = 'black'
) {
 hrule <- match.arg(hrule)
 sprintf(
 '[%s][%s][\\textbf{%s}]{%s}{\\fa%s}{%s}',
 vrulecolor, hrule, title, vrulewidth, icon, iconcolor
)
}
...

インライン R コード内で `awesomeblock` 環境に引数を与えます.
::: {.awesomeblock data-latex="`r box_args(title = '注意!')`"}
この ** 新しい注意書き ** を見てくれてありがとう!

あなたがこれを見ていることは監視されており,_当局に報告される_!
:::
```

**訳注**: 翻訳者の開発した **rmdja** パッケージでは, デフォルトでこの節で紹介されているようなカスタムブロックが定義されており, より簡単にアイコン付きブロックを記述できます. 詳細はこのパッケージのドキュメントをご覧ください.

## 第10章

# 表

表は、レポート上で結果を伝えることができる主要な手段です。表をあなたの独自の要件に合った外見に調整したいと思うことはしばしばあるでしょう。この章では表のカスタマイズに使えるテクニックを紹介します。この章のねらいは以下のとおりです。

- 表生成関数 knitr::kable() の全ての特徴を紹介する
- **kableExtra** パッケージ (Zhu, 2020) を使用したより発展的な表のカスタマイズに焦点を 当てる
- 表を生成してくれる他のパッケージの一覧を提示する

### 10.1 knitr::kable() 関数

**knitr** パッケージの kable() 関数はとてもシンプルな表生成用の関数で,表のデザインもシンプルです. 行列やデータフレーム厳密に矩形状のデータに対してのみ表を生成します. 表のセルを細かく整形したりセルを結合したりはできません. しかしこの関数は表の外見をカスタマイズする多くの引数を持っています.

```
kable(x, format, digits = getOption("digits"), row.names = NA,
col.names = NA, align, caption = NULL, label = NULL,
format.args = list(), escape = TRUE, ...)
```

#### 10.1.1 サポートする表形式

データオブジェクト x を単純な表で表すことだけが必要ならば、ほとんどの場合、x knitr::x kable(x) で十分でしょう. format 引数は x knitr のソース文書フォーマットに従って自動的に設定されま

す. 使用可能な値は列をパイプで区切った pipe, Pandoc 式の単純な表である simple, LaTeX の表 latex, HTML の表 html, reStructuredText (rst) 形式の rst です. R Markdown 文書に対して kable() はデフォルトで pipe フォーマットを使用し, このような外見になります.

```
% knitr::kable(head(mtcars[, 1:4]), "pipe")
```

単純な表, そして HTML, LaTeX, reStructuredText での表を生成できます. You can also generate simple tables, or tables in HTML, LaTeX, and reStructuredText:

```
01 knitr::kable(head(mtcars[, 1:4]), "simple")
```

	mpg	cyl	disp	hp
Mazda RX4	21.0	6	160	110
Mazda RX4 Wag	21.0	6	160	110
Datsun 710	22.8	4	108	93
Hornet 4 Drive	21.4	6	258	110
Hornet Sportabout	18.7	8	360	175
Valiant	18.1	6	225	105

```
% knitr::kable(mtcars[1:2, 1:2], "html")
```

```
<thead>
```

```
 mpg
 cyl
</thead>
 Mazda RX4
 21
 6
 Mazda RX4 Wag
 21
 6
```

```
01 knitr::kable(head(mtcars[, 1:4]), "latex")
```

```
\begin{tabular}{||r|r|r|r}
\hline
 & mpg & cyl & disp & hp\\
\hline

Mazda RX4 & 21.0 & 6 & 160 & 110\\
\hline

Mazda RX4 Wag & 21.0 & 6 & 160 & 110\\
\hline

Datsun 710 & 22.8 & 4 & 108 & 93\\
\hline

Hornet 4 Drive & 21.4 & 6 & 258 & 110\\
\hline
```

```
Hornet Sportabout & 18.7 & 8 & 360 & 175\\
\hline

Valiant & 18.1 & 6 & 225 & 105\\
\hline
\end{tabular}
```

01 knitr::kable(head(mtcars[, 1:4]), "rst")

```
mpg cyl disp hp
mpg cyl d
```

pipe と simple のフォーマットのみが移植可能だと覚えておいてください. つまり, これらだけがいずれの出力文書フォーマットでも動作します. それ以外の表形式は特定のフォーマットに対してのみ, 例えば format = 'latex' は LaTeX 出力に対してのみの動作です. 移植性を犠牲にする代わりに, 特定の表形式を使うことでより細かい操作ができます.

特定の1つの表形式だけが必要で、それが文書のデフォルト形式でないなら、knitr.table.formatというRのグローバルオプションで一括設定できます。例えばこのように、

```
01 options(knitr.table.format = "latex")
```

このオプションには,表形式を表す文字列か NULL を返す関数を与えることもできます. NULL の場合は **knitr** は適切な表形式を自動的に決定しようとします. 例えば出力フォーマットが LaTeX の場合のみ latex を使用できます.

```
options(knitr.table.format = function() {
 if (knitr::is_latex_output())
 "latex" else "pipe"
04 })
```

#### 10.1.2 列名を変更する

データフレームの列の名前と読者に見せたいものは一致しないかもしれません. R ではデータの列名で, しばしば単語を区切るのにスペースを使わずドットやアンダースコアで代用することがあります. これはこれは表を読む上で不自然に感じるでしょう. col.names 引数で列名をを新しい名前の列に置き換えることができます. 例えば iris データの列名のドットをスペースに置換します.

```
iris2 <- head(iris)
knitr::kable(iris2, col.names = gsub("[.]", " ", names(iris)))</pre>
```

Sepal Length	Sepal Width	Petal Length	Petal Width	Species
5.1	3.5	1.4	0.2	setosa
4.9	3.0	1.4	0.2	setosa
4.7	3.2	1.3	0.2	setosa
4.6	3.1	1.5	0.2	setosa
5.0	3.6	1.4	0.2	setosa
5.4	3.9	1.7	0.4	setosa

col.names 引数には必ずしも gsub() ような関数で列を与える必要はなく, 元のデータオブジェクトの列数と同じ長さであれば, 好きな文字列ベクトルを与えることができます. 例えば以下のように.

```
01 knitr::kable(
02 iris,
03 col.names = c('ここ', 'には', '5つの', '名前が', '必要')
04)
```

表10.1: 表のキャプションの例

Sepal.Length	Sepal.Width	Petal.Length	Petal.Width	Species
5.1	3.5	1.4	0.2	setosa
4.9	3.0	1.4	0.2	setosa
4.7	3.2	1.3	0.2	setosa
4.6	3.1	1.5	0.2	setosa
5.0	3.6	1.4	0.2	setosa
5.4	3.9	1.7	0.4	setosa

#### 10.1.3 列のアラインメントを指定する

表の各列のアラインメントを変更するには, 左揃え 1, 中央揃え c, 右揃え r のどれかと一致する 1 文字のベクトルまたは, 1 つの文字列で指定できます. よって kable(..., align = c(c, l)) に省略できます. デフォルトでは, 数値列は右揃えで, それ以外は 左揃えになります. これが使用例です.

#### 01 # 左,中央,中央,中央,右,右揃え

knitr::kable(iris2, align = "lccrr")

Sepal.Length	Sepal.Width	Petal.Length	Petal.Width	Species
5.1	3.5	1.4	0.2	setosa
4.9	3.0	1.4	0.2	setosa
4.7	3.2	1.3	0.2	setosa
4.6	3.1	1.5	0.2	setosa
5.0	3.6	1.4	0.2	setosa
5.4	3.9	1.7	0.4	setosa

#### 10.1.4 表にキャプションを追加する

01

caption 引数で表にキャプションを追加できます. 以下が例です (表10.1参照).

knitr::kable(iris2, caption = "表のキャプションの例")

4.7節で言及したように、出力フォーマットが bookdown パッケージ由来のものであれば、キャプ

ションのある表を相互参照することができます.

#### 10.1.5 数値列を整形する

小数点以下の最大表示桁数を digits 引数で指定できます. 値は round() 関数に与えられるものと同じです. それ以外の整形用の引数は base R の format() 関数に与えられるものを format.args に与えられます. まず round() や format() を使ったいくつかの簡単な例をお見せすれば, この後の kable() 引数がどう動作するか理解できることでしょう.

```
01
 round(1.234567, 0)
 ## [1] 1
02
 round(1.234567, digits = 1)
03
04
 ## [1] 1.2
 round(1.234567, digits = 3)
05
 ## [1] 1.235
06
 format(1000, scientific = TRUE)
07
 ## [1] "1e+03"
80
 format(10000.123, big.mark = ",")
09
 ## [1] "10,000"
10
```

それでは表の数値を丸め整形します.

```
01 d <- cbind(X1 = runif(3), X2 = 10^c(3, 5, 7), X3 = rnorm(3, 0, 1000))
03 # 最大で 4 桁表示
04 knitr::kable(d, digits = 4)
```

X1	X2	Х3
0.1259	1e+03	472.4048
0.8449	1e+05	-300.5133
0.2253	1e+07	-1608.1977

```
列ごとにそれぞれ丸める
knitr::kable(d, digits = c(5, 0, 2))
```

X1	X2	Х3
0.12588	1e+03	472.40
0.84494	1e+05	-300.51
0.22533	1e+07	-1608.20

#### 01 # 指数表記を使わせない

02 knitr::kable(d, digits = 3, format.args = list(scientific = FALSE))

X1	X2	Х3
0.126	1000	472.405
0.845	100000	-300.513
0.225	10000000	-1608.198

#### 01 # 大きな数に対してカンマ区切りする

02 knitr::kable(d, digits = 3, format.args = list(big.mark = ",",

03 scientific = FALSE))

X1	X2	Х3
0.126	1,000	472.405
0.845	100,000	-300.513
0.225	10,000,000	-1,608.198

#### 10.1.6 欠損値を表示する

デフォルトでは欠損値 (NA) は表の上で NA という文字で表示されます. これを R のグローバルオプション knitr.kable.NA で他の値に置き換えたり何も表示させない, つまり NA を空白にする, といったことができます. 例えば以下の 2 つ目の表では NA を空白に置き換え, 3 つ目の表で \*\* で表示しています.

```
01 d[rbind(c(1, 1), c(2, 3), c(3, 2))] \leftarrow NA
```

02 knitr::kable(d) # デフォルトでは NA は表示される

X1	X2	Х3
NA	1e+03	472.4
0.8449	1e+05	NA
0.2253	NA	-1608.2

```
01 # NA を空白に置き換え
```

02 opts <- options(knitr.kable.NA = "")</pre>

03 knitr::kable(d)

X1	X2	Х3
	1e+03	472.4
0.8449	1e+05	
0.2253		-1608.2

01 options(knitr.kable.NA = "\*\*")

02 knitr::kable(d)

	X1	X2	Х3
	**	1e+03	472.4
	0.8449	1e+05	**
•	0.2253	**	-1608.2

options(opts) # グローバルオプションを元に戻す

#### 10.1.7 特殊文字をエスケープする

あなたがもし HTML や LaTeX に詳しいなら、これらの言語にいくつかの特殊文字があることを知っているでしょう。安全に出力するために、kable() はデフォルトでは escape = TRUE 引数によって特殊文字をエスケープし、これは全ての文字がそのまま表示され、特殊文字はその特別な意味を失います。例えば > は HTML の表に対しては &gt; に置き換えられ、LaTeX の表に対しては L は L としてエスケープされます。あなたが専門家で、特殊文字を適切に扱う方法を知っているなら、escape = FALSE 引数によってこれを無効化すると良いでしょう。以下の L 2 つ目の表では、特殊文字である L 2 へを含む L 2 の数式表現を与えています。

```
01 m <- lm(dist ~ speed, data = cars)</pre>
```

02 d <- coef(summary(m))</pre>

03 knitr::kable(d)

	Estimate	Std. Error	t value	Pr(> t )
(Intercept)	-17.579	6.7584	-2.601	0.0123
speed	3.932	0.4155	9.464	0.0000

#### 01 # 行と列の名前に数式表現を与える

- 02 rownames(d) <- c("\$\\beta\_0\$", "\$\\beta\_1\$")</pre>
- 03 colnames(d)[4] <- "P(T > |t|)"
- 04 knitr::kable(d, escape = FALSE)

	Estimate	Std. Error	t value	P(T >  t )
$\beta_0$	-17.579	6.7584	-2.601	0.0123
$\beta_1$	3.932	0.4155	9.464	0.0000

escape = FALSE なしでは特殊文字はエスケープされるか置き換えられます. 例えば \$ は \$ に, \$ は \$ に, \$ は \$ に, \$ は \$ にエスケープされます.

```
01 knitr::kable(d, format = "latex", escape = TRUE)
```

```
\begin{tabular}{1|r|r|r|r}
```

\hline

& Estimate & Std. Error & t value & \\$P(T > |t|)\\$\\

\hline

\\$\textbackslash{}beta\\_0\\$ & -17.579 & 6.7584 & -2.601 & 0.0123\\

\hline

\\$\textbackslash{}beta\\_1\\$ & 3.932 & 0.4155 & 9.464 & 0.0000\\

\hline

**\end**{tabular}

LaTeX で他によく知られた特殊文字として、#, %, &, {,} があります. HTML のよく知られた特殊文字は &, <, > そして " です. escape = FALSE で表を生成する際には注意深くなり、正しい方法で特殊文字を使うよう確認する必要があります. とてもよくある失敗として、LaTeX で escape = FALSE を使いつつ、% や \_ が特殊文字であると気づかずに表の列名やキャプションに含んでしまうというものがあります.

特殊文字のエスケープの方法を正しく知っている自信がないなら **knitr** には 2 つのヘルパー内部 関数があります. 以下はその例です.

表10.2: 横に並べられた2つの表

speed	dist		mpg	cyl	disp
4	2	Mazda RX4	21.0	6	160
4	10	Mazda RX4 Wag	21.0	6	160
7	4	Datsun 710	22.8	4	108
		Hornet 4 Drive	21.4	6	258
		Hornet Sportabout	18.7	8	360

### 10.1.8 複数の表を横に並べる

複数の表を並べて生成すために, データフレームや行列のリストを kable() に与えることができます. 例えば表10.2は以下のコードから生成された 2 つの表を含んでいます.

```
01 d1 <- head(cars, 3)
02 d2 <- head(mtcars[, 1:3], 5)
03 knitr::kable(
04 list(d1, d2),
05 caption = '横に並べられた2つの表',
06 booktabs = TRUE, valign = 't'
07)
```

この機能は HTML と PDF 出力でのみ機能することに注意してください.

表を横に並べて個別の表をカスタマイズできるようになりたいと考えているなら, kables() 関数

表10.3: knitr::kables() によって作成された2つの表.

速さ	距離		mpg	cyl	disp
4	2	Mazda RX4	21	6	160
4	10	Mazda RX4 Wag	21	6	160
7	4	Datsun 710	23	4	108
		Hornet 4 Drive	21	6	258
		Hornet Sportabout	19	8	360

(つまり, kable() の複数形を意味しています) を使い, kable() オブジェクトのリストを与えると良いでしょう. 例えば, 表10.3の左の表の列名を変更し, かつ右の表の表示桁数をゼロに変更します.

```
データオブジェクト d1, d2 は以前のコードチャンクのもの
01
 knitr::kables(
02
 list(
03
 # 第1の kable() は列名を変更する
04
 knitr::kable(
05
 d1, col.names = c('速さ', '距離'), valign = 't'
06
07
),
 # 第2の kable() は表示桁数を設定する
08
 knitr::kable(d2, digits = 0, valign = 't')
09
10
),
 caption = 'knitr::kables() によって作成された2つの表.'
11
)
12
```

### 10.1.9 for ループから複数の表を作成する (\*)

kable() に関してよく混乱することの 1 つは, for ループ内では動作しないということです. この問題は kable() に限らず他のパッケージにも存在します. 原因は少々複雑です. 技術的な話に関心があるなら, "The Ghost Printer behind Top-level R Expressions."  $^{*1}$  というブログ記事で解説されています.

以下のコードチャンクは3つの表を生成する,とあなたは予想するかもしれませんが,そうはなりません.

<sup>\*1</sup> https://yihui.org/en/2017/06/top-level-r-expressions/

```
'``{r}
for (i in 1:3) {
 knitr::kable(head(iris))
}
...
```

明示的に kable() の結果をプリントし, チャンクオプション results = 'asis' を適用しなければ なりません. 例えばこのように.

```
'``{r, results='asis'}
for (i in 1:3) {
 print(knitr::kable(head(iris)))
}
...
```

一般に, for ループ内で出力を生成するときは, 出力する要素をそれぞれ区別するためにそれぞれの直後に改行コード (\n) または HTML のコメント行 (<!-- -->) を加えることをおすすめします. これが例です.

```
'``{r, results='asis'}
for (i in 1:3) {
 print(knitr::kable(head(iris), caption = 'A caption.'))
 cat('\n\n<!-- -->\n\n')
}
'``
```

セパレータがないと Pandoc は個別の要素を検出するのに失敗します. 例えばグラフのすぐ後に表を続けて書いたとき, 表が認識されなくなります.

```


mpg cyl disp hp

Mazda RX4 21.0 6 160 110

Mazda RX4 Wag 21.0 6 160 110
```

しかし明示的に分離した場合はこうなります. 以下では画像の直後に空白行を挟んでいます.

```


mpg cyl disp hp

Mazda RX4 21.0 6 160 110

Mazda RX4 Wag 21.0 6 160 110
```

あるいはこのように.

```

<!--->

mpg cyl disp hp

Mazda RX4 21.0 6 160 110

Mazda RX4 Wag 21.0 6 160 110
```

### 10.1.10 LaTeX の表をカスタマイズする (\*)

必要なのが LaTeX の出力のみなら, さらにいくつか kable() のオプションがあります. これらは HTML 等, 他の種類のフォーマットでは無視されることに注意してください. 表のフォーマットオプションをグローバルに設定 (10.1.1節参照) していない限り, この節の例では kable() の format 引数を明示的に使わなければなりません.

```
knitr::kable(iris2, format = "latex", booktabs = TRUE)
```

表のキャプションを設定 (10.1.4節参照) している場合, kable() は表を table 環境で囲みます. つまりこうなります.

```
\begin{table}
% the table body (usually the tabular environment)
\end{table}
```

You can change this environment via the table.envir argument, e.g.,

```
% knitr::kable(cars[1:2,], format = "latex", table.envir = "figure")
```

```
\begin{figure}
\begin{tabular}{r|r}
\hline
speed & dist\\
\hline
4 & 2\\
\hline
4 & 10\\
\hline
\end{tabular}
\end{figure}
```

表のフロート位置は position 引数によって制御されます. 例えば position = "!b" によって表のフロートをページ下部に置くことを強制できます.

```
knitr::kable(cars[1:2,], format = "latex", table.envir = "table",
position = "!b")
```

```
\begin{table}[!b]
\begin{tabular}{r|r}
\hline
speed & dist\\
\hline
4 & 2\\
\hline
4 & 10\\
\hline
\end{tabular}
```

#### **\end**{table}

表にキャプションがある場合, caption. short 引数でこの例のようにキャプションの短縮形を与えることもできます.

```
81 knitr::kable(iris2, caption = "長い長いキャプション",
82 caption.short = "短いキャプション")
```

キャプションの短縮形は LaTeX 上では \caption[]{} コマンドのブラケット ([]) 内に与えられ, ほとんどの場合は出力された PDF の表一覧で使用されます. 短縮形がない場合は, キャプション全文が表示されます.

出版物レベルのクオリティの作表のための LaTeX パッケージの **booktabs**\* $^2$  に詳しいなら、この例のように booktabs = TRUE を設定できます.

```
01 iris3 <- head(iris, 10)
```

knitr::kable(iris3, format = "latex", booktabs = TRUE)

Sepal.Length	Sepal.Width	Petal.Length	Petal.Width	Species
5.1	3.5	1.4	0.2	setosa
4.9	3.0	1.4	0.2	setosa
4.7	3.2	1.3	0.2	setosa
4.6	3.1	1.5	0.2	setosa
5.0	3.6	1.4	0.2	setosa
5.4	3.9	1.7	0.4	setosa
4.6	3.4	1.4	0.3	setosa
5.0	3.4	1.5	0.2	setosa
4.4	2.9	1.4	0.2	setosa
4.9	3.1	1.5	0.1	setosa

R Markdown で **booktabs** のような LaTeX パッケージが追加で必要なら, YAML で宣言しなければならないことを忘れないでください (やり方は6.4節参照).

引数 booktabs が TRUE か FALSE (デフォルト) であるかに依存して表の外見は変わります. booktabs

<sup>\*2</sup> https://ctan.org/pkg/booktabs

#### = FALSE なら

- 表の列が垂直線で区切られます. vline 引数を使って垂直線を削除することができます. 例えば knitr::kable(iris, vline = "") と言うふうにします. デフォルトは vline = "|"です. このオプションをグローバルに設定することもでき, 表ごとに指定する必要はありません. 例えば options(knitr.table.vline = "")とします.
- 水平線を toprule, midrule, linesep, bottomrule 引数で定義できます. これらのデフォルト値は \hline です.

#### booktabs = TRUE の場合は

- 表に垂線はありませんが、vline 引数で追加することができます.
- テーブルのヘッダと末尾にのみ水平線が描かれます. デフォルトの引数の値は toprule = "\\toprule", midrule = "\\midrule", bottomrule = "\\bottomrule" です. デフォルトでは1行分の空きが5行ごとに挿入されます. これは linesep 引数で制御でき, このデフォルトは c("", "", "", "\\addlinespace") となっています. 3行ごとに空白を与えたいなら, このようにできます.

Sepal.Length	Sepal.Width	Petal.Length	Petal.Width	Species
5.1	3.5	1.4	0.2	setosa
4.9	3.0	1.4	0.2	setosa
4.7	3.2	1.3	0.2	setosa
4.6	3.1	1.5	0.2	setosa
5.0	3.6	1.4	0.2	setosa
5.4	3.9	1.7	0.4	setosa
4.6	3.4	1.4	0.3	setosa
5.0	3.4	1.5	0.2	setosa
4.4	2.9	1.4	0.2	setosa
4.9	3.1	1.5	0.1	setosa

行空けを完全に削除したいなら, linesep = '' とするとよいでしょう.

表がページよりも長くなってしまうもともあるでしょう. そのような場合は longtable = TRUE を

使用しできます. このオプションは LaTeX パッケージ **longtable**\* $^3$  を使い表を複数ページに分割します.

table 環境に含まれた場合, つまり表にキャプションを設定した場合は表はデフォルトで中央揃えになります. 表を中央揃えにしたくないなら, centering = FALSE 引数を使用してください.

### 10.1.11 HTML の表をカスタマイズする (\*)

knitr::kable(format = "html") で生成した表をカスタマイズしたいなら, 前節で紹介した共通の引数の他, 1 つだけ table.attr という引数があります. この引数で任意の属性を タグに追加することができます. 例えばこのように.

```
knitr::kable(mtcars[1:2, 1:2], table.attr = "class=\"striped\"",
format = "html")
```

```
<thead>

 mpg
 cyl
</thead>
 Mazda RX4
 21
 6
 Mazda RX4 Wag
 21
 6
```

 $<sup>^{*3}</sup>$  https://ctan.org/pkg/longtable

表に striped クラスを追加しています. しかしクラス名だけでは表の外見を変更するのに不十分です. クラスに対して CSS ルールを定義しなければなりません. 例えば偶数列と気数列で色の異なるストライプ背景の表を作るには, 明灰色の背景を偶数または気数列に追加できます.

```
.striped tr:nth-child(even) { background: #eee; }
```

上記の CSS ルールは, striped クラスを持つ要素の子要素の全ての偶数行 (:nth-child(even)) 全て, つまり タグに対して, 偶数行が背景色 #eee になることを意味します.

少しの CSS の記述だけでプレーンの HTML の表の見栄えをよくできます. 図10.1は, 以下の CSS ルールを適用した HTML 表のスクリーンショットです A little bit of CSS can make a plain HTML table look decent. Figure 10.1 is a screenshot of an HTML table to which the following CSS rules are applied:

```
table {
 margin: auto;
 border-top: 1px solid #666;
 border-bottom: 1px solid #666;
}
table thead th { border-bottom: 1px solid #ddd; }
th, td { padding: 5px; }
thead, tfoot, tr:nth-child(even) { background: #eee; }
```

# 10.2 kableExtra パッケージ

**kableExtra** package (Zhu, 2020)は knitr::kable() (10.1節参照) を使用して作成した表の基本機能を拡張するために設計されました. knitr::kable() はシンプルな設計なので (これは Yihui が怠け者であるという意味として読み流してください), 他のパッケージで見られるような機能の多くが決定的に失われてしまっています. そして **kableExtra** はこのギャップを完全に埋めてくれます. **kableExtra** について最も驚異することは,表のほとんどの機能,例えば,図10.1のようなストライプ背景の表をつくるなどが HTML でも PDF でも動作することです.

Sepal.Length	Sepal.Width	Petal.Length	Petal.Width	Species
5.1	3.5	1.4	0.2	setosa
4.9	3.0	1.4	0.2	setosa
4.7	3.2	1.3	0.2	setosa
4.6	3.1	1.5	0.2	setosa
5.0	3.6	1.4	0.2	setosa
5.4	3.9	1.7	0.4	setosa

図10.1: HTML と CSS で作成したストライプ背景の表

このパッケージはいつものように CRAN からインストールできますし, GitHub (https://github.com/haozhu233/kableExtra) から開発版をインストールしてもよいでしょう.

```
install from CRAN
install.packages("kableExtra")

install the development version
remotes::install_github("haozhu233/kableExtra")
```

発展的なドキュメントが https://haozhu233.github.io/kableExtra/ にあり, kable() の出力を HTML や LaTeX 出力でどうカスタマイズするかについて多くの使用例が掲載されています. 我々としてはご自分でドキュメントを読むことをおすすめし, ここでは一部の例だけを提示します.

**kableExtra** パッケージはパイプ演算子 %>% を前面に出しています. kable() の出力に **kableExtra** のスタイル関数を接続することができます. 例えばこのように.

```
01 library(knitr)
02 library(kableExtra)
03 kable(iris) %>%
04 kable_styling(latex_options = "striped")
```

### 10.2.1 フォントサイズを設定する

**kableExtra** パッケージの kable\_styling() 関数によってテーブル全体のスタイルを設定できます. 例えばページ上での表のアラインメント, 幅, フォントサイズなどです. 以下は小さいフォントサイズを使う例です.

```
kable(head(iris, 5), booktabs = TRUE) %>%
kable_styling(font_size = 8)
```

Sepal.Length	Sepal.Width	Petal.Length	Petal.Width	Species
5.1	3.5	1.4	0.2	setosa
4.9	3.0	1.4	0.2	setosa
4.7	3.2	1.3	0.2	setosa
4.6	3.1	1.5	0.2	setosa
5.0	3.6	1.4	0.2	setosa

### 10.2.2 特定の行・列のスタイルを設定する

関数  $row\_spec()$  と  $column\_spec()$  はそれぞれ個別の行と列のスタイル設定に使うことができます. 以下の例では第 1 行をボールドイタリックにし, 第 2, 第 3 行を黒色背景と白色文字にし, 第 4 行にアンダーラインを引きタイプフェースを変更し, 第 5 行を回転させ, そして第 5 列に打ち消し線を引きます.

```
kable(head(iris, 5), align = 'c', booktabs = TRUE) %>%
row_spec(1, bold = TRUE, italic = TRUE) %>%
row_spec(2:3, color = 'white', background = 'black') %>%
row_spec(4, underline = TRUE, monospace = TRUE) %>%
row_spec(5, angle = 45) %>%
column_spec(5, strikeout = TRUE)
```

Sepal.Length	Sepal.Width	Petal.Length	Petal.Width	Species
5.1	<i>3.</i> 5	1.4	0.2	setosa
4.9	3.0	1.4	0.2	setosa
4.7	3.2	1.3	0.2	setosa
4.6	<u>3.1</u>	<u>1.5</u>	0.2	<u>setosa</u>
69.°	3.60	~.\ <u>\</u>	0,7	seiosa

同様に, cell\_spec() 関数で個別のセルにスタイル設定できます.

# 10.2.3 行・列をグループ化する

行や列をそれぞれ、pack\_rows()と add\_header\_above() 関数でまとめることができます. collapse\_rows() 関数で行を崩し、セルを複数行にまたがらせることができます. 以下は行をグループ化したカスタムテーブルヘッダの例です.

```
1 iris2 <- iris[1:5, c(1, 3, 2, 4, 5)]
10 names(iris2) <- gsub('[.].+', '', names(iris2))
10 kable(iris2, booktabs = TRUE) %>%
10 add_header_above(c("長さ" = 2, "幅" = 2, " " = 1)) %>%
10 add_header_above(c("Measurements" = 4, "More attributes" = 1))
```

	Measur	More attributes		
長	さ	悼	i i	
Sepal	Petal	tal Sepal l		Species
5.1	1.4	3.5	0.2	setosa
4.9	1.4	3.0	0.2	setosa
4.7	1.3	3.2	0.2	setosa
4.6	1.5	3.1	0.2	setosa
5.0	1.4	3.6	0.2	setosa

add\_header\_above() 内の名前付きベクトルに対して、名前がテーブルヘッダにテキストとして表示され、整数値のベクトルが対応する名前の列の長さを表します。 例えば "Length" = 2 が Length が 2 列にまたがることを意味します。

以下は pack\_rows() の例です. index 引数の意味は既に説明した add\_header\_above() の引数と似

ています.

```
01 iris3 <- iris[c(1:2, 51:54, 101:103),]
02 kable(iris3[, 1:4], booktabs = TRUE) %>% pack_rows(
03 index = c("setosa" = 2, "versicolor" = 4, "virginica" = 3)
04)
```

	Sepal.Length	epal.Length Sepal.Width Pet		Petal.Width
setosa				
1	5.1	3.5	1.4	0.2
2	4.9	3.0	1.4	0.2
versico	olor			
51	7.0	3.2	4.7	1.4
52	6.4	3.2	4.5	1.5
53	6.9	3.1	4.9	1.5
54	5.5	2.3	4.0	1.3
virgini	ca			
101	6.3	3.3	6.0	2.5
102	5.8	2.7	5.1	1.9
103	7.1	3.0	5.9	2.1

### 10.2.4 LaTeX で表を縮小する

HTML や LaTeX 出力特有の機能もいくつかあります. 例えば横向きページは LaTeX でのみ意味をなすので, **kableExtra** の landscape() 関数は LaTeX でのみ機能します. 以下はページに合わせて表を縮小する例です. 縮小しなければ横に長すぎる表になります.

```
01 tab <- kable(tail(mtcars, 5), booktabs = TRUE)
02 tab # 長すぎる元の表
```

	mpg	cyl	disp	hp	drat	wt	qsec	vs	am	gear	carb
Lotus Europa	30.4	4	95.1	113	3.77	1.513	16.9	1	1	5	2
Ford Pantera L	15.8	8	351.0	264	4.22	3.170	14.5	0	1	5	4
Ferrari Dino	19.7	6	145.0	175	3.62	2.770	15.5	0	1	5	6
Maserati Bora	15.0	8	301.0	335	3.54	3.570	14.6	0	1	5	8
Volvo 142E	21.4	4	121.0	109	4.11	2.780	18.6	1	1	4	2

tab %>%

01

02

kable\_styling(latex\_options = "scale\_down")

	mpg	cyl	disp	hp	drat	wt	qsec	vs	am	gear	carb
Lotus Europa	30.4	4	95.1	113	3.77	1.513	16.9	1	1	5	2
Ford Pantera L	15.8	8	351.0	264	4.22	3.170	14.5	0	1	5	4
Ferrari Dino	19.7	6	145.0	175	3.62	2.770	15.5	0	1	5	6
Maserati Bora	15.0	8	301.0	335	3.54	3.570	14.6	0	1	5	8
Volvo 142E	21.4	4	121.0	109	4.11	2.780	18.6	1	1	4	2

HTML 版をご覧なら、上の2つの表に違いが見られないでしょう.

### 10.3 その他の表作成パッケージ

多くの作表用 R パッケージがあります. kable() (10.1節) と **kableExtra** (10.2節) を紹介した) 主な理由は他のパッケージより良いからではなく, 私がこれらにのみ詳しかったからです.\*<sup>4</sup> 存在 は知っていますがあまり詳しくないパッケージを次に列挙します.\*<sup>5</sup> ご自分で確認し, 目的に最も 合っているものを決めることができます.

• **flextable** (Gohel, 2021a) と **huxtable** (Hugh-Jones, 2020): 幅広い種類の出力フォーマットをサポートするパッケージを探しているなら, **flextable** と **huxtable** が最善の 2 つの選択です. HTML, LaTeX. そして Office フォーマットを全てサポートし, よく使われる表の機能 (例えば条件付き書式とか) のほとんどをサポートしています. **flextable** の詳細は https://davidgohel.github.io/flextable/で, **huxtable** のドキュメントは

<sup>\*4</sup> 平たく言うと, 自分では表を全く使いませんから, 洗練された表を作る方法を学ぶ強いモチベーションがありませんでした.

<sup>\*&</sup>lt;sup>5</sup> **訳注**: これらの差異について, 翻訳者も自信の作成したドキュメントでいくらか言及しています https://gedevan-aleksizde.github.io/rmdja/advanced-tabulate.html

https://hughjonesd.github.io/huxtable/で見られます.

- **gt** (Richard Iannone Cheng, and Schloerke, 2020): 表のヘッダ, (題名・副題), 列の ラベル, 表の本体, 行グループのラベル, 表のフッタといった異なる表のパーツをまとめ て表を構成することができます. 数字のフォーマットを指定したり, セルの背景色に影をつけたりもできます. 現在は **gt** は主に HTML 出力をサポートしています.\*6 詳細は https://gt.rstudio.com で見られます.
- **formattable** (Ren and Russell, 2021): percent(), accounting() といった数値を整形 するものや, テキストの書式, 背景色やカラーバー, アイコンの追加などで数値を強調するなど, 表の列のスタイルを設定する関数を提供してくれます. **gt** のように, このパッケージも主に HTML フォーマットをサポートしています. 詳細は GitHub プロジェクトの https://github.com/renkun-ken/formattable で見ることができます.
- **DT** (Xie Cheng, and Tan, 2021): 作者なのでこのパッケージには精通していると思っていますが, HTML フォーマットのみサポートしているため, 独立した節を設けて紹介したりはしません. **DT** は JavaScript ライブラリの **DataTables** を下地に構築されたもので, HTML ページ上で静的な表をインタラクティブな表に変えることができます. 表をソートしたり, 検索したり, ページ移動したりできるでしょう. **DT** はセルの整形もサポートしており, インタラクティブなアプリケーションの構築のため Shiny と連携して動作し, 多くの**DaataTables** の拡張を導入します. 例えばエクセルへのエクスポート, 列の並び替えなどです. 詳細はパッケージのリポジトリ https://github.com/rstudio/DT を見てください.
- **reactable** (Lin, 2020): **DT** と同様にこのパッケージは JavaScript ライブラリを元にしてインタラクティブな表を作成します. 平たく言うと, 私が見る限り, 行のグループ化やHTML ウィジェットの埋め込み機能などいくつかの観点で **DT** より優れているようです. もし **reactable** が 2015 年時点で存在していれば, 私は **DT** を開発していなかったと思います. よってあなたはこのパッケージのドキュメントを読み, どちらが目的に合ったものかを知るとよいでしょう. https://glin.github.io/reactable/
- **rhandsontable** (Owen, 2018): これも **DT** と似ており, そして表上でデータを直接編集 できるなど Excel っぽさがあります. 詳しく学ぶには https://jrowen.github.io/rhand sontable/ を見てください.
- **pixiedust** (Nutter, 2021): **broom** パッケージ (Robinson Hayes, and Couch, 2021) を介して統計モデル (線形モデルとか) 向けの表を作るのが特徴です. Markdown, HTML, LaTeX 出力フォーマットをサポートしています. リポジトリは https://github.com/nutte

<sup>\*&</sup>lt;sup>6</sup> LaTeX や Word といった他の出力フォーマットへのサポートが必要ならば, **gtsummary** パッケージ (Sjoberg Curry, et al., 2021) はとても有望な **gt** を下地に拡張しています. https://github.com/ddsjoberg/gtsummary

rb/pixiedust です.

- **stargazer** (Hlavac, 2018): 回帰モデルと要約統計量の表を整形するのが特徴です. このパッケージは CRAN の https://cran.r-project.org/package=stargazer にあります.
- **xtable** (Dahl Scott, et al., 2019): おそらく最古の作表パッケージです. 最初のリリースは 2000 年になります. LaTeX と HTML フォーマットの両方をサポートしています. パッケージは CRAN の https://cran.r-project.org/package=xtable にあります.

その他のパッケージは紹介しませんが, 名前だけ挙げておきます. **tables** (Murdoch, 2020), **pander** (Daróczi and Tsegelskyi, 2018), **tangram** (Garbett, 2020), **ztable** (Moon, 2020), **condformat** (Oller Moreno, 2020) があります.

# 第11章

# チャンクオプション

図2.1が表すように, **knitr** パッケージは R Markdown においてきわめて重要な役割を持ちます. この章と次の 3 つの章では **knitr** に関連するレシピをお見せします.

R のチャンクを処理する際には, **knitr** の挙動を微調整するのに 50 のチャンクオプションが使われる可能性があります. 完全なリストは https://yihui.org/knitr/options/ のオンラインドキュメントをご覧ください.\*<sup>1</sup> 利便性のため, 本書の付録 $^{A}$ としてこのドキュメントのコピーを掲載しました.

続く各節では、チャンクオプションを個別のコードチャンクに適用する例のみを示します。ただし、どのチャンクオプションもグローバル設定で文書全体に適用できるので、コードチャンク1つ1つに繰り返しオプションを書かなくても良いという事実を覚えてください。グローバルにチャンクオプションを設定するには、いずれかのコードチャンクで knitr::opts\_chunk\$set() を呼び出してください。たいていは文書の中で最初のチャンクオプションです。例えばこのように

```
'``{r, include=FALSE}
knitr::opts_chunk$set(
 comment = "#>", echo = FALSE, fig.width = 6
)
...
```

<sup>\*&</sup>lt;sup>1</sup> 訳注: 翻訳者に寄る日本語訳はこちら: https://gedevan-aleksizde.github.io/knitr-doc-ja/options.html

# 11.1 チャンクオプションに変数を使う

大抵の場合, 例えば fig.width = 6 のようにチャンクオプションは定数をとりますが, 簡単であるか複雑であるかに関わらず, 任意の R コードを与えることもできます. 単純なケースはチャンクオプションに通せる変数です. 変数もまた R コードであることに注意してください. 例えば文書の冒頭で変数として図の幅を定義して, その後の他のコードチャンクで使うことができるので, それ以降の幅を簡単に変更できます.

```
"``{r}
my_width <- 7
"``
"``{r, fig.width=my_width}
plot(cars)
"``</pre>
```

以下はチャンクオプショで if-else 文を使う例です.

```
'``{r}
fig_small <- FALSE # 大きい図に対しては TRUE に変更
width_small <- 4
width_large <- 8
'``
'``{r, fig.width=if (fig_small) width_small else width_large}
plot(cars)
'``</pre>
```

さらに以下にもう 1 つの例として、必要なパッケージが使用可能な場合のみコードチャンクを評価する (つまり実行する) ものを示します.

```
'``{r, eval=require('leaflet')}
library(leaflet)
leaflet() %>% addTiles()
```

. . .

意図が分からない方のために説明しますと, require('package') はパッケージが使用可能なら TRUE を返し, そうでないなら FALSE を返します.

### 11.2 エラーが起こっても中止しない

時として, 例えば R のチュートリアルのために, わざとエラーを見せたいこともあるかもしれません. デフォルトでは, Rmd 文書のコードチャンクでのエラーは R の処理を停止させます. R の処理を停めることなくエラーを見せたいなら, 例えばこのように error = TRUE チャンクオプションを使うと良いでしょう.

```
```{r, error=TRUE}
1 + "a"
...
```

Rmd 文書をコンパイルすると、出力文書上でのエラーメッセージはこのような見た目になります.

Error in 1 + "a": 二項演算子の引数が数値ではありません

R Markdown では error = FALSE がデフォルトであり, これはコードチャンクの実行時のエラーは処理を停止させます.

11.3 同じグラフを複数の出力フォーマットに

ほとんどの場合, 1 つの図に対して png や pdf といった 1 つの画像フォーマットにしたいでしょう. 画像フォーマットはチャンクオプション dev で操作できます. つまり, グラフをレンダリング するグラフィックデバイスを意味します. このオプションはデバイス名のベクトルをとることができます. これが例です.

```
'``{r, dev=c('png', 'pdf', 'svg', 'tiff')}
plot(cars)
...
```

出力文書には最初のフォーマットのみが使われますが,残りのフォーマットに対応する画像も生成

されます. 例えば, レポートでは png 画像を掲載するが, 同じ画像の tiff 形式が求められるというように, 追加で異なるフォーマットの図の提出が要求されるような場合に便利でしょう.

デフォルトでは, 典型として画像ファイルは出力文書がレンダリングされた後に削除されます. ファイルを保持する方法は16.5節を参照してください.

11.4 時間のかかるチャンクをキャッシュする

コードチャンクの実行に時間がかかる場合,チャンクオプション cache = TRUE で結果をキャッシュすることを検討すると良いでしょう.キャッシュが有効な場合,このコードが以前にも実行され,その後コードに変更がないならば, knitr はこの実行を飛ばします.コードチャンクを変更し,つまりコードまたはチャンクオプションを修正したなら,過去のキャッシュは自動的に無効になりknitr はもう一度チャンクをキャッシュします.

キャッシュされたコードチャンクに関しては、チャンクが再度実行されたかのように、過去の実行結果から出力とオブジェクトが自動的に読み込まれます。キャッシュを取ることは結果を計算するより読み込んだほうがはるかに速いという場合に役に立ちます。しかしながら、うまい話というのは世に存在しません。あなたの使う場面にもよりますが、キャッシュがどのように動作するかをより学びぶ必要があるかもしれません、特に cache invalidation*2 を. これにより、**knitr**がしょっちゅうキャッシュを無効化したり、あるいは時に無効化が十分できていない理由に混乱することなく、あなたはキャッシュの利点を最大限活かすことができます。

最も適切なキャッシュの使用例は、コードチャンク内での計算に非常に時間がかかるり、そして options()を使って R のグローバルオプションを変更するといった副産物 (このような変更はキャッシュされません) の一切ない R オブジェクトの保存と再読込に使うことです。コードチャンクに 副産物があるなら、キャッシュを使わないことをお薦めします.

最初のほうで簡単に書いたように、キャッシュはチャンクオプションに依存します. もし include 以外のチャンクオプションを変更したら、キャッシュは無効化されます. この性質はよくある問題を解決するのに使うことができます. それは外部データファイルを読み込むときに、ファイルが更新されていたならキャッシュを無効化したい、というような場合です. 単純に cache = TRUE を使うだけでは不十分です.

```
'``{r import-data, cache=TRUE}
d <- read.csv('my-precious.csv')
...</pre>
```

^{*2} https://yihui.org/en/2018/06/cache-invalidation/

knitr にデータファイルが変更されたかどうかを教えなければなりません. 1 つの方法として別のチャンクオプション cache.extra = file.mtime('my-precious.csv') を, あるいはより厳密に cache.extra = tools::md5sum('my-precious.csv') を追加することがあります。前者はファイルの更新時刻が変更されたらキャッシュを無効化する, という意味です。後者はファイルの中身が変更されたらキャッシュを更新するということです。cache.extra は **knitr** の組み込みのチャンクオプションではないということに注意してください。他の組み込みのオプション名と競合しない限り, この用途のオプションには好きな名前を使うことができます。

同様に、他の情報をキャッシュと関連付けることができます。例えば R のバージョンなら cache.extra = getRversion()、日付なら cache.extra = Sys.Date()、オペレーティングシステムなら cache.extra = Sys.info()[['sysname']] というようにすると、これらの条件が変更されたときにキャッシュは正しく無効化されます。

文書全体で cache = TRUE を設定することはお薦めしません。キャッシュはかなり扱いにくいものです。そうではなく、実行に時間がかかり副産物のないとはっきりしているコードチャンクに対してのみ個別にキャッシュを有効化することをお薦めします。

knitr のキャッシュの設計に不満があるなら, 自分でオブジェクトのキャッシュを取ることもできます. 以下はごく簡単な例です.

```
if (file.exists("results.rds")) {
   res <- readRDS("results.rds")
} else {
   res <- compute_it() # a time-consuming function
   saveRDS(res, "results.rds")
}</pre>
```

この例では, キャッシュを無効化する唯一の, そして簡単な方法は result.rds`` ファイルを削除することです. この簡単なキャッシュのしくみが気に入ったなら, \@ref(cache-rds) 節で紹介する xfun::cache_rds()' を使うと良いでしょう.

11.5 複数の出力フォーマットに対してチャンクをキャッシュする

cache = TRUE でキャッシュが有効化されたとき, **knitr** は R コードチャンクで生成された R オブジェクトをキャッシュデータベースに書き込みます. これで次回から再読込ができます. キャッシュデータベースのパスはチャンクオプション cache.path によって決まります. デフォルトでは R Markdown は出力フォーマットごとに異なるキャッシュのパスを使用するので, 時間のかかるコ

ードチャンクは出力フォーマットごとに丸ごと実行されることになります。これは不便かもしれませんが、これがデフォルトの挙動であることには理由があります。コードチャンクの出力は、出力フォーマットに依存します。例えばグラフを生成した時、出力フォーマットが word_document なら![text](path/to/image.png) のような Markdown 構文で図を掲載できますし、出力フォーマットが html_document なら が使えます。

コードチャンクにグラフなど副作用が一切ないとき、全ての出力フォーマットで同じキャッシュデータベースを使っても安全であり、時間を節約できます。例えば大きなデータオブジェクトを読み込むか時間のかかるモデルを実行するかというときは、結果は出力フォーマットに依存しませんので、同じキャッシュデータベースを使うことができます。コードチャンクに cache.path を指定することでデータベースのパスを指定できます。これが例です。

```
```{r important-computing, cache=TRUE, cache.path="cache/"}
...
```

R Markdown ではデフォルトでは cache.path = "INPUT\_cache/FORMAT/" で, INPUT には入力ファイル名が, FORMAT には html, latex, docx といった出力フォーマット名が入ります.

# 11.6 巨大オブジェクトをキャッシュする

チャンクオプション cache = TRUE を使うと、キャッシュされたオブジェクトは R セッション内で遅延読み込みされます。これはオブジェクトが実際にコード内で使用されるまでキャッシュデータベースから読み込まれないことを意味します。以降の文書内で全てのオブジェクトが使われるわけではない場合にメモリを多少節約することができます。例えば大きなデータオブジェクトを読み込んだが、以降の分析ではその一部しか使わないなら、元のデータオブジェクトはキャッシュデータベースから読み込まれません。

```
'``{r, read-data, cache=TRUE}
full <- read.csv("HUGE.csv")
rows <- subset(full, price > 100)
next we only use `rows`
'``
'``{r}
plot(rows)
'``
```

しかし, オブジェクトが大きすぎるときは, このようなエラーに遭遇するかもしれません.

```
Error in lazyLoadDBinsertVariable(vars[i], ...
long vectors not supported yet: ...
Execution halted
```

この問題が発生したら、チャンクオプション cache.lazy = FALSE で遅延読み込みを無効にできます。 チャンク内の全てのオブジェクトが即座にメモリに読み込まれます。

# 11.7 コード, テキスト出力, メッセージ, グラフを隠す

デフォルトでは、**knitr** はコードチャンクから、ソースコード・テキスト出力・メッセージ・警告・エラー・グラフといった可能な全ての出力を表示します.これらに対応するコードチャンクを使い、個別に隠すことができます.

```
 ソースコードを隠す.

 ****(r, echo=FALSE)

 1 + 1

 ****(r, results='hide')

 print(" テキスト出力はあなたには見えない.")

 ****(r, message=FALSE)

 message(" このメッセージはあなたには見えない.")

 警告メッセージを隠す.
```

**knitr** に関するよくある質問の 1 つは、パッケージ読み込み時のメッセージを隠す方法です。例えば library(tidyverse) や library(ggplot2) を使ったとき、いくつかの読み込みメッセージが現れます。このようなメッセージはチャンクオプション message = FALSE で抑制することもできます。

インデックスによってこれらの要素を表示したり隠したり選択することも出来ます. 以下の例では, ソースコードの4つ目と5つ目の式を表示し, 最初の2つのメッセージと2つ目と3つ目の警告を隠しています. コメントも式1つとして数えられることに注意してください.

負のインデックスを使用することもできます. 例えば echo = -2 は出力部のソースコードの2つ目

の式を排除します.

同様に、fig.keep オプションに対してインデックスを使うことでどのグラフを表示あるいは隠すかを選ぶこともできます。例えば fig.keep = 1:2 は最初の 2 つのグラフを残すことを意味します。このオプションにはいくつかのショートカットがあります。fig.keep = "first" は最初のグラフのみを残し、fig.keep = "last" は最後のグラフのみを残し、fig.keep = "none" は全てのグラフを破棄します。2 つのオプション fig.keep = "none" と fig.show = "hide" は異なることに注意してください。前者はそもそも画像ファイルを生成しませんが、後者はグラフを生成し隠すだけです。

html\_document 出力のソースコードブロックに対して, echo = FALSE で完全に省略したくないというならば, ページ上でブロックを折りたたみ, ユーザーが展開ボタンを押して展開させるようにできる方法を書いた7.5節を見ると良いかもしれません.

# 11.8 チャンクの出力を全て隠す

ときには出力を全く表示させずにコードチャンクを実行したいかもしれません. 11.7節で言及したような方法で個別にオプションを使うのではなく, ただ 1 つ include = FALSE を使うことで出力全体を抑制できます. これが例です.

```
```{r, include=FALSE}
# ここに何らかの R コード
```

include=FALSE オプションがあると, eval = FALSE の指定がない限りコードチャンクは評価されますが、出力は完全に抑制されます。コードも、テキスト出力も、メッセージもグラフも見えなくなります。

11.9 テキスト出力をソースコードとまとめる

テキスト出力ブロックとソースコードブロックの間隔が空きすぎていると感じたら, チャンクオプション collapse = TRUE でテキスト出力をソースブロックと連結することを検討するとよいでしょう. collapse = TRUE としたとき, 出力はこのようになります.

```
03 1:10
04 ## [1] 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10
```

以下は同じチャンクですが collapse = TRUE オプションがありません. デフォルトは FALSE です.

```
01 1 + 1
```

[1] 2

01 1:10

[1] 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

11.10 R のソースコードを整形する

チャンクオプション tidy = TRUE を設定すると, **formatR** パッケージ (Xie, 2019a) の tidy_source() 関数によって R のソースコードが整形されます. tidy_source() 関数は, ほ とんどの演算子の前後にスペースを追加する, 適切なインデントをする, 代入演算子 = を <- に置き換えるなど, いくつかの観点でソースコードを整形します. チャンクオプション tidy.opts には formatR::tidy_source() に与えられる引数のリストが使えます. これが例です.

整形後の出力はこうなります.

```
      01 # 乱雑な R コード...

      02 1 + 1
```

```
03 x <- 1:10 #代入演算子として '<-' を好むユーザーがいる
04 if (TRUE) {
05 print("Hello world!") # スペース 2 個でインデントする
06 }</pre>
```

5.3節ではテキストの幅を制御する方法について言及しました. ソースコードの幅を制御したいなら, tidy = TRUE としたときに width.cutoff 引数を試してみると良いでしょう. これが例です.

出力はこうなります.

使用可能な引数を知るにはヘルプページ ?formatR::tidy_source を読んでください. そして https://yihui.org/formatR/で使用例とこの関数の限界を理解してください.

tidy = styler を設定したら、コード整形には代わりに **styler** パッケージ (Müller and Walthert, 2020) が使われるでしょう.R コードは styler::style_text() 関数で整形されます.**styler** パッケージは **formatR** よりも豊富な機能を持ちます.例えば、引数のアラインメントができたりパイプ演算子 %>% のあるコードも対処できたりします.チャンクオプション tidy.opts には styler::style_text() への引数を使うこともできます.これが例です.

```
```{r, tidy='styler', tidy.opts=list(strict=FALSE)}
代入演算子のアラインメント
a <- 1#one variable
abc <- 2#another variable
```

デフォルトでは tidy = FALSE であり, あなたのコードは整形されません.

# 11.11 テキストを生の Markdown として出力する (\*)

デフォルトではコードチャンクからのテキスト出力は冒頭に2つハッシュを置いて、テキストをそのまま書き出します (11.12節参照). **knitr** は出力をコードブロックで囲むため、テキストはそのまま表示されます。 例えば 1:5 というコードの生の出力はこうなります。

## [1] 1 2 3 4 5

時には生のテキストをそのまま出力するのではなく, Markdown 構文として扱いたいこともあるでしょう. 例えば cat('# これは見出しです') でセクション見出しを書きたい時があるかもしれませんが, 生の出力はこうなります.

テキストをコードブロックで囲んでほしくない, あるいは冒頭のハッシュもいらない. つまり, 生の出力が cat() に与えた文字列そのままになるようにしたい, というわけです.

### # This is a header

これを解決するのはチャンクオプション results = 'asis' です. このオプションはテキスト出力をコードブロックで囲むのではなく, "as is" (そのまま) 扱うよう **knitr** に指示します. R コードから動的にコンテンツを生成したい時に, このオプションは特に有用でしょう. 例えば以下のコードチャンクと results = 'asis' オプションで, iris データから列名のリストを生成します.

01 cat(paste0("- `", names(iris), "`"), sep = "\n")

- Sepal.Length
- Sepal.Width
- Petal.Length
- Petal.Width
- Species

ハイフン (-) は番号のない箇条書き意味する Markdown 構文です. バッククォートはオプションです. results = 'asis' オプションなしで上記のコードチャンクがそのまま出力されるのを見ることもできます.

```
01 cat(paste0("- `", names(iris), "`"), sep = "\n")
```

- `Sepal.Length`
- `Sepal.Width`
- `Petal.Length`
- `Petal.Width`
- `Species`

以下は、セクション見出し、パラグラフ、mtcars データの全ての列に対して for ループ内で作成したグラフを表示する例の全貌です

```
title: プログラミングでコンテンツを生成する

チャンクオプション 'results = 'asis'' で生の Markdown コンテンツを書き出すことができま

・ す. これはプロットを含めることもできます.

'``{r, mtcars-plots, results='asis'}
for (i in names(mtcars)) {
 cat('\n\n# 変数 '', i, '' の要約.\n\n')
 x <- mtcars[, i]
 if (length(unique(x)) <= 6) {
 cat('`', i, '' はカテゴリカル変数である.\n\n')
 plot(table(x), xlab = i, ylab = '度数', lwd = 10)
 } else {
 cat('連続変数 '', i, '' のヒストグラム.\n\n')
```

```
hist(x, xlab = i, main = '')
}
...
```

改行 (\n) を過剰に追加していることに注意してください. これは Markdown コンテンツ上でそれ ぞれの要素を明確に分離したいからです. 要素間の改行は多すぎても無害ですが, 改行が不十分だ と問題が起こりえます. 例えば以下の Markdown テキストには大いに曖昧さがあります.

# これは見出し? これは段落? ヘッダの一部? ![この画像は?](foo.png) # この行はどうなる?

cat('\n')で生成できていたように空白行を追加すると,この曖昧さは消えます.

# そうこれは見出し!

そしてこれは明らかに段落.

![これは画像](foo.png)

# 完全なる別の見出し

cat() だけがテキスト出力のできる関数ではありません. 他のよく使われる関数には print() があります. print() はしばしばオブジェクトの表示のために暗黙に呼び出されることに注意してください. これが R コンソールでオブジェクトや値をタイプした直後に出力が表示される理由です. 例えば R コンソールで 1:5 とタイプし Enter キーを押した時, R が実際には print(1:5) を暗黙に呼び出しているので出力が見えます. R コンソール上で入力していれば正常に表示されていたはずのオブジェクトや値が for ループなどのコード内では出力の生成に失敗するというのはとても混乱をもたらします. この話はかなり技術的に高度なので, 私はブログに "The Ghost Printer behind Top-level R Expressions"\*3 という説明の記事を投稿しました. 技術的な詳細に関心があるなら, このルールだけは覚えてください. 「for ループ内の出力が表示されなかったら, おそらく print()

<sup>\*3</sup> https://yihui.org/en/2017/06/top-level-r-expressions/

# 11.12 テキストの先頭のハッシュ記号を消す

デフォルトでは R コードのテキスト出力の先頭には 2 つのハッシュ記号 ## が付きます. この挙動はチャンクオプション comment で変更することができます. このオプションのデフォルトは "###"という文字列です. ハッシュを消したいなら, 空の文字列を使うことができます. これが例です.

```
'``{r, comment=""}
1:100
...
```

もちろん, comment = "#>" などと他の文字列はなんでも使うことができます. なぜ comment オプションのデフォルトはハッシュ記号なのか? その理由は # が R ではコメントを意味するからです. テキスト出力がコメントアウトされていれば, レポートに掲載されたコードチャンクを全部まとめてコピーして自分で実行するのが簡単になり, テキスト出力が R コードとして扱われないということに悩むことがありません. 例えば以下のコードチャンクの 4 つの行のテキスト全てをコピーして, R コードとして安全に実行することができます.

comment = "" でハッシュ記号を消したなら, 2 つ目と 2 つ目のコードを手動で消さなければならないため, 全てのコードをコピーして簡単に実行するということができなくなります.

```
01 1 + 1

02 [1] 2

03 2 + 2

04 [1] 4
```

comment = "" が好ましいという主張の 1 つには, テキスト出力が R コンソールのユーザーにとって見慣れたものになるというものがあります. R コンソールではテキスト出力の行の先頭にはハッシュ記号が現れません. 本当に R コンソールの挙動を模倣したいのであれば, comment = "" を

prompt = TRUE と組み合わせて使うことができます. これが例です.

```
'``{r, comment="", prompt=TRUE}
1 + 1
if (TRUE) {
 2 + 2
}
...
```

ソースコードにプロンプト記号 > と継続を表す記号 + が含まれているので, 出力は R コードをタイプして実行するときのものにかなり近づいているはずです.

```
01 > 1 + 1

02 [1] 2

03 > if (TRUE) {

04 + 2 + 2

05 + }

06 [1] 4
```

# 11.13 テキスト出力ブロックに属性を与える(\*)

7.3節では、class.source と class.output を使い、ソース・テキスト出力のブロックにスタイルを定義する例をいくつかお見せしました.実際には **knitr** には同様の様々なオプションがあります.それらは class.message、class.warning、class.error といったものです.これらのオプションはクラス名を対応するテキスト出力ブロックに追加するために使うことができます.例えば class.error はチャンクオプション error = TRUE (11.2節参照) が設定されているとき、エラーメッセージに大してクラスを追加します.これらのオプションのもっともよくある応用は、クラス名に応じて定義された CSS ルールでスタイルを適用することでしょう.この例の実演は7.3節でなされています.

典型的には、テキスト出力ブロックは最低限コードブロックに囲まれており、Markdown のソースはこのようになります.

```
```{.className}
出力された行
```

出力フォーマットが HTML ならば, たいていの場合で*4このように変換されます.

```
  <code>出力された行</code>
```

class.* オプションは 要素の class 属性を制御します. この要素は先述のテキスト出力ブロックを入れたコンテナです.

実際には、クラスは HTML の 要素の属性に使用可能なものの 1 つにすぎません.HTML 要素は幅や高さやスタイルなどと、他にも多くの属性を持ちます.attr.source、attr.output、attr.message、attr.warning、attr.error を含む一連のチャンクオプション attr.* によって、任意の属性をテキスト出力ブロックに追加することができます.例えば attr.source = 'style="background: pink;"' を使えばソースブロックの背景をピンク色にできます.対応するコードブロックはこのようになります.

```
```{style="background: pink;"}
...
...
```

そして HTML 出力はこのようになります.

```
...
```

5.7, 12.3節でさらなる例を見ることができます.

技術的なことをいいますと, チャンクオプション class.\* は attr.\* の特殊形です. 例えば class.source = 'numberLines' は attr.source = '.numberLines' と同じです (後者は先頭にド

<sup>\*&</sup>lt;sup>4</sup> <div class="className"></div> に変換される場合もあります.万全を期すには HTML 出力された文書を確認するとよいでしょう.

ットがあることに注意). しかし attr.source は任意の属性をとることができ, 例えば attr.source = c('.numberLines', 'startFrom="11"') も可能です.

これらのオプションはほとんどの HTML 出力で有効です. 属性が他の出力フォーマットでも有効な場合もありますが, そのような場合になるのは比較的珍しいです. 属性は Pandoc か, 何らかのサードパーティ製パッケージでもサポートされている必要があります. .numberLines 属性は Pandoc によって HTML と LaTeX の両方で動作し, サードパーティ製パッケージというのは大抵は4.20節で紹介したような Lua フィルターを使ったものになります.

# 11.14 グラフに後処理をかける(\*)

コードチャンクでグラフが生成された後,チャンクオプション fig.process によってグラフに後処理をかけることが出来ます.これはファイルパスを引数にとり,生成された画像ファイルのパスを返す関数であるべきです.この関数はオプションで第2引数 option を取ることができ,これには現在のチャンクのオプションのリストが与えられます.

R のロゴをグラフに埋め込むために、とても強力な **magick** パッケージ (Ooms, 2021) を使用する例を以下にお見せします。このパッケージに詳しくないなら、オンラインドキュメントか、豊富な使用例を含むパッケージのヴィネットをを読むことをお薦めします。初めに、関数 add\_logo() を定義します。add\_logo():

```
add_logo <- function(path, options) {</pre>
01
 # コードチャンクで作成された画像
02
 img <- magick::image_read(path)</pre>
03
04
 # R のロゴ
 logo <- file.path(R.home("doc"), "html", "logo.jpg")</pre>
95
 logo <- magick::image_read(logo)</pre>
06
 # デフォルトの重心は `northwest` (左上) で,
07
 # ユーザーはチャンクオプション `magick.gravity`
08
 # で変更できる
09
 if (is.null(g <- options$magick.gravity))</pre>
10
 g <- "northwest"</pre>
11
 # ロゴを画像に追加する
12
 img <- magick::image_composite(img, logo, gravity = g)</pre>
13
 # 新しい画像を書き出す
14
 magick::image_write(img, path)
15
16
 path
```

17 }

基本的にこの関数は R のグラフのパスをとり, R のロゴを追加し, 元画像のパスに新しい画像を保存します. デフォルトでは, ロゴはグラフの左上 (northwest) の隅に追加されますが, ユーザーはカスタムチャンクオプション magick.gravity で位置をカスタマイズできます. このオプション名は任意に決められます.

では上記の処理関数を fig.process = add\_logo と magick.gravity = "northwest" オプションで以下のコードチャンクに適用します。よってロゴは右上の隅に追加されます。実際の出力は図11.1になります。

```
par(mar = c(4, 4, 0.1, 0.1))

hist(faithful$eruptions, breaks = 30, main = "", col = "gray",

border = "white")
```

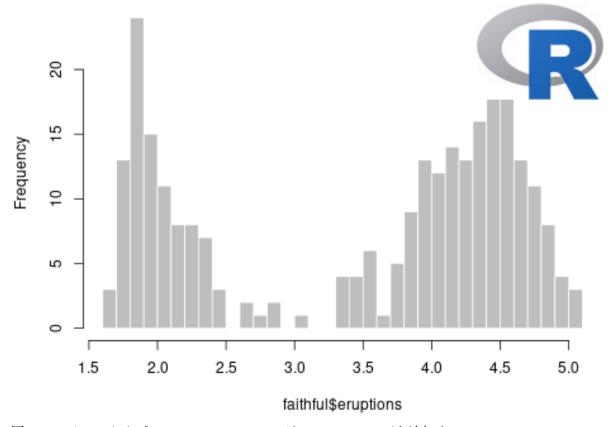


図11.1: チャンクオプション fig.process でグラフに R のロゴを追加する

あなたが magick パッケージにより詳しくなったら, R のグラフに後処理をするための, より創造

的で有用なアイディアを思いつくことでしょう.

最後に、fig.process オプションのもう 1 つの応用例をお見せします。以下の pdf2png() 関数は PDF 画像を PNG に変換します。 11.15節ではグラフの生成のために tikz グラフィックデバイスを使用する例を見せました。この方法の問題は、デバイスが PDF を生成することで、LaTeX でない出力の文書に対しては機能しないということです。 チャンクオプション dev = "tikz" と fig.process = pdf2png で、グラフの PNG 版を図11.2に示すことができます。

```
pdf2png <- function(path) {</pre>
01
 # LaTeX でない出力に対してのみ変換する
02
 if (knitr::is_latex_output())
03
 return(path)
04
 path2 <- xfun::with_ext(path, "png")</pre>
05
 img <- magick::image_read_pdf(path)</pre>
06
 magick::image_write(img, path2, format = "png")
07
80
 path2
09
 }
```

# 11.15 高品質なグラフィック(\*)

rmarkdown パッケージはそれぞれの出力フォーマットに対して妥当なデフォルトのグラフィックデバイスを設定しています。例えば HTML 出力に対しては png() を使うので, knitr は PNG 画像ファイルを生成し, PDF 出力に対しては pdf() デバイスを使う, などです。あなたがデフォルトのグラフィックデバイスの品質に不満なら, チャンクオプションdev によって変更することができます。knitr によってサポートされているグラフィックデバイスの一覧は次のようになります。"bmp", "postscript", "pdf", "png", "svg", "jpeg", "pictex", "tiff", "win.metafile", "cairo\_pdf", "cairo\_ps", "quartz\_pdf", "quartz\_png", "quartz\_jpeg", "quartz\_tiff", "quartz\_gif", "quartz\_psd", "quartz\_bmp", "CairoJPEG", "CairoPNG", "CairoPS", "CairoPDF", "CairoSVG", "CairoTIFF", "Cairo\_pdf", "Cairo\_png", "Cairo\_ps", "Svglite", "ragg\_png", and "tikz"

大抵の場合, グラフィックデバイスの名前は関数名でもあります. デバイスについてもっと詳しく知りたいなら, あなたは R のヘルプページを読むことができます. 例えば svg デバイスの詳細を知るのに, R コンソールで ?svg と打つことができます. このデバイスは base R に含まれています. さらに quartz\_XXX デバイスは quartz() 関数を元にしたもので, macOS でのみ有効です. CairoXXX デバイスは **Cairo** (Urbanek and Horner, 2020) パッケージによるアドオンで, Cairo\_XXX デバ

イスは **cairoDevice** package (Lawrence, 2020) から\*<sup>5</sup>, svglite デバイスは **svglite** パッケージ (Wickham Henry, et al., 2020) から, tikz は **tikzDevice** パッケージ (Sharpsteen and Bracken, 2020) からのデバイスです. アドオンパッケージ由来のデバイスを使いたいなら, そのパッケージをまずインストールしなければなりません.

大抵はベクタ画像はラスタ画像よりも高品質であり、ベクタ画像は品質を損なうことなく縮尺を変更できます。HTML 出力では、SVG のグラフのために dev = "svg" または dev = "svglite" を使うことを検討してください。SVG はベクタ画像形式で、デフォルトの png デバイスはラスタ画像形式であることに注意してください。

あなたが PDF 出力時のグラフ内の書体に対してこだわりが強い人なら、dev = "tikz" を使うと良いでしょう。これは LaTeX がネイティヴでサポートしているからです。つまり、テキストや記号を含むグラフの全ての要素が LaTeX を介して高品質にレンダリングされるということです。図11.2に、dev = "tikz" で R のグラフ内で LaTeX 数式表現を書く例を示します。

```
par(mar = c(4, 4, 2, .1))
curve(dnorm, -3, 3, xlab = 'x', ylab = '$\\phi(x)$',
main = 'The density function of $N(0, 1)$')
text(-1, .2, cex = 3, col = 'blue',
 '$\\phi(x)=\\frac{1}{\\sqrt{2\\pi}}e^{\\frac{-x^2}{2}}$')
```

base R は実は数式表現をサポートしていますが, LaTeX を介してレンダリングされていないこと に注意してください (詳細は ?plotmath を見てください). tikz デバイスの細かい組版を調整する いくつかの発展的なオプションがあります。?tikzDevice::tikz で, できることを確認するとよい でしょう。例えばグラフにマルチバイト文字が含まれているなら, このオプションを設定すると良いでしょう。

```
01 options(tikzDefaultEngine = "xetex")
```

これは、LaTeX 文書でマルチバイト文字を処理する観点で、xetex の方が大抵の場合はデフォルトのエンジン pdftex より優れているからです。

tikz の主な欠点が 2 つあります. 1 つ目は LaTeX のインストールが必要ということですが, これはそこまで深刻ではありません (1.2節参照). 他にもいくつかの LaTeX パッケージが必要になりますが, TinyTeX を使用しているなら簡単にインストールできます.

<sup>\*&</sup>lt;sup>5</sup> 訳注: これらと異なり, cairo\_pdf は base R に含まれています.

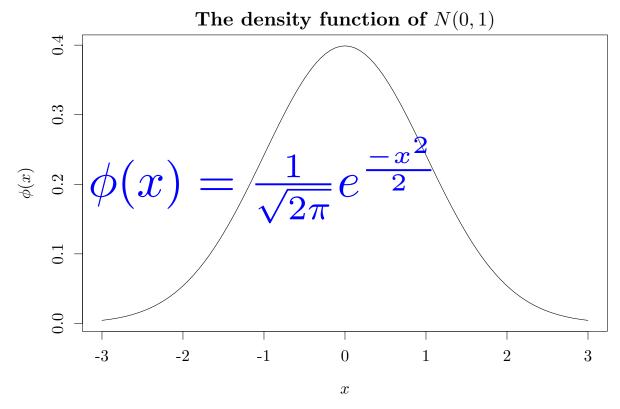


図11.2: tikz デバイスでレンダリングされたグラフ

01 tinytex::tlmgr\_install(c("pgf", "preview", "xcolor"))

2つ目の欠点は、デバイスが LaTeX ファイルを生成してから PDF にコンパイルするため、グラフのレンダリングが顕著に遅くなるということです。 コードチャンクに時間がかかると感じるなら、 cache = TRUE でチャンクオプションを有効にするとよいでしょう (11.4節参照).

図11.2には, チャンクオプション fig. process = pdf2png が使われています. pdf2png は11.14節 で定義された, 出力フォーマットが LaTeX でない時に PDF 画像を PNG に変換するものです. 変換しない場合, 本書のオンライン版をウエブブラウザで閲覧しても PDF グラフは見られないでしょう.

#### 11.16 低水準作図関数で1つづつグラフを作る(\*)

R グラフィックスには 2 種類の作図関数があります。高水準作図関数は新たなグラフを作成し、低水準作図関数は既存のグラフに要素を追加します。詳細は R マニュアルの 12 章 An Introduction

 $to R^{*6}$  を確認するとよいでしょう.

デフォルトでは **knitr** は低水準作図関数による中間グラフはそれより前のグラフを修正するのに使います. 全ての低水準作図による変更が反映された最後のグラフのみが表示されます. By default, **knitr** does not show the intermediate plots when a series of low-level plotting functions are used to modify a previous plot. Only the last plot on which all low-level plotting changes have been made is shown.

特に教育目的では、中間グラフを表示することが有用になりえます.低水準作図による変更を保存するために、チャンクオプション fig.keep = 'low' を設定することができます.例えば図11.3、11.4は fig.keep = 'low' のオプションを設定した同一のコードチャンク由来ですが、2 つのコードチャンクから生成されたように見えます.さらに異なる図のキャプションを、チャンクオプション fig.cap = c('... の散布図', '... に回帰直線を追加') で割り当てています.

```
01 par(mar = c(4, 4, 0.1, 0.1))
02 plot(cars)

01 fit <- lm(dist ~ speed, data = cars)
02 abline(fit)</pre>
```

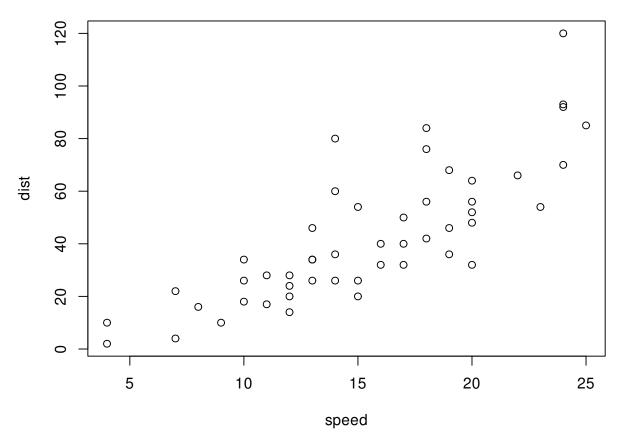
異なるコードチャンク間でグラフの変更を維持したいなら,14.5節を参照してください.

### 11.17 チャンク内のオブジェクト表示をカスタマイズする (\*)

デフォルトではコードチャンク内のオブジェクトは knitr::knit\_print() 関数を通して表示され、これは概ね base R の print() と同じです。knit\_print() 関数は S3 ジェネリック関数であり、あなたが自分で S3 メソッドを登録することで機能を拡張できることを意味します。以下は knitr::kable() でデータフレームを表として自動的に表示する方法の例を示しています。

```
title: データフレームの表示にカスタム `knit_print` メソッドを使う初めに `knit_print` メソッドを定義して登録します.
```

<sup>\*6</sup> https://cran.r-project.org/doc/manuals/r-release/R-intro.html



**図11.3:** cars データの散布図.

```
'``(r)
knit_print.data.frame = function(x, ...) {
 res = paste(c("", "", knitr::kable(x)), collapse = "\n")
 knitr::asis_output(res)
}

registerS3method(
 "knit_print", "data.frame", knit_print.data.frame,
 envir = asNamespace("knitr")
)

これでデータフレームに対するカスタム表示メソッドをテストできます。もはや
 `knitr::kable()`を明示的に呼ぶ必要がないことに注意してください。
```

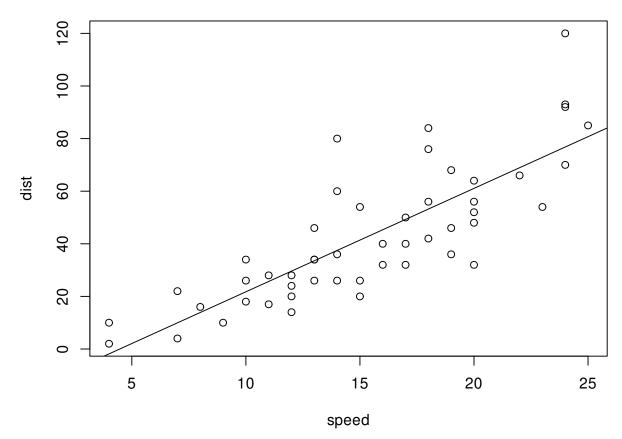


図11.4: 既にある散布図に回帰曲線を追加

```
'``{r}
head(iris)
'``
'``{r}
head(mtcars)
'``
```

knit\_print() 関数の詳細は knitr パッケージのビネットから学ぶことができます.

```
vignette("knit_print", package = "knitr")
```

**printr** パッケージ (Xie, 2021b) はいくつかの R オブジェクトを可能な範囲で自動的に表として表示する S3 メソッドをいくつか提供します. コードチャンクで library(printr) を実行するだ

けで十分で、全てのメソッドが自動的に登録されます.

このテクニックがとても上級者向けだと感じたなら、 $html_document$  や  $pdf_document$  のような R Markdown の出力フォーマットに  $df_print$  オプションを与えてください.これでデータフレームの表示に関する挙動をカスタマイズできます.例えばデータフレームを knitr::kable() で表示したいなら、このようにオプションを設定するとよいでしょう.

```
output:
 html_document:
 df_print: kable

```

出力フォーマットが df\_print をサポートするかどうか, そしてもしそうなら使用可能な値が何であるかの判断は, 出力フォーマット関数のヘルプページを見てください.

実際には、render チャンクオプションで knit\_print() 関数を完全に置き換えることができます.このオプションはオブジェクトを表示する任意の関数を取ることができます.例えば **pander** パッケージ を使用するオブジェクトを表示したいなら、チャンクオプション render に pander::pander() を設定するとよいでしょう.

```
'``{r, render=pander::pander}
iris
...
```

render オプションによって, あなたは R オブジェクトの表示方法に対する完全なる自由を手に入れるでしょう.

#### 11.18 オプションフック(\*)

あるチャンクオプションを,他のチャンクオプションの値に応じて動的に変えたいことがあるかもしれません.これを実施するにはオプションフックを設定するために,opts\_hooks オブジェクトを使用するとよいでしょう.オプションフックはオプションと関連付けられた関数で,対応するチャンクオプションが NULL でないときに実行されます.この関数は現在のチャンクのオプションのリストを引数として受け取り,そのリストを(おそらく変更して)返すものであるべきです.例えばfig.width オプションを常に fig.height より小さくならないように調整することができます.

```
knitr::opts_hooks$set(fig.width = function(options) {
 if (options$fig.width < options$fig.height) {
 options$fig.width <- options$fig.height
 }
 options
}</pre>
```

fig.width が NULL になることはないので、このフック関数は常に、コードチャンクの直前にチャンクオプションの更新のために実行されます。以下のコードチャンクは、上記のオプションフックが設定されていれば、fig.width が初期値の 5 の代わりに実際には 6 になります。

```
```{r fig.width = 5, fig.height = 6}
plot(1:10)
...
```

別の例として、11.12説の最後の例を書き換えます.単一のチャンクオプション console = TRUE が、comment = ""と prompt = TRUE を意味するようにできます.console は **knitr** の固有のチャンクオプションでなく、任意の名前のカスタムオプションであることに注意してください.デフォルト値は NULL です.以下はその完全な例です.

```
'``{r, include=FALSE}
knitr::opts_hooks$set(console = function(options) {
   if (isTRUE(options$console)) {
      options$comment <- ''; options$prompt <- TRUE
   }
   options
})

'``

デフォルトの出力.

'``{r}
1 + 1
if (TRUE) {
   2 + 2</pre>
```

```
'console = TRUE'で出力.

'``{r, console=TRUE}
1 + 1
if (TRUE) {
2 + 2
}
...
```

3つ目の例はどうやって自動的にソースコード・テキスト出力・メッセージ・警告・エラーの出力ブロックに行番号を追加するかに関するものです。行番号を追加するために attr.source, attr.output といったチャンクオプションを使用する方法は5.7節で紹介しています。ここでは単一のチャンクオプション (この例では numberLines) で行番号を追加するかどうかを制御したいとします。

```
knitr::opts_hooks$set(
01
      numberLines = function(options) {
02
         attrs <- paste0("attr.", options$numberLines)</pre>
03
         options[attrs] <- lapply(options[attrs], c, ".numberLines")</pre>
04
         options
05
      }
06
    )
07
80
09
    knitr::opts_chunk$set(
      numberLines = c(
10
         "source", "output", "message", "warning", "error"
11
      )
12
    )
13
```

基本的に、オプションフック numberLines は .numberLines 属性を出力ブロックに追加し、チャンクオプション opts_chunk\$set() によって設定された numberLunes はオプションフックによって実行されたことが確認されます.

上記の設定では、チャンクオプション numberLines をコードチャンクで使用して、そのチャンクの出力ブロックのどの部分に行番号を付けるかを決めることができます。 例えば numberLines = ('source', 'output') のように、 numberLines = ('sou

このアプローチがチャンクオプションを直接設定するのと何が違うのかと思うかもしれません. 例えば5.7節でしたように、単に knitr::opts_chunk\$set(attr.source = '.numberLines') とする場合と. ここでオプションフックを使う利点は .numberLines 属性をチャンクオプションに**追加する**という点のみです. これはチャンクオプションの既に存在する値を**上書きする**ことを意味しません. 例えば以下のチャンクのソースコードブロックは (既に設定したため) 行番号が付いており、そして番号を 2 行目から始めます.

```
```{r, attr.source='startFrom="2"'}
このコメント行には番号がつかない
1 + 1
```

これは以下と同等です.

```
```{r, attr.source=c('startFrom="2"', '.numberLines'}
# このコメント行には番号がつかない
1 + 1
```

第12章

Output Hooks (*)

With the **knitr** package, you have control over every piece of output from your code chunks, such as source code, text output, messages, and plots. The control is achieved through "output hooks." Output hooks are a series of functions that take a piece of output as the input (typically a character vector), and return a character vector to be written to the output document. This may not be easy to understand for now, but hopefully you can see the idea more clearly with a small example below explaining how the output of a simple code chunk is rendered through **knitr**'s output hooks.

Consider this code chunk with one line of code:

```
'``{r}
1 + 1
...
```

After **knitr** evaluates the code chunk, it gets two output elements, and both are stored as character strings: the source code "1 + 1", and the text output "[1] 2". These character strings will be further processed by chunk hooks for the desired output format. For example, for Markdown documents, **knitr** will wrap the source code in a fenced code block with a language name. This is done through the source hook, which more or less looks like this function:

```
# for the above case, `x` is a character string '1 + 1'
function(x, options) {
# the little 'r' here indicates the language name
```

```
paste(c("```r", x, "```"), collapse = "\n")
05 }
```

Similarly, the text output is processed by the output hook that looks like this function:

```
function(x, options) {
  paste(c("```", x, "```"), collapse = "\n")
}
```

So the final output of the above code chunk is:

```
'''r
1 + 1
...
[1] 2
...
```

The actual hooks are more complicated than the two functions above, but the idea is the same. You may obtain the actual hooks from the object knit_hooks via the get() method, e.g.,

```
# for meaningful output, the code below should be
# executed *inside* a code chunk of a knitr document
knitr::knit_hooks$get("source")
knitr::knit_hooks$get("output")
# or knitr::knit_hooks$get(c('source', 'output'))
```

Unless you are truly interested in making contributions to the **knitr** package, we do not recommend that you read the source code of these built-in hooks. If you are interested, this code can be found in the scripts named in the form hooks-*.R at https://github.com/yihui/knitr/tree/master/R (e.g., hooks-md.R contains hooks for R Markdown documents). As a **knitr** user, it usually suffices if you know how to create custom output hooks by taking

advantage of the built-in hooks. You will learn that in several examples in this chapter, and we show the basic idea below.

A custom output hook is registered through the set() method of knit_hooks. Because this method will override the existing default hook, we recommend that you save a copy of an existing hook, process the output elements in your own way, and pass the results to the default hook. The usual syntax is:

```
# using local() is optional here (we just want to avoid
01
    # creating unnecessary global variables like `hook_old`)
02
    local({
03
      hook_old <- knitr::knit_hooks$get("NAME") # save the old hook</pre>
04
      knitr::knit_hooks$set(NAME = function(x, options) {
05
         # now do whatever you want to do with x, and pass the
06
        # new x to the old hook
07
        hook_old(x, options)
80
09
      })
    })
10
```

Here, NAME is the name of the hook, which can be one of the following values:

- source: processing the source code.
- output: processing text output.
- warning: processing warnings (usually from warning()).
- message: processing messages (usually from message()).
- error: processing error messages (usually from stop()).
- plot: processing plot file paths.
- inline: processing output from inline R expressions.
- chunk: processing output from the whole chunk.
- document: processing the whole document.

The meaning of the argument x in the hook functions is explained in the above list. For the options argument of a hook, it denotes the chunk options (as a list) for the current code chunk. For example, if you set foo = TRUE on a chunk, you can obtain its value via

options\$foo in the hook. The options argument is not available to the inline and document hooks.

Output hooks give you the ultimate control over every single piece of your chunk and document output. Compared with chunk options, which often have predefined purposes, output hooks can be much more powerful since they are user-defined functions, and you can do anything you want in functions.

12.1 Redact source code

Sometimes we may not want to fully display our source code in the report. For example, you may have a password in a certain line of code. We mentioned in Section 11.7 that you can use the chunk option echo to select which expressions in the R code to display (e.g., show the second expression via echo = 2). In this section, we provide a more flexible method that does not require you to specify the indices of expressions.

The basic idea is that you add a special comment to the code (e.g., # SECRET!!). When this comment is detected in a line of code, you omit that line. Below is a full example using the source hook:

```
title: Using the `source` hook to hide certain lines of code

First, we set up a `source` hook to exclude the lines of code
that contain the string `# SECRET!!` at the end.

```{r, include=FALSE}
local({
 hook_source <- knitr::knit_hooks$get('source')
 knitr::knit_hooks$set(source = function(x, options) {
 x <- x[!grepl('# SECRET!!$', x)]
 hook_source(x, options)
 })
})

```</pre>
```

```
Now we can test the new hook. When you knit this document, you will not see the lines with the special comment `# SECRET!!`.

'``{r}

1 + 1  # normal code to be displayed

# please use your real username and password
auth <- httr::authenticate("user", "passwd")
auth <- httr::authenticate("yihui", "horsebattery")  # SECRET!!
httr::GET("http://httpbin.org/basic-auth/user/passwd", auth)

'``
```

The key part in the above source hook is this line, which matches the trailing comment # SECRET!! in the source code vector x via grepl() and exclude the matches:

```
01 x <- x[!grepl("# SECRET!!$", x)]
```

Precisely speaking, the above hook will exclude whole *expressions* containing the trailing comment # SECRET!!, instead of individual lines, because x is actually a vector of R expressions. For example, for the code chunk below:

```
01 1 + 1

02 if (TRUE) {

03 # SECRET!!

04 1:10

05 }
```

The value of x in the source hook is:

```
01 c("1 + 1", "if (TRUE) { # SECRET!!\n 1:10\n}")
```

If you want to hide lines instead of expressions of R code, you will have to split x into individual lines. You may consider using the function xfun::split_lines(). The body of the hook function will be:

```
01 x <- xfun::split_lines(x) # split into individual lines
02 x <- x[!grepl("# SECRET!!$", x)]
03 x <- paste(x, collapse = "\n") # combine into a single string
04 hook_source(x, options)</pre>
```

This example shows you how to manipulate the source code string, and grep1() is certainly not the only choice of string manipulation. In Section 12.2, we will show another example.

12.2 Add line numbers to source code

In this section, we show an example of defining a source hook to add line numbers as comments to the source code. For example, for this code chunk:

```
'``{r}
if (TRUE) {
    x <- 1:10
    x + 1
}
'``</pre>
```

We want the output to be:

```
01 if (TRUE) { # 1

02  x <- 1:10  # 2

03  x + 1  # 3

04 } # 4
```

The full example is below:

```
title: Add line numbers to source code
---
We set up a 'source' hook to add line numbers to the source
```

```
code. The numbers appear in comments at the end of each line.
```{r, include=FALSE}
local({
 hook_source <- knitr::knit_hooks$get('source')</pre>
 knitr::knit_hooks$set(source = function(x, options) {
 x <- xfun::split_lines(x)</pre>
 n <- nchar(x, 'width')</pre>
 i <- seq_along(x) # line numbers</pre>
 n <- n + nchar(i)</pre>
 s <- knitr:::v_spaces(max(n) - n)</pre>
 x <- paste(x, s, ' # ', i, sep = '', collapse = '\n')</pre>
 hook_source(x, options)
 })
})
. . .
Now we can test the new hook. When you knit this document, you
will see line numbers in trailing comments.
```{r}
if (TRUE) {
  x <- 1:10
 x + 1
}
```

The main trick in the above example is to determine the number of spaces needed before the comment on each line, so the comments can align to the right. The number depends on the widths of each line of code. We leave it to readers to digest the code in the hook function. Note that an internal function knitr:::v_spaces() is used to generate spaces of specified lengths, e.g.,

```
01 knitr:::v_spaces(c(1, 3, 6, 0))
```

```
## [1] " " " " " " "
```

The method introduced in Section 5.7 may be the actual way in which you want to add line numbers to source code. The syntax is cleaner, and it works for both source code and text output blocks. The above source hook trick mainly aims to show you one possibility of manipulating the source code with a custom function.

12.3 Scrollable text output

In Section 7.4, we showed how to restrict the heights of code blocks and text output blocks via CSS. In fact, there is a simpler method with the chunk options attr.source and attr.output to add the style attribute to the fenced code blocks in the Markdown output (see Section 11.13 for more information on these options). For example, for this code chunk with the attr.output option:

```
'``{r, attr.output='style="max-height: 100px;"'}
1:300
...
```

Its Markdown output will be:

```
'``r
1:300
'``

'``{style="max-height: 100px;"}
## [1] 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10
## [11] 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20
## ......
'``
```

Then the text output block will be converted to HTML by Pandoc:

```
<code>## [1] 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10
## [11] 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20
## ....</code>
```

To learn more about Pandoc's fenced code blocks, please read its manual at https://pandoc.org/MANUAL.html#fenced-code-blocks.

The attr.source and attr.output options have made it possible for us to specify maximum heights for individual code chunks. However, the syntax is a little clunky, and requires a better understanding of CSS and Pandoc's Markdown syntax. Below we show an example of a custom output hook that works with a custom chunk option max.height, so you will only need to set the chunk option like max.height = "100px" instead of attr.output = 'style="max-height: 100px;"'. In this example, we only manipulate the options argument, but not the x argument.

```
title: スクロール可能なコードブロック
output:
html_document:
highlight: tango
---

チャンクオプション `max.height` が設定されている時, テキスト出力に `style` 属性を追加す
。 るような `output` フックを設定します.

'``{r, include=FALSE}
options(width = 60)
local({
hook_output <- knitr::knit_hooks$get('output')
knitr::knit_hooks$set(output = function(x, options) {
    if (!is.null(options$max.height)) options$attr.output <- c(
        options$attr.output,
        sprintf('style="max-height: %s;"', options$max.height)
```

```
)
   hook_output(x, options)
 })
})
. . .
`max.height` がない場合, 出力の全体が表示されます. 例えば...,
```{r}
1:100
. . .
ここで `max.height` に `100px` を設定します. この高さは 100px を超えているので, テキス
→ ト出力にスクロールバーが現れます.
```{r, max.height='100px'}
1:100
. . .
原則として `max.height` オプションは `attr.output` オプションに変換されます.
→ `attr.output` が既に設定されていたとしても動作します. つまり `attr.output` オプショ
→ ンは上書きされません. 例えば `.numberLines` 属性を付けてテキスト出力の端に行番号を
→ 表示させてみます.
```{r, max.height='100px', attr.output='.numberLines'}
1:100
. . .
```

Figure 12.1 shows the output. Note that in the last code chunk with the chunk option attr.output, the option will not be overridden by max.height because we respect existing attributes by combining them with the style attribute generated by max.height:

```
01 options$attr.output <- c(
02 options$attr.output,
03 sprintf('style="max-height: %s;"', options$max.height)</pre>
```

)

```
Without the max.height option, you will see the full output, e.g.,
 1:100
 7
 ##
 [1]
 1
 2
 3
 4
 5
 6
 8
 9
 10
 11
 12
 13
 ##
 [14]
 14
 15
 16
 17
 18
 19
 20
 21
 22
 23
 24
 25
 26
 [27]
 27
 28
 29
 32
 33
 35
 39
 30
 31
 34
 36
 37
 38
 ##
 [40]
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 [53]
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 [66]
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 ##
 [79]
 79
 87
 89
 90
 91
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 88
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99 100
 [92]
Now we set max.height to 100px. You will see a scrollbar in the text output because its
height is larger than 100px.
 1:100
 ##
 [1]
 2
 3
 4
 5
 6
 7
 8
 9
 10
 11
 12
 13
 26
 ##
 [14]
 19
 20
 21
 22
 23
 24
 25
 14
 15
 16
 17
 18
 ##
 [27]
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 [40]
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 52
 [53]
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
Essentially the max.height option is converted to the attr.output option. It works even
if the attr.output option is present, i.e., it will not override the attr.output option, e.g.,
we show line numbers on the left side of the text output via the .numberLines attribute:
 1:100
 ##
 2
 3
 4
 5
 6
 7
 8
 9
 10
 11
 12
 13
 [1]
 1
 19
 26
 2
 ##
 [14]
 14
 15
 16
 17
 18
 20
 21
 22
 23
 24
 25
 39
 ##
 [27]
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 4
 [40]
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 52
 ##
 51
 ##
 [53] 53
 54 55 56
 57 58 59 60
 61
 62 63 64
```

図12.1: An example of scrollable text output, with its height specified in the chunk option max.height.

You can use a similar trick in the source hook to limit the height of source code blocks.

#### 12.4 Truncate text output

When the text output from a code chunk is lengthy, you may want to only show the first few lines. For example, when printing a data frame of a few thousand rows, it may not be helpful to show the full data, and the first few lines may be enough. Below we redefine the output hook so that we can control the maximum number of lines via a custom chunk option out.lines:

```
01
 # save the built-in output hook
 hook_output <- knitr::knit_hooks$get("output")</pre>
02
03
 # set a new output hook to truncate text output
04
 knitr::knit_hooks$set(output = function(x, options) {
05
 if (!is.null(n <- options$out.lines)) {</pre>
06
 x <- xfun::split_lines(x)</pre>
97
 if (length(x) > n) {
80
 # truncate the output
09
 x \leftarrow c(head(x, n), ".... \n")
10
11
 x <- paste(x, collapse = "\n")</pre>
12
 }
13
 hook_output(x, options)
14
 })
15
```

The basic idea of the above hook function is that if the number of lines of the text output is greater than the threshold set in the chunk option out.lines (stored in the variable n in the function body), we only keep the first n lines and add an ellipsis (....) to indicate the output is truncated.

Now we can test the new output hook by setting the chunk option out.lines = 4 on the chunk below:

```
01 print(cars)
```

And you see four lines of output as expected. Since we have stored the original output hook in hook\_output, we can restore it by calling the set() method again:

```
01 knitr::knit_hooks$set(output = hook_output)
```

As an exercise for readers, you may try to truncate the output in a different way: given the chunk option out.lines to determine the maximum number of lines, can you truncate the output in the middle instead of the end? For example, if out.lines = 10, you extract the first and last five lines, and add . . . . in the middle like this:

```
##
 speed dist
1
 4
 2
2
 4
 10
3
 7
 4
 7
4
 22
46
 24
 70
47
 24
 92
48
 93
 24
49
 24
 120
50
 25
 85
```

Please note that the last line in the output (i.e., the argument x of the hook function) might be an empty line, so you may need something like c(head(x, n/2), '....', tail(x, n/2 + 1)) (+ 1 to take the last empty line into account).

#### 12.5 Output figures in the HTML5 format

By default, plots in R Markdown are included in the tag <img src="..." /> in a or <div> tag in the HTML output. This example below shows how to use the HTML5 <figure> tag to display plots.

```
title: Output figures in `<figure>` tags
output: html_document
Given a plot file path \dot{x} and a figure caption in the chunk
option `options$fig.cap`, we want to write the plot in the
HTML5 tag in this form:
```html
<figure>
  <img src="PATH" alt="CAPTION" />
  <figcaption>CAPTION</figcaption>
</figure>
. . .
Now we redefine the 'plot' hook (only when the output format
is HTML):
```{r}
if (knitr::is_html_output()) knitr::knit_hooks$set(
 plot = function(x, options) {
 cap <- options$fig.cap # figure caption</pre>
 tags <- htmltools::tags</pre>
 as.character(tags$figure(
 tags$img(src = x, alt = cap),
 tags$figcaption(cap)
))
 }
)
. . .
The plot from the code chunk below will be placed in the
`<figure>` tag:
```

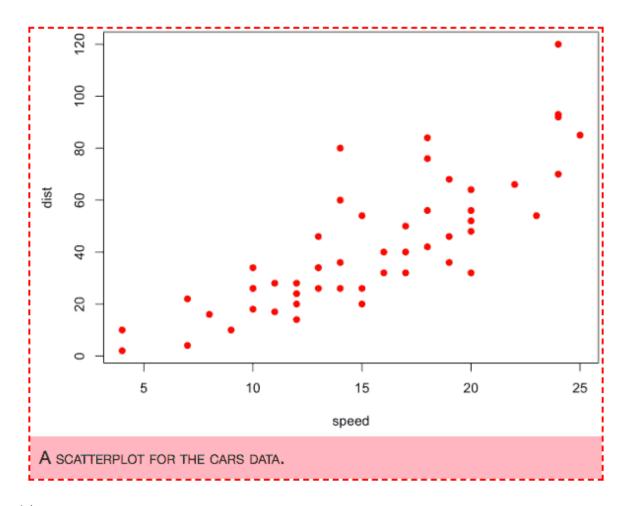
```
```{r, fig.cap='A scatterplot for the cars data.'}
par(mar = c(4.5, 4.5, .2, .2))
plot(cars, pch = 19, col = 'red')
We add some CSS styles to "see" the '<figure>' and
`<figcaption>` tags better (the `figure` has a dashed
border, and the caption has a light pink background):
```{css, echo=FALSE}
figure {
 border: 2px dashed red;
 margin: 1em 0;
}
figcaption {
 padding: .5em;
 background: lightpink;
 font-size: 1.3em;
 font-variant: small-caps;
}
. . .
```

The figure output is shown in Figure 12.2. Note that we actually overrode the default plot hook in this example, while most other examples in this chapter build custom hooks on top of the default hooks. You should completely override default hooks only when you are sure you want to ignore some built-in features of the default hooks. For example, the plot hook function in this case did not consider possible chunk options like out.width = '100%' or fig.show = 'animate'.

This example shows you what you can possibly do with the plot file path x in the plot hook. If all you need is to customize the style of figures, you do not have to use the HTML5 tags. Usually the default plot hook will output images in the HTML code like this:

```
<div class="figure">

```



2.2: A figure in the HTML5 figure tag.

```
CAPTION
</div>
```

So you can just define css rules for div.figure and p.caption.

## 第13章

# Chunk Hooks (\*)

A chunk hook is a function that is triggered by a chunk option when the value of this chunk option is not NULL. Chunk hooks provide a way for you to execute additional tasks beyond running the code in a chunk. For example, you may want to post-process plots (e.g., Section 13.1 and Section 13.2), or record the time taken by a code chunk (Section 13.3). Such tasks may not be essential to the computing or analysis in the report, but they can be useful for other purposes (e.g., enhance plots or help you identify the most time-consuming chunks).

You can use chunk hooks purely for their side effects (e.g., only printing out certain information to the console), or for their returned values, which will be written to the output document if the value is a character value.

Like output hooks (see Chapter 12), chunk hooks are also registered via the object knitr::knit\_hooks. Please note that the names of output hooks are reserved by **knitr**, so you must not use these names for your custom chunk hooks:

```
01 names(knitr:::.default.hooks)
```

```
[1] "source" "output"
[3] "warning" "message"
[5] "error" "plot"
[7] "inline" "chunk"
[9] "text" "evaluate.inline"
[11] "evaluate" "document"
```

A chunk hook is associated with a chunk option of the same name. For example, you can register a chunk hook with the name greet:

```
knitr::knit_hooks$set(greet = function(before) {
 if (before)
 "Hello!" else "Bye!"
 })
```

We will explain the arguments of the hook function in a moment. Now we set the chunk option greet = TRUE for the chunk below:

```
'``{r, greet=TRUE}
1 + 1
...
```

And you will see that "Hello!" appears before the chunk, and "Bye!" appears after the chunk in the output below (which is because they are character values):

```
Hello!

1 + 1

[1] 2

Bye!
```

A chunk hook function can possibly take four arguments: before, options, envir, and name. In other words, it can be of this form:

```
function(before, options, envir, name) {
}
```

All four arguments are optional. You can have four, three, two, one, or even no arguments. In the above example, we used one argument (i.e., before). The meanings of these arguments are:

• before: Whether the chunk hook is currently being executed before or after the

code chunk itself is executed. Note that a chunk hook is executed twice for every code chunk (once before with hook(before = TRUE) and once after with hook(before = FALSE).

- options: The list of chunk options for the current code chunk, e.g., list(fig.width = 5, echo = FALSE, ...).
- envir: The environment in which the chunk hook is evaluated.
- name: The name of the chunk option that triggered the chunk hook.

As we mentioned in the beginning of this chapter, non-character values returned by chunk hooks are silently ignored, and character values are written to the output document.

#### 13.1 Crop plots

The chunk hook knitr::hook\_pdfcrop() can be used to crop PDF and other types of plot files, i.e., remove the extra margins in plots. To enable it, set this hook via knit\_hooks\$set() in a code chunk, and turn on the corresponding chunk option, e.g.,

```
81 knitr::knit_hooks$set(crop = knitr::hook_pdfcrop)
```

Then you can use the chunk option crop = TRUE to crop plots in a code chunk.

The hook hook\_pdfcrop() calls the external program pdfcrop to crop PDF files. This program often comes with a LaTeX distribution (e.g., TeX Live or MiKTeX). You can check if it is available in your system via:

```
if the returned value is not empty, it is available
Sys.which("pdfcrop")
```

```
pdfcrop
"/usr/local/bin/pdfcrop"
```

If you are using the LaTeX distribution TinyTeX (see Section 1.2), and pdfcrop is not available in your system, you may install it via tinytex::tlmgr\_install('pdfcrop').

For non-PDF plot files such as PNG or JPEG files, this hook function calls the R package **magick** (Ooms, 2021) for cropping. You need to make sure this R package has been

installed. Figure 13.1 shows a plot that is not cropped, and Figure 13.2 shows the same plot but has been cropped.

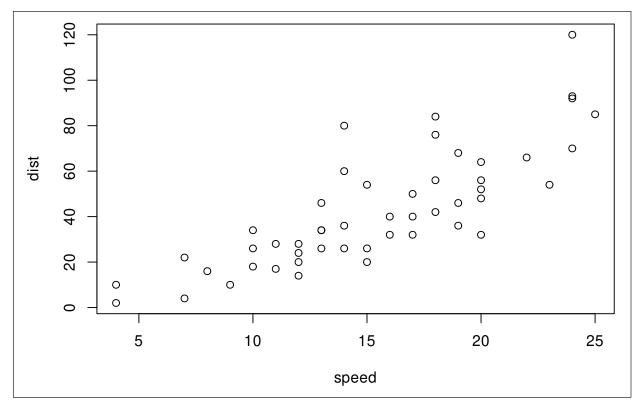


図13.1: A plot that is not cropped.

#### 13.2 Optimize PNG plots

If you have installed the program OptiPNG (http://optipng.sourceforge.net), you may use the hook knitr::hook\_optipng() to optimize PNG plot files to a smaller size without losing the image quality.

```
81 knitr::knit_hooks$set(optipng = knitr::hook_optipng)
```

After you set up this hook, you can use the chunk option optipng to pass command-line arguments to OptiPNG, e.g., optipng = '-o7'. These command-line arguments are optional, which means you can just use optipng = '' to enable the hook for a code chunk. Please see the user manual on the website of OptiPNG to know the possible arguments.

Note that macOS users can easily install OptiPNG with Homebrew (https://brew.sh):

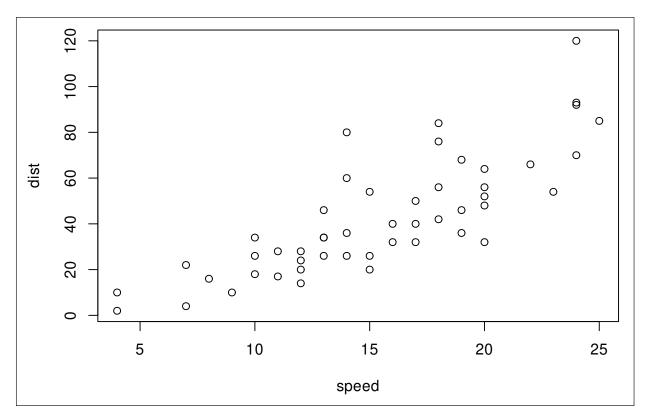


図13.2: A plot that is cropped.

brew install optipng.

### 13.3 Report how much time each chunk takes to run

By default, **knitr** provides a text-based progress bar to show you the knitting progress. If you want more precise timing information about the chunks, you may register a custom chunk hook to record the time for each chunk. Here is an example hook:

```
knitr::knit_hooks$set(time_it = local({
01
 now <- NULL
02
 function(before, options) {
03
 if (before) {
04
 # record the current time before each chunk
05
 now <<- Sys.time()</pre>
06
 } else {
07
 # calculate the time difference after a chunk
80
```

```
res <- difftime(Sys.time(), now)

return a character string to show the time

paste("Time for this code chunk to run:", res)

}

}

}

}
```

Then you can time a chunk with the chunk option time\_it, e.g.,

```
```{r, time_it = TRUE}
Sys.sleep(2)
```

If you want to time all code chunks, you can certainly set the option globally: knitr::opts_chunk\$set(time_it = TRUE).

In the above hook function, you can also output more information from the chunk options (i.e., the options argument of the function). For example, you may print out the chunk label in the returned value:

```
paste("Time for the chunk", options$label, "to run:", res)
```

Or you may record the time without printing it out in the hook:

```
all_times <- list() # store the time for each chunk
01
02
    knitr::knit_hooks$set(time_it = local({
       now <- NULL
03
       function(before, options) {
04
         if (before) {
05
           now <<- Sys.time()</pre>
06
         } else {
07
           res <- difftime(Sys.time(), now)</pre>
80
           all_times[[options$label]] <<- res</pre>
09
         }
10
11
       }
    }))
12
```

Then you can access all the time information in the object all_times. This object is a named list with the names being chunk labels, and element values being the execution time for each chunk.

Lastly, as a technical note, we want to explain the use of the local() function in the previous hooks because some readers may not be familiar with it. This function allows you to run code in a "local" environment. The main benefit is that variables created in the code are local to that environment, so they will not pollute the outer environment (usually the global environment). For example, we created a variable now in local(), and used it in the time_it hook function. In the hook function, we update the value of now via the double arrow <<- instead of the normal assignment operator <-. This is because <<- assigns a value to a variable in the parent environment (which is the environment in local() in this case), and <- can only assign values to variables in the current environment. Before each code chunk is evaluated, the local variable now records the current time. After each code chunk is evaluated, we calculate the time difference between the current time and now. Note that local() returns the last value in the expression passed to it, which is a (hook) function in this case. In short, local() can make your workspace cleaner by not exposing variables that are only used locally but unused in the global environment. If you do not mind creating a variable now in the global environment, you can choose not to use local().

13.4 Show the chunk header in the output

Sometimes you may want to show the original code chunk header to your readers. For example, when you write an R Markdown tutorial, you may want to show both the chunk output and the chunk options that you used to generate the output, so your readers can learn how to do it by themselves.

The original chunk options are actually stored as a character string in the chunk option params.src. After you know this, you may write a chunk hook to add params.src to the output. Below is a full example:

```
title: Show chunk headers in the output
---
Set up a chunk hook named 'wrapper' to wrap the chunk
output inside the original chunk header and footer.
```

```
```{r, setup, include=FALSE}
knitr::knit_hooks$set(wrapper = function(before, options) {
 # the original chunk might be indented
 if (is.null(indent <- options$indent)) indent <- ''</pre>
 # hide the wrapper=TRUE option
 opts <- gsub(', wrapper=TRUE', '', options$params.src)</pre>
 if (before) {
 # add the header
 sprintf('\n\n%s```\n'``{r,%s}\n'``\n', indent, opts)
 } else {
 # add the footer
 sprintf('\n\n%s```\n```\n'\`\n', indent)
 }
})
. . .
Now we apply the hook via the chunk option `wrapper=TRUE`.
Remember to put 'wrapper=TRUE' at the end of the header, and
it has to be 'wrapper=TRUE' precisely (e.g., not 'wrapper=T'),
following a comma and a space, unless you adjust the 'gsub()'
call in the above hook.
```{r, test-label, collapse=TRUE, wrapper=TRUE}
1 + 1
plot(cars)
. . .
You should see the original chunk header appear in
the output. The hook should also work when the chunk
is indented, e.g.,
- One bullet.
```

```
'``{r, eval=TRUE, wrapper=TRUE}
2 + 2
'``
- Another bullet.
```

Basically, we restored the chunk header from options\$params.src by putting this string inside ```{r, }. Then we wrapped this line in a pair of four backticks, so it can be displayed verbatim in the output. Note that the original code chunk might be indented (e.g., when it is nested in a list item), so we also need to add the proper indentation, which is stored in the chunk option options\$indent.

The output of the bullet list at the end of the above example will be like this:

```
One bullet.
'``{r, eval=TRUE}
2 + 2
## [1] 4
'``
Another bullet.
```

You can see that the code chunk was evaluated, and the chunk header was also added.

13.5 Embed an interactive 3D plot with rgl

The **rgl** package (Adler and Murdoch, 2021) can be used to generate interactive 3D plots. These plots can still be interactive if they are saved to the WebGL format, which can be done through a hook function rgl::hook_webgl(). Below is an example that shows you how to set up **rgl** and **knitr** so 3D plots can be saved while preserving the interactivity:

```
title: Embed 3D plots with rgl
output: html_document
---

Set up a hook to save **rgl** plots:

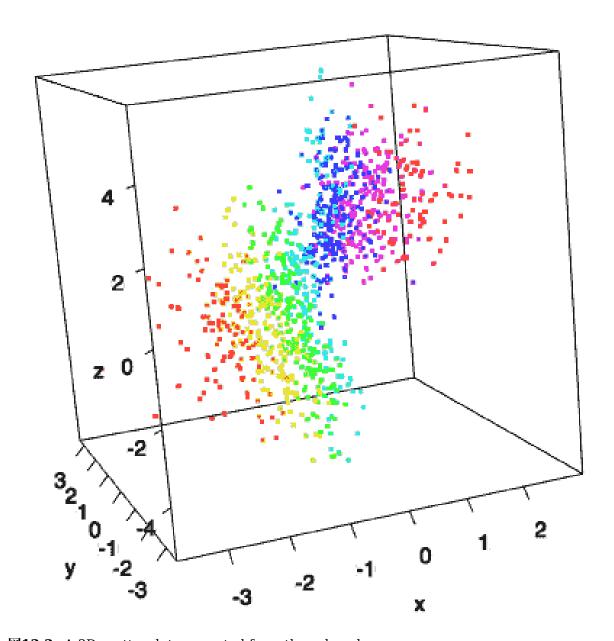
'``{r, setup}
library(rgl)
knitr::knit_hooks$set(webgl = hook_webgl)

'``

See if it works for this 3D plot after we enable the hook
via the chunk option `webgl = TRUE`:

'``{r, test-rgl, webgl=TRUE}
x <- sort(rnorm(1000))
y <- rnorm(1000)
z <- rnorm(1000) + atan2(x,y)
plot3d(x, y, z, col = rainbow(1000))
'``</pre>
```

You should get an interactive 3D scatterplot like Figure 13.3 after you compile this example. Note that the interactive plots only work when the output format is HTML.



213.3: A 3D scatterplot generated from the rgl package.

第14章

Miscellaneous knitr Tricks

Besides chunk options (Chapter 11), output hooks (Chapter 12), and chunk hooks (Chapter 13), there are other useful functions and tricks in **knitr**. We introduce these tricks in this chapter, such as how to reuse code chunks, exit knitting early, display a plot in a custom place, and so on.

14.1 Reuse code chunks

You can freely reuse code chunks anywhere in your source document without cut-andpaste. The key is to label your code chunks, so you can refer to them with labels in other places. There are three ways to reuse code chunks.

14.1.1 Embed one chunk in another chunk (*)

You can embed one code chunk in another code chunk by enclosing its label in <>>>. Then **knitr** will automatically expand the string <<label>> to the actual code. For example, you can create an R function in this way:

```
First, we check if the input value is numeric:
    '``{r, check-arg, eval=FALSE}
    if (!is.numeric(x)) stop("The input must be numeric!")
    '``
Then we do the actual conversion:
    '``{r, convert, eval=FALSE}
    (x - 32) * 5/ 9
    '``
```

This is based on one of the main ideas of Literate Programming,*1 which was proposed by Donald Knuth. The advantage of this technique is that you can split (complex) code into smaller parts, write each part in a separate code chunk, and explain them with narratives. All parts can be composed into the main code chunk to be executed.

For the above example, the first code chunk (with the label f2c) will become:

```
'``{r, f2c}
F2C <- function(x) {
   if (!is.numeric(x)) stop("The input must be numeric!")
     (x - 32) * 5/ 9
}
...</pre>
```

You can embed an arbitrary number of other code chunks in one code chunk. The embedding can also be recursive. For example, you may embed chunk A in chunk B, and chunk B in chunk C. Then chunk C will include code from chunk A via chunk B.

The marker <<label>> does not have to be on a separate line. It can be embedded anywhere in a code chunk.

^{*1} https://en.wikipedia.org/wiki/Literate_programming

14.1.2 Use the same chunk label in another chunk

If you want to use exactly the same code chunk two or more times, you may define the chunk with a label, and create more code chunks with the same label but leave the chunk content empty, e.g.,

```
Here is a code chunk that is not evaluated:

'``{r, chunk-one, eval=FALSE}

1 + 1

2 + 2

...

Now we actually evaluate it:

'``{r, chunk-one, eval=TRUE}

...
```

We used the chunk label "chunk-one" twice in the above example, and the second chunk just reuses code from the first chunk.

We recommend that you do not use this method to run a code chunk more than once to generate plots (or other files), because plot files created from a later chunk may overwrite files from a previous chunk. It is okay if only one of such chunks uses the chunk option eval = TRUE, and all other chunks use eval = FALSE.

14.1.3 Use reference labels (*)

The chunk option ref.label takes a vector of chunk labels to retrieve the content of these chunks. For example, the code chunk with the label chunk-a is the combination of chunk-c and chunk-b below:

```
```{r chunk-a, ref.label=c('chunk-c', 'chunk-b')}
...
```

```
'``{r chunk-b}
this is the chunk b
1 + 1
'``
'``{r chunk-c}
this is the chunk c
2 + 2
'``
```

In other words, chunk-a is essentially this:

```
'``{r chunk-a}
this is the chunk c
2 + 2
this is the chunk b
1 + 1
'``
```

The chunk option ref.label has provided a very flexible way of reorganizing code chunks in a document without resorting to cut-and-paste. It does not matter if the code chunks referenced are before or after the code chunk that uses ref.label. An early code chunk can reference a later chunk.

There is an application of this chunk option in Section 4.19.

## 14.2 Use an object before it is created (\*)

All code in a **knitr** document, including the code in code chunks and inline R expressions, is executed in linear order from beginning to end. In theory, you cannot use a variable before it is assigned a value. However, in certain cases, we may want to mention the value of a variable earlier in the document. For example, it is common to present a result in the abstract of an article, but the result is actually computed later in the document. Below is an example that illustrates the idea but will not compile:

```
title: An important report
abstract: >
 In this analysis, the average value of
 'x' is 'r mx'.

We create the object 'mx' in the following chunk:
'''{r}
x <- 1:100
mx <- mean(x)
'''</pre>
```

To solve this problem, the value of the object has to be saved somewhere and loaded the next time when the document is compiled. Please note that this means the document has to be compiled at least twice. Below is one possible solution using the saveRDS() function:

```
'``{r, include=FALSE}
mx <- if (file.exists('mean.rds')) {
 readRDS('mean.rds')
} else {
 "The value of `mx` is not available yet"
}
'``

title: An important report
abstract: >
 In this analysis, the average value of
 `x` is `r mx`.

We create the object `mx` in the following chunk:
```

```
'``{r}
x <- 1:100
mx <- mean(x)
saveRDS(mx, 'mean.rds')
'``</pre>
```

The first time you compile this document, you will see the phrase "The value of mx is not available yet" in the abstract. Later, when you compile it again, you will see the actual value of mx.

The function knitr::load\_cache() is an alternative solution, which allows you to load the value of an object from a specific code chunk after the chunk has been cached. The idea is similar to the above example, but it will save you the effort of manually saving and loading an object, because the object is automatically saved to the cache database, and you only need to load it via load\_cache(). Below is the simplified example:

```
title: An important report
abstract: >
 In this analysis, the average value of
 'x' is 'r knitr::load_cache('mean-x', 'mx')'.

We create the object 'mx' in the following chunk:
'``{r mean-x, cache=TRUE}
x <- 1:100
mx <- mean(x)
'``</pre>
```

In this example, we added a chunk label mean-x to the R code chunk (which is passed to the load\_cache() function), and cached it using the chunk option cache = TRUE. All objects in this code chunk will be saved to the cache database. Again, you will have to compile this document at least twice, so the object mx can be correctly loaded from the cache database. If the value of mx is not going to be changed in the future, you do not need to compile the document one more time.

If you do not specify the object name in the second argument to load\_cache(), the whole cache database will be loaded into the current environment. You can then use any objects that were in the cache database before these objects are created later in the document, e.g.,

```
knitr::load_cache("mean-x")
x # the object `x`
mx # the object `mx`
```

## 14.3 Exit knitting early

Sometimes we may want to exit knitting early and not at the end of the document. For example, we may be working on some analysis and only wish to share the first half of the results, or we may still be working on code at the bottom that is not yet complete. In these situations, we could consider using the knit\_exit() function in a code chunk, which will end the knitting process after that chunk.

Below is a simple example, where we have a very simple chunk followed by a more timeconsuming one:

```
'``{r}
1 + 1
knitr::knit_exit()
...

You will only see the above content in the output.

'``{r}
Sys.sleep(100)
...
```

Normally you have to wait for 100 seconds, but since we have called knit\_exit(), the rest of the document will be ignored.

### 14.4 Generate a plot and display it elsewhere

Normally plots generated in a code chunk are displayed beneath the code chunk, but you can choose to show them elsewhere and (optionally) hide them in the code chunk. Below is an example:

```
We generate a plot in this code chunk but do not show it:

'``{r cars-plot, dev='png', fig.show='hide'}
plot(cars)
...

After another paragraph, we introduce the plot:
![A nice plot.]('r knitr::fig_chunk('cars-plot', 'png')')
```

In the code chunk, we used the chunk option fig.show='hide' to hide the plot temporarily. Then in another paragraph, we called the function knitr::fig\_chunk() to retrieve the path of the plot file, which is usually like test\_files/figure-html/cars-plot-1.png. You need to pass the chunk label and the graphical device name to fig\_chunk() for it to calculate the plot file path.

You may see https://stackoverflow.com/a/46305297/559676 for an application of fig\_chunk() to **blogdown** websites. This function works for any R Markdown output formats. It can be particularly helpful for presenting plots on slides, because the screen space is often limited on slide pages. You may present code on a slide, and reveal the plot on a different slide.

## 14.5 Modify a plot in a previous code chunk

By default, **knitr** opens a new graphical device to record plots for each new code chunk. This brings a problem: you cannot easily modify a plot from a previous code chunk, because the previous graphical device has been closed. This is usually problematic for base R graphics (not so for grid graphics such as those created from **ggplot2** (Wickham Chang, et al., 2020) because plots can be saved to R objects). For example, if we draw a plot in

one code chunk, and add a line to the plot in a later chunk, R will signal an error saying that a high-level plot has not been created, so it could not add the line.

If you want the graphical device to remain open for all code chunks, you may set a **knitr** package option in the beginning of your document device:

```
01 knitr::opts_knit$set(global.device = TRUE)
```

Please note that it is opts\_knit instead of the more frequently used opts\_chunk. You may see the Stack Overflow post https://stackoverflow.com/q/17502050 for an example.

When you no longer need this global graphical device, you can set the option to FALSE. Here is a full example:

```
title: "Using a global graphical device to record plots"

First, turn on a global graphical device:

'``{r, include=FALSE}
knitr::opts_knit$set(global.device = TRUE)
...

Draw a plot:

'``{r}
par(mar = c(4, 4, 0.1, 0.1))
plot(cars)
...

Add a line to the plot in the previous code chunk:

'``{r}
fit <- lm(dist ~ speed, data = cars)
abline(fit)
...</pre>
```

```
No longer use the global device:

'``{r, include=FALSE}

knitr::opts_knit$set(global.device = FALSE)

'``

Draw another plot:

'``{r}

plot(pressure, type = 'b')

'``
```

## 14.6 Save a group of chunk options and reuse them (\*)

If you frequently use some chunk options, you may save them as a group and reuse them later only using the group name. This can be done with knitr::opts\_template\$set(name = list(options)). Then you can use the chunk option opts.label to refer to the group name. For example:

```
'``{r, setup, include=FALSE}
knitr::opts_template$set(fullwidth = list(
 fig.width = 10, fig.height = 6,
 fig.retina = 2, out.width = '100%'
))
'``
'``{r, opts.label='fullwidth'}
plot(cars)
'``
```

With opts.label = 'fullwidth', **knitr** will read chunk options from knitr::opts\_template, and apply them to the current chunk. This can save you some typing effort. If a chunk option is to be used globally in a document, you should consider setting it globally (see

### Chapter 11).

You can override options read from opts.label, e.g., if you set fig.height = 7 in the chunk below, the actual fig.height will be 7 instead of 6.

```
'``{r, opts.label='fullwidth', fig.height=7}
plot(cars)
...
```

You can save an arbitrary number of grouped options, e.g., knitr::opts\_template\$set(group1 = list(...), group2 = list(...)).

## 14.7 Use knitr::knit\_expand() to generate Rmd source

The function knitr::knit\_expand() "expands" an expression in {{ }} (by default) to its value, e.g.,

```
knitr::knit_expand(text = "The value of `pi` is {{pi}}.")

[1] "The value of `pi` is 3.14159265358979."

knitr::knit_expand(

text = "The value of `a` is {{a}}, so `a + 1` is {{a+1}}.",

a = round(rnorm(1), 4)

[1] "The value of `a` is -1.322, so `a + 1` is -0.322."
```

This means that if you have an Rmd document that contains some dynamic parts in {{ }}, you may apply knit\_expand() on the document, and then call knit() to compile it. For example, here is a template document named template.Rmd:

```
Regression on {{i}}

'``{r lm-{{i}}}

lm(mpg ~ {{i}}, data = mtcars)
...
```

We can build linear regression models using mpg against all other variables one by one in

the mtcars dataset:

```
'``{r, echo=FALSE, results='asis'}
src = lapply(setdiff(names(mtcars), 'mpg'), function(i) {
 knitr::knit_expand('template.Rmd')
})
res = knitr::knit_child(text = unlist(src), quiet = TRUE)
cat(res, sep = '\n')
'``
```

If you find it difficult to understand this example, please see Section 11.11 for the meaning of the chunk option results = 'asis', and Section 16.4 for the usage of knitr::knit\_child().

## 14.8 Allow duplicate labels in code chunks (\*)

By default, **knitr** does not allow duplicate code chunk labels in the document. Duplicate labels will result in an error when the document is knitted. This occurs most frequently when a code chunk is copied and pasted within a document. You may have seen an error message like this:

```
processing file: myfile.Rmd
Error in parse_block(g[-1], g[1], params.src, markdown_mode):
 Duplicate chunk label 'cars'
Calls: <Anonymous> ... process_file -> split_file -> lapply ->
 FUN -> parse_block
Execution halted
```

However, there are scenarios where we may wish to allow duplicate labels. For example, if we have one parent document parent.Rmd in which we knit the child document multiple times, it will fail:

```
settings
settings <- list(...)

run once</pre>
```

```
knit_child("useful_analysis.Rmd")

new settings
settings <- list(...)

run again
knit_child("useful_analysis.Rmd")</pre>
```

In this scenario, we can allow duplicate labels by setting this global option in R *before* the child document is knitted:

```
01 options(knitr.duplicate.label = "allow")
```

If you want to allow duplicate labels in the main document instead of the child document, you have to set this option *before* knitr::knit() is called. One possible way to achieve that is to set the option in your ~/.Rprofile file (see the help page ?Rprofile for more information).

You should set this option with caution. As with most error messages, they are there for a reason. Allowing duplicate chunks can create silent problems with figures and cross references. For example, in theory, if two code chunks have the same label and both chunks generate plots, their plot files will overwrite each other (without error or warning messages), because the filenames of plots are determined by the chunk labels. With the option knitr.duplicate.label = "allow", knitr will silently change the duplicate labels by adding numeric suffixes. For example, for the two code chunks:

```
'``{r, test}
plot(1:10)
...
'``{r, test}
plot(10:1)
...
```

The second label will be silently changed to test-1. This may avoid overwriting the plot

from the chunk with the label test, but it also makes the chunk label unpredictable, so you may have difficulties in cross-referencing figures (see Section 4.7), because the cross references are also based on chunk labels.

### 14.9 A more transparent caching mechanism

If you feel the caching mechanism of **knitr** introduced in Section 11.4 is too complicated (it is!), you may consider a simpler caching mechanism based on the function xfun::cache\_rds(), e.g.,

```
% xfun::cache_rds({
% # write your time-consuming code in this expression
% })
```

The tricky thing about **knitr**'s caching is how it decides when to invalidate the cache. For xfun::cache\_rds(), it is much clearer: the first time you pass an R expression to this function, it evaluates the expression and saves the result to a .rds file; the next time you run cache\_rds() again, it reads the .rds file and returns the result immediately without evaluating the expression again. The most obvious way to invalidate the cache is to delete the .rds file. If you do not want to manually delete it, you may call xfun::cache\_rds() with the argument rerun = TRUE.

When xfun::cache\_rds() is called inside a code chunk in a **knitr** source document, the path of the .rds file is determined by the chunk option cache.path and the chunk label. For example, for a code chunk with the chunk label foo in the Rmd document input.Rmd:

```
'``{r, foo}
res <- xfun::cache_rds({
 Sys.sleep(3)
 1:10
})</pre>
```

The path of the .rds file will be of the form input\_cache/FORMAT/foo\_HASH.rds, where FORMAT is the Pandoc output format name (e.g., html or latex), and HASH is an MD5 hash that contains 32 hexadecimal digits (consisting a-z and 0-9), e.g., in-

put\_cache/html/foo\_7a3f22c4309d400eff95de0e8bddac71.rds.

As documented on the help page ?xfun::cache\_rds, there are two common cases in which you may want to invalidate the cache: 1) the code in the expression to be evaluated has changed; 2) the code uses an external variable, and the value of that variable has changed. Next we will explain how these two ways of cache invalidation work, as well as how to keep multiple copies of the cache corresponding to different versions of the code.

### 14.9.1 Invalidate the cache by changing code in the expression

When you change the code in cache\_rds() (e.g., from cache\_rds( $\{x + 1\}$ ) to cache\_rds( $\{x + 2\}$ )), the cache will be automatically invalidated and the expression will be re-evaluated. However, please note that changes in white spaces or comments do not matter. Or generally speaking, as long as the change does not affect the parsed expression, the cache will not be invalidated. For example, the two expressions passed to cache\_rds() below are essentially identical:

```
res <- xfun::cache_rds({
 Sys.sleep(3);
 x<-1:10; # semi-colons won't matter
 x+1;
})

res <- xfun::cache_rds({
 Sys.sleep(3)
 x <- 1:10 # a comment
 x +
 1 # feel free to make any changes in white spaces
})</pre>
```

Hence if you have executed cache\_rds() on the first expression, the second expression will be able to take advantage of the cache. This feature is helpful because it allows you make cosmetic changes in your code without invalidating the cache.

If you are not sure if two versions of code are equivalent, you may try the parse\_code() below:

```
parse_code <- function(expr) {</pre>
01
 deparse(substitute(expr))
02
03
 # white spaces and semi-colons do not matter
04
 parse_code({x+1})
05
 " x + 1" "}"
 ## [1] "{"
 parse_code({ x +
 1; })
01
 x + 1" "}"
 ## [1] "{"
 # left arrow and right arrow are equivalent
01
 identical(parse_code(\{x \leftarrow 1\}), parse_code(\{1 \rightarrow x\}))
02
 ## [1] TRUE
```

### 14.9.2 Invalidate the cache by changes in global variables

There are two types of variables in an expression: global variables and local variables. Global variables are those created outside the expression, and local variables are those created inside the expression. If the value of a global variable in the expression has changed, your cached result will no longer reflect the result that you would obtain by running the expression again. For example, in the expression below, if y has changed, you are most likely to want to invalidate the cache and rerun the expression, otherwise you still get the result from the old value of y:

```
y <- 2

res <- xfun::cache_rds({
 x <- 1:10
 x + y
})</pre>
```

To invalidate the cache when y has changed, you may let cache\_rds() know through the

hash argument that y needs to be considered when deciding if the cache should be invalidated:

```
res <- xfun::cache_rds({
 x <- 1:10
 x + y
}, hash = list(y))</pre>
```

When the value of the hash argument is changed, the 32-digit hash in the cache filename (as mentioned earlier) will change accordingly, therefore the cache will be invalidated. This provides a way to specify the cache's dependency on other R objects. For example, if you want the cache to be dependent on the version of R, you may specify the dependency like this:

```
res <- xfun::cache_rds({
 x <- 1:10
 x + y
}, hash = list(y, getRversion()))</pre>
```

Or if you want the cache to depend on when a data file was last modified:

```
res <- xfun::cache_rds({
 x <- read.csv("data.csv")
 x[[1]] + y
}, hash = list(y, file.mtime("data.csv")))</pre>
```

If you do not want to provide this list of global variables to the hash argument, you may try hash = "auto" instead, which tells cache\_rds() to try to figure out all global variables automatically and use a list of their values as the value for the hash argument, e.g.,

```
res <- xfun::cache_rds({
 x <- 1:10
 x + y + z # y and z are global variables
}, hash = "auto")</pre>
```

This is equivalent to:

```
res <- xfun::cache_rds({
 x <- 1:10
 x + y + z # y and z are global variables
}, hash = list(y = y, z = z))</pre>
```

The global variables are identified by codetools::findGlobals() when hash = "auto", which may not be completely reliable. You know your own code the best, so we recommend that you specify the list of values explicitly in the hash argument if you want to be completely sure which variables can invalidate the cache.

### 14.9.3 Keep multiple copies of the cache

Since the cache is typically used for time-consuming code, perhaps you should invalidate it conservatively. You might regret invalidating the cache too soon or aggressively, because if you should need an older version of the cache again, you would have to wait for a long time for the computing to be redone.

The clean argument of cache\_rds() allows you to keep older copies of the cache if you set it to FALSE. You can also set the global R option options(xfun.cache\_rds.clean = FALSE) if you want this to be the default behavior throughout the entire R session. By default, clean = TRUE and cache\_rds() will try to delete the older cache every time. Setting clean = FALSE can be useful if you are still experimenting with the code. For example, you can cache two versions of a linear model:

```
model <- xfun::cache_rds({
 lm(dist ~ speed, data = cars)
}, clean = FALSE)

model <- xfun::cache_rds({
 lm(dist ~ speed + I(speed^2), data = cars)
}, clean = FALSE)</pre>
```

After you decide which model to use, you can set clean = TRUE again, or delete this argument (so the default TRUE is used).

### 14.9.4 Comparison with **knitr**'s caching

You may wonder when to use **knitr**'s caching (i.e., set the chunk option cache = TRUE), and when to use xfun::cache\_rds() in a **knitr** source document. The biggest disadvantage of xfun::cache\_rds() is that it does not cache side effects (but only the value of the expression), whereas **knitr** does. Some side effects may be useful, such as printed output or plots. For example, in the code below, the text output and the plot will be lost when cache\_rds() loads the cache the next time, and only the value 1:10 will be returned:

```
01 xfun::cache_rds({
 print("Hello world!")
 plot(cars)
 1:10
 })
```

By comparison, for a code chunk with the option cache = TRUE, everything will be cached:

```
'``{r, cache=TRUE}
print("Hello world!")
plot(cars)
1:10
'``
```

The biggest disadvantage of **knitr**'s caching (and also what users complain most frequently about) is that your cache might be inadvertently invalidated, because the cache is determined by too many factors. For example, any changes in chunk options can invalidate the cache,\*2 but some chunk options may not be relevant to the computing. In the code chunk below, changing the chunk option fig.width = 6 to fig.width = 10 should not invalidate the cache, but it will:

```
'``{r, cache=TRUE, fig.width=6}
there are no plots in this chunk
```

<sup>\*2</sup> This is the default behavior, and you can change it. See https://yihui.org/knitr/demo/cache/ for how you can make the cache more granular, so not all chunk options affect the cache.

```
x <- rnorm(1000)
mean(x)
...
```

Actually, **knitr** caching is quite powerful and flexible, and its behavior can be tweaked in many ways. As its author, I often doubt if it is worth introducing these lesser-known features, because you may end up spending much more time on learning and understanding how the cache works than the time the actual computing takes.

In case it is not clear, xfun::cache\_rds() is a general way for caching the computing, and it works anywhere, whereas **knitr**'s caching only works in **knitr** documents.

## 第 15 章

# Other Languages

Besides the R language, many other languages are supported in R Markdown through the **knitr** package. The language name is indicated by the first word in the curly braces after the three opening backticks. For example, the little r in ```{r} indicates that the code chunk contains R code, and ```{python} is a Python code chunk. In this chapter, we show a few languages that you may not be familiar with.

In **knitr**, each language is supported through a language engine. Language engines are essentially functions that take the source code and options of a chunk as the input, and return a character string as the output. They are managed through the object knitr::knit\_engines. You may check the existing engines via:

```
01 names(knitr::knit_engines$get())
```

```
[1] "awk"
 "bash"
 "coffee"
 "gawk"
##
 "haskell"
 "lein"
 "mysql"
 [5] "groovy"
 [9] "node"
 "octave"
 "perl"
 "psql"
[13] "Rscript"
 "sas"
 "scala"
 "ruby"
[17] "sed"
 "sh"
 "stata"
 "zsh"
 "dot"
[21] "highlight"
 "Rcpp"
 "tikz"
[25] "c"
 "cc"
 "fortran95"
 "fortran"
[29] "asy"
 "cat"
 "asis"
 "stan"
[33] "block"
 "is"
 "block2"
 "css"
[37] "sql"
 "go"
 "python"
 "julia"
[41] "sass"
 "scss"
```

At the moment, most code chunks of non-R languages are executed independently. For example, all bash code chunks in the same document are executed separately in their own sessions, so a later bash code chunk cannot use variables created in a previous bash chunk, and the changed working directory (via cd) will not be persistent across different bash chunks. Only R, Python, and Julia code chunks are executed in the same session. Please note that all R code chunks are executed in the same R session, and all Python code chunks are executed in the same Python session, etc. The R session and the Python session are two different sessions, but it is possible to access or manipulate objects of one session from another session (see Section 15.2).

Section 2.7\*1 of the *R Markdown Definitive Guide* (Xie J.J. Allaire, and Grolemund, 2018) shows examples of using Python, Shell, SQL, Rcpp, Stan, JavaScript, CSS, Julia, C, and Fortran code in R Markdown. In this chapter, we will show more language engines, and you may find more examples in the repository at https://github.com/yihui/knitr-examples (look for filenames that contain the word "engine").

First, let's reveal how a language engine works by registering a custom language engine.

## 15.1 Register a custom language engine (\*)

You can register a custom language engine via the method knitr::knit\_engines\$set(). It accepts a function as its input, e.g.,

```
knitr::knit_engines$set(foo = function(options) {

the source code is in options$code; just do whatever

you want with it

})
```

This registers the foo engine, and you will be able to use a code chunk that starts with ```{foo}.

The engine function has one argument, options, which is a list of chunk options of the code chunk. You can access the source code of the chunk as a character vector in options\$code. For example, for the code chunk:

<sup>\*1</sup> https://bookdown.org/yihui/rmarkdown/language-engines.html

```
'``{foo}
1 + 1
2 + 2
...
```

The code element of options would be a character vector c('1 + 1', '2 + 2').

Language engines do not really have to deal with computer languages, but can process any text in a code chunk. First, we show a simple example of an engine that converts the content of a code chunk to uppercase:

```
knitr::knit_engines$set(upper = function(options) {
 code <- paste(options$code, collapse = "\n")
 if (options$eval)
 toupper(code) else code
}</pre>
```

The key is that we apply the function toupper to the "code," and return the result as a single character string (by concatenating all lines of code by \n). Note that toupper() is applied only when the chunk option eval = TRUE, otherwise the original string is returned. This shows you how to make use of chunk options like eval inside the engine function. Similarly, you may consider adding if (options\$results == 'hide') return() to the function body to hide the output when the chunk option results = 'hide'. Below is an example chunk that uses the upper engine, with its output:

```
'``{upper}
Hello, **knitr** engines!
...
```

#### HELLO, KNITR ENGINES!

Next we show an example of an alternative Python engine\*2 named py. This engine is implemented by simply calling the python command via the R function system2():

<sup>\*2</sup> In practice, you should use the built-in python engine instead, which is based on the **reticulate** package and supports Python code chunks much better (see Section 15.2).

```
knitr::knit_engines$set(py = function(options) {
 code <- paste(options$code, collapse = '\n')
 out <- system2(
 'python', c('-c', shQuote(code)), stdout = TRUE
)
 knitr::engine_output(options, code, out)
})</pre>
```

To fully understand the above engine function, you need to know the following:

- 1. Given Python code as a character string (code in the above function), we can execute the code via a command-line call python -c 'code'. That is what system2() does. We collect the (text) output by specifying stdout = TRUE in system2().
- 2. You can pass the chunk options, source code, and text output to the function knitr::engine\_output() to generate the final output. This function deals with common chunk options like echo = FALSE and results = 'hide', so you do not need to take care of these cases.

A lot of language engines in **knitr** are defined in this way (i.e., using system2() to execute commands corresponding to languages). If you are curious about the technical details, you may check out the source code of most language engines in the R source code here: https://github.com/yihui/knitr/blob/master/R/engine.R.

Now we can use the new engine py, e.g.,

```
""{py}
print(1 + 1)
""
2
```

You can even override existing language engines in **knitr** via knitr::knit\_engines\$set(), if you are sure that your versions are necessary or better than the existing ones. Usually we do not recommend that you do this because it may surprise users who are familiar with existing engines, but we want to make you aware of this possibility anyway.

## 15.2 Run Python code and interact with Python

We know you love Python, so let's make it super clear: R Markdown and **knitr** do support Python.

To add a Python code chunk to an R Markdown document, you can use the chunk header ```{python}, e.g.,

```
'``{python}
print("Hello Python!")
...
```

You can add chunk options to the chunk header as usual, such as echo = FALSE or eval = FALSE. Plots drawn with the **matplotlib** package in Python are also supported.

The Python support in R Markdown and **knitr** is based on the **reticulate** package (Ushey JJ Allaire, and Tang, 2020), and one important feature of this package is that it allows two-way communication between Python and R. For example, you may access or create Python variables from the R session via the object py in **reticulate**:

```
'``{r, setup}
library(reticulate)
...

Create a variable 'x' in the Python session:

'``{python}
x = [1, 2, 3]
...

Access the Python variable 'x' in an R code chunk:

'``{r}
py$x
...
```

```
Create a new variable 'y' in the Python session using R, and pass a data frame to 'y':

'''{r}

py$y <- head(cars)

'''

Print the variable 'y' in Python:

'''{python}

print(y)

'''
```

For more information about the **reticulate** package, you may see its documentation at https://rstudio.github.io/reticulate/.

## 15.3 Execute content conditionally via the asis engine

As its name indicates, the asis engine writes out the chunk content as is. The advantage of using this engine is that you can include some content conditionally—the display of the chunk content is decided by the chunk option echo. When echo = FALSE, the chunk will be hidden. Below is a simple example:

```
getRandomNumber <- function() {
 sample(1:6, 1)
}
...
'``{asis, echo = getRandomNumber() == 4}
According to https://xkcd.com/221/, we just generated
a **true** random number!
...</pre>
```

The text in the asis chunk will be displayed only if the condition getRandomNumber() == 4 is (randomly) true.

## 15.4 Execute Shell scripts

You can run Shell scripts via the bash or sh or zsh engine, depending on which shell you prefer. Below is a bash example, with the chunk header ```{bash}:

Please note that bash is invoked with the R function system2(). It will ignore profile files like ~/.bash\_profile and ~/.bash\_login, in which you may have defined command aliases or modified environment variables like the PATH variable. If you want these profile files to be executed just like when you use the terminal, you may pass the argument -1 to bash via engine.opts, e.g.,

```
'``{bash, engine.opts='-1'}
echo $PATH
'``
```

If you want to enable the -1 argument globally for all bash chunks, you may set it in the global chunk option in the beginning of your document:

```
knitr::opts_chunk$set(engine.opts = list(bash = "-1"))
```

You can also pass other arguments to bash by providing them as a character vector to the chunk option engine.opts.

### 15.5 Visualization with D3

The R package **r2d3** (Strayer Luraschi, and JJ Allaire, 2020) is an interface to D3 visualizations. This package can be used in R Markdown documents as well as other applications (e.g., Shiny). To use it in R Markdown, you can either call its function r2d3() in a code chunk, or use its d3 engine. The latter requires you to understand the D3 library and JavaScript, which are beyond the scope of this book, and we will leave it to readers to learn them. Below is an example of using the d3 engine to draw a bar chart:

```
title: Generate a chart with D3
output: html_document
First, load the package **r2d3** to set up the 'd3' engine
for **knitr** automatically:
```{r setup}
library(r2d3)
. . .
Now we can generate data in R, pass it to D3, and draw
the chart:
```{d3, data=runif(30), options=list(color='steelblue')}
svg.selectAll('rect')
 .data(data)
 .enter()
 .append('rect')
 .attr('width', function(d) { return d * 672; })
 .attr('height', '10px')
 .attr('y', function(d, i) { return i * 16; })
 .attr('fill', options.color);
```

### 15.6 Write the chunk content to a file via the cat engine

Sometimes it could be useful to write the content of a code chunk to an external file, and use this file later in other code chunks. Of course, you may do this via the R functions like writeLines(), but the problem is that when the content is relatively long, or contains special characters, the character string that you would pass to writeLines() may look awkward. Below is an example of writing a long character string to a file my-file.txt:

```
writeLines("This is a long character string.
It has multiple lines. Remember to escape
double quotes \"\", but 'single quotes' are OK.
I hope you not to lose your sanity when thinking
about how many backslashes you need, e.g., is it
'\t' or '\\t' or '\\\\t'?",
con = "my-file.txt")
```

This problem has been greatly alleviated since R 4.0.0, because R started to support raw strings in r"( )" (see the help page ?Quotes), and you do not need to remember all the rules about special characters. Even with raw strings, it can still be a little distracting for readers to see a long string written to a file explicitly in a code chunk.

The cat engine in **knitr** has provided a way for you to present text content in a code chunk and/or write it to an external file, without thinking about all the rules about R's character strings (e.g., you need double backslashes when you need a literal backslash).

To write the chunk content to a file, specify the file path in the chunk option engine.opts, e.g., engine.opts = list(file = 'path/to/file'). Under the hood, the list of values specified in engine.opts will be passed to the function base::cat(), and file is one of the arguments of base::cat().

Next we will present three examples to illustrate the use of the cat engine.

### 15.6.1 Write to a CSS file

As shown in Section 7.3, you can embed a css code chunk in an Rmd document to style elements with CSS. An alternative way is to provide a custom CSS file to Pandoc via the

css option of some R Markdown output formats such as html\_document. The cat engine can be used to write this CSS file from Rmd.

This example below shows how to generate a file custom.css from a chunk in the document, and pass the file path to the css option of the html\_document format:

```
title: "Create a CSS file from a code chunk"
output:
 html_document:
 css: custom.css

The chunk below will be written to `custom.css`, which will be used during the Pandoc conversion.

'``{cat, engine.opts = list(file = "my_custom.css")} h2 {
 color: blue;
}
'``.
And this title will blue
```

The only difference between the css code chunk approach and this approach is that the former approach writes the CSS code in place (i.e., in the place of the code chunk), which is inside the <body> tag of the output document, and the latter approach writes CSS to the <head> area of the output document. There will not be any practical visual differences in the output document.

### 15.6.2 Include LaTeX code in the preamble

In Section 6.1, we introduced how to add LaTeX code to the preamble, which requires an external .tex file. This file can also be generated from Rmd, and here is an example:

```
title: "Create a .tex file from a chunk"
author: "Jane Doe"
classoption: twoside
output:
 pdf_document:
 includes:
 in_header: preamble.tex
How it works
Write a code chunk to a file 'preamble.tex' to define
the header and footer of the PDF output document:
```{cat, engine.opts=list(file = 'preamble.tex')}
\usepackage{fancyhdr}
\usepackage{lipsum}
\pagestyle{fancy}
\fancyhead[CO,CE]{This is fancy header}
\fancyfoot[CO,CE]{And this is a fancy footer}
\fancyfoot[LE,RO]{\thepage}
\fancypagestyle{plain}{\pagestyle{fancy}}
\lipsum[1-15]
# More random content
\lipsum[16-30]
```

In the LaTeX code in the cat code chunk above, we have defined the header and footer of the PDF document. If we also want to show the author name in the footer, we can append the author information to preamble.tex in another cat code chunk with options engine.opts = list(file = 'preamble.tex', append = TRUE) and code =

sprintf('\\fancyfoot[LO,RE]{%s}', rmarkdown::metadata\$author). To understand how this works, recall that we mentioned earlier in this section that engine.opts is passed to base::cat() (so append = TRUE is passed to cat()), and you may understand the chunk option code by reading Section 16.2.

15.6.3 Write YAML data to a file and also display it

By default, the content of the cat code chunk will not be displayed in the output document. If you also want to display it after writing it out, set the chunk option class.source to a language name. The language name is used for syntax highlighting. In the example below, we specify the language to be yaml:

```
'``{cat, engine.opts=list(file='demo.yml'), class.source='yaml'}
a:
    aa: "something"
    bb: 1
b:
    aa: "something else"
    bb: 2
```

Its output is displayed below, and it also generated a file demo.yml.

```
01 a:
02 aa: "something"
03 bb: 1
04 b:
05 aa: "something else"
06 bb: 2
```

To show the file demo.yml is really generated, we can try to read it into R with the **yaml** package (J. Stephens Simonov, et al., 2020):

```
01 xfun::tree(yaml::read_yaml("demo.yml"))
```

List of 2

```
## |-a:List of 2
## | -aa: chr "something"
## | |-bb: int 1
## |-b:List of 2
## |-aa: chr "something else"
## |-bb: int 2
```

15.7 Run SAS code

You may run SAS (https://www.sas.com) code using the sas engine. You need to either make sure the SAS executable is in your environment variable PATH, or (if you do not know what PATH means) provide the full path to the SAS executable via the chunk option engine.path, e.g., engine.path = "C:\\Program Files\\SASHome\\x86\\SASFoundation\\9.3\\sas.exe". Below is an example to print out "Hello World":

```
'``{sas}
data _null_;
put 'Hello, world!';
run;
'``
```

15.8 Run Stata code

You can run Stata (https://www.stata.com) code with the stata engine if you have installed Stata. Unless the stata executable can be found via the environment variable PATH, you need to specify the full path to the executable via the chunk option engine.path, e.g., engine.path = "C:/Program Files (x86)/Stata15/StataSE-64.exe". The following is a quick example:

```
'``{stata}
sysuse auto
summarize
'``
```

The stata engine in knitr is quite limited. Doug Hemken has substantially extended it in

the **Statamarkdown** package, which is available on GitHub at https://github.com/Hemke n/Statamarkdown. You may find tutorials about this package by searching online for "Stata R Markdown."

15.9 Create graphics with Asymptote

Asymptote (https://asymptote.sourceforge.io) is a powerful language for vector graphics. You may write and run Asymptote code in R Markdown with the asy engine if you have installed Asymptote (see its website for instructions on the installation). Below is an example copied from the repository https://github.com/vectorgraphics/asymptote, and its output is shown in Figure 15.1:

```
import graph3;
01
    import grid3;
02
    import palette;
03
    settings.prc = false;
04
05
    currentprojection=orthographic(0.8,1,2);
06
    size(500,400,IgnoreAspect);
07
80
    real f(pair z) {return cos(2*pi*z.x)*sin(2*pi*z.y);}
09
10
    surface s=surface(f,(-1/2,-1/2),(1/2,1/2),50,Spline);
11
12
13
    surface S=planeproject(unitsquare3)*s;
    S.colors(palette(s.map(zpart),Rainbow()));
14
    draw(S,nolight);
15
    draw(s,lightgray+opacity(0.7));
16
17
    grid3(XYZgrid);
```

Note that for PDF output, you may need some additional LaTeX packages, otherwise you may get an error that looks like this:

```
! LaTeX Error: File `ocgbase.sty' not found.
```

If such an error occurs, please see Section 1.3 for how to install the missing LaTeX pack-

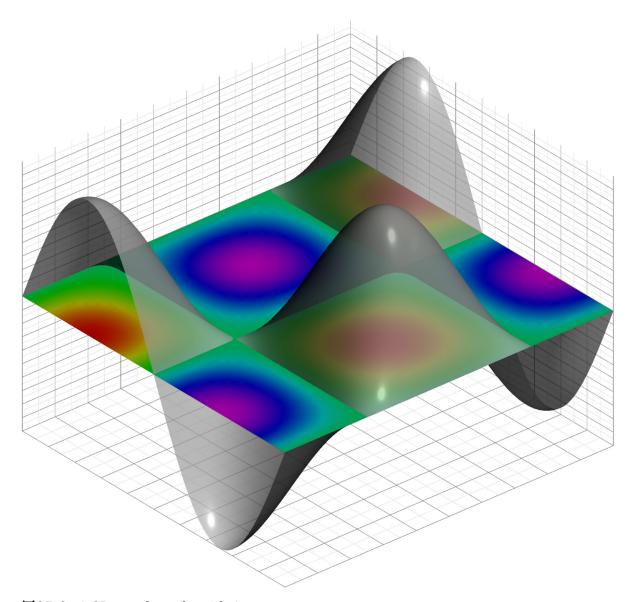


図15.1: A 3D graph made with Asymptote.

ages.

In the asy chunk above, we used the setting settings.prc = false. Without this setting, Asymptote generates an interactive 3D graph when the output format is PDF. However, the interactive graph can only be viewed in Acrobat Reader. If you use Acrobat Reader, you can interact with the graph. For example, you can rotate the 3D surface in Figure 15.1 with your mouse.

15.9.1 Generate data in R and read it in Asymptote

Now we show an example in which we first save data generated in R to a CSV file (below is an R code chunk):

```
01  x <- seq(0, 5, 1 = 100)
02  y <- sin(x)
03  writeLines(paste(x, y, sep = ","), "sine.csv")</pre>
```

Then read it in Asymptote, and draw a graph based on the data as shown in Figure 15.2 (below is an asy code chunk):

```
import graph;
01
    size(400,300,IgnoreAspect);
02
    settings.prc = false;
03
04
    // import data from csv file
05
    file in=input("sine.csv").line().csv();
06
    real[][] a=in.dimension(0,0);
07
    a=transpose(a);
80
09
    // generate a path
10
    path rpath = graph(a[0],a[1]);
11
    path lpath = (1,0)--(5,1);
12
13
    // find intersection
14
    pair pA=intersectionpoint(rpath,lpath);
15
16
17
    // draw all
    draw(rpath, red);
18
    draw(lpath,dashed + blue);
19
    dot("$\delta$",pA,NE);
20
    xaxis("$x$",BottomTop,LeftTicks);
21
    yaxis("$y$",LeftRight,RightTicks);
22
```

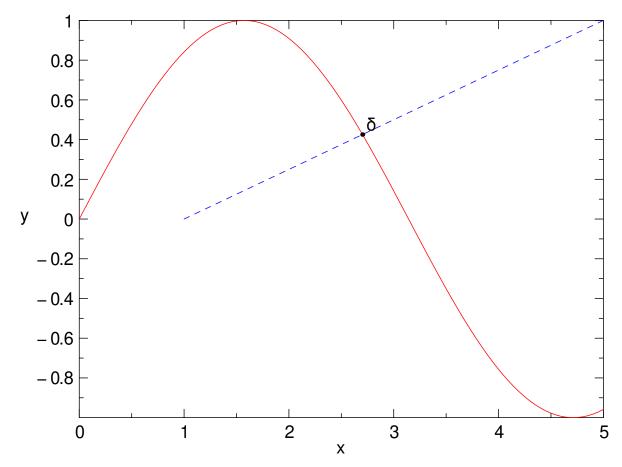


図15.2: Pass data from R to Asymptote to draw a graph.

15.10 Style HTML pages with Sass/SCSS

Sass (https://sass-lang.com) is a CSS extension language that allows you to create CSS rules in much more flexible ways than you'd do with plain CSS. Please see its official documentation if you are interested in learning it.

The R package **sass** (Cheng Mastny, et al., 2021) can be used to compile Sass to CSS. Based on the **sass** package, **knitr** includes two language engines: sass and scss (corresponding to the Sass and SCSS syntax, respectively) to compile code chunks to CSS. Below is a scss code chunk, with the chunk header ```{scss}:

```
$\font-stack: "Comic Sans MS", cursive, sans-serif;
$\primary-color: #00FF00;
```

```
03
04 .book.font-family-1 {
05   font: 100% $font-stack;
06   color: $primary-color;
07 }
```

You can also use the sass engine, and the Sass syntax is slightly different with the SCSS syntax, e.g.,

```
$\``\{\sass}\
\$\font-\stack: "Comic Sans MS", cursive, sans-\serif
\$\primary-\color: #00FF00

.book.\font-\family-1
font: 100% \$\font-\stack
color: \$\primary-\color

\``\
\``\
```

If you are reading the HTML version of this section,*3 you will notice that the font for this page has been changed to Comic Sans, which might be surprising, but please do not panic—you are not having a stroke.*4

The sass/scss code chunks are compiled through the sass::sass() function. Currently you can customize the output style for the CSS code via the chunk option engine.opts, e.g., engine.opts = list(style = "expanded"). The default style is "compressed." If you are not sure what this means, please refer to the help page ?sass::sass_options and look for the output_style argument.

^{*3} https://bookdown.org/yihui/rmarkdown-cookbook/eng-sass.html

^{*4} https://twitter.com/andrewheiss/status/1250438044542361600

第16章

Managing Projects

When you work on larger projects or reports, you may not want to put all text and code in a single R Markdown document, but organize them in smaller units instead. In this chapter, we introduce tips on how to organize multiple files related to R Markdown.

16.1 Source external R scripts

If your R Markdown document has a large amount of code, you may consider putting some code in external R scripts, and run these scripts via source() or sys.source(), e.g.,

```
'``{r, include=FALSE}
source("your-script.R", local = knitr::knit_global())
# or sys.source("your-script.R", envir = knitr::knit_global())
...
```

We recommend that you use the argument local in source() or envir in sys.source() explicitly to make sure the code is evaluated in the correct environment, i.e., knitr::knit_global(). The default values for them may not be the appropriate environment: you may end up creating variables in the wrong environment, and being surprised that certain objects are not found in later code chunks.

Next in the R Markdown document, you can use objects created in these scripts (e.g., data objects or functions). This way will not only make your R Markdown document cleaner, but also make it more convenient for you to develop R code (e.g., debugging R code is often easier with pure R scripts than R Markdown).

Note that we used include = FALSE in the above example because we only want to execute the script without showing any output. If you do want output, you may remove this chunk option, or use the options in Section 11.7 to selectively hide or show different types of output.

16.2 Read external scripts into a chunk

There is a disadvantage of the source() method in Section 16.1. That is, you will not be able to see the source code by default. You can use source(..., echo = TRUE), but the source code will not be properly syntax highlighted. Besides, you need to be careful about the local argument of source(), as mentioned in Section 16.1. In this section, we introduce an alternative method that does not have these problems.

Basically, when you have one or more external scripts, you may read them and pass the content to the code option of a chunk. The code option can take a character vector and treat it as the content of the code chunk. Below we show a few examples.

• The code option can take a character vector of source code. For example:

```
'``{r, code=c('1 + 1', 'if (TRUE) plot(cars)')}
...
```

· You can also read an external file:

```
'``{r, code=xfun::read_utf8('your-script.R')}
'``
```

You can read as many scripts as you want:

```
'``{r, include=FALSE}
read_files <- function(files) {
  unlist(lapply(files, xfun::read_utf8))
}
'``{r, code=read_files(c('one.R', 'two.R'))}</pre>
```

You can read scripts of other languages, too. See Chapter 15 for how to use other languages in R Markdown. Here are a few more examples on non-R code.

• Read a Python script:

```
```{python, code=xfun::read_utf8('script.py')}
...
```

• Read a C++ file:

```
'``{Rcpp, code=xfun::read_utf8('file.cpp')}
'``
```

With the code option, you can develop complicated code in your favorite editor, and read it into a code chunk of an R Markdown document.

#### 16.3 Read multiple code chunks from an external script (\*)

In Section 16.2, we introduced a way to read code into a single code chunk. In this section, we introduce one method to read multiple code chunks from an external script. The key is that you need to label the code in the script, and you can use the same labels in the code chunks in your R Markdown document, so the code in the external script can be mapped to the code chunks via the function knitr::read\_chunk(). To label a block of code in a script, you write the label after ## ---- (optionally, you can add a series of dashes to the end of this line). One script can contain multiple labeled code blocks, e.g.,

```
---- test-a -----
1 + 1

---- test-b -----
if (TRUE) {
 plot(cars)
}
```

We assume that the filename of the above script is test.R. In the R Markdown document, we can read it via knitr::read\_chunk(), and use the code in code chunks with the labels, e.g.,

```
Read an external script:

'``{r, include=FALSE, cache=FALSE}
knitr::read_chunk('test.R')

'``

Now we can use the code, e.g.,

'``{r, test-a, echo=FALSE}

'``{r, test-b, fig.height=4}

...
```

Note that we use knitr::read\_chunk() mainly for its side effect, so please make sure the code chunk in which you call this function is not cached (see Section 11.4 for the explanation).

Like methods introduced in Section 16.1 and Section 16.2, this method also gives you the flexibility of developing code in a separate environment.

## 16.4 Child documents (\*)

When you feel an R Markdown document is too long, you may consider splitting it into shorter documents, and include them as child documents of the main document via the chunk option child. The child option takes a character vector of paths to the child documents, e.g.,

```
```{r, child=c('one.Rmd', 'two.Rmd')}
...
```

Since **knitr** chunk options can take values from arbitrary R expressions, one application of the child option is the conditional inclusion of a document. For example, if your report has an appendix containing technical details that your boss may not be interested in, you may use a variable to control whether this appendix is included in the report:

```
Change 'BOSS_MODE' to 'TRUE' if this report is to be read by the boss:

'''{r, include=FALSE}

BOSS_MODE <- FALSE

'''

Conditionally include the appendix:

'''{r, child=if (!BOSS_MODE) 'appendix.Rmd'}

'''
```

Or if you are writing a news report on a football game that has not taken place yet, you may include different child documents depending on the outcome, e.g., child = if (winner == 'brazil') 'brazil.Rmd' else 'germany.Rmd'. Then as soon as the game (between Germany and Brazil) is finished, you can publish your report.

Another way to compile child documents is the function knitr::knit_child(). You can call this function in an R code chunk or an inline R expression, e.g.,

```
'``{r, echo=FALSE, results='asis'}
res <- knitr::knit_child('child.Rmd', quiet = TRUE)
cat(res, sep = '\n')
...</pre>
```

The function knit_child() returns a character vector of the knitted output, which we can write back to the main document with cat() and the chunk option results = 'asis'.

You can even use a child document as a template, and call knit_child() on it repeatedly with different parameters. In the example below, we run a regression using mpg as the response variable and each of the rest of variables in the mtcars data as the explanatory variable.

```
'``{r, echo=FALSE, results='asis'}
res <- lapply(setdiff(names(mtcars), 'mpg'), function(x) {
  knitr::knit_child(text = c(
    '## Regression on "`r x`"',
    ''',
    '''``{r}',
    'lm(mpg ~ ., data = mtcars[, c("mpg", x)])',
    ''''',
    '''
), envir = environment(), quiet = TRUE)
})
cat(unlist(res), sep = '\n')
'''</pre>
```

To make the above example self-contained, we used the text argument of knit_child() instead of a file input to pass the R Markdown content to be knitted. You can certainly write the content to a file, and pass a path to knit_child() instead. For example, you can save the content below to a file named template.Rmd:

```
## Regression on "`r x`"

'``{r}

lm(mpg ~ ., data = mtcars[, c("mpg", x)])

'``
```

And knit the file instead:

```
res <- lapply(setdiff(names(mtcars), 'mpg'), function(x) {
   knitr::knit_child(
        'template.Rmd', envir = environment(), quiet = TRUE
   )
   })
   cat(unlist(res), sep = '\n')</pre>
```

16.5 Keep the plot files

Most R Markdown output formats use the option self_contained = TRUE by default. This causes R plots to be embedded in the output documents, so we do not need the intermediate plot files when viewing the output documents. As a consequence, the plot folder (which typically has a suffix _files) will be deleted after the Rmd document is rendered.

Sometimes you may want to keep the plot files. For example, some academic journals require authors to submit figures files separately. For R Markdown, there are three ways to avoid the automatic deletion of these files:

 Use the option self_contained = FALSE if the output format supports this option, e.g.,

```
output:
  html_document:
    self_contained: false
```

However, this means the plot files will not be embedded in the output document. If this is not what you want, you may consider the next two methods.

- 2. Enable caching for at least one code chunk (see Section 11.4). When caching is enabled, R Markdown will not delete the plot folder.
- 3. Use the option keep_md = TRUE if the output format supports this option, e.g.,

```
output:
  word_document:
   keep_md: true
```

When you ask R Markdown to preserve the intermediate Markdown output file, it will also preserve the plot folder.

16.6 The working directory for R code chunks

By default, the working directory for R code chunks is the directory that contains the Rmd document. For example, if the path of an Rmd file is ~/Downloads/foo.Rmd, the working directory under which R code chunks are evaluated is ~/Downloads/. This means when you refer to external files with relative paths in code chunks, you need to know that these paths are relative to the directory of the Rmd file. With the aforementioned Rmd example file, read.csv("data/iris.csv") in a code chunk means reading the CSV file ~/Downloads/data/iris.csv.

When in doubt, you can add getwd() to a code chunk, compile the document, and check the output from getwd().

Sometimes you may want to use another directory as the working directory. The usual way to change the working directory is setwd(), but please note that setwd() is not persistent in R Markdown (or other types of **knitr** source documents), which means setwd() only works for the current code chunk, and the working directory will be restored after this code chunk has been evaluated.

If you want to change the working directory for all code chunks, you may set it via a setup code chunk in the beginning of your document:

```
'``{r, setup, include=FALSE}
knitr::opts_knit$set(root.dir = '/tmp')
...
```

This will change the working directory of all subsequent code chunks.

If you use RStudio, you can also choose the working directory from the menu Tools -> Global Options -> R Markdown (see Figure 16.1). The default working directory is the directory of the Rmd file, and there are two other possible choices: you may use the current working directory of your R console (the option "Current"), or the root directory of the project that contains this Rmd file as the working directory (the option "Project").

In RStudio, you may also knit an individual Rmd document with a specific working directory, as shown in Figure 16.2. After you change the "Knit Directory" and click the "Knit" button, **knitr** will use the new working directory to evaluate your code chunks. All these

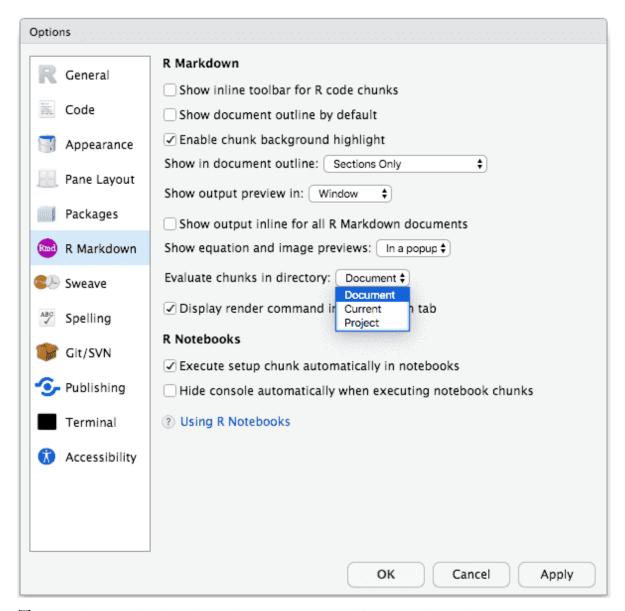


図16.1: Change the default working directory for all R Markdown documents in RStudio.

settings boil down to knitr::opts_knit\$set(root.dir = ...) as we mentioned earlier, so if you are not satisfied by any of these choices, you can specify a directory by yourself with knitr::opts_knit\$set().

There is no absolutely correct choice for the working directory. Each choice has its own pros and cons:

• If you use the Rmd document directory as the working directory for code chunks (knitr's default), you assume that file paths are relative to the Rmd document. This is similar to how web browsers handle relative paths, e.g., for an image <img

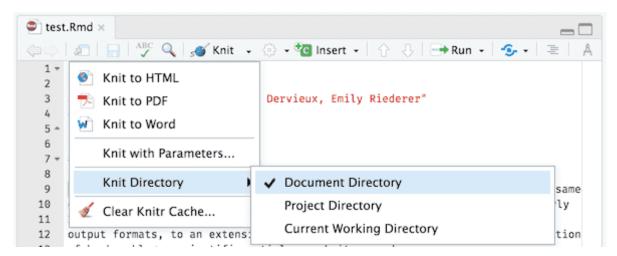


図16.2: Knit an Rmd document with other possible working directories in RStudio.

src="foo/bar.png" /> on an HTML page https://www.example.org/path/to/page.html,
your web browser will try to fetch the image from https://www.example.org/path/to/foo/bar.png.
In other words, the relative path foo/bar.png is relative to the directory of the
HTML file, which is https://www.example.org/path/to/.

The advantage of this approach is that you can freely move the Rmd file to-gether with its referenced files anywhere, as long as their relative locations remain the same. For the HTML page and image example above, the files page.html and foo/bar.png could be moved together to a different directory, such as https://www.example.org/another/path/, and you will not need to update the relative path in the src attribute of .

Some users like to think of relative paths in Rmd documents as "relative to the working directory of the R console," as opposed to "relative to the Rmd file." Therefore **knitr**'s default working directory feels confusing. The reason that I did not use the working directory of the R console as the default when I designed **knitr** was that users could use setwd() to change the working directory at any time. This working directory is not guaranteed to be stable. Each time a user calls setwd() in the console, there is a risk that the file paths in the Rmd document may become invalid. It could be surprising that the file paths depend on an external factor (setwd()), which is out of the control of the Rmd file. If you treat the Rmd file as "the center of the universe" when thinking of relative paths, the paths inside the Rmd file may be stabler.

Furthermore, if you do not want to think too hard on relative paths, you may enter

a path in RStudio using its autocomplete, as shown in Figure 16.3. RStudio will try to autocomplete a path relative to the Rmd file.

- Using the working directory of the R console can be a good choice for knitting documents programmatically or interactively. For example, you may knit a document multiple times in a loop, and use a different working directory each time to read a different data file (with the same filename) in that directory. This type of working directory is advocated by the **ezknitr** package (Attali, 2016), which essentially uses knitr::opts_knit\$set(root.dir) to change the working directory for code chunks in knitr.
- Using the project directory as the working directory requires an obvious assumption: you have to use a project (e.g., an RStudio project or a version control project) in the first place, which could be a disadvantage of this approach. The advantage of this type of working directory is that all relative paths in any Rmd document are relative to the project root directory, so you do not need to think where your Rmd file is located in the project or adjust the relative paths of other files accordingly. This type of working directory is advocated by the **here** package (Müller, 2020), which provides the function here::here() to return an absolute path by resolving a relative path passed to it (remember that the relative path is relative to the project root). The disadvantage is that when you move the referenced file together with the Rmd file to another location in the project, you need to update the referenced path in the Rmd document. When you share the Rmd file with other people, you also have to share the whole project.

These types of paths are similar to absolute paths without the protocol or domain in HTML. For example, an image on the page https://www.example.org/path/to/page.html refers to the image under the root directory of the website, i.e., https://www.example.org/foo/bar.png. The leading / in the src attribute of the image indicates the root directory of the website. If you want to learn more (or further confuse yourself) about absolute and relative paths in HTML, please see Appendix B.1 of the **blogdown** book*1 (Xie Hill, and Thomas, 2017).

The working directory pain mainly arises from this question when dealing with relative paths: *relative to what?* As we mentioned earlier, different people have different preferences, and there is not an absolutely right answer.

^{*1} https://bookdown.org/yihui/blogdown/html.html

```
24 v '''{r}
25 read.csv('chars')
26 a
27
28 chars.csv
chars.pdf
chars.Rmd
```

図16.3: Autocomplete file paths in an Rmd document in RStudio.

16.7 R package vignettes

If you have experience in developing R packages, or your project requires clear documentation and rigorous tests for custom functions written in the project, you may consider organizing the project as an R package. If you do not know how to create an R package, you can easily get started in the RStudio IDE by clicking the menu File -> New Project, and selecting the project type to be an R package.

There are a lot of benefits of using an R package to manage a project. For example, you can place datasets in the data/ folder, write R code under R/, generate documentation (e.g., using the **roxygen2** package (Wickham Danenberg, et al., 2020)) to man/, and add unit tests to test/. When it comes to the R Markdown reports, you can write them as package vignettes under vignettes/. In the vignettes, you can load datasets and call functions in the package. When you build the package (via the command R CMD build or RStudio), vignettes will be automatically compiled.

To create a package vignette in R Markdown, the easiest way is through the RStudio menu File -> New File -> R Markdown -> From Template (see Figure 16.4). Then you select "Package Vignette" from the **rmarkdown** package, and you will get a vignette template. After changing the title, author, and other metadata of the template, you can start writing the content of your report.

Alternatively, you can install the package **usethis** (Wickham and Bryan, 2020) and use its function usethis::use_vignette() to create a vignette skeleton. Below is what the YAML frontmatter of a package vignette typically looks like:

```
title: "Vignette Title"
```

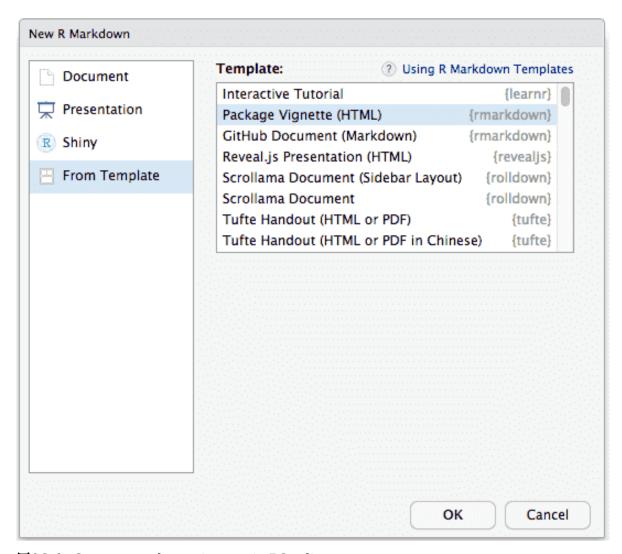


図16.4: Create a package vignette in RStudio.

```
author: "Vignette Author"
output: rmarkdown::html_vignette
vignette: >
   %\VignetteIndexEntry{Vignette Title}
   %\VignetteEngine{knitr::rmarkdown}
   %\VignetteEncoding{UTF-8}
---
```

Note that you need to change the vignette title in both the title field and the \VignetteIndexEntry{} command. Besides the above information in the vignette,

you also need to do two more things in your package DESCRIPTION file:

- 1. Specify VignetteBuilder: knitr in the DESCRIPTION file.
- 2. Add Suggests: knitr, rmarkdown in DESCRIPTION.

The vignette output format does not have to be HTML. It can also be PDF, so you can use output: pdf_document, too. Any other output formats that create HTML or PDF are also okay, such as beamer_presentation and tufte::tufte_html. However, currently, R only recognizes HTML and PDF vignettes.

16.8 R Markdown templates in R packages

Figure 16.4 of Section 16.7 illustrates the process of retrieving the editable Package Vignette (HTML) template from the **rmarkdown** package. This R Markdown file is prepopulated with the appropriate metadata for an R package vignette.

Similarly, any package may include R Markdown templates that package users can access through the RStudio IDE (as shown in the figure) or across any platform with the rmarkdown::draft() function.

16.8.1 Template use-cases

Templates are a useful way to share custom structure, style, and content. There are many excellent examples of this "in the wild."

Many templates add structure and style by pre-populating the YAML metadata. We already saw an example of this with the **rmarkdown** package's Package Vignette (HTML) template. Similarly, the **rmdformats** package (Barnier, 2021) provides a number of templates that pass different custom styling functions to the output option.

Other templates demonstrate document structures that the packages require. For example, the **pagedown** package (Xie Lesur, et al., 2020) includes numerous templates for posters, resumes, and other page layouts. Similarly, the **xaringan** package's Ninja Presentation template (Xie, 2020b) demonstrates the syntax for many different slide formatting options.

Templates may also demonstrate package features and syntax. For example, both the **flexdashboard** package (Richard Iannone IJ Allaire, and Borges, 2020) and the **learnr**

package (Schloerke JJ Allaire, and Borges, 2020) include templates with code chunks that call functions from the packages to create a sample dashboard or tutorial, respectively.

Similarly, templates may also include boilerplate content. For example, the **rticles** package (JJ Allaire Xie R Foundation, et al., 2021) provides many such templates to align R Markdown output to the required style and content guidelines of different academic journals. Boilerplate content is also useful in organizational settings, such as a team generating quarterly reports.

16.8.2 Template setup

The **usethis** package (Wickham and Bryan, 2020) has a helpful function for creating templates. Running usethis::use_rmarkdown_template("Template Name") will automatically create the required directory structure and files (you should provide your own Template Name).

If you wish to set up your template manually instead, create a subdirectory of the inst/rmarkdown/templates directory. Within this directory, you need to save at least two files:

1. A file named template.yaml, which gives the RStudio IDE basic metadata such as a human-readable name for the template. At a minimum, this file should have the name and description fields, e.g.,

```
name: Example Template
description: What this template does
```

You may include create_dir: true if you want a new directory to be created when the template is selected. This is useful if your template relies upon additional resources. For example, the **learnr** package template*2 sets create_dir: true, whereas the **flexdashboard** package template*3 uses the default create_dir: false. You may attempt to open both of these templates in RStudio to notice the different user prompts.

2. An R Markdown document saved under skeleton/skeleton.Rmd. This may contain

 $^{^{*2}}$ <code>https://github.com/rstudio/learnr/blob/master/inst/rmarkdown/templates/tutorial/template.yaml</code>

 $^{^{*3}}$ https://github.com/rstudio/flexdashboard/blob/master/inst/rmarkdown/templates/flex_dashboard/template.yaml

anything you wish to put in an R Markdown document.

Optionally, the skeleton folder may also include additional resources like style sheets or images used by your template. These files will be loaded to the user's computer along with the template.

For more details on building custom R Markdown templates, please refer to the RStudio Extensions*4 website and the Document Templates chapter*5 of the *R Markdown Definitive Guide* (Xie J.J. Allaire, and Grolemund, 2018).

16.9 Write books and long-form reports with **bookdown**

The **bookdown** package (Xie, 2020a) is designed for creating long-form documents that are composed of multiple R Markdown documents. For example, if you want to write a book, you can write each chapter in its own Rmd file, and use **bookdown** to compile these Rmd files into a book.

For RStudio users, the easiest way to get started is to create a **bookdown** project with the IDE by selecting File -> New Project -> New Directory -> Book Project using bookdown, as you can see from Figure 16.5.

If you do not use RStudio or if you prefer to work from the console, you may produce the same result by calling the function bookdown:::bookdown_skeleton('your-book-dir').

To demonstrate the usage, we provide a minimal example consisting of three files within the same directory:

directory

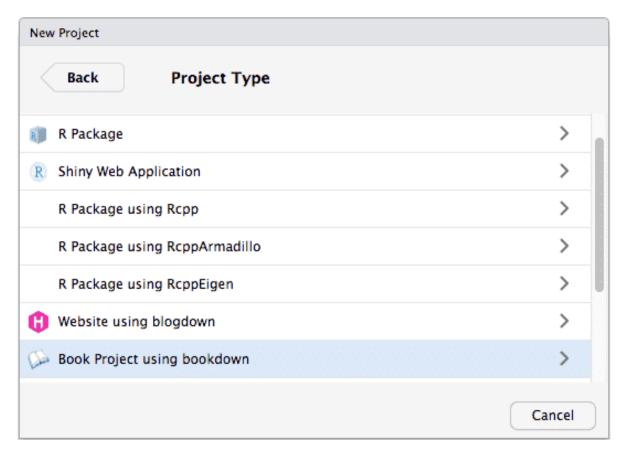
- |- index.Rmd
- |- 01-intro.Rmd
- |- 02-analysis.Rmd

Below we show the content of each file and explain their roles.

· index.Rmd:

 $^{^{*4}}$ https://rstudio.github.io/rstudio-extensions/rmarkdown_templates.html

^{*5} https://bookdown.org/yihui/rmarkdown/document-templates.html



☑16.5: Create a bookdown project in RStudio.

```
title: "A Minimal bookdown Project"
site: bookdown::bookdown_site
output: bookdown::gitbook
---
# Preface {-}
Some content
```

The first file is typically called index.Rmd. It should be the only Rmd file in which you provide the YAML frontmatter. It should also include a special YAML field site: bookdown::bookdown_site, so that **rmarkdown** knows to use **bookdown** to build all Rmd files, instead of rendering a single Rmd file. You can use any **bookdown** output

formats, such as bookdown::gitbook, bookdown::pdf_book, bookdown::word_document2, and bookdown::epub_book.

The next two Rmd files are two chapters:

• 01-intro.Rmd:

```
# Chapter 1
This is chapter 1.
```

• 02-analysis.Rmd:

```
# Chapter 2
This is chapter 2.
```

To render these Rmd files, you should call bookdown::render_book('index.Rmd') instead of rmarkdown::render(). Under the hood, **bookdown** merges all Rmd files into a single Rmd by default and compiles it. Files are merged in alphabetical order. That is why we added numeric prefixes to filenames in the above example.

There are a lot of settings that you can customize for a **bookdown** project. For a more comprehensive overview of **bookdown**, you may see Chapter 18 the **rmarkdown** book (Xie J.J. Allaire, and Grolemund, 2018). For the full documentation, see the **bookdown** book (Xie, 2016).

16.10 Build websites with **blogdown**

If you want build a website based on R Markdown, you may consider using the **blogdown** package (Xie Dervieux, and Presmanes Hill, 2021). The easiest way to get started is to use the RStudio menu File -> New Project -> New Directory -> Website using blogdown, as you can see from Figure 16.5. If you have never used **blogdown** before, you may use the default settings in the dialog box, otherwise you can customize things like the website theme. If you do not use RStudio, you may call the function blogdown::new_site() under an empty directory to create a new website.

A website project may contain any number of Rmd documents. They could either be normal pages or blog posts. R Markdown makes it easier for you to maintain your website because the results on your website are automatically and dynamically generated.

We recommend that you read Chapter 1^{*6} of the **blogdown** book (Xie Hill, and Thomas, 2017) for an overview of this package as well as the basic workflow of maintaining a website.

 $^{^{*6}}$ https://bookdown.org/yihui/blogdown/get-started.html

第 17 章

Workflow

In this chapter, we introduce some tips on working with individual R Markdown documents as well as running your R Markdown projects. You may also check out Chapter 30^{*1} of the book *R for Data Science* (Wickham and Grolemund, 2016a), which briefly introduces some tips on using analysis notebooks (including R Markdown documents). Nicholas Tierney also discusses the workflow in the book *R Markdown for Scientists*.*²

17.1 Use RStudio keyboard shortcuts

The R Markdown format can be used with any editor of your choice, as long as R, the **rmarkdown** package, and Pandoc are installed. However, RStudio is deeply integrated with R Markdown, so you can work with R Markdown smoothly.

Like any IDE (Integrated Development Environment), RStudio has keyboard shortcuts. A full list can be found under the menu Tools -> Keyboard Shortcuts Help. Some of the most useful shortcuts related to R Markdown are summarized in Table 17.1.

Additionally, you can press F7 to spell-check your document. You can also restart the R session by Ctrl + Alt + F10 (or Command + Option + F10 on macOS). Restarting regularly is helpful for reproducibility, because results are more likely to be reproducible if they are computed from a new R session. This can also be done through the drop-down menu Restart R and Run All Chunks behind the Run button on the toolbar.

^{*1} https://r4ds.had.co.nz/r-markdown-workflow.html

^{*2} https://rmd4sci.njtierney.com/workflow.html

表17.1: RStudio keyboard shortcuts related to R Markdown.

Task	Windows & Linux	macOS
Insert R chunk	Ctrl+Alt+I	Command+Option+I
Preview HTML	Ctrl+Shift+K	Command+Shift+K
Knitr document (knitr)	Ctrl+Shift+K	Command+Shift+K
Compile Notebook	Ctrl+Shift+K	Command+Shift+K
Compile PDF	Ctrl+Shift+K	Command+Shift+K
Run all chunks above	Ctrl+Alt+P	Command+Option+P
Run current chunk	Ctrl+Alt+C	Command + Option + C
Run current chunk	Ctrl+Shift+Enter	Command+Shift+Enter
Run next chunk	Ctrl+Alt+N	Command + Option + N
Run all chunks	Ctrl+Alt+R	Command + Option + R
Go to next chunk/title	Ctrl+PgDown	Command+PgDown
Go to previous chunk/title	Ctrl+PgUp	Command+PgUp
Show/hide document outline	Ctrl+Shift+O	Command+Shift+O
Build book, website,	Ctrl+Shift+B	Command+Shift+B

17.2 Spell-check R Markdown

If you use the RStudio IDE, you can press the F7 key or click the menu Edit -> Check Spelling to spell-check an Rmd document. Real-time spell checking has become available in RStudio v1.3, so you no longer need to manually trigger spell checking with this version or a later version of RStudio.

If you do not use RStudio, the **spelling** package (Ooms and Hester, 2020) has a function spell_check_files(), which can check the spelling of common document formats, including R Markdown. When spell checking Rmd documents, it will skip code chunks and only check ordinary text.

17.3 Render R Markdown with rmarkdown::render()

If you do not use RStudio or any other IDE, you need to know this fact: R Markdown documents are rendered through the function rmarkdown::render(). This means you can

programmatically render an R Markdown document in any R script. For example, you could render a series of reports in a for-loop for each state of a country:

```
for (state in state.name) {
    rmarkdown::render(
        'input.Rmd', output_file = paste0(state, '.html')
    )
}
```

The output filename will be different for each state. You can also make use of the state variable in the document input.Rmd, e.g.,

```
title: "A report for `r state`"
output: html_document
---
The area of `r state` is `r state.area[state.name == state]`
square miles.
```

You may read the help page ?rmarkdown::render to know other possible arguments. Here we just want to mention two of them, i.e., the clean and envir arguments.

The former (clean) is particularly helpful for debugging when anything goes wrong with the Pandoc conversion. If you call rmarkdown::render(..., clean = FALSE), all intermediate files will be preserved, including the intermediate .md file knitted from the .Rmd file. If Pandoc signals an error, you may start debugging from this .md file.

The latter (envir) offers a way to render a document with the guarantee of an empty new environment when you call rmarkdown::render(..., envir = new.env()), so objects created in your code chunks will stay inside this environment, without polluting your current global environment. On the other hand, if you prefer rendering the Rmd document in a new R session so that objects in your current R session will not pollute your Rmd document, you may call rmarkdown::render in xfun::Rscript_call(), e.g.,

```
01 xfun::Rscript_call(
```

```
rmarkdown::render,
list(input = 'my-file.Rmd', output_format = 'pdf_document')

)
```

This method is similar to clicking the Knit button in RStudio, which also renders the Rmd document in a new R session. In case you need to render an Rmd document inside another Rmd document, we strongly recommend that you use this method instead of directly calling rmarkdown::render() in a code chunk, because rmarkdown::render() creates and relies on a lot of side effects internally, which may affect rendering other Rmd documents in the same R session.

The second argument of xfun::Rscript_call() takes a list of arguments to be passed to rmarkdown::render(). In fact, xfun::Rscript_call is a general-purpose function to call any R function (with arguments optionally) in a new R session. Please see its help page if you are interested.

17.4 Parameterized reports

In Section 17.3, we mentioned one way to render a series of reports in a for-loop. In fact, rmarkdown::render() has an argument named params specifically designed for this task. You can parameterize your report through this argument. When you specify parameters for a report, you can use the variable params in your report. For example, if you call:

```
for (state in state.name) {
   rmarkdown::render('input.Rmd', params = list(state = state))
}
```

then in input.Rmd, the object params will be a list that contains the state variable:

```
title: "A report for `r params$state`"
output: html_document
---
The area of `r params$state` is
```

```
`r state.area[state.name == params$state]`
square miles.
```

Another way to specify parameters for a report is to use the YAML field params, e.g.,

```
title: Parameterized reports

output: html_document

params:
   state: Nebraska
   year: 2019
   midwest: true
```

Note that you can include as many parameters in the params YAML field or the params argument of rmarkdown::render(). If both the YAML field and the argument are present, the parameter values in the argument will override the corresponding parameters in YAML. For example, when we call rmarkdown::render(..., params = list(state = 'Iowa', year = 2018) on the previous example that has the params field, params\$state will become Iowa (instead of Nebraska) and params\$year will become 2018 (instead of 2019) in the R Markdown document.

When rendering the same R Markdown document to a series of reports, you need to adjust the output_file argument of rmarkdown::render(), to make sure each report has its unique filename. Otherwise, you will accidentally override certain report files. For example, you can write a function to generate a report for each state and each year:

```
render_one <- function(state, year) {</pre>
01
      # assuming the output format of input.Rmd is PDF
02
       rmarkdown::render(
03
         'input.Rmd',
04
        output_file = paste0(state, '-', year, '.pdf'),
05
        params = list(state = state, year = year),
06
07
        envir = parent.frame()
      )
08
```

```
09 }
```

Then you can use nested for-loops to generate all reports:

```
for (state in state.name) {
   for (year in 2000:2020) {
      render_one(state, year)
    }
  }
}
```

At the end, you will get a series of report files like Alabama-2000.pdf, Alabama-2001.pdf, ..., Wyoming-2019.pdf, and Wyoming-2020.pdf.

For parameterized reports, you can also input parameters interactively through a graphical user interface (GUI) created from Shiny. This requires you to provide a params field in YAML, and **rmarkdown** will automatically create the GUI using the appropriate input widgets for each parameter (e.g., a checkbox will be provided for a Boolean parameter).

To start the GUI, you can call rmarkdown::render() with params = 'ask' if you do not use RStudio:

```
01 rmarkdown::render("input.Rmd", params = "ask")
```

If you use RStudio, you can click the menu Knit with Parameters behind the Knit button. Figure 17.1 shows an example GUI for parameters.

For more information on parameterized reports, you may read Chapter 15^{*3} of the *R Mark-down Definitive Guide* (Xie J.J. Allaire, and Grolemund, 2018).

17.5 Customize the Knit button (*)

When you click the Knit button in RStudio, it will call the rmarkdown::render() function in a new R session and output a file of the same base name as the input file in the same directory. For example, knitting example.Rmd with the output format html_document will create an output file example.html.

^{*3} https://bookdown.org/yihui/rmarkdown/parameterized-reports.html

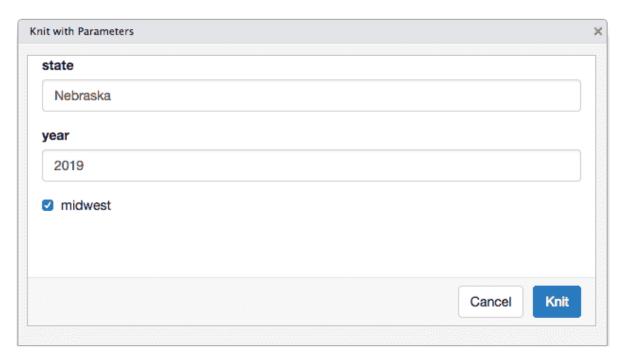


図17.1: Knit an R Markdown document with parameters that you can input from a GUI.

There may be situations in which we want to customize how the document is rendered. For example, perhaps we would like the rendered document to contain the current date, or would like to output the compiled report into a different directory. Although we can achieve these goals by calling rmarkdown::render() (see Section 17.3) with the appropriate output_file argument, it can be inconvenient to have to rely on a custom call to rmarkdown::render() to compile your report.

It is possible to control the behavior of the Knit button by providing the knit field within the YAML frontmatter of your document. The field takes a function with the main argument input (the path to the input Rmd document) and other arguments that are currently ignored. You can either write the source code of the function directly in the knit field, or put the function elsewhere (e.g., in an R package) and call the function in the knit field. If you routinely need the custom knit function, we would recommend that you put it in a package, instead of repeating its source code in every single R Markdown document.

If you store the code directly within YAML, you must wrap the entire function in parentheses. If the source code has multiple lines, you have to indent all lines (except the first line) by at least two spaces. For example, if we want the output filename to include the date on which it is rendered, we could use the following YAML code:

```
knit: (function(input, ...) {
    rmarkdown::render(
        input,
        output_file = paste0(
            xfun::sans_ext(input), '-', Sys.Date(), '.html'
        ),
        envir = globalenv()
    )
})
---
```

For example, if we knit example. Rmd on 2019-07-29, the output filename will be example-2019-07-29. html.

While the above approach looks simple and straightforward enough, embedding a function directly in your YAML may make it difficult for you to maintain it, unless the function is only to be used once with a single R Markdown document. In general, we would recommend using an R package to maintain such a function, e.g., you may create a function knit_with_date() in a package:

```
#' Custom Knit function for RStudio
01
    #'
02
    #' @export
03
04
    knit_with_date <- function(input, ...) {</pre>
       rmarkdown::render(
05
06
         input,
         output_file = paste0(
07
             xfun::sans_ext(input), '-', Sys.Date(), '.',
08
             xfun::file_ext(input)
09
         ),
10
         envir = globalenv()
11
       )
12
    }
13
```

If you add the above code to a package named myPackage, you will be able to refer to

your custom knit function using the following YAML setting:

```
knit: myPackage::knit_with_date
---
```

You may refer to the help page ?rmarkdown::render to find out more ideas on how you could customize your knit function behind the Knit button in RStudio.

17.6 Collaborate on Rmd documents through Google Drive

Based on the **googledrive** package (D'Agostino McGowan and Bryan, 2020), Emily Kothe provided a few wrapper functions in the **rmdrive** package, which is currently available only on GitHub at https://github.com/ekothe/rmdrive. At the time of writing, it still lacks rich documentation, so I recommend that you try Janosch Linkersdörfer's fork instead: https://github.com/januz/rmdrive (which is based on Ben Marwick's fork—if you still have not learned GIT, you may be motivated by these examples of freely forking and improving other people's GIT repositories).

The workflow with **rmdrive** is outlined below:

- 1. We assume there is a main author or contributor of the project, who is capable of using version control tools like GIT. The main author writes the initial version of the Rmd document, and uploads it to Google Drive via the upload_rmd() function.
- 2. The Rmd document in Google Drive is shared with other collaborators, who can make or suggest changes in Google Document.
- 3. The main author can accept suggested changes, and download/preview the Rmd document locally via render_rmd(). Other collaborators can also do this by themselves if they have modified code chunks and want to see the new results.
- 4. If satisfied, the main author can commit changes to the GIT repository.

The collaborative editing can be either synchronous or asynchronous in Google Drive. Multiple people can edit the same document at the same time, or wait for other people to finish their editing first.

There is also a function udpate_rmd() in the package, which allows you to edit the Rmd

document locally, and upload the local Rmd document to Google Drive. You probably should never want to run this function, because it will completely overwrite the document in Google Drive. The main author may want to warn collaborators about this in advance. Ideally, all collaborators should only edit the document in Google Drive and not locally. It is okay to preview the edited document locally via render_rmd(), though (note that render_rmd() automatically downloads the document before rendering it).

17.7 Organize an R Markdown project into a research website with **workflowr**

The workflowr package (J. Blischak Carbonetto, and M. Stephens, 2020; J. D. Blischak Carbonetto, and M. Stephens, 2019) can help you organize a (data analysis) project with a project template and the version control tool GIT. Every time you make a change to the project, you can log the change, and workflowr can build a website corresponding to that particular version of your project. This means that you will be able to view the full history of your analysis results. Although this package uses GIT as the backend for version control, you do not really have to be familiar with GIT. The package provides R functions that do the GIT operations under the hood, and you only need to call these R functions. Furthermore, workflowr automates best practices for reproducible code. Each time an R Markdown document is rendered, workflowr automatically sets a seed with set.seed(), records the session information with sessionInfo(), and scans for absolute file paths, etc. Please see the package documentation*4 for how to get started and more information.

The main author of **workflowr**, John Blischak, has also put together a non-exhaustive list of R packages and guides related to the workflow of R projects, which can be found in this GitHub repo: https://github.com/jdblischak/r-project-workflows.

17.8 Send emails based on R Markdown

With the **blastula** package (Richard Iannone and Cheng, 2020), you can render an Rmd document to the email body and send the email. To render an Rmd document to an email, the document needs to use the output format blastula::blastula_email, e.g.,

^{*4} https://jdblischak.github.io/workflowr/

```
title: Weekly Report
output: blastula::blastula_email
---

Dear Boss,

Below is an analysis of the 'iris' data:

'''{r}
summary(iris)
plot(iris[, -5])
...

Please let me know if it is not boring enough.

Sincerely,
John
```

This Rmd document should be rendered via the function blastula::render_email(), and the output can be passed to blastula::smtp_send(), which will send out the email. Note that smtp_send() needs an email server as well as your credentials.

If you use RStudio Connect, you can find more examples at https://solutions.rstudio.com/examples/blastula-overview/, including automated, conditional, and parameterized emails.

付録A

knitr's Chunk and Package Options

The **knitr** package provides a lot of chunk options for customizing nearly all components of code chunks, such as the source code, text output, plots, and the language of the chunk. It also offers some options at the package level to customize the knitting process. This appendix describes all chunk options and package options available in **knitr**. The default values of these options are in parentheses in the list items.

A.1 Chunk options

Chunk options are written in chunk headers. The syntax for chunk headers depends on the document format, e.g., for .Rnw documents (R + LaTeX), chunk headers are written with <>>=, and for .Rmd documents, chunk headers are written with ```{r}. The examples below are primarily for .Rmd documents (R + LaTeX), but in most cases, the chunk options can be used with any document format.

Chunk options are written in the form tag=value like this:

```
```{r, my-chunk, echo=FALSE, fig.height=4, dev='jpeg'}
...
```

A special chunk option is the chunk label (e.g., my-chunk in the above example). Only the chunk label does not need a tag (i.e., you only provide the value). If you prefer the form tag=value, you could also use the chunk option label explicitly, e.g.,

```
```{r, label='my-chunk'}
...
```

The chunk label for each chunk is assumed to be unique within the document. This is especially important for cache and plot filenames, because these filenames are based on chunk labels. Chunks without labels will be assigned labels like unnamed-chunk-i, where i is an incremental number.

You may use knitr::opts_chunk\$set() to change the default values of chunk options in a document. For example, you may put this in the first code chunk of your document:

```
'``{r, setup, include=FALSE}
knitr::opts_chunk$set(
  comment = '', fig.width = 6, fig.height = 6
)
...
```

Below are a few more tips about chunk options:

- 1. The chunk header must be written on one line. You must not break the line.
- 2. Try to avoid spaces, periods (.), and underscores (_) in chunk labels and paths. If you need separators, you are recommended to use hyphens (-) instead. For example, setup-options is a good label, whereas setup.options and chunk 1 are bad; fig.path = 'figures/mcmc-' is a good path for figure output, and fig.path = 'markov chain/monte carlo' is bad.
- 3. All option values must be *valid R expressions*. You may think of them as values to be passed to function arguments.
 - For example, options that take character values must be quoted, e.g., results =
 'asis' and out.width = '\\textwidth' (remember that a literal backslash needs
 double backslashes).
 - In theory, the chunk label should be quoted, too. However, for the sake of convenience, it will be automatically quoted if you did not (e.g., ```{r, 2a} will parsed as ```{r, '2a'}).
 - You can write arbitrarily complicated expressions as long as they are valid R code.

Below is a list of chunk options in **knitr** documented in the format "option: (default value; type of value)".

A.1.1 Code evaluation

• eval: (TRUE; logical or numeric) Whether to evaluate the code chunk. It can also be a numeric vector to choose which R expression(s) to evaluate, e.g., eval = c(1, 3, 4) will evaluate the first, third, and fourth expressions, and eval = -(4:5) will evaluate all expressions except the fourth and fifth.

A.1.2 Text output

- echo: (TRUE; logical or numeric) Whether to display the source code in the output document. Besides TRUE/FALSE, which shows/hides the source code, we can also use a numeric vector to choose which R expression(s) to echo in a chunk, e.g., echo = 2:3 means to echo only the 2nd and 3rd expressions, and echo = -4 means to exclude the 4th expression.
- results: ('markup'; character) Controls how to display the text results. Note that this option only applies to normal text output (not warnings, messages, or errors). The possible values are as follows:
 - markup: Mark up text output with the appropriate environments depending on the output format. For example, for R Markdown, if the text output is a character string "[1] 1 2 3", the actual output that knitr produces will be:

```
[1] 1 2 3
```

In this case, results='markup' means to put the text output in fenced code blocks (```).

- asis: Write text output as-is, i.e., write the raw text results directly into the output document without any markups.

```
```{r, results='asis'}
cat("I'm raw **Markdown** content.\n")
...
```

- hold: Hold all pieces of text output in a chunk and flush them to the end of the chunk.
- hide (or FALSE): Hide text output.
- collapse: (FALSE; logical) Whether to, if possible, collapse all the source and output blocks from one code chunk into a single block (by default, they are written to separate blocks). This option only applies to Markdown documents.
- warning: (TRUE; logical) Whether to preserve warnings (produced by warning()) in the output. If FALSE, all warnings will be printed in the console instead of the output document. It can also take numeric values as indices to select a subset of warnings to include in the output. Note that these values reference the indices of the warnings themselves (e.g., 3 means "the third warning thrown from this chunk") and not the indices of which expressions are allowed to emit warnings.
- error: (TRUE; logical) Whether to preserve errors (from stop()). By default, the code evaluation will not stop even in case of errors! If we want to stop on errors, we need to set this option to FALSE. Note that R Markdown has changed this default value to FALSE. When the chunk option include = FALSE, **knitr** will stop on error, because it is easy to overlook potential errors in this case.
- message: (TRUE; logical) Whether to preserve messages emitted by message() (similar to the option warning).
- include: (TRUE; logical) Whether to include the chunk output in the output document. If FALSE, nothing will be written into the output document, but the code is still evaluated and plot files are generated if there are any plots in the chunk, so you can manually insert figures later.
- strip.white: (TRUE; logical) Whether to remove blank lines in the beginning or end of a source code block in the output.
- class.output: (NULL; character) A vector of class names to be added to the text output blocks. This option only works for HTML output formats in R Markdown.

For example, with class.output = c('foo', 'bar'), the text output will be placed in .

- class.message/class.warning/class.error: (NULL; character) Similar to class.output, but applied to messages, warnings, and errors in R Markdown output. Please see Section A.1.3 for class.source, which applies similarly to source code blocks.
- attr.output/attr.message/attr.warning/attr.error: (NULL; character) Similar to the class.\* options above, but for specifying arbitrary fenced code block attributes for Pandoc; class.\* is a special application of attr.\*, e.g., class.source = 'numberLines' is equivalent to attr.source = '.numberLines', but attr.source can take arbitrary attribute values, e.g., attr.source = c('.numberLines', 'startFrom="11"').
- render: (knitr::knit\_print; function(x, options, ...)) A function to print the visible values in a chunk. The value passed to the first argument of this function (i.e., x) is the value evaluated from each expression in the chunk. The list of current chunk options is passed to the argument options. This function is expected to return a character string. For more information, check out the package vignette about custom chunk rendering: vignette('knit\_print', package = 'knitr').
- split: (FALSE; logical) Whether to split the output into separate files and include them in LaTeX by \input{} or HTML by <iframe></iframe>. This option only works for .Rnw, .Rtex, and .Rhtml documents.

#### A.1.3 Code decoration

- tidy: (FALSE) Whether to reformat the R code. Other possible values are as follows:
  - TRUE (equivalent to tidy = 'formatR'): Call the function formatR::tidy\_source() to reformat the code.
  - 'styler': Use styler::style\_text() to reformat the code.
  - A custom function of the form function(code, ...) {} to return the reformatted code.
  - If reformatting fails, the original R code will not be changed (with a warning).
- tidy.opts: (NULL; list) A list of options to be passed to the function determined by the tidy option, e.g., tidy.opts = list(blank = FALSE, width.cutoff = 60) for tidy = 'formatR' to remove blank lines and try to cut the code lines at 60 characters.
- prompt: (FALSE; logical) Whether to add the prompt characters in the R code. See

prompt and continue on the help page ?base::options. Note that adding prompts can make it difficult for readers to copy R code from the output, so prompt = FALSE may be a better choice. This option may not work well when the chunk option engine is not R (# $1274^{*1}$ ).

- comment: ('##'; character) The prefix to be added before each line of the text output. By default, the text output is commented out by ##, so if readers want to copy and run the source code from the output document, they can select and copy everything from the chunk, since the text output is masked in comments (and will be ignored when running the copied text). Set comment = '' remove the default ##.
- highlight: (TRUE; logical) Whether to syntax highlight the source code.
- class.source: (NULL; character) Class names for source code blocks in the output document. Similar to the class.\* options for output such as class.output.
- attr.source: (NULL; character) Attributes for source code blocks. Similar to the attr.\* options for output such as attr.output.
- size: ('normalsize'; character) Font size of the chunk output from .Rnw documents. See this page\*2 for possible sizes.
- background: ('#F7F7F7'; character) Background color of the chunk output of .Rnw documents.
- indent: (character) A string to be added to each line of the chunk output. Typically it consists of white spaces. This option is assumed to be read-only, and **knitr** sets its value while parsing the document. For example, for the chunk below, indent is a character string of two spaces:

```
```{r}
rnorm(10)
...
```

^{*1} https://github.com/yihui/knitr/issues/1274

 $^{^{*2}}$ https://www.overleaf.com/learn/latex/Font_sizes,_families,_and_styles

A.1.4 Cache

- cache: (FALSE; logical) Whether to cache a code chunk. When evaluating code chunks for the second time, the cached chunks are skipped (unless they have been modified), but the objects created in these chunks are loaded from previously saved databases (.rdb and .rdx files), and these files are saved when a chunk is evaluated for the first time, or when cached files are not found (e.g., you may have removed them by hand). Note that the filename consists of the chunk label with an MD5 digest of the R code and chunk options of the code chunk, which means any changes in the chunk will produce a different MD5 digest, and hence invalidate the cache. See more information on this page.*3
- cache.path: ('cache/'; character) A prefix to be used to generate the paths of cache files. For R Markdown, the default value is based on the input filename, e.g., the cache paths for the chunk with the label FOO in the file INPUT.Rmd will be of the form INPUT_cache/FOO_*.*.
- cache.vars: (NULL; character) A vector of variable names to be saved in the cache
 database. By default, all variables created in the current chunks are identified and
 saved, but you may want to manually specify the variables to be saved, because the
 automatic detection of variables may not be robust, or you may want to save only a
 subset of variables.
- cache.globals: (NULL; character) A vector of the names of variables that are not created from the current chunk. This option is mainly for autodep = TRUE to work more precisely—a chunk B depends on chunk A when any of B's global variables are A's local variables. In case the automatic detection of global variables in a chunk fails, you may manually specify the names of global variables via this option (see #1403*4 for an example).
- cache.lazy: (TRUE; logical) Whether to lazyLoad() or directly load() objects. For very large objects, lazyloading may not work, so cache.lazy = FALSE may be desirable (see #572*5).
- · cache.comments: (NULL; logical) If FALSE, changing comments in R code chunks will

^{*3} https://yihui.org/knitr/demo/cache/

^{*4} https://github.com/yihui/knitr/issues/1403

^{*5} https://github.com/yihui/knitr/issues/572

not invalidate the cache database.

- cache.rebuild: (FALSE; logical) If TRUE, reevaluate the chunk even if the cache does not need to be invalidated. This can be useful when you want to conditionally invalidate the cache, e.g., cache.rebuild = !file.exists("some-file") can rebuild the chunk when some-file does not exist (see #238*6).
- dependson: (NULL; character or numeric) A character vector of chunk labels to specify
 which other chunks this chunk depends on. This option applies to cached chunks
 only—sometimes the objects in a cached chunk may depend on other cached chunks,
 so when other chunks are changed, this chunk must be updated accordingly.
 - If dependson is a numeric vector, it means the indices of chunk labels, e.g., dependson = 1 means this chunk depends on the first chunk in the document, and dependson = c(-1, -2) means it depends on the previous two chunks (negative indices stand for numbers of chunks before this chunk, and note they are always relative to the current chunk).
 - Please note this option does not work when set as a global chunk option via opts_chunk\$set(); it must be set as a local chunk option.
- autodep: (FALSE; logical) Whether to analyze dependencies among chunks automatically by detecting global variables in the code (may not be reliable), so dependson does not need to be set explicitly.

A.1.5 Plots

- fig.path: ('figure/'; character) A prefix to be used to generate figure file paths. fig.path and chunk labels are concatenated to generate the full paths. It may contain a directory like figure/prefix-; the directory will be created if it does not exist.
- fig.keep: ('high'; character) How plots in chunks should be kept. Possible values are as follows:
 - high: Only keep high-level plots (merge low-level changes into high-level plots).
 - none: Discard all plots.
 - all: Keep all plots (low-level plot changes may produce new plots).
 - first: Only keep the first plot.
 - last: Only keep the last plot.

^{*6} https://github.com/yihui/knitr/issues/238

- If set to a numeric vector, the values are indices of (low-level) plots to keep.

Low-level plotting commands include lines() and points(), etc. To better understand fig.keep, consider the following chunk:

```
plot(1)  # high-level plot
abline(0, 1)  # low-level change
plot(rnorm(10)) # high-level plot
# many low-level changes in a loop (a single R expression)
for(i in 1:10) {
   abline(v = i, lty = 2)
}
...
```

Normally this produces 2 plots in the output (because fig.keep = 'high'). For fig.keep = 'none', no plots will be saved. For fig.keep = 'all', 4 plots are saved. For fig.keep = 'first', the plot produced by plot(1) is saved. For fig.keep = 'last', the last plot with 10 vertical lines is saved.

- fig.show: ('asis'; character) How to show/arrange the plots. Possible values are as follows:
 - asis: Show plots exactly in places where they were generated (as if the code were run in an R terminal).
 - hold: Hold all plots and output them at the end of a code chunk.
 - animate: Concatenate all plots into an animation if there are multiple plots in a chunk.
 - hide: Generate plot files but hide them in the output document.
- dev: ('pdf' for LaTeX output and 'png' for HTML/Markdown; character) The graphical device to generate plot files. All graphics devices in base R and those in **Cairo**, **cairoDevice**, **svglite**, **ragg**, and **tikzDevice** are supported, e.g., pdf, png, svg, jpeg, tiff, cairo_pdf, CairoJPEG, CairoPNG, Cairo_pdf, Cairo_png, svglite, ragg_png, tikz, and so on. See names(knitr:::auto_exts) for the full list. Besides these devices, you can also provide a character string that is the name of a function of the form function(filename, width, height). The units for the image size are *always* inches (even for bitmap devices, in which DPI is used to convert between pixels and inches).

The chunk options dev, fig.ext, fig.width, fig.height, and dpi can be vectors (shorter ones will be recycled), e.g., dev = c('pdf', 'png') creates a PDF and a PNG file for the same plot.

- dev.args: (NULL; list) More arguments to be passed to the device, e.g., dev.args = list(bg = 'yellow', pointsize = 10) for dev = 'png'. This option depends on the specific device (see the device documentation). When dev contains multiple devices, dev.args can be a list of lists of arguments, and each list of arguments is passed to each individual device, e.g., dev = c('pdf', 'tiff'), dev.args = list(pdf = list(colormodel = 'cmyk', useDingats = TRUE), tiff = list(compression = 'lzw')).
- fig.ext: (NULL; character) File extension of the figure output. If NULL, it will be derived from the graphical device; see knitr:::auto_exts for details.
- dpi: (72; numeric) The DPI (dots per inch) for bitmap devices (dpi * inches = pixels).
- fig.width, fig.height: (both are 7; numeric) Width and height of the plot (in inches), to be used in the graphics device.
- fig.asp: (NULL; numeric) The aspect ratio of the plot, i.e., the ratio of height/width. When fig.asp is specified, the height of a plot (the chunk option fig.height) is calculated from fig.width * fig.asp.
- fig.dim: (NULL; numeric) A numeric vector of length 2 to provide fig.width and fig.height, e.g., fig.dim = c(5, 7) is a shorthand of fig.width = 5, fig.height = 7. If both fig.asp and fig.dim are provided, fig.asp will be ignored (with a warning).
- out.width, out.height: (NULL; character) Width and height of the plot in the output document, which can be different with its physical fig.width and fig.height, i.e., plots can be scaled in the output document. Depending on the output format, these two options can take special values. For example, for LaTeX output, they can be .8\\linewidth, 3in, or 8cm; for HTML, they may be 300px. For .Rnw documents, the default value for out.width will be changed to \\maxwidth, which is defined on this page.*\forall It can also be a percentage, e.g., '40%' will be translated to 0.4\\linewidth when the output format is LaTeX.
- out.extra: (NULL; character) Extra options for figures. It can be an arbitrary string,
 to be inserted in \includegraphics[] in LaTeX output (e.g., out.extra = 'angle=90'

^{*7} https://yihui.org/knitr/demo/framed/

- to rotate the figure by 90 degrees), or in HTML output (e.g., out.extra = 'style="border:5px solid orange;"').
- fig.retina: (1; numeric) This option only applies to HTML output. For Retina displays,*8 setting this option to a ratio (usually 2) will change the chunk option dpi to dpi * fig.retina, and out.width to fig.width * dpi / fig.retina internally. For example, the physical size of an image is doubled, and its display size is halved when fig.retina = 2.
- resize.width, resize.height: (NULL; character) The width and height to be used in \resizebox{}{} in LaTeX output. These two options are not needed unless you want to resize TikZ graphics, because there is no natural way to do it. However, according to the **tikzDevice** authors, TikZ graphics are not meant to be resized, to maintain consistency in style with other text in LaTeX. If only one of them is NULL, ! will be used (read the documentation of **graphicx** if you do not understand this).
- fig.align: ('default'; character) Alignment of figures in the output document. Possible values are default, left, right, and center. The default is not to make any alignment adjustments.
- fig.link: (NULL; character) A link to be added onto the figure.
- fig.env: ('figure'; character) The LaTeX environment for figures, e.g., you may set fig.env = 'marginfigure' to get \begin{marginfigure}. This option requires fig.cap be specified.
- fig.cap: (NULL; character) A figure caption.
- fig.alt: (NULL; character) The alternative text to be used in the alt attribute of the tags of figures in HTML output. By default, the chunk option fig.cap will be used as the alternative text if provided.
- fig.scap: (NULL; character) A short caption. This option is only meaningful to LaTeX output. A short caption is inserted in \caption[], and usually displayed in the "List of Figures" of a PDF document.
- fig.lp: ('fig:'; character) A label prefix for the figure label to be inserted in \label{}. The actual label is made by concatenating this prefix and the chunk label, e.g., the figure label for ```{r, foo-plot} will be fig:foo-plot by default.

^{*8} http://en.wikipedia.org/wiki/Retina_Display

- fig.pos: (''; character) A character string for the figure position arrangement to be used in \begin{figure}[].
- fig. subcap: (NULL) Captions for subfigures. When there are multiple plots in a chunk, and neither fig. subcap nor fig. cap is NULL, \subfloat{} will be used for individual plots (you need to add \usepackage{subfig} in the preamble). See 067-graphics-options.Rnw*9 for an example.
- fig.ncol: (NULL; integer) The number of columns of subfigures; see this issue*10 for examples (note that fig.ncol and fig.sep only work for LaTeX output).
- fig.sep: (NULL; character) A character vector of separators to be inserted among subfigures. When fig.ncol is specified, fig.sep defaults to a character vector of which every N-th element is \newline (where N is the number of columns), e.g., fig.ncol = 2 means fig.sep = c('', '', '\\newline', '', '\\newline', '', '\\newline', '', ...).
- fig.process: (NULL; function) A function to post-process figure files. It should take the path of a figure file, and return the (new) path of the figure to be inserted in the output. If the function contains the options argument, the list of chunk options will be passed to this argument.
- fig.showtext: (NULL; logical) If TRUE, call showtext::showtext_begin() before drawing plots. See the documentation of the **showtext***11 package for details.
- external: (TRUE; logical) Whether to externalize tikz graphics (pre-compile tikz graphics to PDF). It is only used for the tikz() device in the **tikzDevice** package (i.e., when dev='tikz'), and it can save time for LaTeX compilation.
- sanitize: (FALSE; character) Whether to sanitize tikz graphics (escape special LaTeX characters). See the documentation of the **tikzDevice** package.

There are two hidden options that are not designed to be set by users: fig.cur (the current figure number or index when there are multiple figures), and fig.num (the total number of figures in a chunk). The purpose of these two options is to help **knitr** deal with the filenames of multiple figures as well as animations. In some cases, we can make use of them to write animations into the output using plot files that are saved manually (see the

^{*9} https://github.com/yihui/knitr-examples/blob/master/067-graphics-options.Rnw

^{*10} https://github.com/yihui/knitr/issues/1327#issuecomment-346242532

^{*11} http://cran.rstudio.com/package=showtext

graphics manual*12 for examples).

A.1.6 Animation

- interval: (1; numeric) Time interval (number of seconds) between animation frames.
- animation.hook: (knitr::hook_ffmpeg_html; function or character) A hook function to create animations in HTML output; the default hook uses FFmpeg to convert images to a WebM video.
 - Another hook function is knitr::hook_gifski based on the gifski*13 package to create GIF animations.
 - This option can also take a character string 'ffmpeg' or 'gifski' as a shorthand of the corresponding hook function, e.g., animation.hook = 'gifski' means animation.hook = knitr::hook_gifski.
 - aniopts: ('controls,loop'; character) Extra options for animations; see the documentation of the LaTeX animate package.*14
- ffmpeg.bitrate (1M; character) To be passed to the -b:v argument of FFmpeg to control the quality of WebM videos.
- ffmpeg.format (webm; character) The video format of FFmpeg, i.e., the filename extension of the video.

A.1.7 Code chunk

- code: (NULL; character) If provided, it will override the code in the current chunk. This allows us to programmatically insert code into the current chunk. For example, code = readLines('test.R') will use the content of the file test.R as the code for the current chunk.
- ref.label: (NULL; character) A character vector of labels of the chunks from which the code of the current chunk is inherited (see the demo for chunk references*15).

 $^{^{*12}\ \}text{https://github.com/yihui/knitr/releases/download/doc/knitr-graphics.pdf}$

 $^{^{*13}}$ https://cran.r-project.org/package=gifski

^{*14} http://ctan.org/pkg/animate

^{*15} https://yihui.org/knitr/demo/reference/

A.1.8 Child documents

• child: (NULL; character) A character vector of paths of child documents to be knitted and input into the main document.

A.1.9 Language engines

- engine: ('R'; character) The language name of the code chunk. Possible values can be found in names(knitr::knit_engines\$get()), e.g., python, sql, julia, bash, and c, etc. The object knitr::knit_engines can be used to set up engines for other languages.
- engine.path: (NULL; character) The path to the executable of the engine. This option makes it possible to use alternative executables in your system, e.g., the default python may be at /usr/bin/python, and you may set engine.path = '~/anaconda/bin/python' to use a different version of Python.

engine.path can also be a list of paths, which makes it possible to set different engine paths for different engines, e.g.,

```
knitr::opts_chunk$set(engine.path = list(
    python = '~/anaconda/bin/python',
    ruby = '/usr/local/bin/ruby'
))
```

The names of the list correspond to the names of the engines.

A.1.10 Option templates

• opts.label: (NULL; character) The label of options set in knitr::opts_template (see ?knitr::opts_template). This option can save some typing effort for sets of frequently used chunk options.

A.1.11 Extracting source code

• purl: (TRUE; logical) When running knitr::purl() to extract source code from a source document, whether to include or exclude a certain code chunk.

A.1.12 Other chunk options

• R.options: (NULL; list) Local R options for a code chunk. These options are set temporarily via options() before the code chunk, and restored after the chunk.

A.2 Package options

The package options can be changed using the object knitr::opts_knit*16 (not to be confused with knitr::opts_chunk). For example:

```
knitr::opts_knit$set(progress = TRUE, verbose = TRUE)
```

See ?knitr::opts_knit for the alternative approach to setting package options using the R base function options().

Available package options are as follows:

- aliases: (NULL; character) A named character vector to specify the aliases of chunk options, e.g., c(h = 'fig.height', w = 'fig.width') tells **knitr** that the chunk option h really means fig.height, and w is an alias for fig.width. This option can be used to save some typing effort for long option names.
- base.dir: (NULL; character) An absolute directory under which the plots are generated.
- base.url: (NULL; character) The base URL of images on HTML pages.
- concordance: (FALSE; logical) Whether to write a concordance file to map the output line numbers to the input line numbers. This enables one to navigate from the output to the input, and can be helpful especially when a TeX error occurs. This feature is only for .Rnw documents, and implemented in RStudio.

^{*16} https://yihui.org/knitr/objects/

- eval.after: (c('fig.cap', 'fig.alt'); character) A character vector of option names. These options will be evaluated *after* a chunk has been evaluated, and all other options will be evaluated before a chunk. For example, for fig.cap = paste('p-value is', t.test(x)\$p.value), it will be evaluated after the chunk according to the value of x if eval.after = 'fig.cap'.
- global.par: (FALSE; logical) If TRUE, the par() settings from the previous code chunk will be preserved and applied to the next code chunk (of course, this only applies to base R graphics). By default, **knitr** opens a new graphical device to record plots and close it after evaluating the code, so par() settings will be discarded.
- header: (NULL; character) The text to be inserted into the output document before
 the document begins (e.g., after \documentclass{article} in LaTeX, or after <head>
 in HTML). This is useful for defining commands and styles in the LaTeX preamble
 or HTML header. The beginning of document is found using the pattern defined in
 knitr::knit_patterns\$get('document.begin'). This option is only for .Rnw and .Rhtml
 documents.
- label.prefix: (c(table = 'tab:'); character) The prefix for labels. Currently only the prefix for table labels generated by knitr::kable() is supported.
- latex.options.color, latex.options.graphicx (NULL): Options for the LaTeX packages **color** and **graphicx**, respectively. These options are only for .Rnw documents.
- out.format: (NULL; character) Possible values are latex, sweave, html, markdown, and jekyll. It will be automatically determined based on the input file, and this option will affect the set of hooks to be set (see ?knitr::render_latex for example). Note this option has to be set before knitr::knit() runs (it will not work if you set it inside the document).
- progress: (TRUE; logical) Whether to display a progress bar when running knitr::knit().
- root.dir: (NULL; character) The root directory when evaluating code chunks. If NULL, the directory of the input document will be used.
- self.contained: (TRUE; logical) Whether the output document should be self-contained (TeX styles to be written in the .tex document, and CSS styles to be written in the .html document). This option only applies to .Rnw and .Rhtml documents.

- unnamed.chunk.label: (unnamed-chunk; character) The label prefix for unnamed chunks.
- upload.fun: (identity; function) A function that takes a file path, processes the file, and returns a character string when the output format is HTML or Markdown. Typically, it is a function to upload an image and return the link to the image, e.g., knitr::opts_knit\$set(upload.fun = knitr::imgur_upload) can upload a file to http://imgur.com (see ?knitr::imgur_upload).
- verbose: (FALSE; logical) Whether to show verbose information (e.g., R code in each chunk and message logs), or only show chunk labels and options.

A.3 About this

このリポジトリは『R Markdown クックブック』翻訳版のソースコードを含んでいます. 現在, 翻訳版は作成中です

完成版は https://gedevan-aleksizde.github.io/rmarkdown-cookbook で公開する予定です.



R Markdown Cookbook



Yihui Xie Christophe Dervieux Emily Riederer



本書はクリエイティブ・コモンズ表示 - 非営利 - 継承 4.0 国際ライセンス* 18 で提供されています. オンライン版のオリジナルはこちら* 19 で読むことができます.

This is an unofficial Japanese translation of "R Markdown Cookbook" by Xie, Dervieux, and Riederer, which is licensed under CC BY-NC-SA 4.0*20. The original is here*21.

A.4 進捗状況

10 章まで翻訳 (全 17 章 + Appendix)

A.5 関連リンク

- 『knitr: R による美麗で柔軟そして高速な動的レポート生成* 22 』/ "knitr: Elegant, flexible, and fast dynamic report generation with R* 23 "
- "R Markdown: The Definitive Guide*24" (近日翻訳予定*25)
- "bookdown: Authoring Books and Technical Documents with R Markdown*26" (近日翻訳予定*27)

 $^{^{*18}}$ https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/4.0/deed.ja

 $^{^{*19}}$ https://bookdown.org/yihui/rmarkdown-cookbook/

 $^{^{*20}}$ https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/4.0/

^{*21} https://bookdown.org/yihui/rmarkdown-cookbook/

 $^{^{*22}}$ https://gedevan-aleksizde.github.io/knitr-doc-ja/index.html

 $^{^{*23}}$ https://yihui.org/knitr/

^{*24} https://bookdown.org/yihui/rmarkdown/

^{*25} https://github.com/Gedevan-Aleksizde/rmarkdown-book

^{*26} https://bookdown.org/yihui/bookdown/

 $^{^{*27}}$ https://github.com/Gedevan-Aleksizde/bookdown

参考文献

Adler, Daniel, Duncan Murdoch (2021). rgl: 3D Visualization Using OpenGL. R package version 0.104.16. URL: here*28.

Allaire, JJ (2019). *rsconnect: Deployment Interface for R Markdown Documents and Shiny Applications*. R package version 0.8.16. URL: here*29.

Allaire, JJ, Rich Iannone, Alison Presmanes Hill, Yihui Xie (2021). *distill: R Markdown Format for Scientific and Technical Writing*. R package version 1.2. URL: here*³⁰.

Allaire, JJ, Yihui Xie, Jonathan McPherson, Javier Luraschi, Kevin Ushey, Aron Atkins, Hadley Wickham, Joe Cheng, Winston Chang, Richard Iannone (2021). *rmarkdown: Dynamic Documents for R*. R package version 2.7. URL: here*31.

Allaire, JJ, Yihui Xie, R Foundation, Hadley Wickham, Journal of Statistical Software, Ramnath Vaidyanathan, Association for Computing Machinery, Carl Boettiger, Elsevier, Karl Broman et al. (2021). *rticles: Article Formats for R Markdown*. R package version 0.18. URL: here*³².

Attali, Dean (2016). *ezknitr: Avoid the Typical Working Directory Pain When Using knitr*. R package version 0.6. URL: here*³³.

Barnier, Julien (2021). *rmdformats: HTML Output Formats and Templates for rmarkdown Documents*. R package version 1.0.1. URL: here*³⁴.

Barrett, Malcolm (2021). *ggdag: Analyze and Create Elegant Directed Acyclic Graphs*. R package version 0.2.3. URL: here*³⁵.

^{*28} https://r-forge.r-project.org/projects/rgl/

^{*29} https://github.com/rstudio/rsconnect

 $^{^{*30}}$ https://CRAN.R-project.org/package=distill

^{*31} https://CRAN.R-project.org/package=rmarkdown

^{*32} https://github.com/rstudio/rticles

 $^{*^{33}}$ https://github.com/ropenscilabs/ezknitr

 $^{^{*34}}$ https://github.com/juba/rmdformats

 $^{^{*35}}$ https://github.com/malcolmbarrett/ggdag

- Blischak, John, Peter Carbonetto, Matthew Stephens (2020). workflowr: A Framework for Reproducible and Collaborative Data Science. R package version 1.6.2. URL: here*36.
- Blischak, John D, Peter Carbonetto, Matthew Stephens (2019). "Creating and sharing reproducible research code the workflowr way [version 1; peer review: 3 approved]". In: F1000Research 8.1749. DOI: 10.12688/f1000research.20843.1*37. URL: here*38.
- Bodwin, Kelly, Hunter Glanz (2020). *flair: Highlight, Annotate, and Format your R Source Code*. R package version 0.0.2. URL: here*³⁹.
- Boettiger, Carl (2021). *knitcitations: Citations for Knitr Markdown Files*. R package version 1.0.12. URL: here*40.
- Chang, Winston (2019). webshot: Take Screenshots of Web Pages. R package version 0.5.2. URL: here *41 .
- Cheng, Joe, Timothy Mastny, Richard Iannone, Barret Schloerke, Carson Sievert (2021). sass: Syntactically Awesome Style Sheets (Sass). R package version 0.3.1. URL: here*42.
- D'Agostino McGowan, Lucy, Jennifer Bryan (2020). *googledrive: An Interface to Google Drive*. R package version 1.0.1. URL: here*43.
- Dahl, David B. David Scott, Charles Roosen, Arni Magnusson, Jonathan Swinton (2019). *xtable: Export Tables to LaTeX or HTML*. R package version 1.8-4. URL: here*44.
- Daróczi, Gergely, Roman Tsegelskyi (2018). *pander: An R Pandoc Writer*. R package version 0.6.3. URL: here*45.
- de Vries, Andrie, Javier Luraschi (2020). *nomnoml: Sassy UML Diagrams*. R package version 0.2.3. URL: here*46.
- El Hattab, Hakim, JJ Allaire (2017). reveal : R Markdown Format for reveal. P Presentations. R package version 0.9. URL: e^{*47} .
- Garbett, Shawn (2020). *tangram: The Grammar of Tables*. R package version 0.7.1. URL: here*⁴⁸.

 $^{^{*36}}$ https://github.com/jdblischak/workflowr

^{*37} https://doi.org/10.12688/f1000research.20843.1

^{*38} https://doi.org/10.12688/f1000research.20843.1

 $^{^{*39}}$ https://CRAN.R-project.org/package=flair

 $^{^{*40}}$ https://github.com/cboettig/knitcitations

^{*41} https://github.com/wch/webshot/

^{*42} https://github.com/rstudio/sass

 $^{^{*43}}$ https://CRAN.R-project.org/package=googledrive

^{*44} http://xtable.r-forge.r-project.org/

^{*45} http://rapporter.github.io/pander

 $^{^{*46}}$ https://github.com/rstudio/nomnoml

 $^{^{*47}}$ https://github.com/rstudio/revealjs

 $^{^{*48}}$ https://github.com/spgarbet/tangram

- Garmonsway, Duncan (2020). *govdown: GOV.UK Style Templates for R Markdown*. R package version 0.10.0. URL: here*49.
- Gohel, David (2021a). *flextable: Functions for Tabular Reporting*. R package version 0.6.3. URL: here *50 .
- (2021b). *officer: Manipulation of Microsoft Word and PowerPoint Documents*. R package version 0.3.16. URL: here*⁵¹.
- Gohel, David, Noam Ross (2021). *officedown: Enhanced R Markdown Format for Word and PowerPoint*. R package version 0.2.1. URL: here*⁵².
- Hlavac, Marek (2018). *stargazer: Well-Formatted Regression and Summary Statistics Tables*. R package version 5.2.2. URL: here*⁵³.
- Hugh-Jones, David (2020). *huxtable: Easily Create and Style Tables for LaTeX, HTML and Other Formats*. R package version 5.1.1. URL: here*⁵⁴.
- Iannone, Richard (2020). *DiagrammeR: Graph/Network Visualization*. R package version 1.0.6.1. URL: here*⁵⁵.
- Iannone, Richard, JJ Allaire, Barbara Borges (2020). *flexdashboard: R Markdown Format* for Flexible Dashboards. R package version 0.5.2. URL: here*⁵⁶.
- Iannone, Richard, Joe Cheng (2020). blastula: Easily Send HTML Email Messages. R package version 0.3.2. URL: here*57.
- Iannone, Richard, Joe Cheng, Barret Schloerke (2020). *gt: Easily Create Presentation-Ready Display Tables*. R package version 0.2.2. URL: here*⁵⁸.
- Lawrence, Michael (2020). *cairoDevice: Embeddable Cairo Graphics Device Driver*. R package version 2.28.2. URL: here*⁵⁹.
- Lin, Greg (2020). reactable: Interactive Data Tables Based on React Table. R package version 0.2.3. URL: here*60.
- Mattioni Maturana, Felipe (2020). *downloadthis: Implement Download Buttons in rmark-down*. R package version 0.2.1. URL: here*61.

^{*49} https://ukgovdatascience.github.io/govdown

 $^{^{*50}}$ https://CRAN.R-project.org/package=flextable

^{*51} https://CRAN.R-project.org/package=officer

^{*52} https://CRAN.R-project.org/package=officedown

^{*53} https://CRAN.R-project.org/package=stargazer

^{*54} https://hughjonesd.github.io/huxtable/

^{*55} https://github.com/rich-iannone/DiagrammeR

^{*56} http://rmarkdown.rstudio.com/flexdashboard

^{*57} https://github.com/rich-iannone/blastula

^{*58} https://github.com/rstudio/gt

^{*59} https://CRAN.R-project.org/package=cairoDevice

^{*60} https://CRAN.R-project.org/package=reactable

^{*61} https://github.com/fmmattioni/downloadthis

- Moon, Keon-Woong (2020). *ztable: Zebra-Striped Tables in LaTeX and HTML Formats*. R package version 0.2.2. URL: here*⁶².
- Müller, Kirill (2020). here: A Simpler Way to Find Your Files. R package version 1.0.1. URL: here*63.
- Müller, Kirill, Lorenz Walthert (2020). *styler: Non-Invasive Pretty Printing of R Code*. R package version 1.3.2. URL: here*⁶⁴.
- Murdoch, Duncan (2020). *tables: Formula-Driven Table Generation*. R package version 0.9.6. URL: here*65.
- Nutter, Benjamin (2021). *pixiedust: Tables so Beautifully Fine-Tuned You Will Believe It's Magic*. R package version 0.9.1. URL: here*⁶⁶.
- Oller Moreno, Sergio (2020). *condformat: Conditional Formatting in Data Frames*. R package version 0.9.0. URL: here*⁶⁷.
- Ooms, Jeroen (2018). *gifski: Highest Quality GIF Encoder*. R package version 0.8.6. URL: here *68 .
- (2021). *magick: Advanced Graphics and Image-Processing in R*. R package version 2.6.0. URL: here*⁶⁹.
- Ooms, Jeroen, Jim Hester (2020). *spelling: Tools for Spell Checking in R*. R package version 2.2. URL: here*⁷⁰.
- Owen, Jonathan (2018). *rhandsontable: Interface to the Handsontable.js Library*. R package version 0.3.7. URL: here*⁷¹.
- Pedersen, Thomas Lin, David Robinson (2020). *gganimate: A Grammar of Animated Graphics*. R package version 1.0.7. URL: here*⁷².
- R Core Team (2020). *R: A Language and Environment for Statistical Computing*. R Foundation for Statistical Computing. Vienna, Austria. URL: here*⁷³.
- Ren, Kun, Kenton Russell (2021). *formattable: Create Formattable Data Structures*. R package version 0.2.1. URL: here*⁷⁴.

^{*62} https://github.com/cardiomoon/ztable

^{*63} https://CRAN.R-project.org/package=here

^{*64} https://github.com/r-lib/styler

^{*65} https://r-forge.r-project.org/projects/tables/

^{*66} https://github.com/nutterb/pixiedust

 $^{^{*67}}$ http://github.com/zeehio/condformat

^{*68} https://CRAN.R-project.org/package=gifski

 $^{^{*69}}$ https://CRAN.R-project.org/package=magick

^{*&}lt;sup>70</sup> https://CRAN.R-project.org/package=spelling

^{*71} http://jrowen.github.io/rhandsontable/

^{*72} https://CRAN.R-project.org/package=gganimate

^{*73} https://www.R-project.org/

^{*74} https://CRAN.R-project.org/package=formattable

- Robinson, David, Alex Hayes, Simon Couch (2021). *broom: Convert Statistical Objects into Tidy Tibbles*. R package version 0.7.4. URL: here*⁷⁵.
- Schloerke, Barret, JJ Allaire, Barbara Borges (2020). *learnr: Interactive Tutorials for R*. R package version 0.10.1. URL: here*⁷⁶.
- Sharpsteen, Charlie, Cameron Bracken (2020). *tikzDevice: R Graphics Output in LaTeX Format*. R package version 0.12.3.1. URL: here*⁷⁷.
- Sjoberg, Daniel D. Michael Curry, Margie Hannum, Karissa Whiting, Emily C. Zabor (2021). *gtsummary: Presentation-Ready Data Summary and Analytic Result Tables*. R package version 1.3.6. URL: here*⁷⁸.
- Soetaert, Karline (2020). *diagram: Functions for Visualising Simple Graphs (Networks), Plotting Flow Diagrams*. R package version 1.6.5. URL: here*⁷⁹.
- Stephens, Jeremy, Kirill Simonov, Yihui Xie, Zhuoer Dong, Hadley Wickham, Jeffrey Horner, reikoch, Will Beasley, Brendan O'Connor, Gregory R. Warnes (2020). *yaml: Methods to Convert R Data to YAML and Back*. R package version 2.2.1. URL: here*80.
- Strayer, Nick, Javier Luraschi, JJ Allaire (2020). *r2d3: Interface to D3 Visualizations*. R package version 0.2.5. URL: here*81.
- Textor, Johannes, Benito van der Zander, Ankur Ankan (2021). *dagitty: Graphical Analysis of Structural Causal Models*. R package version 0.3-1. URL: here*82.
- Urbanek, Simon, Jeffrey Horner (2020). Cairo: R Graphics Device using Cairo Graphics Library for Creating High-Quality Bitmap (PNG, JPEG, TIFF), Vector (PDF, SVG, Post-Script) and Display (X11 and Win32) Output. R package version 1.5-12.2. URL: here*83.
- Ushey, Kevin, JJ Allaire, Yuan Tang (2020). *reticulate: Interface to Python*. R package version 1.18. URL: here*84.
- Wickham, Hadley, Jennifer Bryan (2020). *usethis: Automate Package and Project Setup*. R package version 2.0.0. URL: here*85.
- Wickham, Hadley, Winston Chang, Lionel Henry, Thomas Lin Pedersen, Kohske Takahashi, Claus Wilke, Kara Woo, Hiroaki Yutani, Dewey Dunnington (2020).

^{*&}lt;sup>75</sup> https://CRAN.R-project.org/package=broom

 $^{^{*76}}$ https://CRAN.R-project.org/package=learnr

^{*77} https://github.com/daqana/tikzDevice

 $^{^{*78}}$ https://CRAN.R-project.org/package=gtsummary

 $^{^{*79}}$ https://CRAN.R-project.org/package=diagram

 $^{^{*80}}$ https://github.com/viking/r-yaml/

^{*81} https://github.com/rstudio/r2d3

 $^{^{*82}}$ https://CRAN.R-project.org/package=dagitty

^{*83} http://www.rforge.net/Cairo/

^{*84} https://github.com/rstudio/reticulate

^{*85} https://CRAN.R-project.org/package=usethis

ggplot2: Create Elegant Data Visualisations Using the Grammar of Graphics. R package version 3.3.3. URL: here*86.

Wickham, Hadley, Peter Danenberg, Gábor Csárdi, Manuel Eugster (2020). roxygen2: In-Line Documentation for R. R package version 7.1.1. URL: here*87.

Wickham, Hadley, Garrett Grolemund (2016) R for Data Science. O'Reilly Media, Inc.

Wickham, Hadley, Garrett Grolemund (2016) *R for Data Science: Import, Tidy, Transform, Visualize, and Model Data*. O'Reilly. 黒川利明・大橋真也訳『R で始めるデータサイエンス』. 2017 年. オライリー・ジャパン

Wickham, Hadley, Lionel Henry, Thomas Lin Pedersen, T Jake Luciani, Matthieu Decorde, Vaudor Lise (2020). *svglite: An SVG Graphics Device*. R package version 1.2.3.2. URL: here*88.

Wickham, Hadley, Jay Hesselberth (2020). *pkgdown: Make Static HTML Documentation* for a Package. R package version 1.6.1. URL: here*89.

Xie, Yihui (2018). *animation: A Gallery of Animations in Statistics and Utilities to Create Animations*. R package version 2.6. URL: here*90.

Xie, Yihui (2016) bookdown: Authoring Books and Technical Documents with R Markdown. Chapman and Hall/CRC. ISBN 978-1138700109

- (2020a). bookdown: Authoring Books and Technical Documents with R Markdown. R package version 0.21. URL: here*91.

Xie, Yihui (2015) Dynamic Documents with R and knitr. Chapman and Hall/CRC. ISBN 978-1498716963

- (2019a). formatR: Format R Code Automatically. R package version 1.7. URL: here*92.
- (2021a). *knitr: A General-Purpose Package for Dynamic Report Generation in R*. R package version 1.31. URL: here*93.
- (2021b). printr: Automatically Print R Objects to Appropriate Formats According to the knitr Output Format. R package version 0.1.1. URL: here*94.
- (2019b). "TinyTeX: A lightweight, cross-platform, and easy-to-maintain LaTeX distribution based on TeX Live". In: *TUGboat* 1, pp. 30–32. URL: here*95.

^{*86} https://CRAN.R-project.org/package=ggplot2

 $^{^{*87}}$ https://CRAN.R-project.org/package=roxygen2

^{*88} https://github.com/r-lib/svglite

^{*89} https://CRAN.R-project.org/package=pkgdown

 $^{^{*90}}$ https://yihui.name/animation

^{*91} https://github.com/rstudio/bookdown

 $^{^{*92}}$ https://github.com/yihui/formatR

 $^{^{*93}}$ https://yihui.org/knitr/

 $^{^{*94}}$ https://yihui.org/printr/

 $^{^{*95}}$ http://tug.org/TUGboat/Contents/contents40-1.html

- Xie, Yihui (2021c). *tinytex: Helper Functions to Install and Maintain TeX Live, and Compile LaTeX Documents*. R package version 0.29. URL: here*⁹⁶.
- (2020b). *xaringan: Presentation Ninja*. R package version 0.19. URL: here*97.
- (2021d). *xfun: Miscellaneous Functions by Yihui Xie.* R package version 0.20. URL: here*98.
- Xie, Yihui, J.J. Allaire, Garrett Grolemund (2018) *R Markdown: The Definitive Guide*. Chapman and Hall/CRC. ISBN 9781138359338
- Xie, Yihui, Joe Cheng, Xianying Tan (2021). *DT: A Wrapper of the JavaScript Library DataTables*. R package version 0.17. URL: here*99.
- Xie, Yihui, Christophe Dervieux, Alison Presmanes Hill (2021). *blogdown: Create Blogs and Websites with R Markdown*. R package version 1.1. URL: here*100.
- Xie, Yihui, Alison Presmanes Hill, Amber Thomas (2017) blogdown: Creating Websites with R Markdown. Chapman and Hall/CRC. ISBN 978-0815363729
- Xie, Yihui, Romain Lesur, Brent Thorne, Xianying Tan (2020). pagedown: Paginate the HTML Output of R Markdown with CSS for Print. R package version 0.13. URL: here*101.
- Zhu, Hao (2020). *kableExtra: Construct Complex Table with kable and Pipe Syntax*. R package version 1.3.1. URL: here*102.

 $^{^{*96}}$ https://github.com/yihui/tinytex

 $^{^{*97}}$ https://github.com/yihui/xaringan

 $^{^{*98}}$ https://github.com/yihui/xfun

 $^{^{*99}}$ https://github.com/rstudio/DT

^{*100} https://github.com/rstudio/blogdown

 $^{^{*101}}$ https://github.com/rstudio/pagedown

 $^{^{*102}}$ https://CRAN.R-project.org/package=kableExtra

索引

Asymptote, 261	max-height, 98 overflow-y, 98
Beamer, 77	text-align, 94
bibliography, 28	white-space, 62
blogdown, 8	
quote poem(), 43	D3, 255
book, 281	Div, 69, 136
bookdown	LaTeX との互換性, 137
html_document2(), 40	
Bootstrap, 95	email, 294
200000145,00	
caching, 176, 177, 233, 241	figure
clean, 245	D3, 255
invalidation, 243	global, 236
child documents, 269	HTML tag, 213
chunk hook, 217	intermediate plots, 194
crop plot, 219	keep files, 272
optimize PNG, 220	optimize PNG, 220
	_
WebGL plot, 225	sub-figures, 84
chunk option	WebGL, 225
cache, 233	IITMI
cache.path, 176, 241	HTML
child, 269	figure tag, 213
chunk hook, → chunk hook	iframe, 133
code, 267	Rhtml, 117
crop, 219	アクセシビリティ, 116
engine.opts, 254, 256	ウィジェット, 132
engine.path, 260	HTML ホスティング, 113
eval, <mark>250</mark>	
fig.show, 235	kableExtra
include, 267	add_header_above(), 167
options template, 237	cell_spec(), 167
optipng, <mark>220</mark>	collapse_rows(), 167
opts.label, 237	column_spec(), 166
out.lines, 212, 213	kable_styling(), 166
ref.label, 230	landscape(), 168
results, 239, 250, 270	pack_rows(), 167
code chunk, 11, 228	row_spec(), 166
«», 228	knitr, 7, 10, 228
embed, 228	all_labels(), <mark>51</mark>
label, <mark>35</mark>	combine_words(), 41
reuse, <mark>228</mark>	engine_output(), 251
CriticMarkup, 125	escape html(), 155
crossreference, 35, 241	escape_latex(), 155
CSS, 69, 93, 139, 187, 256	fig_chunk(), 235
Sass, 264	global.device, 236
ストライプ柄の表, 164	hook optipng(), 220
CSS プロパティ	hook pdfcrop(), 219
background-image, 141	include app(), 133
color, 57	include_graphics(), 64, 65
display, 69	include url(), 133
alopiuj, vv	

inline expr(), 65	Lua フィルタ, 25, 52, 58
is html output(), 57, 129	
is latex output(), 57, 129	OptiPNG, <mark>220</mark>
kable(), 146	output hook
kables(), 156	plot, 215
knit2pdf(), 91	output hooks, 201
knit_child(), 239, 270	output nooks, 201
knit engines, 249	
_ ~	extra_dependencies, 84
knit_exit(), 234	keep_md, 272
knit_expand(), 238	self_contained, 272
knit_global(), 266	
knit_hooks, 202, 213, 217, 219	Pandoc, 1, 2, 7, 89
knit_print(), 194	Div, see Div <mark>69</mark>
knitr.duplicate.label, 240	Lua フィルタ, → Lua フィルタ
load_cache(), 233	parameter, 288
opts_knit, 236, 273	pdflatex, <mark>76</mark>
opts_template, 237	PhantomJS, 132, 133
pandoc_toc(), 136	Python, 252
purl(), <mark>21</mark>	-
read_chunk(), 268	R package
root.dir, 273	blastula, 294
spin(), 17	blogdown, 283
v spaces(), 207	bookdown, 281
write bib(), 32	distill, 40
	ezknitr, 276
language engine	googledrive, 293
asis, 253	
asy, 261	here, 276
· ·	knitcitations, 35
bash, 254	magick, 219
cat, 256	R Markdown template, 279
css, 256	R Markdown templates, 279
custom, 249	r2d3, <mark>255</mark>
D3, 255	reticulate, <mark>252</mark>
python, 252	rgl, <mark>225</mark>
SAS, 260	rmdrive, 293
sass, 264	roxygen2, 277
scss, 264	sass, <mark>264</mark>
sh, 254	spelling, <mark>286</mark>
stata, 260	Statamarkdown, 261
zsh, 254	usethis, 277
LaTeX, 1, 3, 74	vignette, 277
fragment, 87	workflowr, 294
MiKTeX, 3, 5	R パッケージ
Rnw, 91	animate, 45
TinyTeX, 3	animation, 46
tinytex, 3	blastula, <mark>26</mark>
パッケージ, 4	DiagrammeR, 46
生のコード, 90	downloadthis, 106
LaTeX package	equatiomatic, 44
subfig, 84	flair, 98
xcolor, 57	formatR, 181
LaTeX パッケージ, 80	
awesomebox, 144	gganimate, 46
booktabs, 161	gglot2, 46
· ·	gifski, 44
fancyhdr, 87	kableExtra, 79, 164
flafter, 83	knitr, 196
float, 82	magick, 189
framed, 139	MonashEBSTemplates, 89
listings, 62	officedown, 126
tcolorbox, 140	officer, 126
titling, 78	pander, 197
'	•

printr, 196	bibliography, 28, 35
redoc, 125	csl, 29
styler, 182	date, 38
webshot, 132, 133	documentclass, 76
xfun, 105	fontsize, 76
·	
グラフィックデバイス, 192	header-includes, 75
作表パッケージ, 169	institute, 77
rmarkdown	knit, <mark>291</mark>
draft, 279	linestretch, 76
render(), <mark>286, 288</mark>	links-as-notes, 75
RStudio, 1, 17	mainfont, 77
bookdown project, 281	monofont, 77
keyboard shortcuts, 285	nocite, 30
Knit button, 288, 290	papersize, 76
Knit with Parameters, 290	params, 289
notebook, 23	sansfont, 77
Quote Poem アドイン, 43	title, 79
spellcheck, 286	vignette frontmatter, 27
_	
vignette template, 277	パラメータ, → パラメータ
working directory, 273	動的生成, 25
コメントのショートカット, 50	
	P=X-y=y, 44
Sass, 264	オプションフック, 197
source(), 266	キャッシュ, 175
sys.source(), 266	クラス
	bg-danger, 95
tabset, 102	bg-info, <mark>95</mark>
template	bg-primary, <mark>95</mark>
chunk options, 237	bg-success, 95
project, 294	bg-warning, 95
R Markdown, 279	Bootstrap クラス, 95
tinytex	unlisted, 50
parse install(), 4	unnumbered, 50
parse packages(), 5	カスタムクラス, 95
tlmgr install(), 219	コメント, 50
tinigi_nistan(), 219	3-7,50 $3-7,50$ $3-7,50$ $3-7,50$ $3-7,50$
.1.	シンタックスハイライト, 67
usethis	-
use_rmarkdown_template(), 280	チャンクオプション, 172
use_vignette(), 277	animation.hook, 44
utils	attr.error, 188
citation(), 31	attr.message, 188
toBibtex(), 31	attr.output, 67, 188
	attr.source, 67, 188
vignette, 277	attr.warning, 188
	cache, 175, 176
WebGL, 225	cache.extra, 176
Word	cache.lazy, 178
Rmd との入出力 , 125	class.error, 187
外部文書のインポート, 127	class.message, 187
working directory, 273	class.output, 95, 187
working directory, 270	class.source, 95, 187
varingan 9	class.warning, 187
xaringan, 8	collapse, 180
xfun	comment, 186
cache_rds(), 176, 241	dev, 174, 191
embed_dir(), 105	echo, 50, 94, 179
embed_file(), 105	error, 174, 187
embed_files(), 105	
split_lines(), 205	eval, 51
	fig.align, 65
YAML, 6, 8, 19, 26	fig.cap, 85, 194
author, 38	fig.dim, 63
'	

```
fig.height, 63
   fig.keep, 180, 194
   fig.ncol, 85
   fig.pos, 82
   fig.process, 189, 193
   fig.show, 45, 133
   fig.subcap, 85
   fig.with, 63
   if else ロジック, 173
   include, 131, 180
   interval, 46
   out.height, 64
   out.width, 64, 85, 133
   prompt, 187
   ref.label, 51
   results, 44, 158, 183
   tidy, 181
   tidy.opts, 181, 182
   オプションフック, 197
   グローバルに設定する, 172
   変数の値, 173
テンプレート
   HTML, 106
   LaTeX, 89
   Word, 120
パラメータ, 26
フォント色, 57
出力オプション
   base_format, 41
   code_download, 105
   code_folding, 98
   css, 93
   extra_dependencies, 80
   highlight, 67
   includes, 62, 75, 108, 110
   latex_engine, 86
   number_sections, 27
   pandoc_args, 55
   reference_docx, 121
   template, 89, 108
   alt text, 116
   グラフィックデバイス, 174
   サイズ, 63
   ダイアグラムの作成,46
   デバイス, 191
   ファビコン, 110
   中間グラフ, 194
   位置,81
   後処理, 189
   表紙ページ, 78
   複数の図をまとめる,84
引用, 29
改行, 24, 42, 60
言語エンジン
   css, 94
```